
熊谷市

北島遺跡 XII

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

— VI —

2005

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



北島遺跡全景



北島遺跡第17地点全景



第17地点C区全景



第17地点D·E区全景



第17地点A～C区全景



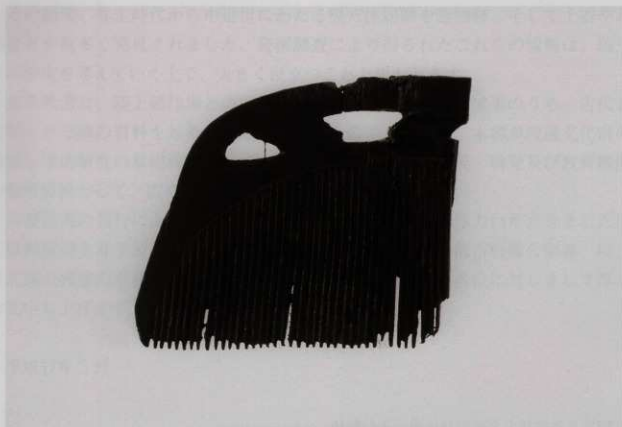
北島遺跡第18地点全景



第74号清跡出土鞘付き刀



第12号住居跡出土奈良三彩小壺



A F42グリッド (旧河川) 出土横櫛

序

都市の緑の中核である都市公園は、自然環境の保全、防災、レクリエーションなどのさまざまな機能を有しており、安全でゆとりある生活に欠かせない施設であります。

熊谷スポーツ文化公園は、このような構想に基づき平成3年4月にオープンした広域都市公園で、現在も整備が進められております。平成16年秋に開催された第59回国民体育大会秋季大会ではメイン会場にもなりました。

熊谷スポーツ文化公園内やその周辺には北島遺跡が所在しており、公園の整備工事などに伴う発掘調査がたびたび行われ、遺跡をとりまく歴史的環境が次第に明らかになりつつあります。

このたび、陸上競技場、屋内運動施設、調整池などの建設に先立ち、埋蔵文化財の取扱いについて関係機関が慎重に協議を重ねた結果、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、やむを得ず現状での保存が困難となる範囲について、埼玉県県土整備部の委託を受けて、当事業団が記録保存のための発掘調査を行うこととなりました。

その結果、弥生時代から中近世にわたる竪穴住居跡や建物跡、そして土器や石器などが数多く発見されました。発掘調査により得られたこれらの情報は、埼玉県の歴史を考えていく上で、大きく役立つことと思われまます。

本報告書は、陸上競技場と調整池の建設に伴う発掘調査の成果のうち、古代およびそれ以降の資料を対象としてまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関の参考資料として、広く御活用いただければ幸いです。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、県土整備部都市整備公園課、埼玉県北部公園建設事務所、熊谷市教育委員会並びに地元関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 福田 陽 充

例言

1. 本書は、埼玉県熊谷市に所在する北島遺跡の発掘調査報告書である。本編では、北島遺跡第17地点の古代～中近世、および第18地点の主な遺構・遺物について記述した。

北島遺跡は、平成15年度までに以下の報告書を当事業団から刊行している。

北島遺跡	事業団報告書第81集
北島遺跡Ⅱ	事業団報告書第88集
北島遺跡Ⅲ	事業団報告書第103集
北島遺跡Ⅳ	事業団報告書第195集
北島遺跡Ⅴ	事業団報告書第278集
北島遺跡Ⅵ	事業団報告書第286集
北島遺跡Ⅶ	事業団報告書第291集
北島遺跡Ⅷ/田谷	事業団報告書第292集
北島遺跡Ⅸ	事業団報告書第293集

2. 今年度刊行されるのは、以下のとおりである。

北島遺跡Ⅹ	事業団報告書第302集
北島遺跡Ⅺ	事業団報告書第303集
北島遺跡Ⅻ(本書)	事業団報告書第304集
北島遺跡Ⅼ	事業団報告書第305集

3. 遺跡の略号と代表地番及び各年度の発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

平成11年度

北島遺跡 第12次 (59-058)

熊谷市大字上川上町Ⅲ364他

平成11年4月16日付 教文第2-5号

平成12年度

北島遺跡 第15次 (59-058)

熊谷市大字上川上323・192他

平成12年5月2日付 教文2-3号

発掘調査は、埼玉県立熊谷スポーツ文化公園建設事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県北部公園事務所の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査事業は、第I章-3に示す組織により実施した。このうち、本書にかかる第17・18地点の発掘事業については、平成10年7月1日から平成11年3月31日までを小野美代子、新屋雅明、福田 聖、平成10年10月1日から平成11年3月31日までを宮井栄一、田中広明、平成11年4月8日から12月10日までを利根川章彦、岩田明広が担当した。

5. 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社シン技術コンサルに委託した。

6. 掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は富田和夫と大塚道則が撮影した。

7. 本書の執筆と、遺構・出土品の整理及び図版作成等の分担については、I章-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、IV章-1～6・7(1)の遺構とIV章-(1)～(7)の遺物整理、IV章-1～6の事実記載を富田、その他を鈴木孝之が行った。

8. 本書の編集は、富田と鈴木が行った。

9. 本書にかかる諸資料は、平成15年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

10. 熊谷市教育委員会には、ご教示・ご協力を賜った。記して感謝を表します。

凡例

本報告書における挿図等の指示は、以下のとおりである。

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅷ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準平面直角座標に基づき、10m×10m方眼を基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から順にA・B・C…とアルファベットを付し、東西方向は西から1・2・3…と算用数字で付し、A-1グリッド等の名称を付けた。
4. 本報告書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。
S J…竪穴住居跡 S B…掘立柱建物跡
S K…土城 S D…溝 S X…竪穴状遺構
S A…ピット列 S G…池状遺構
5. 本報告書における挿図の縮尺は以下のとおりである。但し、例外もある。
全測図：1/1700・1/500・1/600
遺構図：1/60・1/100・1/200
遺物 土器：1/4
土製品・石製品・鉄製品：1/2・1/3・1/4
木製品：1/2・1/3・1/4・1/6・1/8
6. 遺物のうち、土器展開図の網掛けは、縄文施文

範囲を示す。また、石器の網掛けは、赤色顔料の付着を示す。

7. 遺物番号表示のうち、土器番号の前に付されているアルファベット表示は、以下の赤彩表示を意味する。
A-外面全面赤彩 B-外面部分赤彩
C-内外面赤彩 D-赤彩痕跡
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
9. 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。
胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを示した。
A-赤色粒子 B-石英 C-長石 D-角閃石
E-白色粒子 F-白色針状物質 G-雲母
H-砂粒 I-片岩 J-礫 K-黒石粒
L-輝石 M-チャート N-黄褐色粒子
O-炭化物
色調は、『新版標準土色帖』1997年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）を基に通用表記とした。
残存率は、5%刻みで表示した。あくまでも目安としてのおおまかな全体表示である。
10. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000、1/25,000と熊谷市都市計画図1/2,500を使用した。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

I 発掘調査の概要	1	溝跡 その3	151
1. 発掘調査に至る経過	1	8. 水田跡 その1	219
2. 発掘調査・整理報告書作成の経過	2	その2	262
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4	9. B区南側包含層・グリッド・表面採集遺物	343
II 遺跡の立地と環境	7	V 発見された遺構と遺物	350
III 遺跡の概要	15	第18地点	350
IV 発見された遺構と遺物	19	1. 溝跡	350
第17地点	19	2. 水田跡	351
1. 竪穴住居跡	19	VI 附編	377
2. 竪穴状遺構	39	1. 第19地点出土遺物(補遺)	377
3. 掘立柱建物跡	65	2. 工事立会い関係	379
4. ピット列	73	VII 小結	385
5. 土壌	77	1. 北島遺跡で検出された筈について	385
6. 池状遺構	100	2. 北島遺跡で検出された条里関連の遺構について	390
7. 溝跡 その1	102	引用・参考文献	396
溝跡 その2	135	写真図版	

挿 図 目 次

第1図 埼玉県地形	7	第7図 第17地点遺構全体図・基本土層図	20
第2図 熊谷市周辺の地形分類図	8	第8図 第1～3号住居跡・第4号住居跡	21
第3図 周辺の遺跡	10	第9図 第1～4号住居跡出土遺物	22
第4図 遺跡の位置迅速側図	11	第10図 第5～7号住居跡	23
第5図 北島遺跡のこれまでの調査区	13	第11図 第5～7号住居跡出土遺物	24
第6図 第17・18地点遺構全体図	17	第12図 第8号住居跡	25

第13区	第8号住居跡出土遺物	25	第50区	第22～24号竪穴状遺構	56
第14区	第9号住居跡	26	第51区	第25～29号竪穴状遺構	58
第15区	第9号住居跡出土遺物	26	第52区	第30・31号竪穴状遺構	59
第16区	第10号住居跡	28	第53区	第32～35号竪穴状遺構	60
第17区	第10号住居跡出土遺物	28	第54区	第36号竪穴状遺構	61
第18区	第11・12住居跡	29	第55区	第37号竪穴状遺構	61
第19区	第11号住居跡出土遺物(1)	30	第56区	第38号竪穴状遺構	62
第20区	第11号住居跡出土遺物(2)	31	第57区	第39～41号竪穴状遺構	62
第21区	第12号住居跡出土遺物	33	第58区	第42号竪穴状遺構	63
第22区	第13～15号住居跡	34	第59区	第43号竪穴状遺構	64
第23区	第13・14号住居跡出土遺物	35	第60区	第42・43号竪穴状遺構出土遺物	64
第24区	第16～18号住居跡	36	第61区	第1号掘立柱建物跡	65
第25区	第17号住居跡出土遺物	36	第62区	第2号掘立柱建物跡	66
第26区	第18号住居跡出土遺物	37	第63区	第3号掘立柱建物跡出土遺物	67
第27区	第19号住居跡出土遺物	37	第64区	第3号掘立柱建物跡(1)	68
第28区	第19・20号住居跡	38	第65区	第3号掘立柱建物跡(2)	69
第29区	第20号住居跡出土遺物	39	第66区	第4号掘立柱建物跡	70
第30区	第1号竪穴状遺構	39	第67区	第5号掘立柱建物跡	71
第31区	第1号竪穴状遺構出土遺物	40	第68区	第6号掘立柱建物跡	72
第32区	第2号竪穴状遺構	41	第69区	第6号掘立柱建物跡出土遺物	72
第33区	第2号竪穴状遺構出土遺物	42	第70区	第1号ピット列	73
第34区	第3号竪穴状遺構	43	第71区	第1・3号ピット列出土遺物	74
第35区	第3号竪穴状遺構出土遺物(1)	44	第72区	第2号ピット列	75
第36区	第3号竪穴状遺構出土遺物(2)	45	第73区	第3～7号ピット列	76
第37区	第4号竪穴状遺構出土遺物	46	第74区	土壌(1)	78
第38区	第4号竪穴状遺構	47	第75区	土壌出土遺物(1)	79
第39区	第5・6号竪穴状遺構	47	第76区	土壌(2)	82
第40区	第7号竪穴状遺構	48	第77区	土壌(3)	84
第41区	第8号竪穴状遺構	49	第78区	土壌(4)	86
第42区	第9号竪穴状遺構	49	第79区	土壌(5)	88
第43区	第10号竪穴状遺構	50	第80区	土壌(6)	90
第44区	第11号竪穴状遺構	50	第81区	土壌(7)	92
第45区	第12・13号竪穴状遺構	51	第82区	土壌(8)	94
第46区	第14～16号竪穴状遺構	52	第83区	土壌(9)	96
第47区	第17号竪穴状遺構	53	第84区	土壌(10)	97
第48区	第18号竪穴状遺構	53	第85区	土壌出土遺物(2)	98
第49区	第19～21号竪穴状遺構	54	第86区	土壌出土遺物(3)	99

第87図	第1号池状遺構	101	第124図	溝跡(2)	138
第88図	第1号池状遺構出土遺物	101	第125図	溝跡(3)	139
第89図	溝跡その1 第17地点溝跡区割図(1)	102	第126図	溝跡(4)	140
第90図	溝跡(1)	103	第127図	溝跡(5)	141
第91図	溝跡(2)	104	第128図	溝跡(6)	142
第92図	溝跡(2)	105	第129図	溝跡(7)	143
第93図	溝跡(3)	106	第130図	溝跡(8)	144
第94図	溝跡(3)	107	第131図	溝跡(9)	145
第95図	溝跡(4)	108	第132図	溝跡(10)	146
第96図	溝跡(4)	109	第133図	溝跡(11)	147
第97図	溝跡(5)	110	第134図	溝跡断面図(1)	148
第98図	溝跡(5)	111	第135図	溝跡その3 第17地点遺構全体図(2)	151
第99図	溝跡(6)	112	第136図	第17地点溝跡区割図(3)	152
第100図	溝跡(6)	113	第137図	溝跡(1)	153
第101図	溝跡(7)	114	第138図	溝跡(2)	154
第102図	溝跡(8)	115	第139図	溝跡(3)	155
第103図	溝跡(8)	116	第140図	溝跡(4)	156
第104図	溝跡(9)	117	第141図	溝跡(5)	157
第105図	溝跡(10)	118	第142図	溝跡(6)	158
第106図	溝跡(10)	119	第143図	溝跡(7)	159
第107図	溝跡(11)	120	第144図	溝跡断面図(2)	160
第108図	溝跡(11)	121	第145図	溝跡(8)	161
第109図	溝跡(12)	122	第146図	溝跡(9)	162
第110図	溝跡(12)	123	第147図	溝跡(10)	163
第111図	溝跡(13)	124	第148図	溝跡断面図(3)	164
第112図	溝跡(14)	125	第149図	溝跡(11)	165
第113図	溝跡(15)	126	第150図	溝跡(12)	166
第114図	溝跡(15)	127	第151図	溝跡(13)	167
第115図	溝跡(16)	128	第152図	溝跡(14)	168
第116図	溝跡(16)	129	第153図	溝跡断面図(4)	169
第117図	溝跡(17)	130	第154図	溝跡断面図(5)	170
第118図	溝跡(18)	131	第155図	溝跡(15)	171
第119図	溝跡(19)	132	第156図	溝跡(16)	172
第120図	溝跡(17・19)	133	第157図	溝跡(17)	173
第121図	溝跡その2 第17地点遺構全体図	135	第158図	溝跡(18)	174
第122図	第17地点溝跡区割図(2)	136	第159図	溝跡(19)	175
第123図	溝跡(1)	137	第160図	溝跡断面図(6)	176

第161図	溝跡出土遺物 (1)	200	第198図	A区水田跡 (7)	245
第162図	溝跡出土遺物 (2)	201	第199図	A区水田跡 (8)	246
第163図	溝跡出土遺物 (3)	202	第200図	A区水田跡 (9)	247
第164図	溝跡出土遺物 (4)	203	第201図	A区水田跡 (10)	248
第165図	溝跡出土遺物 (5)	204	第202図	A区水田跡 (11)	249
第166図	溝跡出土遺物 (6)	205	第203図	A区水田跡 (12)	250
第167図	溝跡出土遺物 (7)	206	第204図	A区水田跡 (13)	251
第168図	溝跡出土遺物 (8)	207	第205図	A区水田跡 (14)	252
第169図	溝跡出土遺物 (9)	208	第206図	A区水田跡 (15)	253
第170図	溝跡出土遺物 (10)	209	第207図	A区水田跡 (16)	254
第171図	溝跡出土遺物 (11)	210	第208図	A区水田跡 (17)	255
第172図	溝跡出土遺物 (12)	216	第209図	A区水田跡 (18)	256
第173図	第74号溝跡出土遺物	217	第210図	A区水田跡 (19)	257
第174図	A区二面水田跡等高線図	220	第211図	A区水田跡 (20)	258
第175図	A区二面水田跡遺構全体図	221	第212図	A区一面水田跡エレベーション図 (1)	259
第176図	A区二面水田跡区割図	222	第213図	A区一面水田跡エレベーション図 (2)	260
第177図	A区水田跡 (1)	223	第214図	A区一面水田跡エレベーション図 (3)	261
第178図	A区水田跡 (2)	224	第215図	B区一面水田跡等高線	263
第179図	A区二面水田跡エレベーション図	225	第216図	B区一面水田跡遺構全体図	264
第180図	B区二面水田跡等高線図	226	第217図	B区一面水田跡区割図	265
第181図	B区二面水田跡遺構全体図	227	第218図	B区水田跡 (1)	266
第182図	B区二面水田跡区割図	228	第219図	B区水田跡 (2)	267
第183図	B区水田跡 (1)	229	第220図	B区水田跡 (3)	268
第184図	B区水田跡 (2)	230	第221図	B区水田跡 (4)	269
第185図	B区水田跡 (3)	231	第222図	B区水田跡 (5)	270
第186図	B区水田跡 (4)	232	第223図	B区水田跡 (6)	271
第187図	B区二面水田跡エレベーション図 (1)	233	第224図	B区水田跡 (7)	272
第188図	B区二面水田跡エレベーション図 (2)	234	第225図	B区水田跡 (8)	273
第189図	A区一面水田跡等高線図	236	第226図	B区水田跡 (9)	274
第190図	A区一面水田跡遺構全体図	237	第227図	B区水田跡 (10)	275
第191図	A区一面水田跡区割図	238	第228図	B区水田跡 (11)	276
第192図	A区水田跡 (1)	239	第229図	B区水田跡 (12)	277
第193図	A区水田跡 (2)	240	第230図	B区水田跡 (13)	278
第194図	A区水田跡 (3)	241	第231図	B区水田跡 (14)	279
第195図	A区水田跡 (4)	242	第232図	B区水田跡エレベーション図 (1)	280
第196図	A区水田跡 (5)	243	第233図	B区水田跡エレベーション図 (2)	281
第197図	A区水田跡 (6)	244	第234図	B区水田跡エレベーション図 (3)	282

第235図	B区水田跡エレベーション図(4)……283	第272図	D区水田跡(4)……323
第236図	B区水田跡エレベーション図(5)……284	第273図	D区水田跡エレベーション図……324
第237図	C区一面水田跡等高線図……287	第274図	E区一面水田跡等高線図……326
第238図	C区一面水田跡遺構全体図……288	第275図	E区一面水田跡遺構全体図……327
第239図	C区一面水田跡区割図……289	第276図	E区一面水田跡区割図……328
第240図	C区水田跡(1)……290	第277図	E区水田跡(1)……329
第241図	C区水田跡(2)……291	第278図	E区水田跡(2)……330
第242図	C区水田跡(3)……292	第279図	E区水田跡(3)……331
第243図	C区水田跡(4)……293	第280図	E区水田跡(4)……332
第244図	C区水田跡(5)……294	第281図	E区水田跡(5)……333
第245図	C区水田跡(6)……295	第282図	E区水田跡(6)……334
第246図	C区水田跡(7)……296	第283図	E区水田跡(7)……335
第247図	C区水田跡(8)……297	第284図	E区水田跡エレベーション図(1)……336
第248図	C区水田跡(9)……298	第285図	E区水田跡エレベーション図(2)……337
第249図	C区水田跡(10)……299	第286図	E区水田跡エレベーション図(3)……338
第250図	C区水田跡(11)……300	第287図	B区南側包含層出土遺物……343
第251図	C区水田跡(12)……301	第288図	グリッド・表採出土遺物(1)……344
第252図	C区水田跡(13)……302	第289図	グリッド・表採出土遺物(2)……345
第253図	C区水田跡(14)……303	第290図	グリッド・表採出土遺物(3)……346
第254図	C区水田跡(15)……304	第291図	グリッド・表採出土遺物(4)……347
第255図	C区水田跡(16)……305	第292図	グリッド出土鉄製品……349
第256図	C区水田跡(17)……306	第293図	第18地点出土遺物……351
第257図	C区水田跡(18)……307	第294図	第18地点遺構全体図……352
第258図	C区水田跡(19)……308	第295図	第18地点溝跡・水田跡区割図……353
第259図	C区水田跡(20)……309	第296図	溝跡水田跡(1)……354
第260図	C区水田跡(21)……310	第297図	溝跡水田跡(2)……355
第261図	C区水田跡エレベーション図(1)……311	第298図	溝跡水田跡(3)……356
第262図	C区水田跡エレベーション図(2)……312	第299図	溝跡水田跡(4)……357
第263図	C区水田跡エレベーション図(3)……313	第300図	溝跡水田跡(5)……358
第264図	C区水田跡エレベーション図(4)……314	第301図	溝跡水田跡(6)……359
第265図	C区B水田跡出土遺物……315	第302図	溝跡水田跡(7)……360
第266図	D区一面水田跡等高線図……317	第303図	溝跡水田跡(8)……361
第267図	D区一面水田跡遺構全体図……318	第304図	溝跡水田跡(9)……362
第268図	D区一面水田跡区割図……319	第305図	溝跡水田跡(10)……363
第269図	D区水田跡(1)……320	第306図	第18地点溝跡断面図……364
第270図	D区水田跡(2)……321	第307図	第18地点基本土層図……365
第271図	D区水田跡(3)……322	第308図	溝跡・水田跡エレベーション図(1)……366

第309図	溝跡・水田跡エレベーション図 (2) ……367	第316図	工事立会い関係出土遺物 (2) ……382
第310図	溝跡・水田跡エレベーション図 (3) ……368	第317図	笠出土状況図 ……386
第311図	溝跡・水田跡エレベーション図 (4) ……369	第318図	絵巻物に登場する笠 ……388
第312図	溝跡・水田跡エレベーション図 (5) ……370	第319図	第17・18地点位置関係図 ……390
第313図	第19地点 ……378	第320図	第17・18地点条理推定図 (1) ……391
第314図	工事立会い位置図 ……380	第321図	第17・18地点条理推定図 (2) ……392
第315図	工事立会い関係出土遺物 (1) ……381	第322図	北島遺跡周辺の条理推定図 ……395

目 次

第1表	調査・整理の経過 …… 3	第25表	溝跡出土遺物観察表 ……212
第2表	第1～4号住居跡出土遺物観察表 …… 22	第26表	溝跡出土遺物観察表 ……213
第3表	第5～7号住居跡出土遺物観察表 …… 24	第27表	溝跡出土遺物観察表 ……214
第4表	第8号住居跡出土遺物観察表 …… 25	第28表	溝跡出土遺物観察表 ……215
第5表	第9号住居跡出土遺物観察表 …… 27	第29表	A区水田跡計測表 ……225
第6表	第10号住居跡出土遺物観察表 …… 29	第30表	B区水田跡計測表 ……234
第7表	第11号住居跡出土遺物観察表 …… 32	第31表	A区水田跡計測表 ……262
第8表	第12号住居跡出土遺物観察表 …… 33	第32表	B区水田跡計測表 ……285
第9表	第13・14号住居跡出土遺物観察表 …… 35	第33表	C区B水田跡出土遺物観察表 ……315
第10表	第18号住居跡出土遺物観察表 …… 37	第34表	C区水田跡計測表 ……316
第11表	第19号住居跡出土遺物観察表 …… 37	第35表	D区水田跡計測表 ……325
第12表	第1号竪穴状遺構出土遺物観察表 …… 40	第36表	E区水田跡計測表 ……339
第13表	第2号竪穴状遺構出土遺物観察表 …… 41	第37表	B区南側包含層出土遺物観察表 ……343
第14表	第2号竪穴状遺構出土遺物観察表 …… 43	第38表	グリッド・表採出土遺物観察表 ……348
第15表	第3号竪穴状遺構出土遺物観察表 …… 46	第39表	グリッド・表採出土遺物観察表 ……349
第16表	第4号竪穴状遺構出土遺物観察表 …… 47	第40表	第18地点出土遺物観察表 ……351
第17表	第42・43号竪穴状遺構出土遺物観察表 …… 64	第41表	第18地点水田跡計測表 ……373
第18表	第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 67	第42表	第18地点水田跡計測表 ……374
第19表	第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 72	第43表	第18地点水田跡計測表 ……375
第20表	第1・3号ピット列出土遺物観察表 …… 74	第44表	第18地点水田跡計測表 ……376
第21表	土城出土遺物観察表 …… 99	第45表	工事立会い関係出土遺物観察表 ……382
第22表	土城出土遺物観察表 ……100	第46表	第17地点新旧対照表 (竪穴状遺構) ……383
第23表	第1号池状遺構出土遺物観察表 ……100	第47表	第17地点新旧対照表 (水田跡) ……384
第24表	溝跡出土遺物観察表 ……211		

図 版 目 次

- | | | |
|------|--|---|
| 図版 1 | 遺跡周辺（昭和24年撮影米軍写真）
遺跡遠景（南西から） | 第 6号竪穴状遺構
第 7号竪穴状遺構 |
| 図版 2 | 第17地点全景（南から）
第18地点全景（西から） | 第11号竪穴状遺構
第12号竪穴状遺構 |
| 図版 3 | A区・B区全景
A区全景 | 第13号竪穴状遺構
図版12 第16号竪穴状遺構 |
| 図版 4 | A区全景
A区全景 | 第19号竪穴状遺構
第20号竪穴状遺構 |
| 図版 5 | AⅩ西北部遠景
AⅩAN・AOグリッド遺構群 | 第21・23号竪穴状遺構
第22・24号竪穴状遺構 |
| 図版 6 | A区AN45グリッド遺構群
A区AN47・48グリッド遺構群 | 第27号竪穴状遺構
第29号竪穴状遺構、第44号土壌 |
| 図版 7 | C区全景
C区1面 | 第 1号掘立柱建物跡
図版13 第 2号掘立柱建物跡 |
| 図版 8 | D区・E区全景
17地点全景（D・EⅩ） | 第 3号掘立柱建物跡
第 3号掘立柱建物跡 |
| 図版 9 | 第 1・2・3号住居跡
第 5・6・7号住居跡
第 8号住居跡
第 9号住居跡
第10号住居跡遺物出土状況
第11・12号住居跡
第11号住居跡カマド跡
第12号住居跡カマド跡1・2 | 第 3号掘立柱建物跡P15柱根
第 4・5号掘立柱建物跡
第 6号掘立柱建物跡
第 1号ピット列
第 3～6号ピット列 |
| 図版10 | 第12号住居跡カマド跡 奈良三彩小壺出土状況
第13・14号住居跡
第 4号竪穴状遺構、第15号住居跡
第16号住居跡
第17号住居跡
第18号住居跡
第19号住居跡
第20号住居跡 | 図版14 第 1号土壌
第 1号土壌遺物出土状況
第 9号土壌
第17号土壌
第24号土壌
第26号土壌
第58号土壌
第59号土壌 |
| 図版11 | 第 1号竪穴状遺構遺物出土状況
第 2号竪穴状遺構
第 5号竪穴状遺構 | 図版15 第65号土壌
第66号土壌
第68号土壌
第72号土壌
第79号土壌
第81号土壌 |

- 第82号土塙
第87号土塙遺物出土状況
- 図版16 第1号溝跡
第1・10号溝跡
第4号溝跡
第24～26号溝跡
第24・32号溝跡
第24・32号溝跡、坪交点
第27号溝跡、平安坪界
第28～31号溝跡
- 図版17 第33～43号溝跡
第33・40～47号溝跡
第33・40・46・47号溝跡
第34・35号溝跡
第38号溝跡
第40号溝跡、平安東西大畦畔、平安水田跡
第62・63号溝跡、平安水田跡
第66・67号溝跡
- 図版18 第70～72号溝跡、平安南北大畦畔
第74号溝跡
第74号溝跡腰刀出土状況
第74号溝跡腰刀出土状況（近接）
第75・76号溝跡
第77号溝跡
第84号溝跡
第95号溝跡
- 図版19 第96～99号溝跡
第96号溝跡遺物出土状況
第102号溝跡
第1号井戸跡、第102号溝跡遺物出土状況
第102号溝跡遺物出土状況（近接）
第103号溝跡
第104号溝跡
第104号溝跡断面
- 図版20 第106・109～111号溝跡
第1号井戸跡
第1号井戸跡、第102号溝跡
- AL45グリッドPit1 遺物出土状況
A区水田跡（南から）
A区平安水田・中世水田跡（西から）
A区平安水田・中世水田跡（南東から）
B区平安水田跡
- 図版21 B区平安水田跡（東から）
B区平安水田跡（東から）
C区平安水田跡（南西から）
C区平安水田跡（東から）
C区平安水田跡（北から）
C区平安水田跡
B区平安水田跡東西断面
C区平安水田跡南北断面
- 図版22 C区平安南北大畦畔（南から）
D区平安水田跡（南から）
D区平安水田跡水田面・畦、馬蹄痕（南から）
D区平安水田跡水田面・畦、馬蹄痕（近接）
E区平安水田跡（南から）
E区平安水田跡（南から）
E区平安水田跡土壌検出状況
作業風景
- 図版23 第1号住居跡 第9図4
第8号住居跡 第13図1
第8号住居跡 第13図1
第8号住居跡 第13図2
第9号住居跡 第15図1
第9号住居跡 第15図1
第9号住居跡 第15図4
第11号住居跡 第19図4
- 図版24 第11号住居跡 第19図5
第11号住居跡 第19図6
第11号住居跡 第19図7
第11号住居跡 第19図7
第11号住居跡 第19図16
第11号住居跡 第19図21
第1号竪穴状遺構 第31図7
第2号竪穴状遺構 第33図17

- 第2号竪穴状遺構 第33図18
- 図版25 第2号竪穴状遺構 第33図5
第2号竪穴状遺構 第33図8
第2号竪穴状遺構 第33図8
第2号竪穴状遺構 第33図11
第2号竪穴状遺構 第33図12
第2号竪穴状遺構 第33図13
第3号竪穴状遺構 第35図1
第3号竪穴状遺構 第35図2
第3号竪穴状遺構 第35図5
- 図版26 第3号竪穴状遺構 第35図7
第3号掘立柱建物跡 第63図4
第3号掘立柱建物跡 第63図5
第1号土壌 第75図4
第1号土壌 第75図5
第11号土壌 第75図20
第11号土壌 第75図21
第68号土壌 第85図46
第77号溝跡 第163図56
第86号溝跡 第163図61
- 図版27 第86号溝跡 第163図63
第92号溝跡 第163図65
第95号溝跡 第163図68
第95号溝跡 第163図68
第95号溝跡 第163図69
第96号溝跡 第163図72
第96号溝跡 第163図72
第102号溝跡 第164図75
- 図版28 第102号溝跡 第164図77
第102号溝跡 第164図76
第102号溝跡 第164図76
第140号溝跡 第169図175
第112号溝跡 第166図121
第105号溝跡 第165図101
第105号溝跡 第165図101
第140号溝跡 第169図173
- 図版29 第140号溝跡 第169図178
- 第140号溝跡 第169図174
第140号溝跡 第169図174
第141号溝跡 第169図180
第143号溝跡 第169図183
第144号溝跡 第170図198
第145号溝跡 第171図220
第149号溝跡 第171図230
第154号溝跡 第171図244
- 図版30 AD32グリッド 第288図1
AE35グリッド 第288図10
AH42グリッド 第290図36
AH42グリッド 第290図36
AE40グリッド 第288図12
AJ24グリッド 第291図56
AJ24グリッド 第291図56
AF35グリッド 第288図20
- 図版31 AG26グリッド 第289図23
AL45グリッド 第290図53
AL45グリッド 第290図53
第147号溝跡 第170図211
AG26グリッド 第289図26
AG41グリッド 第289図31
第95号溝跡 第163図71
第95号溝跡 第163図71
- 図版32 灰釉陶器(表)
灰釉陶器(裏)
- 図版33 須恵器大甕1(表)
須恵器大甕1(裏)
- 図版34 須恵器大甕2(表)
須恵器大甕2(裏)
- 図版35 第47号溝跡 第162図34
第47号溝跡 第162図34
AD32グリッド 第288図3
AD32グリッド 第288図3
砥石・土錘
- 図版36 木製品(表)
木製品(裏)

- 図版37 第24号溝跡 第161図18
 第49号溝跡 第162図35
 第49号溝跡 第162図35
 第24号溝跡 第161図24
 第24号溝跡 第161図20
 第24号溝跡 第161図23
- 図版38 近世陶器 1 (表)
 近世陶器 1 (裏)
- 図版39 近世陶器 2 (表)
 近世陶器 2 (裏)
- 図版40 近世磁器 (表)
 近世磁器 (裏)
- 図版41 第74号溝跡 第173図 1
 AL24グリッド 第292図76
 笠出土状況 第317図
- 図版42 墨書 (1) 「綱」
 AL45グリッド Pit1 第290図53
 第11号住居跡 第19図 5
 第140号溝跡 第169図178
 第140号溝跡 第169図173
 表採 第291図69
 第147号溝跡 第170図206
- 図版43 第143号溝跡 第169図191
 第11号住居跡 第19図19
 第5・6・7号住居跡 第11図 1
 第93号土壌 第86図60
 第133号溝跡 第168図158
 第11号住居跡 第19図10
- 図版44 墨書 (2) 「文」
 第140号溝跡 第169図174
 第3号掘立柱建物跡 第63図 8
 第3号掘立柱建物跡 第63図 3
 第140号溝跡 第169図175
 第5号土壌 第75図13
 第149号溝跡 第171図229
- 図版45 第152号溝跡 第171図241
 第143号溝跡 第169図190
 第147号溝跡 第170図209
 墨書 (3) 「田」
 第10号住居跡 第17図 4
 第2号竪穴状遺構 第33図 8
 墨書 (4) その他の文字・記号
 AG26グリッド・表採 第289図26
- 図版46 第5・6・7号住居跡 第11図 9
 AL44グリッド・表採 第290図45
 第3号竪穴状遺構 第35図13
 第3号掘立柱建物跡 第63図 5
 第102号溝跡 第164図76
 第112号溝跡 第166図121
- 図版47 墨書 (5) 不明
 第3号掘立柱建物跡 第63図 4
 第1号溝跡 第161図 2
 第149号溝跡 第171図230
 第1号土壌 第75図 2
 AL44グリッド・表採 第290図48
 第147号溝跡 第170図207
- 図版48 第2号竪穴状遺構 第33図19
 第12号土壌 第85図31
 第1号溝跡 第161図 1
 第11号住居跡 第19図11
 第7号土壌 第75図15
 第149号溝跡 第171図222

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。各種大型のスポーツ大会の開催やスポーツ施設の整備を進めてきたのは、本県におけるスポーツの振興を図り、時代を担う人づくりを目標とした施策である。

2004年に開催される第59回国民体育大会、第40回全国身体障害者スポーツ大会に向け、そのメイン会場となる熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業も、その一環として計画されたものである。

熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業に先立ち、公園課長から平成9年7月18日付公園第277号で、埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成9年12月2日～5日に遺跡範囲確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成9年12月22日付け教文第1254号で、概ね次のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
天神遺跡 (59-101)	集落跡・古墳・墓	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	熊谷市大字上川上
北島遺跡 (59-058)	集落跡・墓	弥生・古墳・奈良・平安・中世	熊谷市大字今井
田谷遺跡 (59-071)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市大字上川上
天神東遺跡 (59-078)	集落跡	古墳・奈良・平安・近世	熊谷市大字上川上

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

さらに、公園外周道路については、平成11年9月2日付け公園第355号で照会があり、平成11年9月

16・17日に遺跡範囲確認調査を行い、平成11年9月22日付け教文第622号で次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
赤城遺跡 (59-100)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市人字今井
北島遺跡 (59-058)	集落跡・墓	弥生・古墳・奈良・平安・中世	熊谷市大字上川上
田谷遺跡 (59-071)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市大字上川上

2 取扱い(省略)

文化財保護課は、公園課や北部公園建設事務所と協議を重ねて工事と埋蔵文化財保護との調整を図り、できるだけ盛土による現状保存の措置を講じた。しかし、工事の計画変更が不可能であるメイン陸上競技場、調整池、屋内運動場、外周道路などについては、止むを得ず記録保存の発掘調査を実施することとし、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

調査は平成10年7月～平成12年12月まで2年5ヶ月にわたって行われた。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法57条第1項にもとづき、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘調査届が、また埼玉県知事から57条の3にもとづく発掘通知が提出された。それに対する指示通知は以下のとおりである。

発掘調査届：平成10年7月27日付け教文第2-77号

平成10年10月5日付け教文第2-120号

平成11年1月21日付け教文第2-178号

平成11年4月16日付け教文第2-5号

平成12年1月24日付け教文第2-129号

平成12年1月24日付け教文第2-130号

平成12年1月24日付け教文第2-131号

平成12年4月19日付け教文第2-3号

発掘通知：平成10年7月28日付け教文第3-278号

平成10年7月28日付け教文第3-279号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成10年度

第9次調査

第9次調査は、平成10年度7月当初より、発掘調査事務所の設置および調査区の開掘工事を行い、重機による表土除去に着手した。調査対象区は、A区～C区であった。第17地点は、試掘の結果、奈良・平安時代の集落および、天仁元年(1198年)に降灰した浅間山の火山灰(浅間B軽石)を被覆した水田跡の存在が予想されていた。そこで、表土除去はこれらの水田跡が検出される直上まで、重機によって掘削を行った。表土除去に続いて、遺構確認作業を行って水田跡を検出し、遺構精査に入った。水田跡の調査の後、奈良・平安時代の遺構が確認できる直上までさらに掘り下げを行い、続いて遺構確認作業と遺構精査に入った。

第10次調査

第10次調査は、平成10年10月当初より、発掘調査事務所の設置および調査区の開掘工事を行い、重機による表土除去に着手した。調査対象区は、第18地点であった。第18地点は、試掘の結果、天仁元年(1108年)に降灰した浅間山の火山灰(浅間B軽石)を被覆した水田跡の存在が予想されていた。そこで、表土除去はこれらの水田跡が検出される直上まで、重機によって掘削を行った。

表土除去に続いて、遺構確認作業を行って水田跡を検出し、遺構精査に入った。第18地点では、浅間B軽石が5cm程堆積している部分もあり、この火山灰の直下に、平安時代の水田跡が検出された。

なお、この過程において、平安時代と近世の溝跡も確認されており、併せて、精査を行った。

平成11年度

第12次調査

第12次調査は、平成11年度4月当初より、重機による表土除去に着手した。調査対象区は、A～C区の未着手部分とD・E区であった。

すでに述べたように、第17地点は、試掘の結果、奈良・平安時代の集落および、天仁元年(1108年)に降灰した浅間山の火山灰(浅間B軽石)を被覆した水田跡の存在が予想されていた。そこで、これまでと同様に、表土除去はこれらの水田跡が検出される直上まで、重機によって掘削を行った。

表土除去に続いて、遺構確認作業を行って水田跡を検出し、遺構精査に入った。水田跡の調査の後、奈良・平安時代の遺構が確認できる直上までさらに掘り下げを行い、続いて遺構確認作業と遺構精査に入った。この調査面の精査終了後、古墳時代の集落跡が検出できる面の直上まで重機による掘削を行い、次いで遺構確認作業から精査へと移行した。

A・C区では、さらにこの後、弥生時代の遺構が検出できる面の直上まで掘削を行った。遺構確認作業の結果、弥生時代の水田跡と溝跡が検出され、精査を開始した。

第13次調査

第13次調査の調査対象区は、第17・18地点の未着手部分の調査である。

平成11年11月、他の調査区と同じく、天仁元年(1108年)に降灰した浅間山の火山灰(浅間B軽石)を被覆した水田跡が検出される直上まで、重機による表土掘削を行った。しかし、ここでは中世以後の擾乱を受けており、浅間B軽石の堆積は見られなかったが、遺構確認作業の結果、平安時代の溝跡と近世の溝跡が検出された。12月、各遺構の精査を終了し、遺物・写真・図面類の搬出を行い、機材を撤収し、仮事務所を撤去した。

整理作業

平成15年度

平成15年4月から9月にかけて行われた。平成15年度の整理予定は、報告書のⅣ章で扱う遺構と遺物の整理作業である。

4月上旬から、出土遺物の水洗・註記および接合・復元作業を開始した。これらと並行して、発掘

調査時に測量した遺構実測図の整理と、第二原図の作成を行った。5月下旬、接合・復元の終了した遺物から順次、実測を開始した。また、二次原図化できたものから、スキャナーで取り込んだデータを基に、パソコンによるデジタルトレースを行い、遺構図版の作成を開始した。7月上旬、遺物実測図のトレースおよび、土器の採拓作業を開始した。遺物実測の終了した遺物から、写真撮影を予定しているものを選別し、色塗りを開始した。8月初旬、遺構・遺物について仮版組みを開始した。下旬より、仮版組みの終了した図版を基に、報告書の割付を開始した。またこれと並行して、遺物の写真撮影と原稿執筆を開始した。9月、8月からの作業を継続・終了すると共に、写真図版も含めて割付を完了した。また、これと併せて、文章や図版などのデータを、フロッピーやCDなどに取り込みを行った。

平成16年度

平成16年度は、報告書における残りの部分につい

での整理作業を行った。

10月初旬、遺構実測図の内、未着手図面の整理と、第二原図の作成を開始した。これと並行して、遺物の水洗・註記および接合・復元作業を開始した。下旬、復元の終了した遺物の実測を開始した。11月初旬、二次原図化できたものから、スキャナーで取り込んだデータを基に、パソコンによるデジタルトレースを行い、遺構図版の作成を開始した。これと並行して、遺物実測図のトレースおよび採拓を行った。中旬、原稿の執筆を開始した。12月上旬、遺構・遺物の図版作成を開始し、併せて報告書全体の割付作業に入った。

平成17年1月、12月からの作業を継続すると共に、図版類・写真類・遺物等を整理・分類作業の準備を開始した。2・3月、1月に続いて図版類・写真類・遺物等を整理・分類作業を行い、収納作業を行った。また、報告書の校正を行い、上旬に刊行した。

第1表 調査・整理の経過

	平成10年												平成11年														
	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12									
調 査	(17地点) (第9次)	第9次																									
	(第12次)												第12次														
	(18地点) (第10次)												第10次														
	(第13次)																										
整 理	平成15年									平成16年			平成17年														
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3															

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成10～12年度）

平成10年度

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

庶務課長 金子 隆
主査 田中 裕二
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

調査部

調査部長 谷井 彪
調査副部長 水村 孝行
調査第二課長 杉崎 茂樹
統括調査員 小野 美代子
統括調査員 宮井 英一
主任調査員 新屋 雅明
主任調査員 田中 広明
主任調査員 福田 聖

平成11年度

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長兼経理課長 関野 栄一
庶務課長 金子 隆
主査 田中 裕二
主任 江田 和美
主任 長滝 美智子
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二
主任 菊池 久

調査部

調査部長 増田 逸朗
調査部副部長 水村 孝行
主席調査員（調査第三担当） 今井 宏
主席調査員（調査第五担当） 小野 美代子
統括調査員 利根川 章彦
統括調査員 若松 良一
統括調査員 細田 勝
統括調査員 富田 和夫
統括調査員 鈴木 孝之
統括調査員 石井 伸明
主任調査員 黒坂 禎二
主任調査員 吉田 稔
主任調査員 村田 章人
主任調査員 田中 広明
主任調査員 福田 聖
主任調査員 岩田 明広
主任調査員 渡辺 清志

平成12年度

理 事 長
副 理 事 長
常務理事兼管理部長

管理部

管 理 部 副 部 長
主 席 (庶務担当)
主 席 (施設担当)
主 任
主 任
主 任
主 任
主 任

調査部

調 査 部 長
調 査 部 副 部 長
主 席 調 査 員 (調査第三担当)
統 括 調 査 員
統 括 調 査 員
統 括 調 査 員
主 任 調 査 員
主 任 調 査 員
主 任 調 査 員
主 任 調 査 員
主 任 調 査 員

中 野 健 一
飯 塚 誠 一 郎
広 木 卓

関 野 栄 一
阿 部 正 浩
野 中 廣 幸
江 田 和 美
長 滝 美 智 子
福 田 昭 美
腰 塚 雄 二
菊 池 久

高 橋 一 夫
石 岡 憲 雄
小 野 美 代 子
宮 井 英 一
鈴 木 孝 之 一
赤 熊 浩 一
古 田 稔
大 谷 徹
君 島 勝 秀
山 本 靖
福 田 聖

(2) 整理・報告書刊行

平成15年度

理 事 長
副 理 事 長
常務理事兼管理部長

管理部

副 部 長
主 席
主 任
主 任
主 任
主 任
主 任

調査部

調 査 部 長
調 査 副 部 長
主 席 調 査 員 (資料整理担当)
統 括 調 査 員

桐 川 卓 雄
飯 塚 誠 一 郎
中 村 英 樹

村 川 健 二
田 中 由 夫
江 田 和 美
長 滝 美 智 子
福 田 昭 美
腰 塚 雄 二
菊 池 久

宮 崎 朝 雄
坂 野 和 信
磯 崎 一
富 田 和 夫

平成16年度

理事 長 福田 陽 充

副 理 事 長 飯 塚 誠一郎

常務理事兼管理部長 中 村 英 樹

管理部

副 部 長 村 田 健 二

主 席 田 中 由 夫

主 任 長 滝 美智子

主 任 福 田 昭 美

主 任 菊 池 久

主 事 海老名 健

主 事 石 原 良 子

調査部

調 査 部 長 宮 崎 朝 雄

調 査 副 部 長 坂 野 和 信

主席調査員（資料整理担当） 磯 崎 一

統 括 調 査 員 鈴 木 孝 之

主 任 調 査 員 山 本 靖 公

調 査 員 宅 間 清 公

II 遺跡の立地と環境

北島遺跡は埼玉県熊谷市大字上川上町田364に位置する。遺跡の現在の地理的環境は、埼玉県北部の中核都市を形成する熊谷市街から、北東に約3kmの郊外にあたる。遺跡周辺は県北部の穀倉地帯となり、広大な田園風景が展開している。

付近には、国道17号熊谷バイパス・国道125号・国道407号などが交わっており、交通の要衝でもある。また、最寄りの駅は、JR熊谷駅であるが、秩父地域と県東部を結ぶ秩父鉄道も乗り入れている。

なお、遺跡は県立熊谷スポーツ文化公園敷地内およびその周辺域にまたがり、広大な範囲を有している。

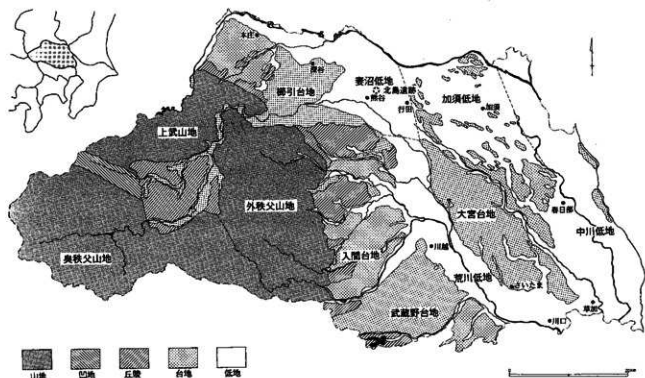
遺跡の立地する地形は、おおまかに見れば熊谷市及び妻沼町を挟む利根川と荒川のほぼ中間地点にあたる。

秩父山系に端を発し、埼玉県北部を東流する荒川が形成する熊谷扇状地の末端部にあたる為、扇状

地末端部に特有の湧水点及び伏流水があり、中小河川が発達し周辺部に多くの井戸が見られる。遺跡の東方には妻沼低地が広がり、所々に河川が形成した帯状の自然堤防と後背湿地が点在している。

荒川が形成する熊谷扇状地には多くの支流が分岐しているが、この中小河川水系の中では熊谷市街中央部にあたる星溪園を湧水点とし、東流する星川に属している。遺跡はこの星川左岸の東西方向に延びる自然堤防のひとつに立地している。

熊谷扇状地に起点を持つ中小の河川は、これより東へ向かうに従って利根川の氾濫堆積作用による影響を受けて、向きを南東方向へ変えている。現在では遺跡周辺は東西方向に延びる自然堤防上に築かれた集落とその間に営まれている広大な水田地帯からなり、比較的平坦な地形である。しかし、古代以前には自然堤防と沖積低地面との比高差が大きく、かなり起伏に富んだ地形をなしていたと考えられる。



第1図 埼玉県の地形



第2図 縣谷市周辺の地形分類図

熊谷市周辺では、旧石器から縄文時代の遺跡は極めて少ない。旧石器時代の遺跡としては、櫛挽台地上の籠原裏遺跡などが知られているに過ぎない。

縄文時代に入ると、櫛挽台地上及び妻沼低地上にも遺跡が進出してくる。妻沼低地上の寺東遺跡では、前期関山式土器が出土している。櫛挽台地上の三ヶ尻遺跡群内の林遺跡では、前期黒浜期の集落が発見されている。また、三ヶ尻天王遺跡では、中期から後期にかけての遺構が検出されている。

妻沼低地においては、後期から遺跡が進出してくる。寺東遺跡では、称名寺式の土器埋設土壇が検出されたほか、石田遺跡などが知られている。

池上遺跡や、現在整理中の諏訪木遺跡などでは、後期から晩期にかけての遺構、および包含層が発見されている。諏訪木遺跡では、後期加曾利B式期の土器集中遺構が検出され、出土した土器も中部日本の要素が窺え、注目される遺跡である。

このように、縄文時代後期から沖積低地の自然堤防部へ、生活の拠点を展開していった状況が窺える。弥生時代に入ると、縄文時代の遺跡立地を踏襲する形で、自然堤防上に集落が展開する例が増加する。北島遺跡では、前期末の土壇が検出され、後期にかけて遺構が展開している。

さらに、三ヶ尻上古遺跡、横間栗遺跡などでは、再葬墓が検出されている。また、前中西遺跡では、弥生時代中期後半を含み、後期まで継続する集落跡が発見された。

熊谷市に隣接する深谷市の上敷免遺跡では、県内初の遺翼川式土器が出土したほか、妻沼町の飯塚・飯塚南遺跡、行田市の池上・小敷田遺跡などでは、中期後半の再葬墓及び集落跡が発見された。

これらの他に、本遺跡の南東約1.2kmに位置する古宮遺跡では、中期後半の集落が検出されている。

後期の遺跡としては、東沢遺跡・行田市池守遺跡・小敷田遺跡などから古ヶ谷式土器が出土しているほか、弥藤吾新田遺跡では、南関東系の弥生町式土器が出土している。

古墳時代に入ると、古墳は台地および低地の自然堤防上の微高地に形成され、集落は台地部ばかりでなく、低地部の自然堤防上などに積極的に進出する傾向が窺える。また近年、低地部の遺構検出が増加したことにより、木製品等の遺物の出土も増えている。

集落としては、東沢遺跡・天神東遺跡・中条遺跡群・一本木前遺跡・行田市弥藤吾新田遺跡・池上・池守遺跡・小敷田遺跡などがある。

このうち東沢遺跡と小敷田遺跡からは、多量の木製品が出土している。古墳群としては、櫛挽台地上の別府古墳群・籠原裏古墳群・三ヶ尻古墳群、さらに、熊谷扇状地上の玉井古墳群・広瀬古墳群・坪井古墳群・石原古墳群・肥塚古墳群、そして、荒川右岸の村岡古墳群、妻沼低地上の中条古墳群・上之古墳群などが形成されている。

以上の古墳群の内、肥塚古墳群では、河原石乱石積と角閃石安山岩切組積の、2種類の胴張型横六式石室をもつ古墳が確認されている。また、中条古墳群内の鍔塚古墳は帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等を伴う墓前祭祀2ヶ所が確認されている。

古代に入ると、遺跡の規模が拡大すると共に、官衙関連施設を想定させるような特定集落遺跡が発見されている。

西別府廃寺は、幡羅郡の郡寺として想定されている。また近年、深谷市の幡羅遺跡では、総柱の倉庫群が発見され、幡羅郡衙の正倉域と想定されている。

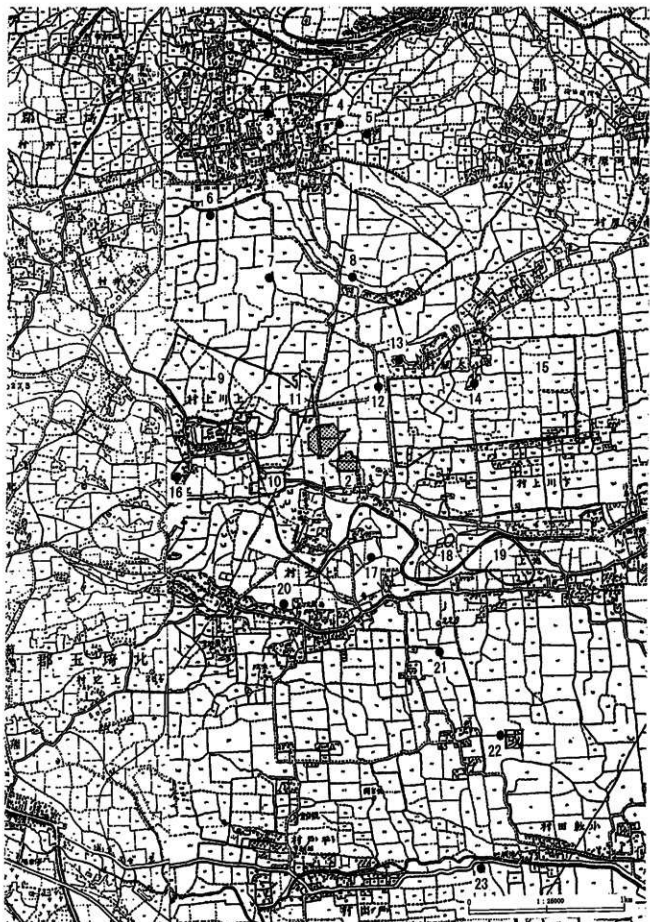
また、小敷田遺跡では、7世紀末から8世紀初頭にかけての出萃木簡などが出土したほか、池上遺跡では9世紀代の企画性をもつ掘立柱建物跡群が検出されている。さらに、熊谷市の諏訪木遺跡では、9～10世紀代の複数の大型建物跡や、多数の掘立柱建物跡群などが検出されている。このほか、河川脇の祭祀関連遺構や、企画性をもつ集落跡と大型掘立柱建物跡が検出されており、特殊な様相を窺がわせている。

北島遺跡については、古代においても抜きん出た

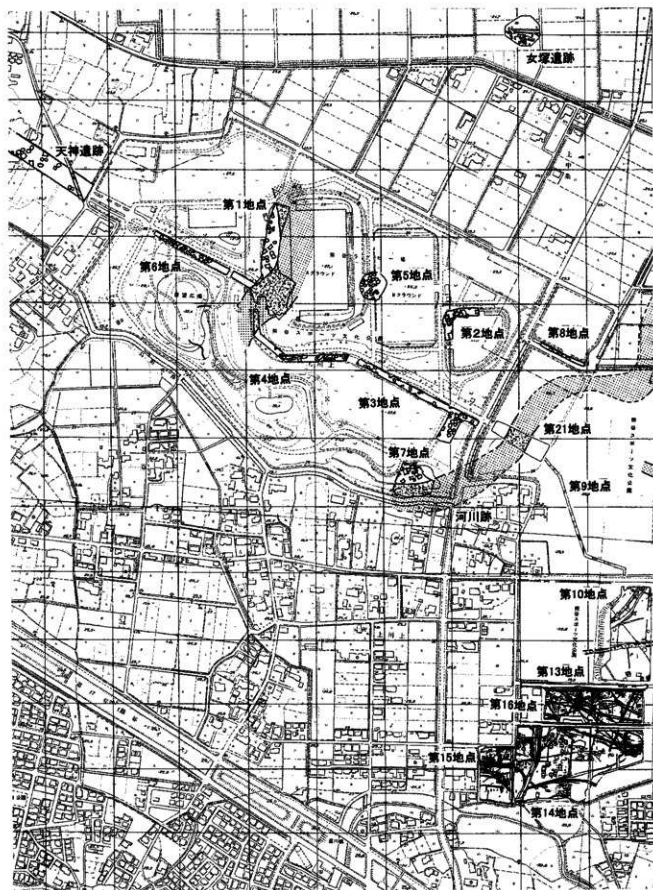


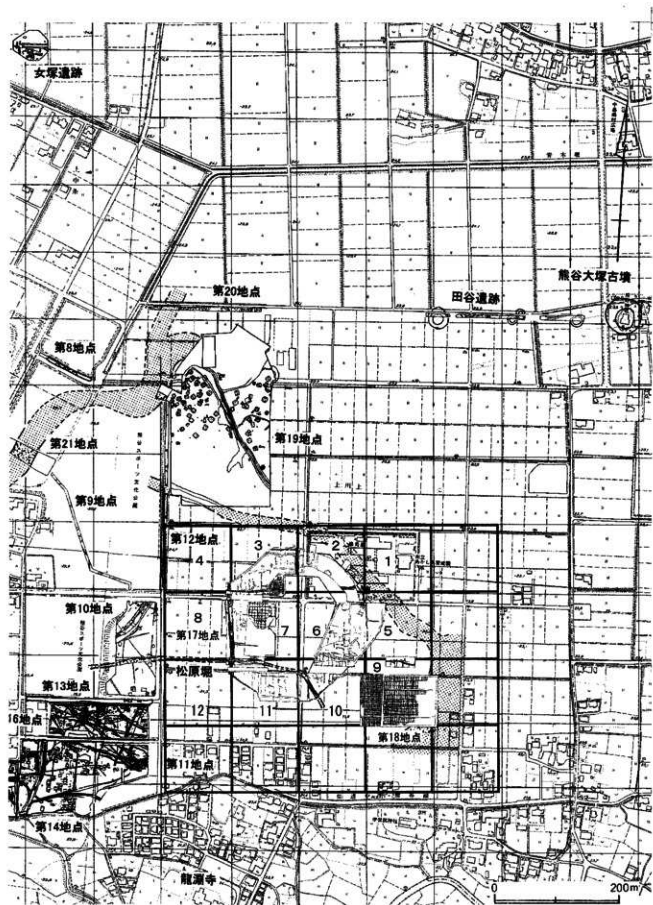
1. 北島遺跡 (No.17地点) 2. 北島遺跡 (No.18地点) 3. 中条氏館跡 4. 塹現山古墳 5. 中条古墳群 6. 女塚古墳
 7. 御塚古墳 8. 中島遺跡 9. 北島遺跡 (No.1~13地点) 10. 北島遺跡 (No.14~16地点) 11. 北島遺跡 (No.19地点)
 12. 天神東遺跡 13. 大塚古墳 14. 東沢遺跡 15. 中条条甲遺跡 16. 河上氏遺跡 17. 熊谷市No.59遺跡 18. 上河原遺跡
 19. 古宮遺跡 20. 成田氏館跡 21. 池上遺跡 22. 小敷田遺跡 23. 持田氏の宮遺跡

第3図 周辺の遺跡



第4図 遺跡の位置 (迅速側図)





第5図 北島遺跡のこれまでの調査区

地域であったと思われる。とくに第19地点では、9～11世紀の二重濠をもつ台形の区画地が検出されている。またその他の調査地点においても、数多くの住居跡や獨立柱建物跡が展開しており、他を圧倒するがごとき様相をみせている。

平安時代末に差し掛かった天仁元(1108)年、上野と信濃の国境の浅間山が噴火し、上野・武蔵両国に多量の火山灰(浅間B軽石)が降下した。この火山灰による水田への打撃は大きく、耕地として復興するのは13世紀以降となるほどであった。

平安時代末から鎌倉時代になると、『平家物語』・『吾妻鏡』などに、多くの武蔵武士が登場し始めるが、北島遺跡周辺では、こういった武士達の館跡と伝えられる遺跡や、寺院跡・集落などが多数みられる。

熊谷市内では、西方遺跡・西別府館跡・玉井陣屋跡・奈良氏館跡・黒沢館跡・樋の上遺跡・若松遺跡・兵部裏屋敷・社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡・熊谷氏館跡・箱田氏館跡・成田氏館跡・河上氏館跡・中条氏館跡・久下氏館跡・市田氏館跡・光屋敷遺跡等々の中世遺跡が知られている。

なかでも、中条氏館跡・樋の上遺跡・黒沢館跡・社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡・三ヶ尻遺跡などでは発掘調査が行われており、この時期についての貴重な成果が得られている。

中条氏館跡は、中条氏ゆかりの常光院周辺と推定されている。常光院は長承元(1132)年、出羽国守に任じられ武蔵国中条に下向した常光が、中条氏を名乗ったのに始まり、常光後裔の家長(1165～1236)の代には成立していたとされる。

家長は、石橋山の合戦以降、頼朝・頼家・実朝・頼朝に仕えた武蔵武士である。また、彼は従五位下出羽国守や、幕府の評定衆にも任じられ、御成敗式目の起草にも関わったとされる人物である。

中条氏館跡は、これまでに常光院東遺跡・権現山遺跡などが発掘調査され、13～14世紀の土師質土器皿や板碑等が出土している。

また、発掘調査は行われていないものの、別府氏の居館である別府城跡は、方形の敷地に土塁や空堀が比較的良く残っている。

さらに北島遺跡の南には、成田氏の居館とされる成田氏館跡と、成田氏累代の墓が建てられた龍淵寺がある。龍淵寺は、応永18(1411)年、成田左京亮家時の時、皿尾村の阿弥陀堂にいた和尚清順を招き、建立したとされる。

その後、永禄5(1563)年に失火して本堂以下が焼け落ちたものの、成田肥前守泰季が翌年復興したとされる。

天正19(1591)年、徳川家康が、遊獵のさいに龍淵寺を訪れた。家康は、住僧の吾雪との個人的なかわりから、武蔵国太田庄の内、百石を龍淵寺の所領とする朱印状をさずけた。

熊谷市の西に位置する深谷市では、東方城跡・疋鼻和城跡・幡羅太郎館跡・新田裏遺跡・増田四郎重富館跡・原遺跡・宮ヶ谷堀の内遺跡・根岸遺跡・城下遺跡等が存在している。なかでも深谷上杉氏は、当初、疋鼻和城を居城としたが、房憲のとき、古河公方の勢力との緊張関係から深谷城に移った。そしてその周辺には、人見館跡・秋本氏館跡・押切遺跡など、深谷上杉氏の家臣の館跡がみられる。

熊谷市の東に位置する行田市には、忍城をはじめとして、皿尾城跡・行田氏館跡・忍三郎館跡・麻積氏館跡・頼戸耕地館跡・神明遺跡・石田堤・鎌田氏館跡・石田陣屋跡・百塚通遺跡・内郷遺跡・漆原館跡・桑崎堀の内遺跡・葛原氏館跡・寄居遺跡等々の中世期の遺跡が存在している。

忍城については、15世紀後半から16世紀末まで成田氏の居城であった。忍城は、「忍の浮城」と称されるように、河川や沼沢に囲まれた城である。天正18(1590)年の石田三成の水攻めはつとに有名である。このとき築かれた石田堤は、行田市から吹上町にかけて現在も一部が残っている。

なお、中世においては、武蔵国埼玉郡の大半が太田庄の庄城となっていた。

Ⅲ 遺跡の概要

北島遺跡第17・18地点の発掘調査は、おのおの熊谷スポーツ文化公園陸上競技場と調整池の建設に伴うものであった。第17地点は、遺構の密度は低いものの、第19地点と同様に、弥生時代中期後半から近世・近代までを含む。この内、弥生時代については、当事業団報告書第286集「北島遺跡Ⅵ」(2003)で報告済みである。また、古墳時代前期に関しては、当事業団報告書第303集「北島遺跡Ⅶ」(2005)において報告される。そして、第17地点の古代～近世・近代までと、第18地点の遺構と遺物についての報告を、本書において行う。

まず、地理的状況であるが、荒川新扇状地と妻沼低地との境界域にあたり、扇状地形の伏流水上昇によって発生する湧水点を起源とする、中小の河川がよく発達している。北島遺跡周辺でも、小河川が東西方向に数多く認められる。また、これまでの調査から、遺跡を東西に貫く形で蛇行して流れていた埋没河川が2本確認されている。これらの河川の自然堤防上には、生活関連遺構が密集して築かれていた。また、周辺低地部に展開する耕作地と一体化することにより、労働力の集約化が図られると同時に、豊富な水量を供給する河川からの水利施設の構築によって、灌漑農耕への好条件を提供していたものと考えられる。従前の発掘調査においても、各時代の用水路関係や、条里関係・道路関係の溝が縦横に開削されている状況が認められ、灌漑設備の拡充が図られている状況が裏付けられている。

第17地点の概要

第17地点は、第19地点の南東側80mに位置している。陸上競技場建設に伴う発掘調査では、スタンド等の構造物建設部分を調査の主体とし、中央のフィールド部分を除外したため、楕円形の調査区となっている。

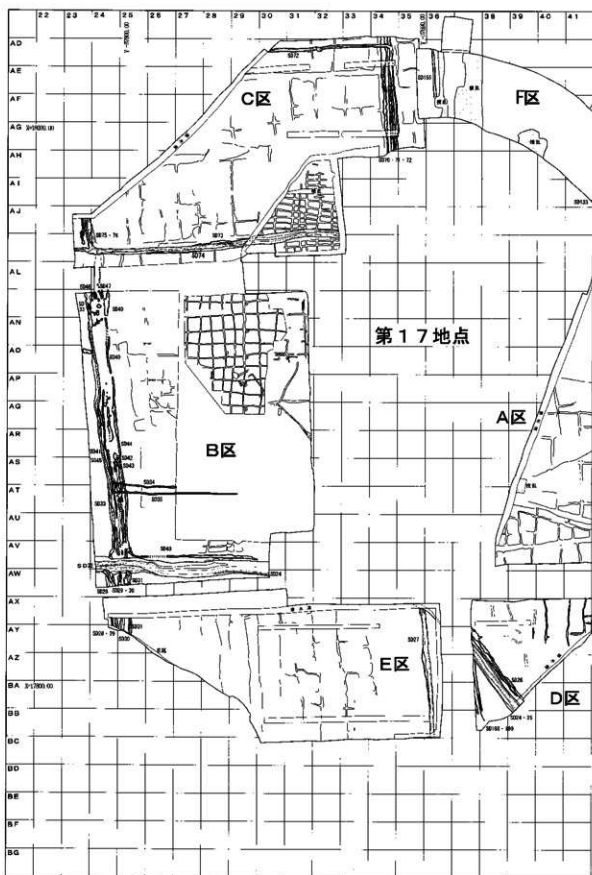
第17地点の立地は、北西に位置した東流する河川跡によって第19地点とは区切られ、この河川の右岸

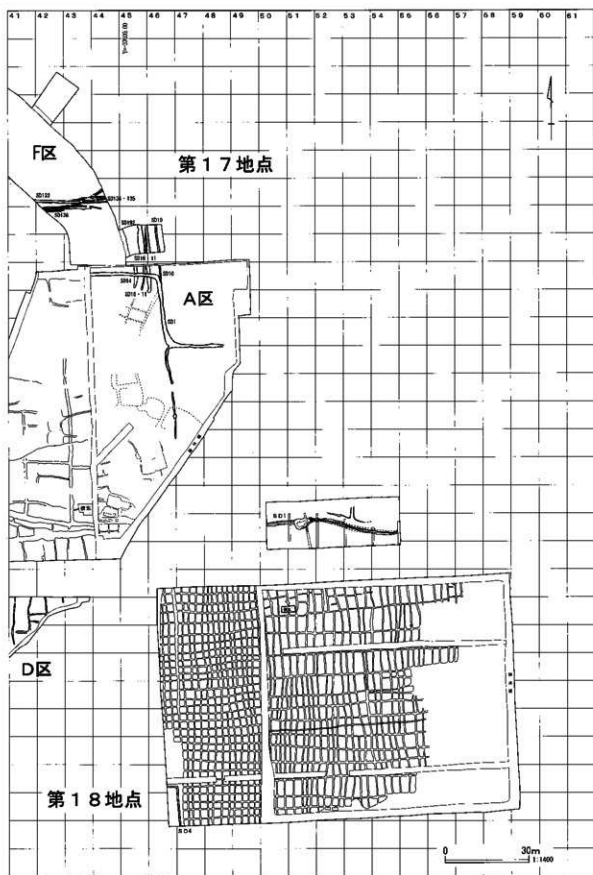
に延びる細長い自然堤防部分と、南東に位置する第18地点で検出された沼沢地に向かう低湿地の部分からなる。但し、近世に築かれた松原堀より南側では、緩やかな微高地が所在し、この部分には古墳時代前期の竪穴住居跡を中心とする生活遺構が、散漫ではあるが分布している。また、調査区全体では、標高は基本的に西側から東側に向かって緩やかに傾斜しているが、調査区内でも浅い谷が入り込み微小な標高差が認められる。

調査区内の基準土層については、20層からなり、標高23.60mを測る原表土から、1層である近・現代の耕作土の下に、第3・4層とした中世水田層が形成されている。第6層は、天仁元年に降灰した浅間B火山灰層となり、2次堆積層であるが鍵層となる。この下の第7層が奈良・平安時代の文化層となる。第8層には古墳時代後期初頭6世紀代以降に降灰した榛名二ツ岳火山灰層が、また、第9層には古墳時代初頭ないしは前期以降に降灰した浅間C火山灰層が堆積している。第10層から12層にかけては、弥生時代後期の文化層、および水田層が形成されている。第13層から第16層にかけては弥生時代中期の文化層及び水田層が形成されている。

本書で報告する遺構は、以下のとおりである。
奈良・平安時代：竪穴式住居跡19軒・土壇43基・ピット列7基・土壇109基・池状遺構1箇所、溝跡総数199条、水田跡は二面目36筆、一面目368筆

ここで、溝跡と水田跡の掲載方法について付言しておきたい。第17地点では、二面目と一面目の層的な隔たりが小さい上に、往時の微地形が反映しており、調査時において、その別を識別することは容易ではない。つまり、遺構確認面を検出する場合、重機によって表土から徐々に水平に掘り下げる作業を繰り返すことになる。その際に鍵層が存在すれば、これが地形を追う一つの手掛かりともなるが、存在していない場合や、存在しても顕著ではない場合は、





第6图 第17・18地点遺構全体图

旧地形を追うことは困難である。そこで、水平な掘り下げを行うことになり、微地形をある程度失ってしまう結果となる。そのために、一面目を検出している過程で、二面に達してしまうことは、残念ではあるが有り得る。

今回の調査でも、他地点と同じく細心の注意を払ったが、上記の結果が生じた部分もある。このことから、一面と二面とは別個の項に掲載するが、厳密性が弱いといわざるを得ない。

具体的な掲載方法としては、Ⅳ-7その1で、奈良～平安時代の溝跡の内、条里関連以外の溝跡を、その2・その3で、主として条里関連と推定される溝跡を、そして、Ⅳ-8その1として浅間B軽石降灰以前の水田跡を、その2として平安時代の浅間B軽石降灰前後～中近世の水田跡を掲載することとする。

なお、できる限り、遺構を面ごと振り分けるべく努めたが果たせなかったものについては、調査時の帰属に従って掲載をした。また、全体的に遺構の遺存度が低いいため、これらの溝跡が途切れている事例も多い。このため、同一の溝跡に別個の遺構番号を付したり、逆に別個の遺構に同じ遺構名を付してしまっている可能性もある。

また、発掘調査の工程上、一面であれば一面を全体的に掘り下げ、次いで全体的に二面まで掘り下げ

るということは事実上不可能であった。そのため、着手順に振る遺構番号は、各面・各区ごとにはなっていないが、旧遺構番号をそのまま使用した。そして、平面図については、全測図を機械的に区割りし、その区割り岡ごとに拡大した図を番号順に並べることとした。各溝跡についての事実記載については、調査面ごとに、遺構番号順に掲載することとしたが、遺物に関しては、煩雑化を避けるために、一面の溝跡遺構図版の次に、調査面・調査区に拘らず遺構番号順に括して載せることにした。そのため、遺構掲載順序と、遺物掲載順序が異なる結果となるが、何卒ご容赦願いたい。

第18地点の概要

第18地点は、市道を挟んで第17地点の南東に位置し、距離は15m程である。調整池の建設に伴う発掘調査である。

第18地点は、地形的に後背湿地にあたるが、東側は河川もしくは沼地となっていたと考えられる。調査区内からは、浅間B軽石が堆積した水田跡や溝跡、浅間A軽石が堆積した溝跡などが検出された。しかし、平安時代の水田跡は、調査区東側では河川または沼地によって削られたためか、検出されなかった。

検出された遺構は、以下のとおりである。

平安時代：水田跡797筆

近世：溝跡4条

Ⅳ 発見された遺構と遺物

第17地点

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡（第8・9図）

A区北端のA L-44グリッドに位置する。北側は調査域外に延びるが、隣接するF区からは検出されなかった。重複する第2号住居跡を切り、第11号土壌に切られていた。

平面形は方形系と推定されるが、東壁は検出されなかった。残存規模は長軸長3.00m、短軸長1.60m、深さ0.05mである。主軸方位はN-23°-Eを指す。カマド、柱穴などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・甕・小型台付甕、須恵器環・蓋がある。須恵器環は24点あり、末野産が13点、南比企産が11点を占める。出土土器の様相から住居跡の時期は9世紀前半と考えられる。

第2号住居跡（第8・9図）

A区北端のA L-44グリッドに位置する。重複する第3・4号住居跡を切り、第1号住居跡・第1号溝跡に切られていた。また、南東壁周辺には第1・2・8・10・22号土壌が重複しており、新旧関係は不明確であるが、住居跡よりも新しい可能性があるかと判断された。

南東辺の壁溝が検出されなかったが、平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長3.95m、短軸長3.92m、深さ0.05mである。主軸方位はN-43°-Eを指す。床面は削平されていた。掘り方と壁溝がこううじて残存するにとどまり、詳細は不明である。

付属施設は検出されなかったが、第8・10号土壌は本住居跡に伴う可能性もある。

出土遺物は土師器甕片が検出されたほか、3号住居跡との分離ができないものとして土師器環・甕・ロクロ土師器環、須恵器環が少量検出されている。時期は不明確であるが、重複遺構との関係から9世紀前半と考えられる。

第3号住居跡（第8・9図）

A区北端のA L-44グリッドに位置する。重複する第4号住居跡を切り、第2号住居跡、第1号溝跡、第1号土壌に切られていた。

平面形は長方形で、残存規模は長軸長4.54m、短軸長3.58m、深さ0.05mである。主軸方位はN-3°-Eを指す。

カマド、柱穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は須恵器環が少量ある。その他、2号住居跡と分離できない遺物として土師器環・甕・ロクロ土師器環がある。図示し得たのは須恵器環1点のみであるが、底部は回転糸切り後、無調整である（第9図10）。住居跡の時期は9世紀前半代であろう。

第4号住居跡（第8・9図）

A L-44グリッドに位置する。重複する第1～3号住居跡、第61号住居跡、第3号土壌及び第1号溝跡に切られていた。

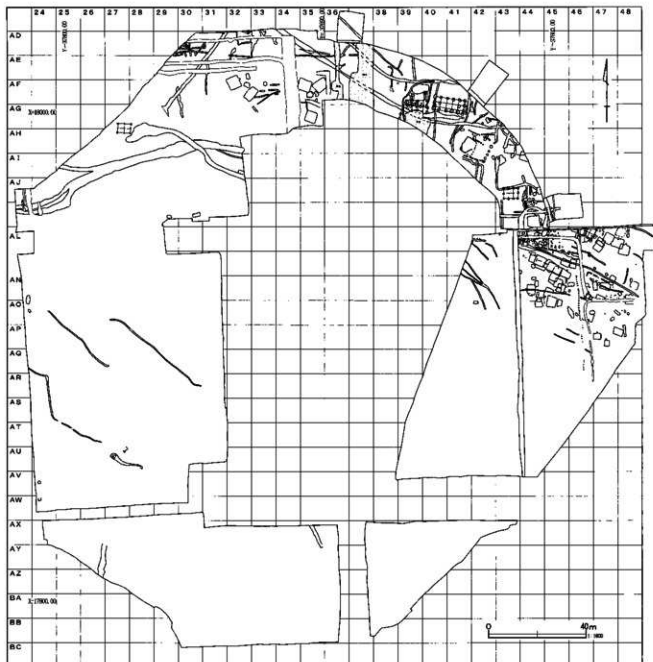
平面形は方形である。残存規模は長軸長4.88m、短軸長4.44m、深さ0.06mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。

カマド、柱穴などの付属施設は検出されなかった。

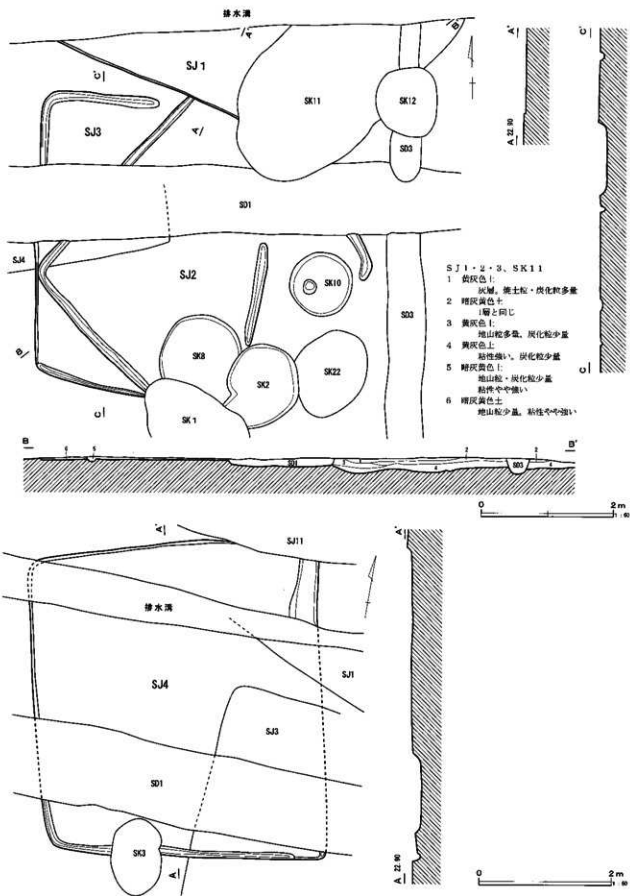
出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・埴・蓋がある。土師器環は体部をヘラケズリするタイプで、底部は平底風となろう（第9図11）。須恵器埴の口縁部は内傾する面取りはなく、細く外反するものに変化しており、型的に新しい特徴が窺える（第9図12）。住居の時期は出土遺物から9世紀前半代と推定されるが、重複する住居跡との時期差はほとんどないようである。

第5号住居跡（第10・11図）

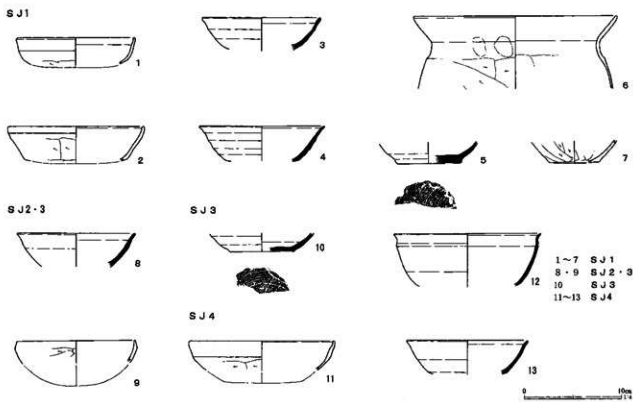
A区北西部のA L-44グリッドに位置する。重複する第6号住居跡・第1号溝跡・第7号土壌に切られていた。第4号住居跡との新旧関係は明確には捉



第7図 第17地点遺構全体図・基本土層図



第8図 第1～3号住居跡・第4号住居跡



第9図 第1～4号住居跡出土遺物

第2表 第1～4号住居跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(11.8)	2.8		ACDF	Ⅱ	褐色	15	SJ1
2	土師環	(13.7)	3.6	(10.5)	ACDE	Ⅱ	橙褐色	10	SJ1
3	須恵環	(12.0)	3.3		EF	Ⅱ	灰色	10	SJ1 南比企産
4	須恵環	(12.6)	3.6	(7.4)	CI	Ⅱ	灰色	20	SJ1 木野産
5	須恵環		2.2	(6.4)	CDG	Ⅱ	灰色	30	SJ1 木野産 底部B0手法
6	土師甕	(20.7)	7.5		ADE	Ⅱ	褐色	10	SJ1
7	土師甕		2.3	(5.0)	DE	Ⅱ	褐色	15	SJ1
8	須恵環	(12.0)	3.5		BCF	Ⅱ	灰色	10	SJ2・3 南比企産
9	土師環	(12.0)	2.3		ACDE	Ⅱ	淡褐色	10	SJ2・3
10	須恵環		1.9	(6.4)	EF	Ⅱ	灰色	20	SJ3 南比企産 底部B0手法
11	土師環	(14.6)	3.0		CDE	Ⅱ	褐色	15	SJ4 体部ヘラケズリ
12	須恵無台埴	(15.0)	5.4		CF	I	灰色	8	SJ4 南比企産
13	須恵環	(12.4)	3.5		CF	I	灰色	10	SJ4 南比企産

えられなかった。

平面形は方形と推定されるが、北側に隣接するF区からは続きの部分が検出されないなど、遺構の遺存状態は極めて悪く全体像は不明確である。残存規模は長軸長3.23m、短軸長2.85m、深さ0.04mである。主軸方位はN-27°-Eを指す。

南東壁に突出部が検出されたが、性格は不明である。その他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、土師器甕と須恵器環が少量検出されている。第11図1の須恵器環は底部回

転糸切り後無調整で、「綱」の異体字が墨書されている。住居跡の時期は不明確であるが、出土遺物から9世紀前半代を中心とした時期と考えておきたい。

第6号住居跡 (第10・11図)

A区北西部のAL-43・44グリッドに位置する。重複する第5号住居跡・第9号溝跡を切り、第7号住居跡・第1号溝跡・第7号土壇に切られていた。

第5号住居跡とほぼ軸が揃うことから連続した建てる可能性はあるが、やはり北側に隣接するF区からは続きの部分が検出されず、不明確な点が残

されている。

平面形は方形と推定されるが、南東壁の壁溝の一部が検出されたのみで、全容は不明である。残存規模は長軸長4.12m、短軸長1.38m、深さ0.01mである。主軸方位はN-32°-Eを指す。

床面は削平されており、掘り方が露出した状態であった。

カマドは南東壁に設けられていたが、掘り方の一部が辛うじて残存していたに過ぎず、焼土や炭化物の堆積は認められなかった。詳細は不明である。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環があるが、量的には少ない。図化した須恵器環(第11図2)は風化が進んでいるが、底部は回転糸切り後無調整。住居跡の時期は9世紀前半代と推定される。

第7号住居跡(第10・11図)

A区北西端部のAL-43グリッドに位置する。重複する第6号住居跡・第9号溝跡を切り、第1号溝跡に切られており、遺存状態は悪い。また、隣接するF区及び排水溝西側からは検出されておらず、不

明確な点があることは否めない。

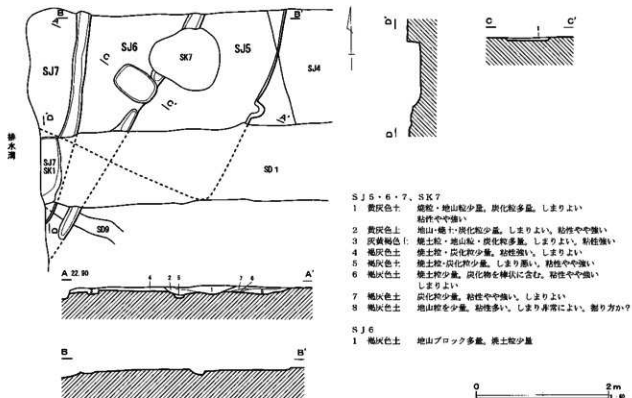
平面形は方形基調と推定されるが、詳細は不明。残存規模は長軸長3.30m、短軸長0.96m、深さ0.03mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。

床面は削平されており、詳細は不明である。付属施設は東壁際に土壌が1基検出されている(SK1)。規模は長さ1.02m、残存幅0.32m、深さ0.25mである。上面を第1号溝跡に削平されていたが、位置的に貯蔵穴となる可能性がある。覆土の状態は不明。

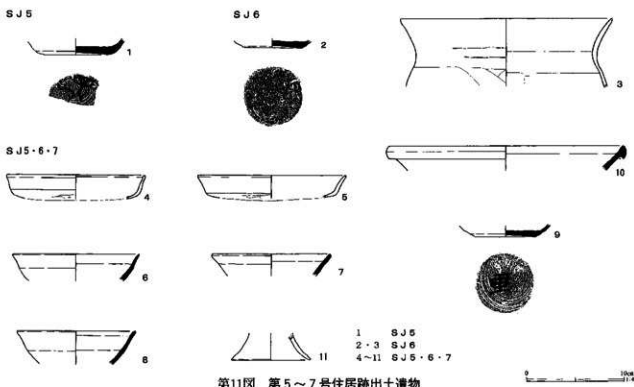
住居内から出土した遺物はない。時期は不明であるが、第5~7号住居跡は連続的に建て替えられた可能性が高く、9世紀前半~中頃に機能したものと考えておきたい。

第5~7号住居跡出土遺物(第11図)

第11図4~11には5~7号住居跡から出土した遺物で、帰属住居を特定できないものを掲げた。4・5は推定L径が大きく皿状の器形を呈する。6~9は須恵器環である。9は底部回転糸切り後無調整で、底部外面には「里」の墨書が記されている。小片が



第10図 第5~7号住居跡



第11図 第5～7号住居跡出土遺物

第3表 第5～7号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵環		1.8	(6.4)	EF	I	灰色	30	S J 5 南比企産 底部B0手法 底部に墨書「副」
2	須恵環		0.9	6.0	BF	Ⅲ	淡褐色	90	S J 6 南比企産 底部B0手法 底部風化
3	土師甕	(21.6)	7.0		ADE	I	橙褐色	10	S J 6 貯穴
4	土師甕か?	(14.0)	2.5		DE	Ⅱ	淡褐色	5	S J 5・6・7 口径傾き不安定
5	土師甕か?	(15.0)	2.3		DE	Ⅱ	褐色	5	S J 5・6・7 口径傾き不安定
6	須恵環	(12.8)	2.8		I	Ⅲ	暗褐色	10	S J 5・6・7 木野産
7	須恵環	(12.0)	2.3		CF	Ⅱ	灰色	12	S J 5・6・7 南比企産
8	須恵環	(12.0)	3.5		CF	Ⅱ	灰色	10	S J 5・6・7 南比企産
9	須恵環		1.3	6.2	EF	Ⅱ	灰色	60	S J 5・6・7 南比企産 底部B0手法 底部墨書「甲」
10	須恵甕	(24.0)	2.6		F	I	灰色	5	S J 5・6・7 南比企産
11	土師小瓶台付甕		2.8	(8.0)	DE	I	褐色	25	S J 5・6・7 脚部片 内面風化

多いが概ね9世紀前半～中頃のものが主体を占めるものと考えられる。

第8号住居跡 (第12・13図)

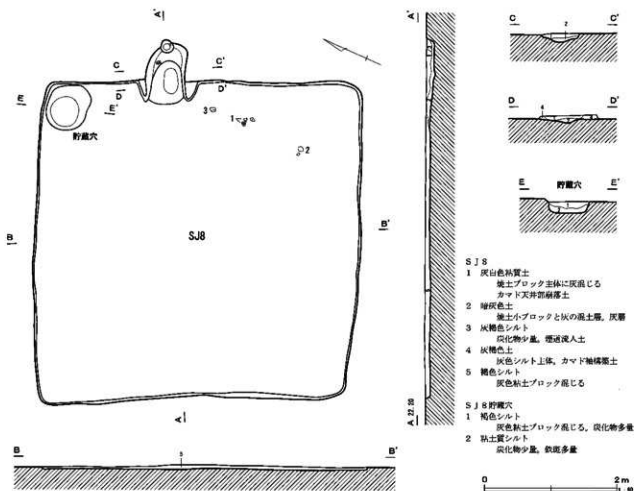
A E・A F-32グリッドに位置する。

平面形は整った方形で、規模は長軸長5.00m、短軸長4.76m、深さ0.06mである。主軸方位はN-56°-Eを指す。床面は平坦である。埋土は粘土混じりの褐色シルト質土が主体であった。カマドは北東壁に設置されていた。燃焼部は壁を切り込んで構築され、長さ0.90m、幅0.60m、深さは12cm前後と浅いものである。軸は灰色シルト質土を主体に構築されていたが、あまりしっかりしたものではない。

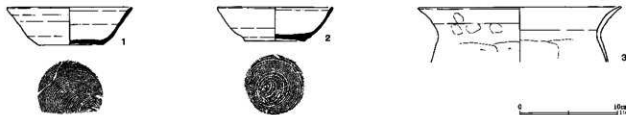
埋土は焼土ブロック主体の天井部崩落土(第1層)と灰層(第2層)が確認できた。

その他の付属施設としてはカマド脇のコーナー部に貯蔵穴が設けられていた。長径0.72mの円形で、深さ0.20mほどである。2層に分層され、上層に炭化物が多量に含まれていた。

出土遺物は須恵器環と土師甕があるが、量的には少ない。須恵器は4点あり、3点が南比企産、1点は産地不明である。第13図1の須恵器環は底部回転系切り後無調整。底径は口径の1/2を超える。胎土に鉱物粒子をほとんど含まず、精良である。産地は不明であるが秋間産の可能性もあろうか。2は南



第12図 第8号住居跡



第13図 第8号住居跡出土遺物

第4表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(12.6)	3.9	6.6	E	Ⅲ	灰色	50	No.2・3 秋田産か? 底部B0丁法 胎土精良
2	須恵坏	(11.6)	3.5	6.2	C F	Ⅱ	灰色	40	No.5 南比企産 底部B0丁法
3	上埴甕	(20.5)	5.7		D E H	Ⅱ	棕褐色	15	No.1 外面風化 ケズリ不明瞭

比企産の坏でやはり底部回転糸切り後、無調整。3は武蔵型甕で、口縁部は弓状に外反する。

住居跡の時期は不明確ではあるが、出土土器の特徴から9世紀初頭前後～前半代と推定される。

第9号住居跡 (第14・15図)

A E・A F-35・36グリッドに位置する。古代末

期と推定される第154号溝跡に北東壁の一部を削平されていたが、ほぼ規模は確定できる。

平面形は歪んだ長方形で、規模は長軸長5.86m、短軸長4.48m、深さ0.10mである。主軸方位はN-54°-Eを指す。

床面は平坦である。埋土は焼土・炭化物を少量含

第5表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師暗文環	12.4	2.9		DE	I	赤褐色	90	暗文は放射暗文+ラセン暗文
2	土師環	(13.0)	2.7		DE	II	褐色	10	口縁下に沈線一条
3	須恵環	(12.0)	3.6		EH	II	青灰色	20	底部欠失 南比企産
4	須恵環	(12.0)	3.4	6.5	E F H	I	灰色	40	No1 南比企産 底部B0手法 砂っぽい胎土 肌目粗かい
5	須恵環	(11.8)	3.9	(7.4)	E F	II	灰色	20	No1 南比企産 底部B0手法
6	須恵環	(11.1)	3.1	(6.2)	E F	II	灰色	15	南比企産 底部B0手法
7	須恵蓋		2.9		F H	II	明灰色	40	南比企産
8	土師甕	(20.0)	6.2		DE	II	褐色	10	
9	土師甕	(20.0)	55.0		C D E H	II	褐色	20	口縁内面に黒色有機物付着(煤状)
10	土師甕		0.9	4.2	DE H	II	褐色	80	

無調整。4・5は底径が口径の1/2を超える。4は底部から体部下端が非常に厚くつくられていた。7は埴蓋。8・9は武蔵型甕で、いわゆる「コ」の字状口縁に移行する前段階の特徴をもっている。

住居跡の時期は不明確ではあるが、1の土師器暗文環は8世紀後半とみて違和感はない。須恵器環も9世紀後半以降の要素はなく、総じて8世紀末頃～9世紀初頭乃至前半頃と考えておきたい。

第10号住居跡 (第16・17図)

A G-35グリッドに位置する。第119号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形で、規模は長軸長4.47m、短軸長4.30m、深さ0.14mである。主軸方位はN-18°-Eを指す。

床面は平坦である。埋土は焼土・炭化物混じりの灰褐色土と茶褐色土が基調となる。カマドは北壁東寄りに壁を切り込み掘り込みが確認され、遺物が伴うことからカマドの痕跡となる可能性もあるが、上面を攪乱され、遺存状態も悪いため存否を確定できなかった。その他、ピットや壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・埴蓋・長頸瓶・甕がある。須恵器は41点あり、南比企産が30点、木野産が10点、群馬産の可能性をもつものが1点認められた。

第17図1～4は須恵器環。1は底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ調整。3・4は底部回転糸切り後無調整。4の底部には「田」の墨書が記されている。5～7は埴蓋。8は埴で、底部回転糸切り後、

周辺十体部下端は回転ヘラケズリ調整されている。9は須恵器甕口縁部片で、7本単位の襷波状文を2段施文されている。波状文間の区画線はない。産地は不明であるが、やや粗い胎土から群馬産の可能性がある。10は土師器武蔵型甕。住居跡の時期は9世紀初頭～前半代と推定される。

第11号住居跡 (第18～20図)

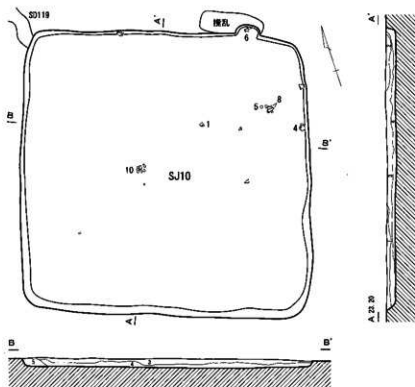
A K・A L-44グリッドに位置する。重複する第4・12号住居跡を切って構築されていた。

平面形は不整形で、規模は長軸長5.18m、短軸長5.08m、深さ0.29mである。主軸方位はN-5°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は焼土・炭化物粒子を含む暗褐色土を基調としていた。

カマドは北壁に設置されていた。袖部は明確ではないものの、焼土ブロックを多量に含む天井部崩落土が確認された。灰層は層としては確認できないが、第7～9層が対応するものと推定される。ピットは8本検出されたが、いずれも浅く不規則な配置であるため、住居に伴う主柱穴ではなからう。Pit 1は上面に被熱焼七層が形成されており、おそらく、第12号住居跡のカマドに関連するものと推定される。壁溝は南壁を中心に巡り、全周はしない。

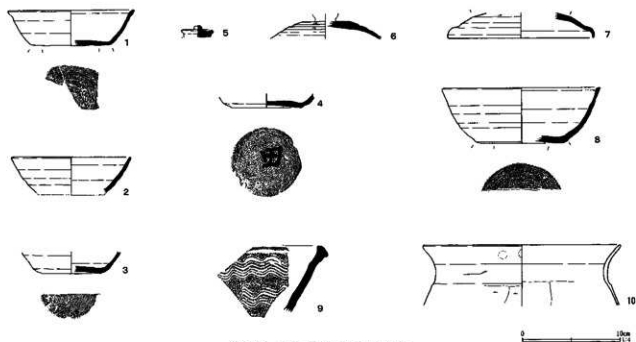
出土遺物は土師器環・甕・小型白付甕・鉢、須恵器環・高台埴蓋・長頸瓶・甕、灰陶器長頸瓶があり、量的には比較的まとまっている。須恵器は113点出土し、南比企産が80点、木野産が32点、木野または群馬産1点となる。灰陶器は1点である。



SJ10

- 1 灰褐色土 炭土・炭化物少量、鉄灰多量
マンガン結核微量
- 2 灰褐色土 炭土・炭化物やや多量、鉄灰多量
マンガン結核少量
- 3 暗灰褐色土 炭土・炭化物やや多量
鉄灰・マンガン結核やや多量
- 4 茶褐色土 粘りけ強い、鉄灰多量
- 5 緑茶褐色土 鉄灰やや多量、マンガン結核少量

第16図 第10号住居跡



第17図 第10号住居跡出土遺物

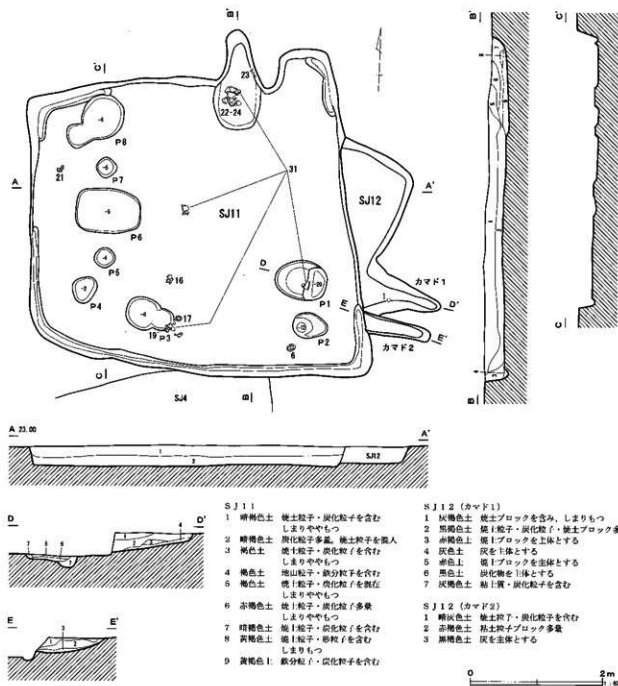
第19図1～3は十師器杯。底部は遺存しないが、平底風となろう。4～11は須恵器杯。4は末野産で、その他は南比企産である。底部は回転糸切り後無調整が大平で、一部再調整品を含む(9・10)。底径は口径の1/2を超え、まだ扁平(浅身)な器形を保って

いる。5・10には「綱」の罫書が記されている。6の杯は遺存率も高く、南壁近くの床面出土。12は十師器碗。底部と体部はヘラケズリ調整される。

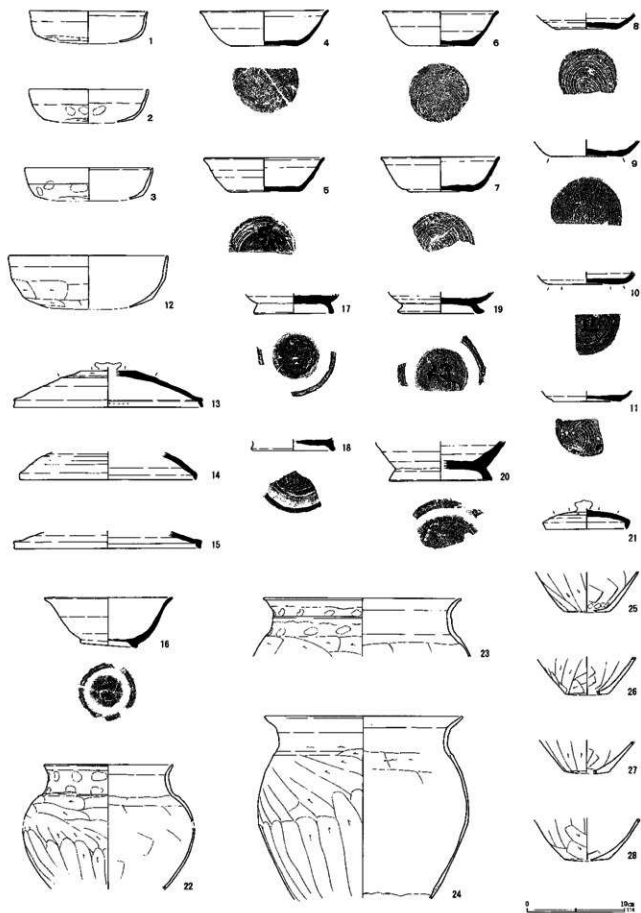
13～15は須恵器蓋。13・15は南比企産で、無台碗の蓋であろう。14は末野産。高台碗蓋か。16～19は

第6表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

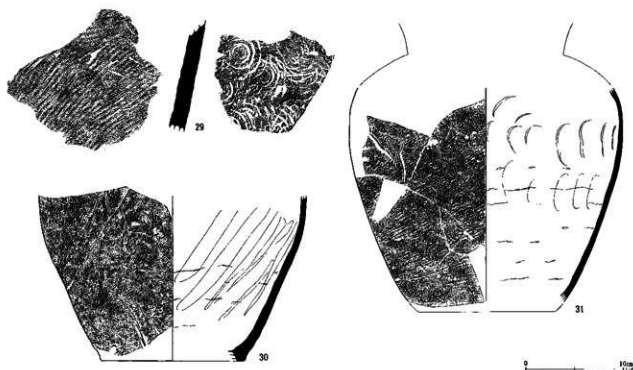
番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵環	(12.6)	3.7	(8.2)	A C D E F	Ⅱ	赤褐色	25	No.9 南比企産 底部B3b手法 器面は風化
2	須恵環	(12.0)	(3.7)		E F	Ⅰ	灰色	20	南比企産
3	須恵環		2.3	(6.0)	F	Ⅱ	灰色	40	南比企産 底部B0手法 底部内面に磨痕?
4	須恵環		1.5	7.2	C E F	Ⅱ	灰色	70	No.10 南比企産 底部B0手法 底部に黒書「Ⅲ」
5	須恵蓋		1.2		F	Ⅱ	灰色	100	No.5 南比企産 接合部で剥離している
6	須恵蓋		1.9		E F	Ⅱ	灰色	40	No.2 南比企産
7	須恵蓋	14.8	2.6		I	Ⅱ	灰色	20	木野産
8	須恵埴	(16.0)	5.7	(8.6)	C F	Ⅱ	灰色	30	No.4・6 南比企産 底部B3d手法
9	須恵甕				B	Ⅰ	灰色		群馬産または木野産?
10	土師甕	(20.0)	6.3		D E H	Ⅱ	赤褐色	10	No.12 風化が進み調整は不明瞭



第18図 第11・12住居跡



第19图 第11号住居跡出土遺物 (1)



第20図 第11号住居跡出土遺物(2)

高台壇(坏)。16は口縁部の開きが大きく新しい様相が見られる。遺構確認面前後の高さから出土した。19の底部には墨書がある。「綱」と思われる。20は長頸瓶、21は小型の壺蓋である。

22は小型(台付き)甕、23～28は武蔵型甕で、口縁部は「コ」の字状に屈曲する。29～31は須恵器甕である。

16の高台壇は9世紀末葉前後まで降る可能性が高いが、他の土器は9世紀前半、降っても中頃までであろう。住居跡の時期は9世紀前半～中頃と考えておきたい。

第12号住居跡(第18・21図)

A K-44グリッドに位置する。第11号住居跡に大半を削平され、遺存状態はあまり良くない。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長1.90m、短軸長1.20m、深さ0.24mである。主軸方位はN-115°-Eを指す。

床面は概ね平埠で、埋土は灰褐色土を基調としていた。カマドは東壁に2基設置されていた。新旧関係は明確には捉えられなかったが、カマド2が南東

壁に寄り過ぎることから、当初はカマド1が機能しており、その後、カマド2に付け替えられたものと推定した。カマド1及びカマド2の底面には灰層が形成されており、その下部には焼上混じりの土が堆積していた。出土遺物は土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏、奈良三彩小壺がある。須恵器は8点あり、いずれも南比企産である。

第21図1は奈良三彩小壺。カマド1の燃焼部から煙道部に移行する付近の上面(確認面)から出土した。口縁部を欠き、軸は全体に薄く、不鮮明である。ベースは白色軸で、内外面全面(底部を含む)施軸される。漬け掛けの可能性もあろう。その上に、緑軸と褐軸を塗り分けている。緑軸は内底面にも一部垂れている。褐軸は発色が悪いのか、元々の施軸部位が少ないのかあまり明瞭ではない。素地土はやや黄色味を帯びた灰白色で、軟質な焼きである。

2は土師器坏。底部は弱い丸底風ないし平底風となろう。3～5は須恵器坏。4は底部回転糸切り後無調整である。5は坏とすると古相を留めるとも見て取れる。8～10は土師器甕で、「コ」の字状口縁

第7表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第19・20図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(12.0)	3.2		L	I	橙褐色	20	全体に風化
2	土師環	(12.0)	3.4	(9.0)	DH	II	褐色	15	全体に風化
3	土師環	(13.0)	3.3	(11.0)	DH	II	褐色	15	カマド
4	須恵環	(13.0)	3.6	6.8	C I	III	灰色	50	末野産 底部B0手法 器面全体風化
5	須恵環	(12.2)	3.5	7.0	F	I	灰色	50	南比企産 底部B0手法 シャープな作り 墨書「綱」
6	須恵環	(11.5)	3.6	6.6	E F	II	灰色	70	No.14 床面 南比企産 底部B0手法 重む
7	須恵環	(12.0)	3.6	(6.4)	E F	II	灰色	20	南比企産 底部B0手法 底部に「X」状のヘラ記号
8	須恵環		1.7	6.2	E F	II	灰色	50	南比企産 底部B0手法
9	須恵環		1.5	7.4	E F	I	灰色	60	南比企産 底部B3 a手法
10	須恵環		1.3	(7.4)	C F	II	灰色	30	南比企産 底部B3b手法 墨書「綱」か
11	須恵環		1.1	(6.8)	E F	II	灰色	40	南比企産 底部B0手法 不明墨書あり
12	土師環(埃)	(16.0)	5.4		D E H	II	橙褐色	20	体部+底部ヘラケズリ 2片接合しない
13	須恵蓋	(19.1)	3.8		E F	I	明灰色	20	南比企産 接合しない2片を网上復元
14	須恵蓋	(18.0)	(2.8)		G I	II	灰色	8	末野産
15	須恵蓋	(19.0)	1.7		E F	I	灰色	5	南比企産
16	須恵高台埴	(13.0)	5.2	5.8	E I	II	灰色	50	末野産 No.7 歪み大きい
17	須恵高台埴		2.0	8.1	C I J	III	灰色	80	末野産 No.8 高台内径7.2cm
18	須恵高台埴		1.2	(8.6)	E F	II	灰色	25	南比企産 底部回転糸切り
19	須恵高台埴		2.2	8.8	I	II	灰色	60	No.11 末野産 底部墨書あり「綱」か
20	須恵長頸瓶		4.0	(10.4)	E F	II	灰色	25	南比企産
21	須恵蓋	8.2	2.0		E F H	I	灰色	100	No.6 南比企産 小型短頸蓋 つまみ欠く
22	土師小壺(埃)	13.0	12.8		A D E H	II	褐色	40	No.2 カマド内
23	土師壺	(20.0)	6.0		D E H	II	明褐色	25	No.1 カマド カマド内
24	土師壺	(20.0)	18.8		D E H	II	褐色	30	No.2 カマド内 接合しない破片を网上復元
25	土師壺		4.2	4.6	D E H	II	明褐色	60	
26	土師壺		3.7	(4.5)	D E H	II	褐色	35	
27	土師壺		3.5	(4.5)	E H	II	褐色	25	
28	土師壺		4.4	(4.6)	D E H	II	褐色	20	
29	須恵土甕				C E I	II	橙褐色		末野または群馬産 外面縦斜格子タタキ
30	須恵土甕		17.0	(14.6)	E F	I	暗灰色	25	南比企産 外面平行叩き後ナデ 内面無文当具ナデ済
31	須恵土甕		21.8		E F	I	灰色	30	南比企産 No.3・5・10・16 外面平行タタキ

に移行する段階と考えられる。

住居跡の時期は出土遺物の様相及び重複する第11号住居跡との関係から9世紀初頭～前半と考えておきた。

第13号住居跡 (第22・23図)

A K-45グリッドに位置する。第14号住居跡と入れ子状に重複し、内側にある本住居跡の方が新しい。おそらく、主軸方位がほぼ一致することから連続的に建て替えられたものと推定される。排水溝を扶んで東側にも延びている筈であるが、削平されており遺存していなかった。

平面形は方形系統と推定されるが詳細は不明とせざるを得ない。残存規模は長軸長4.22m、短軸長0.90m、深さ0.32mである。主軸方位はN-7°-Eを指す。

付属施設としては西壁部に壁溝が一部巡ることが判明した。

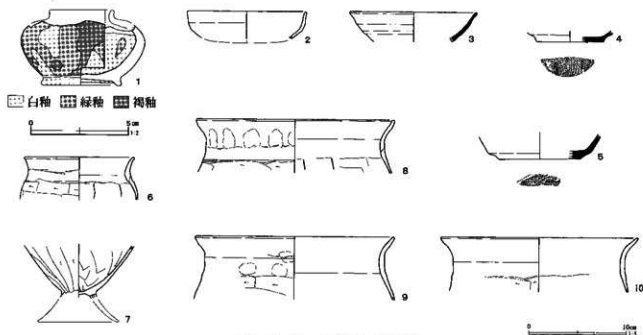
出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・鉢が検出されているが、量的には少ない。図示し得たのは須恵器鉢1点のみである(第23図1)。末野産で、器面は風化により摩滅している。

住居跡の時期は不明確であるが、第14号住居跡から連続的な建て替えと考えれば9世紀前半またはそれ以前と推定される。

第14号住居跡 (第22・23図)

A K・A L-44・45グリッドに位置する。重複する第13号住居跡・第15号住居跡に切られていた。また、西側には第12号住居跡が接している。

平面形は方形系統と推定される。残存規模は長軸長5.60m、短軸長2.48m、深さ0.27mである。主軸方



第21図 第12号住居跡出土遺物

第8表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	奈良三彩小壺		(3.9)	(4.0)	M	Ⅱ	浅黄棕色	70	No.17 白色釉全面施釉 緑釉・褐釉塗り分け
2	上師環	(12.0)	2.8		E	Ⅰ	橙褐色	10	カマド 風化著しく調整不明瞭 カマド出土
3	須恵環	(12.8)	3.1		E F	Ⅱ	淡灰色	10	南比企産
4	須恵環		1.2	(6.7)	E F	Ⅱ	淡青灰色	25	南比企産 底部B0手法
5	須恵環?		2.6	(8.2)	E F	Ⅱ	青灰色	15	南比企産 底部B0手法 埴の可能性もある
6	土師小壺台付甕	(11.0)	4.5		D E H	Ⅱ	暗褐色	20	カマド 煤付着
7	土師小型台付甕				D E H	Ⅱ	淡褐色	30	カマド
8	土師甕	(20.0)	5.5		C D E	Ⅱ	茶褐色	20	No.2
9	土師甕	(20.0)	6.5		C D E H	Ⅱ	褐色	10	カマド
10	土師甕	(20.0)	5.5		C D E	Ⅱ	橙褐色	10	カマド 内面風化

位はN-16°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。付属施設としてはピットが2本検出されたが、いずれも深度が浅く住居に伴う柱穴とは異なる。

出土遺物は土師器環・甕・小型台付甕、須恵器環・高台環・蓋・長頸瓶・甕がある。須恵器は48点あり、南比企産が32点、末野産が15点、不明(東海産?)1点となる。須恵器環は底部回転糸切り後無調整が主体を占めるが、底部再調整品を含み(7)、底径はまだ大きめである。5は大型の蓋で末野産。おそらく大型の高台埴蓋となろう。11の高台環は混入の可能性が高い。12は武蔵型甕。口唇部が欠くが「コ」の字状口縁になる前段階と思われる。住居跡の時期は不明確であるが、9世紀初頭前後-9世紀

前半代と推定される。

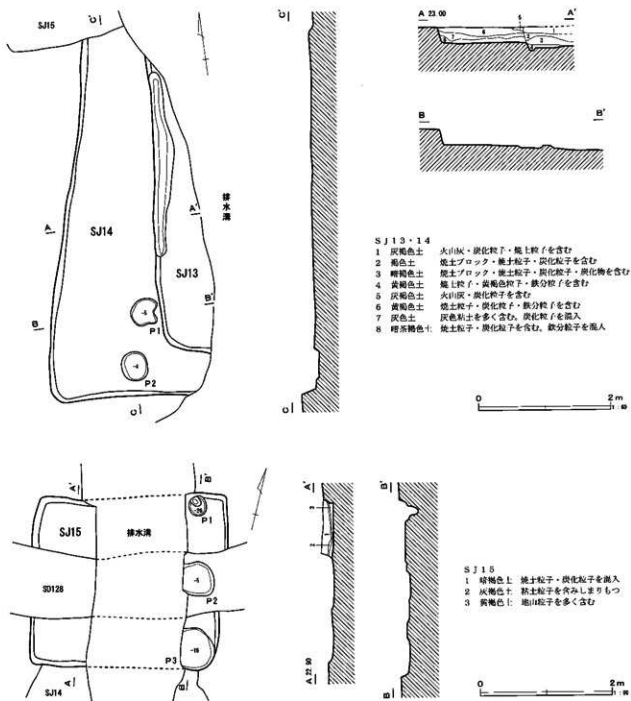
第15号住居跡 (第22図)

AK-44・45グリッドに位置する。重複する第14号住居跡を切り、第128号溝跡に切られていた。また、住居跡中央を排水溝が貫通しているため、遺構の遺存状態は悪い。

平面形は整った方形である。残存規模は長軸長2.96m、短軸長2.72m、深さ0.17mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。付属施設はピットが3本検出されたが、深さや形状から柱穴ではなく、掘り方の一部となる可能性が高い。

出土遺物は須恵器の甕が1点検出されたのみで、図化可能なものはない。



第22図 第13～15号住居跡

住居跡の時期は不明確であるが、第14号住居跡との関係から9世紀前半またはそれ以降となる。大きな時期差はないであろう。

第16号住居跡（第24図）

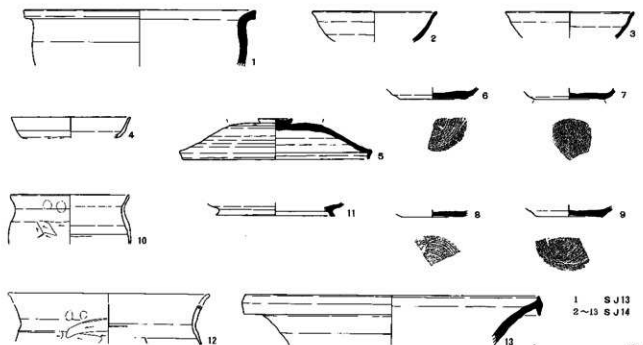
F区東端のAJ-44グリッドに位置する。重複する第137号溝跡を切って構築されていた。住居東半は調査区外に延びており、遺構全体の様相は不明で

ある。

平面形は方形系と推定される。小型の住居跡で残存規模は長軸長2.82m、短軸長1.45m、深さ0.15mである。主軸方位はN-107°-Wを指す。

床面はやや軟弱で、凹凸がある。埋土は焼土と炭化物を含む茶褐色土を基調としていた。

カマドは西壁に設置されていたが、遺存状態は悪



第23図 第13・14号住居跡出土遺物

第9表 第13・14号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵鉢	(23.6)	5.8		DE I	Ⅱ	明灰色	10	S J 64 末野産 器面は風化のため磨耗
2	須恵環	(12.6)	(3.2)		E F	Ⅱ	灰色	15	S J 65 南比企産 胎土は精良
3	須恵環	(13.0)	2.7		E F	Ⅱ	暗灰色	15	S J 65 南比企産 内面に火漉
4	土師環	(12.0)	2.2		B	Ⅱ	褐色	8	S J 65 磨耗しており調整は不明瞭
5	須恵蓋	(18.8)	4.2		C I	Ⅱ	灰色	40	S J 65 末野産
6	須恵環		1.2	(6.6)	E F	Ⅱ	灰色	25	S J 65 南比企産 底部B0手法 内外に火漉有
7	須恵環		1.1	(7.0)	F	Ⅱ	灰色	25	S J 65 南比企産 底部B3a手法
8	須恵環		0.7	(6.0)	C F	I	暗紫色	25	S J 65 南比企産 底部B0手法 胎土は精良
9	須恵環		1.2	(5.8)	I J	Ⅲ	灰色	30	S J 65 末野産 底部B0手法 軟質 器表摩滅
10	土師小壺/付蓋	(12.0)	5.1		A D E	Ⅱ	淡褐色	10	S J 65
11	須恵高台環		1.3	(12.0)	E	I	明灰色	5	S J 65 東海か?
12	土師壺	(20.4)	(5.2)		A B C D	Ⅱ	橙褐色	30	S J 65 口部欠損、推定復元
13	須恵壺	(30.0)	5.1		C F	I	灰色	8	S J 65 南比企産

く、詳細は不明である。壁外に約0.30m延びていた。埋土は焼土混じりの褐色土を基調としていたが、屋内の袖部が作られた形跡は認められなかった。右袖相当部には小ピットが掘り込まれていた(P4)。その他のピットは3本検出されたが、深度が浅く柱痕も観察されなかった。

出土遺物は土師器壺と須恵器環が少量出土したのみである。図化可能な遺物はない。時期は不明確であるが、9世紀代と推定される。

第17号住居跡 (第24・25図)

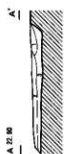
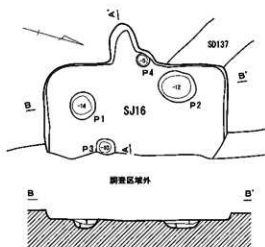
AH-44、AI-43・44グリッドに位置する。重

複する第18号住居跡を切っており、東半は調査区外に延びていた。

平面形は長方形と推定される。残存規模は長軸長3.74m、短軸長3.31m、深さ0.01mである。主軸方位はN-71°-Wを指す。

床面は削平されていた。壁際には幅0.40-0.85m、深さ0.10m程の溝が巡る。壁溝にしては幅広く、掘り方であろう。

カマドは不明確であるが、西壁溝中にある深さ約0.13mの浅いピットがその痕跡と考えられた(P4)。ピットは3本検出された。P1は深度が深く、柱穴

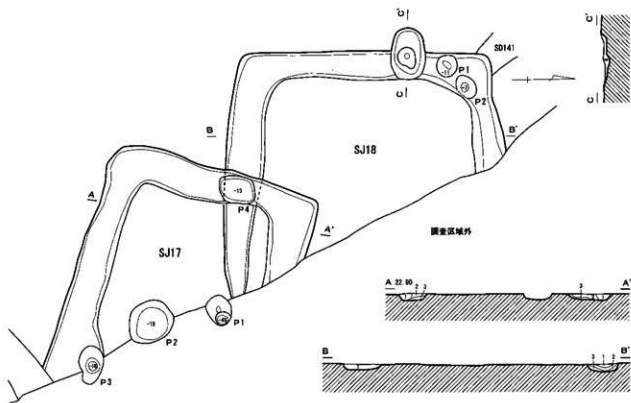
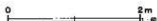


SJ16

- 1 褐色土 焼く粒子を含む
- 2 暗茶褐色土 焼く粒子・炭化物を含む
- 3 暗茶褐色土 茶褐色土粒子・鉄分粒を含む(掘り方)

SJ16 P1・2

- 1 暗褐色土 炭量の炭化粒了を含む
- 2 暗灰褐色土 粘土を主体とし、しまり・粘性強い
- 3 暗灰褐色土 粘土を主体とし、しまり・粘性もつ



SJ17

- 1 暗灰褐色土 炭化物粒子多量、焼土粒子少量
- 2 暗灰褐色土 炭化物粒子少量、焼土粒子微量、暗灰色粘土多量
- 3 暗灰褐色土 炭化物粒子微量、暗灰色粘土少量、黄灰色砂質土をブロック状に含む

SJ18

- 1 暗灰褐色土 炭化物粒子少量
- 2 暗褐色土 炭化物粒子帯状埋積
- 3 灰褐色土 炭化物粒子少量、黄灰色土をブロック状に含む
- 4 暗褐色土 炭化物粒子多量、カマド燃焼層か



第24図 第16～18号住居跡

と見ても十分であるが、他のピットとの配置に規則性が認められない。

出土遺物は土師器甕、須恵器杯・蓋がある。量的には少なく、須恵器蓋が炭化できたのみである(第25図)。

第25図1は須恵器蓋でつまみを欠く。おそらく坑



第25図 第17号住居跡出土遺物

蓋であろう。推定口径17.0cm、残存高2.2cm。胎上に白色針状物質と白色粒子を含む。焼成は普通で、灰色を呈する。残存率は約10%。南比企産である。

住居跡の時期は出土遺物及び重複関係から9世紀中頃～後半頃と推定される。

第18号住居跡 (第24・26図)

AH・A I-43・44グリッドに位置する。重複する第141号溝跡を切り、第17号住居跡に切られていた。西側には第19号住居跡が接していた。

平面形は方形または長方形と推定される。残存規模は長軸長3.96m、短軸長3.70m、深さ0.03mである。主軸方位はN-90°-Wを指す。

床面は削平されていた。カマドは西壁に設置されていた。楕円形土塊状の掘り込みで壁外に延び、埋土には炭化物粒子が多量に含まれていた。また、壁に沿って幅0.25m～0.60mの溝が巡り、掘り方の一部と推定された。ピットは2本検出されたが、主柱

穴とは異なるものである。出土遺物としては土師器環・甕、須恵器環が少量検出された。須恵器環は2点あり、南比企産、末野産各1点である。第26図1は末野産、2は南比企産で、底部は回転糸切り後無調整である。3は土師器武蔵型甕で、口縁部は「コ」の字状に屈曲する。住居跡の時期は9世紀前半～中頃と推定される。(旧SJ68)

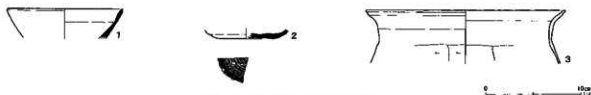
第19号住居跡 (第27・28図)

AH・A I-43グリッドに位置する。重複する第139号溝跡との切り合いは本住居跡の方が古い可能性がある。また、第87号土塊との関係は本住居跡の方が古いものと判断された。

平面形は長方形で、規模は長軸長4.04m、短軸長3.50m、深さ0.07m。主軸方位はN-97°-E。

床面は平垣で、床面直上に炭化物層が薄く堆積していたことから火災によって焼失した可能性がある。

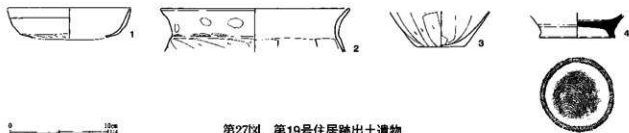
カマドは東壁に設けられていた。底面は床面とほ



第26図 第18号住居跡出土遺物

第10表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵環	(12.0)	3.1		E I	Ⅲ	灰白色	10	末野産 風化
2	須恵環		1.1	(6.0)	F F	I	紫灰色	25	南比企産 底面B0手法
3	土師甕	(20.6)	5.5		D E H	Ⅱ	茶褐色	10	



第27図 第19号住居跡出土遺物

第11表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(12.2)	3.0		D E H	Ⅱ	褐色	15	風化著しい、口縁復元図化
2	土師甕	(19.0)	4.4		D E H	Ⅱ	褐色	25	カマド
3	土師甕		3.6	5.0	E H	Ⅱ	橙褐色	75	カマド 外面被熱
4	須恵高台壇		2.5	7.7	B I J	Ⅱ	黒灰色	90	Na1 末野産

ば同一で続く。埋土には粘土・炭化物・焼土ブロックが含まれていたが、軸は不明確であった。ピットは5本検出され、P1・P3～P5が規則的に配されていた。壁溝は北壁を中心に巡っていた。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器高台碗・蓋が検出された。第27図4の須恵器高台碗は西壁付近の床面から出上した。住居跡の時期は9世紀前半～中頃

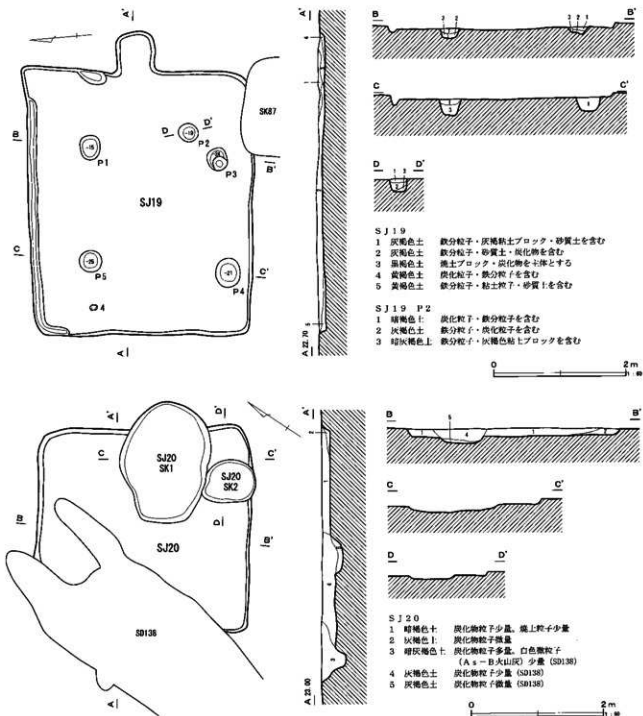
と推定される。(旧S J 71)

第20号住居跡 (第28・29図)

A1-43グリッドに位置する。重複する第138号溝跡に住居西壁部付近を壊されていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.28m、短軸長3.20m、深さ0.13m。主軸方位はN-33°-W。

床面は概ね平坦である。埋土は炭化物混じりの暗



第28図 第19・20号住居跡



第29図 第20号住居跡出土遺物

褐色土を基調としていた。カマドは検出されなかつ

2. 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (第30・31図)

A F-32・33グリッドに位置する。重複する第122号溝跡を切っていた。

平面形は長方形で、規模は長軸長5.86m、短軸長3.60m、深さ0.09mである。主軸方位はN-42°-Eを指す。

床面はほぼ平坦である。柱穴や壁溝などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・甕・小型台付甕、須恵器環・蓋がある。須恵器は12点あり、10点が南比企産(環7・蓋3)2点(環)が末野産である。第31図1～3は土師器環で、3は混入品。4～6は須恵器環、6は底部回転米切り後無調整である。7・8は須恵器塊蓋。7は南隅の床面から出土した。9は小型台付甕、10・11は土師器甕である。

遺構の時期は出土遺物から9世紀初頭～9世紀前半と考えておきたい。

第2号竪穴状遺構 (第32・33図)

A E・A F-34・35グリッドに位置する。重複する第43号竪穴状遺構を切り、第117号溝跡に南西隅を削平されていた。また、住居内を溝状の攪乱が抜けていた。

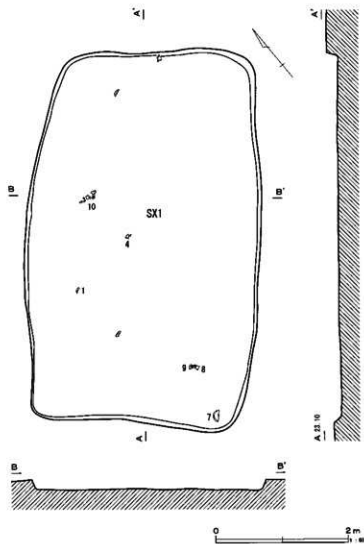
平面形は長方形で、規模は長軸長5.32m、短軸長4.50m、深さ0.12mである。主軸方位はN-68°-Wを指す。

床面はやや凹凸が顕著である。埋土は上層に火山

だが、第1号土壌がカマド掘り方となる可能性もある。2号土壌は掘り方の一部であろうか。

出土遺物は須恵器甕が1点検出されたのみである。

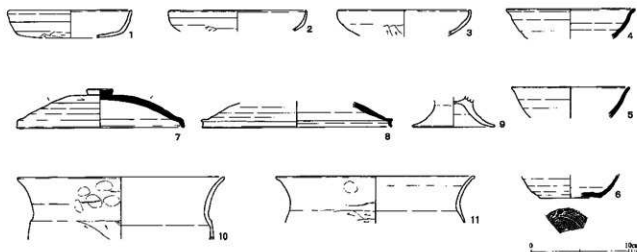
第29図1は須恵器甕胴部片。胎土に白色針状物質含む。暗灰色。外面は平行タタキ、内面無文当て具痕。南比企産。住居跡の詳細な時期は不明とせざるを得ない。(HS J 70)



第30図 第1号竪穴状遺構

灰を含む灰褐色土が堆積し、下層には焼土や炭化物を多量に含む土が堆積していた。カマドや柱穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・甕・台付甕、須恵器環・



第31図 第1号竪穴状遺構出土遺物

第12表 第1号竪穴状遺構出土遺物観察表 (第31図)

番付	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(12.5)	2.9		ADE	Ⅱ	褐色	20	No3 器面は風化 調整痕は不明瞭
2	土師環	(13.8)	2.1		AD	Ⅱ	褐色	8	
3	土師環	(13.4)	2.7		AD	Ⅱ	褐色	5	
4	須恵環	(13.0)	3.1		CF	Ⅱ	明灰色	15	No9 南比企産
5	須恵環	(12.0)	3.2		EI	I	暗紫色	8	木野産
6	須恵環		2.3	(6.0)	F	Ⅱ	灰色	20	南比企産 底部B0手法
7	須恵蓋	17.0	4.0		BEF	Ⅱ	灰色	60	No7 南比企産
8	須恵蓋	(19.2)	2.6		CF	I	灰色	10	No6 南比企産
9	土師小型台付甕		3.0	(8.5)	ADE	E	橙褐色	45	No5
10	土師甕	(21.0)	6.4		ABDEH	Ⅱ	橙褐色	8	No8 内面は風化
11	土師甕	(20.0)	4.8		CD	Ⅱ	暗褐色	8	

壺・蓋・長頸瓶・甕が比較的多く出土された。須恵器は184点検出された。そのうち、126点が南比企産、58点が木野産である。

第33図1～4は土師器環。3は混入品で、それを除くと底部平底風となろう。5・6は平底暗文環。いずれも風化しており、内面の暗文は不明瞭であるが、本来は見込み部に螺旋暗文、その外周に放射暗文が施されたものと考えられる。7は口ロコ土師器か。橙褐色で全体的に摩滅している。底部調整は不明。8～16は須恵器環。底径は口径の1/2を超え、外縁部に再調整を施すものが主体を占める。17～20は壺蓋、21～23は無台壺である。底部は回転糸切り後、ヘラによる再調整を伴う。24・25は土師器小型台付甕、26～28は甕である。いわゆる「コ」の字状口縁に変化する前のタイプである。

遺物は遺構のほぼ全域から出土している。21の須恵器壺と28の土師器甕は床面出土。土師器暗文環4、

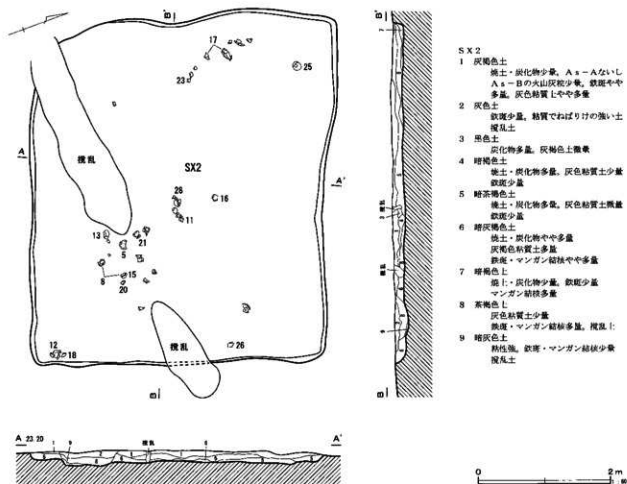
須恵器環13、須恵器蓋20は覆土下層から出土した。遺構の時期は8世紀末頃～9世紀前葉に位置付けられよう。

第3号竪穴状遺構 (第34～36図)

AH・AI-41・42グリッドに位置する。

平面形は長方形を基調とすると思われるが、南壁周辺部の壁がきれいに立ち上らず、結果的に不整形な長方形または不整形となる。規模は長軸長6.22m、短軸長5.02m、深さ0.20mである。主軸方位はN-32°-Eを指す。

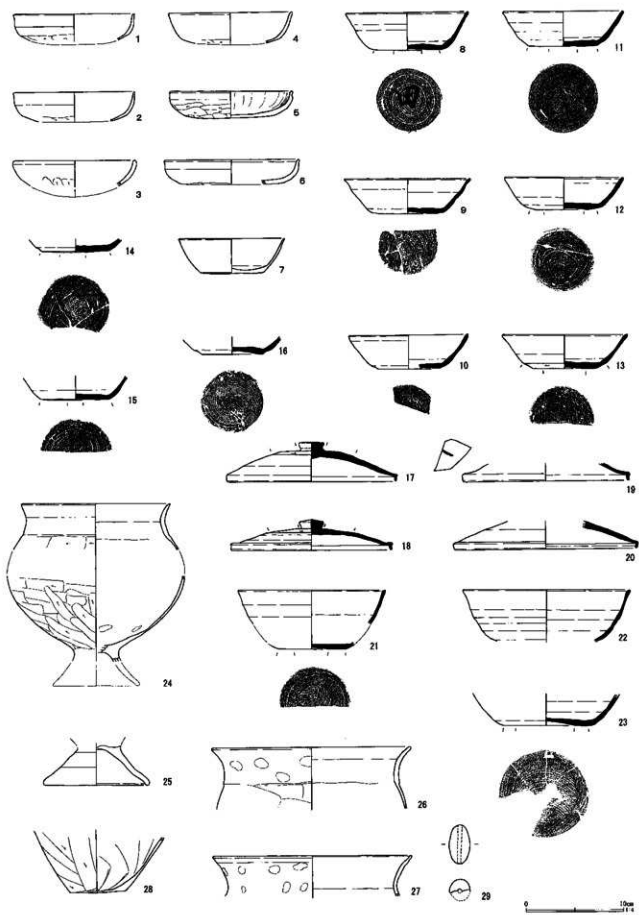
床面は概ね平坦である。埋土中には炭化物や焼土が層状に含まれる、炭化材が残るなど、火災により焼失した可能性がある。カマドは検出されなかった。ピットは10本検出された。P2に関しては深度が深く柱穴と考えても良いが他に組み合わせるものが見当たらない。P1は炭化物が層状に堆積する浅いピットで柱穴とは明らかに異なるものである。また、P8



第32図 第2号竪穴状遺構

第13表 第2号竪穴状遺構出土遺物観察表 (第33図)

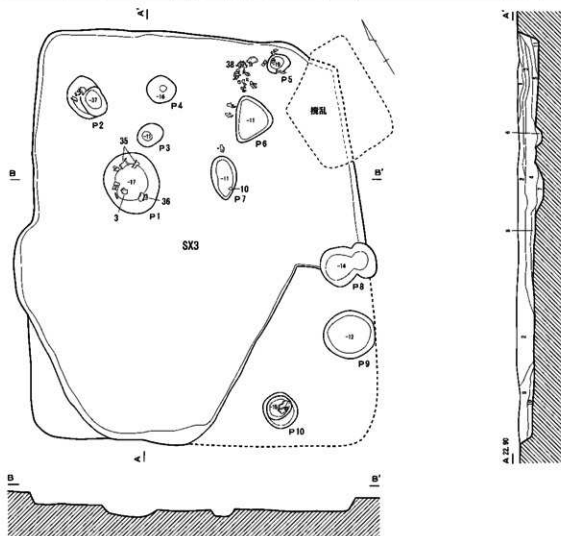
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(12.2)	2.7		DEH	Ⅱ	淡褐色	25	内面風化
2	土師環	(12.2)	3.1		E	I	橙褐色	10	風化著しい 粉っぽい胎土
3	土師環	(12.2)	2.7		DEH	Ⅱ	明褐色	15	風化著しい 混入か
4	土師環	(12.4)	3.1		DE	Ⅱ	褐色	10	風化著しい
5	土師暗文環	12.3	2.8	9.2	DEH	Ⅱ	明褐色	80	No14 覆上下層 内面風化 ラセン暗文不明瞭
6	土師暗文環	(13.6)	2.5	(10.7)	E	I	明褐色	30	内面暗文風化により消滅
7	ロクロ土師環	10.7	3.6	6.5	E	I	橙褐色	80	全体に摩滅 ロクロ彫形と思われる
8	須恵環	12.2	3.9	6.5	CEF	Ⅱ	灰色	70	No16・20 南比企産 底部B3b手法 底部に黒書「田」
9	須恵環	(12.8)	3.6	6.0	EF	Ⅱ	明灰色	45	南比企産 底部B0手法 底部に黒書か?
10	須恵環	12.0	3.5	(6.6)	EF	Ⅱ	明灰色	60	南比企産 底部B0手法
11	須恵環	12.2	3.6	6.7	CEF	Ⅱ	暗灰色	80	No9 南比企産 底部B3b手法
12	須恵環	12.0	3.4	6.7	CF	Ⅱ	明灰色	60	No23 南比企産 底部B3b手法 器面やや風化
13	須恵環	(12.6)	3.5	6.5	C I	Ⅲ	黒灰色	50	No15 覆上下層 木野産 底部B3d手法 やや硬質
14	須恵環		1.9	7.0	CEF	Ⅱ	暗灰色	60	南比企産 底部B3b手法
15	須恵環		2.4	7.0	CEF	Ⅱ	明灰色	40	No20 南比企産 底部B3b手法
16	須恵環		1.8	6.3	EF	Ⅱ	暗灰色	70	No6 南比企産 底部B0手法
17	須恵蓋	17.2	4.0		CF	Ⅱ	灰色	50	No3・4 南比企産 つまみは雑なつくり
18	須恵蓋	(16.3)	3.2		F	I	紫灰色	40	No23 南比企産
19	須恵蓋	(17.0)	1.8		F	Ⅱ	明灰色	5	南比企産 外面に黒書あり
20	須恵蓋	(18.6)	2.9		CF	Ⅱ	灰色	5	No21 覆上下層 南比企産 直線的なつくり
21	須恵埴	(15.0)	(6.0)	6.8	EF	I	暗紫色	5	No13 床面出土 南比企産 底部B3b手法
22	須恵埴	(18.0)	5.4		CEF	Ⅱ	灰色	15	南比企産 軽量感がある



第33图 第2号竖穴状遺構出土遺物

第14表 第2号壁穴状遺構出土物観察表 (第33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
23	須恵埵		3.3	8.6	E F	II	灰色	60	No.5 南比企産 底部B3 b手法
24	十種小壺台付甕	(15.0)	(16.2)		D E H	II	褐色	25	口縁部と脚部接合しない
25	土師台付甕	4.1	10.4		D E H	II	褐色	100	No.1 煤付着 脚部完存
26	土師甕	(20.0)	6.3		A D E H	II	橙褐色	15	No.8
27	土師甕	(20.0)	4.3		D E H	II	褐色	20	
28	土師甕		6.5	5.7	D E H	II	褐色	60	No.10 床面出土
29	土鍾				D E H	II	暗褐色	55	半欠 長さ4.0cm 最大径2.1cm 孔径0.4cm 重量8.2g



SX3

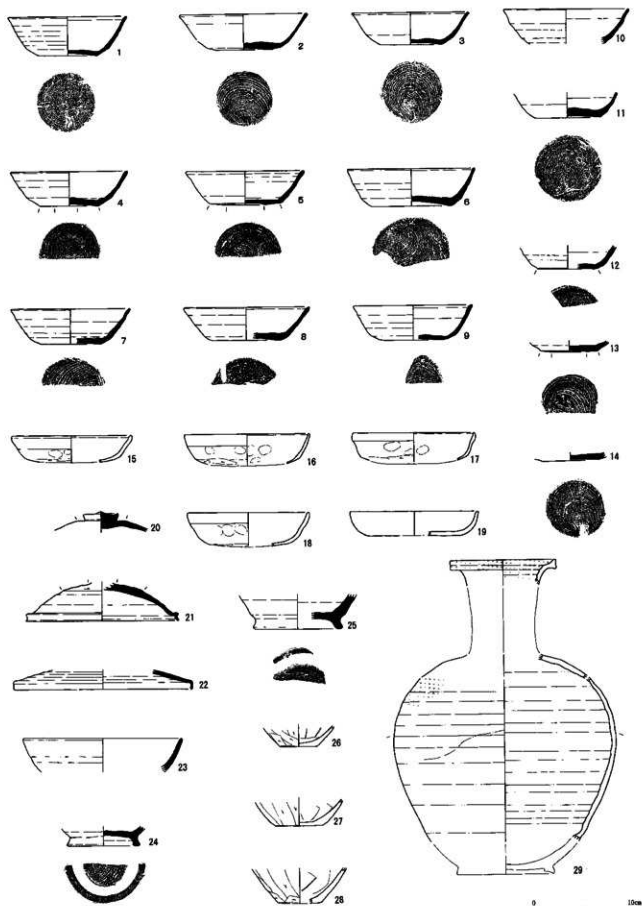
- | | | | |
|---------|-------------------------------|----------|------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 粘土粒子少量、炭化物粒子多量、明灰色粘土粒子多量 | 7 暗灰褐色土 | 炭化物の帯状堆積、粘土ブロック少量 |
| 2 灰褐色土 | 粘土粒子少量、炭化物粒子少量、明灰色粘土をブロック状に含む | 8 暗灰褐色土 | 炭化物粒子少量、粘土粒子少量 |
| 3 灰褐色土 | 炭化物・灰・粘土ブロックの屑 | 9 黄灰褐色土 | 炭化物粒子少量、粘土粒子微量、褐色土粒子少量 |
| 4 暗灰褐色土 | 炭化物と明灰色粘土の帯状堆積 | 10 暗灰褐色土 | 黄灰色土粒子多量、明灰色粘土少量 |
| 5 暗灰褐色土 | 炭化材・大型粘土ブロック・明灰色粘土小ブロック少量 | 11 暗灰褐色土 | 炭化物粒子少量、粘土粒子少量 |
| 6 暗灰褐色土 | 炭化物粒子微量、明灰色粘土小ブロック多量 | | 明灰色粘土粒子多量 |

第34図 第3号壁穴状遺構

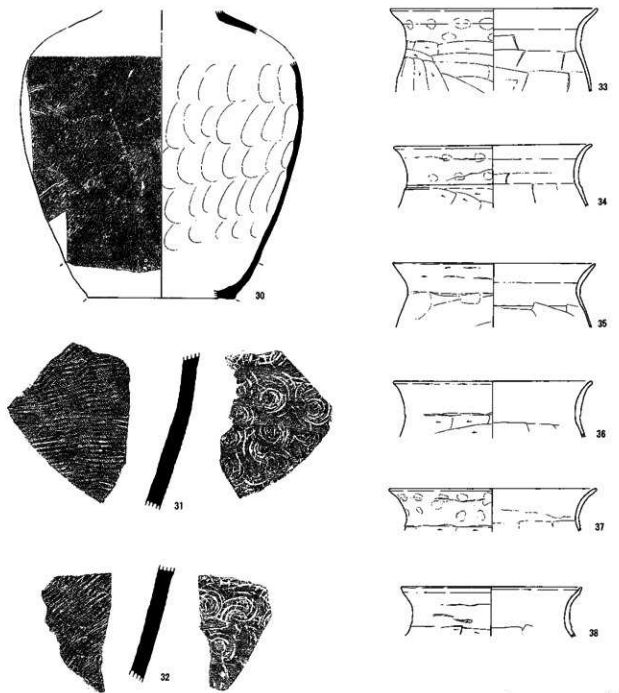
～P10は掘込みの外に位置するもので、伴うか否かは不明である。

出土物は比較的多く、住居北半を中心にまとまっていた。但し、床面よりも浮いたものが多い。器

種的には土師器杯・甕・台付甕、須恵器杯・埵・高台埵・蓋・長頸瓶・甕、灰釉陶器長頸瓶がある。須恵器は106点あり、南比企産が77点、末野産が26点、群馬または末野産が2点、産地不明が各1点となる。



第35图 第3号竖穴状遺構出土遺物(1)



第36図 第3号壜穴状遺構出土遺物(2)

第33図3の須恵器環と35・36の土師器甕はP1上面のほぼ床面相当から出土した。38の甕は7cmほど浮いている。第33図1～14は須恵器環。底部は回転糸切り後無調整が主体を占めるが、周辺部再調整品も少量で含まれる。南比企産が主体である。15～19は土師器環。19は器形や胎土から在地産の平底暗文環と思われる。風化が進み、暗文は不明瞭。20～22は須恵器蓋。20・21は末野産で高台壜蓋、22は南比

企産の無台壜蓋である。23～25は高台壜。29は灰軸陶器長頸瓶。精選された胎上で、黄緑色の灰軸が胴部上半に掛かる。狼投産か。30は須恵器平底甕、31・32は須恵器大甕で、同一個体であろう。外面は平行(擬斜格子タタキ)、内面同心円当て具の上をカキ目状工具で調整している。33～38は土師器甕。口縁部が「コ」の字状になるものと、弓状に外反するものがある。遺構の時期は9世紀前半と考えられる。

第15表 第3号竪穴状遺構出土遺物観察表 (第35・36図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵環	(12.0)	4.0	5.8	EF	Ⅱ	褐色	45	南比企産 底部B0手法
2	須恵環	(12.8)	3.6	5.8	EF	Ⅱ	灰色	50	南比企産 底部B0手法
3	須恵環	(11.8)	3.3	6.0	EF	Ⅱ	明灰色	25	No7 南比企産 底部B0手法
4	須恵環	(11.8)	3.6	6.0	EF	Ⅱ	灰色	35	南比企産 底部B3b手法
5	須恵環	(11.8)	3.4	7.2	EF	Ⅱ	青灰色	40	南比企産 底部B3b手法
6	須恵環	(12.8)	3.9	8.0	CI	Ⅱ	灰色	45	未野産 底部B0手法
7	須恵環	(12.0)	3.6	(6.0)	FL	Ⅱ	淡青灰色	45	南比企産 底部B0手法
8	須恵環	(12.7)	3.4	(7.0)	BC I	Ⅲ	明灰色	20	未野産 底部B0手法 風化著しい
9	須恵環	(12.0)	3.6	(8.0)	EF	Ⅱ	紫灰色	50	南比企産 底部B0手法 3片が接合しない
10	須恵環	(12.6)	3.6		EF	Ⅱ	暗灰色	10	No9 南比企産
11	須恵環		2.6	6.8	I	Ⅱ	暗灰色	65	未野産 底部B0手法
12	須恵環		2.4	(6.2)	FL	I	明灰色	20	南比企産 底部B3a手法 内外面曇痕あり 転用痕か
13	須恵環		1.2	(5.9)	CEF	Ⅱ	明灰色	50	南比企産 底部B3b手法 底部に曇き「那」か
14	須恵環		0.7	5.8	EF	Ⅱ	褐色	100	南比企産 底部B0手法 「+」ヘラ記号
15	土師環	(12.0)	2.7	(9.0)	ADEH	Ⅱ	褐色	15	内部風化
16	土師環	(12.6)	3.1	(10.6)	EK	Ⅱ	橙褐色	20	
17	土師環	(12.4)	2.8		ADEH	Ⅱ	褐色	10	
18	土師環	(12.2)	3.4		DEH	Ⅱ	褐色	20	
19	土師暗文環	(13.0)	2.5		ADF	I	赤褐色	15	風化が進み、暗文は観察できない
20	須恵蓋				E I	Ⅱ	明灰色	35	未野産
21	須恵蓋	(15.6)	3.9		AE I	Ⅱ	淡褐色	15	未野産 器表はやや風化している
22	須恵蓋	(18.0)	2.0		EF	Ⅱ	淡青灰色	5	南比企産
23	須恵高台埴	(16.0)	3.5		I J	Ⅱ	明灰色	10	未野産
24	須恵高台埴		2.1	7.5	E I	Ⅱ	暗灰色	50	未野産 底部回転糸切り 高台内径6.1cm
25	須恵高台埴		3.5	(8.4)	E I	Ⅱ	明灰色	20	未野産 底部回転糸切り 全体に風化
26	土師甕		2.1	3.8	DEH	Ⅱ	暗赤褐色	40	
27	土師甕		2.8		DE	Ⅱ	褐色	25	
28	土師甕		3.6	(4.4)	ADEH	Ⅱ	茶褐色	20	器壁厚い
29	灰軸長頸瓶	(10.6)			H	I	灰色	15	猿投産か 胎七精選 口縁、胴部上半に黄緑色の灰軸
30	須恵甕				FH	I	暗灰色	20	南比企産 外面平行叩き 内面無文当具
31	須恵甕				E I J	I	灰褐色		群馬または未野産 内面同心円文当具後カキ目
32	須恵甕				E I J	Ⅱ	灰褐色		群馬または未野産 内面同心円文当具後カキ目
33	土師甕	(21.0)	8.5		DH	Ⅱ	褐色	20	
34	土師甕	(20.0)	6.4		DEH	Ⅱ	褐色	15	
35	土師甕		20.6	6.6	ADE	I	橙色	80	No2・3 2片あり接合しない
36	土師甕	(20.0)	5.8		DEH	Ⅱ	褐色	15	No8
37	土師甕	(21.0)	4.4		DEH	Ⅱ	淡褐色	35	
38	土師甕	(18.4)	5.1		BDE	I	淡褐色	15	No10

第4号竪穴状遺構 (第37・38図)

A K-45グリッドに位置する。排水溝西側にある第13・14号住居跡が本遺構と重複する筈であるが、削平されたためか、明確に捉えられなかった。また、第191号溝跡、第86号土壌にも埋されており遺存状態は悪い。

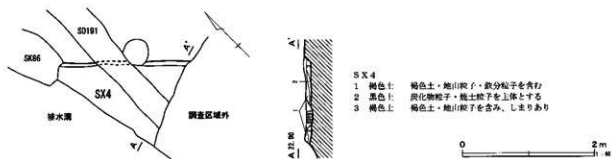
平面形は不明である。残存規模は長軸長1.92m、短軸長1.32m、深さ0.10mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土中には焼土と炭化物粒子が多量に含まれていた(第2層)。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・蓋があるが、量的には少ない。須恵器は2点で、環が南比企産、蓋が未野産である。第37図1は土師器環。2は須恵器環底部片。底部は回転糸切り後無調整である。時期は不明確であるが、9世紀前半頃と推定される。



第37図 第4号竪穴状遺構出土遺物



第38図 第4号竪穴状遺構

第16表 第4号竪穴状遺構出土遺物観察表 (第37図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏	(12.0)	3.4	(6.0)	CDE	Ⅱ	褐色	20	AK-45G 南比企産 底部B0手法 内面磨減
2	須恵坏		1.0	(6.0)	BF	I	灰色	20	

第5号竪穴状遺構 (第39図)

A L-47グリッドに位置し、重複する第6号竪穴状遺構に削平されていた。

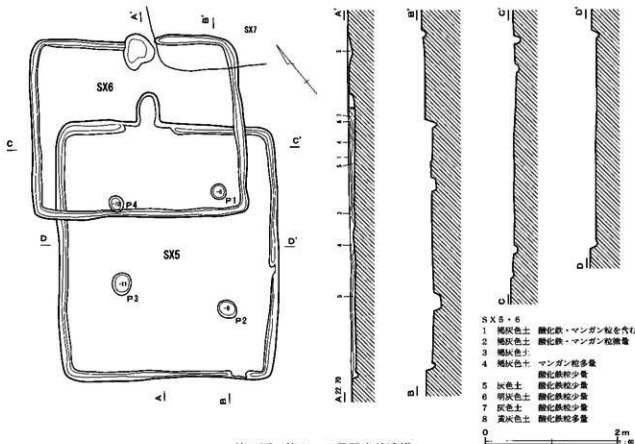
平面形は長方形である。規模は長軸長4.00m、短軸長3.36m、深さ0.10mである。主軸方位はN-38°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は酸化鉄粒子混じり

の灰色土を主体に構成されていた。

カマド状の施設は北東壁に設置されていた。壁を0.42m掘り込んで構築されていたが、焼土の堆積は確認できなかった。

柱穴は4本検出された。位置的には主柱穴に対応するものの掘込みが浅く、主柱穴と断定するには問題も残る。壁溝はカマドの周囲を除きほぼ全周する。



第39図 第5・6号竪穴状遺構

出土遺物は検出されず、時期は不明である。

第6号竪穴状遺構 (第39図)

AL-47グリッドに位置する。重複する第5号竪穴状遺構を切り、第7号竪穴状遺構に切られていた。

平面形はやや横長の方形で、規模は長軸長3.30m、短軸長2.78m、深さ0.02mである。主軸方位はN-37°-Eを指す。

床面は削平され、掘り方が遺存したに過ぎない。カマド状の土壇は北東壁に構築されていたが、焼土や炭化物の堆積は全く確認できず、カマドであるとの証拠は得られなかった。柱穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物はなく、本遺構の時期は不明である。

第7号竪穴状遺構 (第40図)

AL-47グリッドに位置する。重複する第6号・8号竪穴状遺構を切っていると判断された。

平面形は方形で、規模は長軸長4.17m、短軸長3.82m、深さ0.01mである。主軸方位はN-121°-Eを指す。

床面は削平され、掘り方が遺存するに過ぎない。カマド状の土壇は南東壁中央付近に設置されている

が、埋土には焼土や炭化物の堆積は全く認められなかったことから、カマドであるとの確証を得ることはできなかった。

柱穴は4本検出された。位置的には主柱穴に対応しても良いが、深さが0.10m~0.18mと浅くやや疑念を残す。壁溝はカマド状土壇の周囲を除いてほぼ全周する。

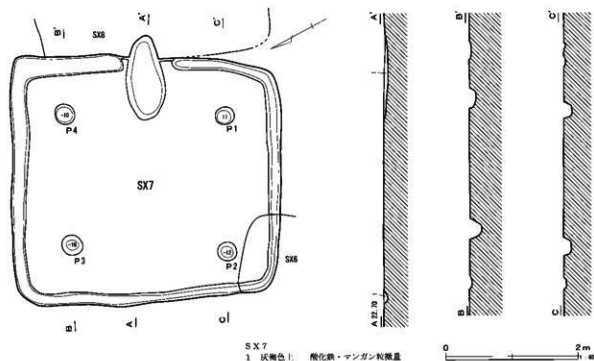
出土遺物はなく、本遺構の時期は不明である。

第8号竪穴状遺構 (第41図)

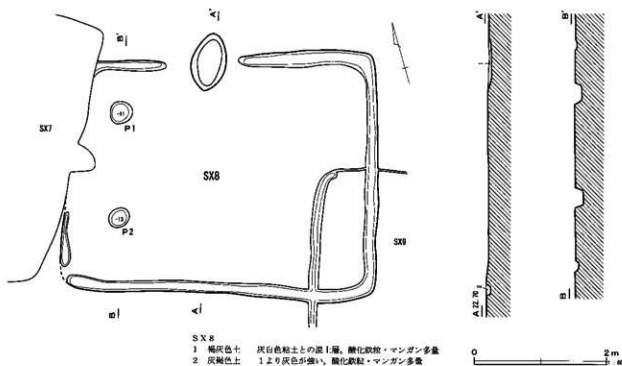
AL-46・47グリッドに位置する。重複する第9号竪穴状遺構を切り、第7号竪穴状遺構に切られていた。

平面形はやや横長の長方形で、規模は長軸長4.84m、短軸長3.82m、深さ0.01mである。主軸方位はN-18°-Eを指す。

床面は削平されていたため、詳細は不明である。カマド状土壇は北壁のほぼ中央に設けられていた。楕円形の浅い掘込みで、灰白色粘土混じりの褐灰色土が堆積していた。埋土には焼土や炭化物粒子は含まれておらず、カマドであるとの確証は得られなかった。



第40図 第7号竪穴状遺構



第41図 第8号竪穴状遺構

柱穴は西壁沿いに2本検出されたが、掘込みが浅く主柱穴とは断定できなかった。壁溝はカマド状土壌の周囲を除き概ね全周する。

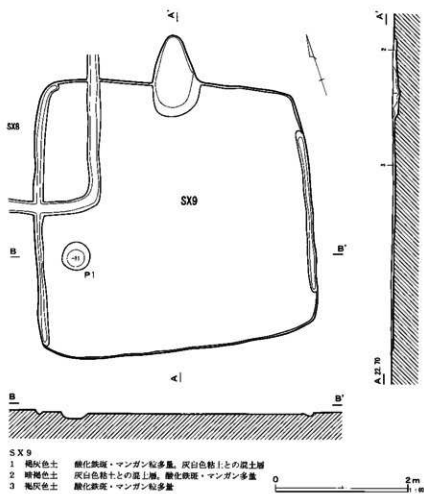
出土遺物はなく、本遺構の時期は不明とせざるを得ない。

第9号竪穴状遺構 (第42図)

A・L・AM-48グリッドに位置し、重複する第8号竪穴状遺構に切られていた。

平面形は不整形で、規模は長軸長4.28m、短軸長4.26m、深さ0.01mである。主軸方位はN-18°-Eを指す。

床面は削平されており、掘り方が露出していた。カマド状土壌は北壁中央に設けられていた。全長1.20m、幅0.66mで壁外に0.72m延びていた。掘込みは浅くかろうじて掘り方の一部が残存したに過ぎない。埋土には灰白色粘土が混



第42図 第9号竪穴状遺構

在していたが、焼土粒子や炭化物粒子、灰などは認められず、カマドであるとの確証は得られなかった。

柱穴は1本検出されたが、主柱穴と考えるのは難しいであろう。壁溝は東壁と西壁に検出されたが全周はしない。

出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

第10号竪穴状遺構（第43図）

A L-47・48グリッドに位置し、北西コーナー部分が僅かに調査区外に伸びていた。西壁と南壁の壁溝の一部が検出されたのみで詳細は不明である。

残存規模は長軸長3.26m、短軸長0.38mである。主軸方位はN-26°-Eを指す。

付属施設はピットが2本検出されたのみである。深度は浅く伴う柱穴と認定するには無理がある。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第11号竪穴状遺構（第44図）

A M-46グリッドに位置する。第12号竪穴状遺構と接していたが新旧関係は明確に捉えることはできなかった。また、重複する第4号溝跡は本遺構を切っていた。

平面形は長方形である。規模は長軸長3.58m、短軸長2.52m、深さ0.06mである。主軸方位は東壁及び西壁を基準にするとN-11°-Eを指す。

床面は削平されており、詳細は不明である。掘り方には灰白色粘土や炭化物粒子が混じっていた。

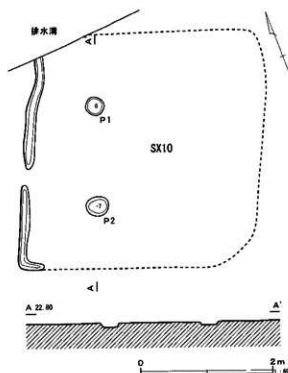
カマドは検出されなかった。第4号溝跡に壊された可能性もあるが、焼土の堆積などの痕跡は認められなかった。ピットは5本検出されたが、全体に浅く本遺構に伴う柱穴と考えて良いか疑問がある。

出土遺物はなく、時期は不明とせざるを得ない。

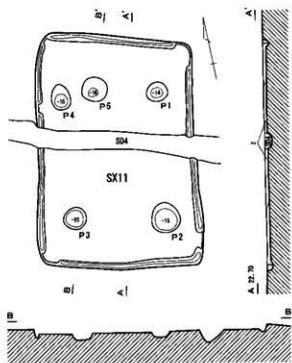
第12号竪穴状遺構（第45図）

A M-45・46グリッドに位置する。第11号竪穴状遺構と接していたが、新旧関係は明確にできなかった。重複する第4号溝跡は本遺構よりも新しい。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.60m、短軸長2.56m、深さ0.06mである。主軸方位はN-28°-Eを指す。



第43図 第10号竪穴状遺構



SX11

- 1 焼灰色土 炭化物の集積多量、灰白色粘土を穴む
- 2 焼灰色土 炭化物を若干含む、灰白粘土粒少量
- 3 黄灰色土 炭灰色粘土粒少量



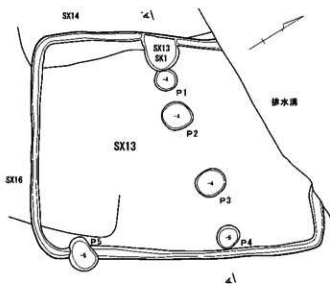
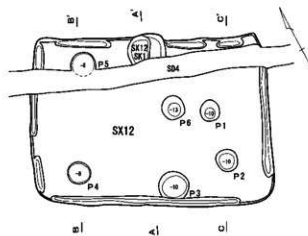
第44図 第11号竪穴状遺構

床面は概ね平坦である。カマド状の土壇（SK1）は北壁の中央に設けられていたが、遺存状態は悪く詳細は不明である。埋土には酸化鉄が凝集していたものの焼土の堆積は確認できなかった。ピットは6本検出された。いずれも深度が浅く、不規則な配置で柱穴には相当しないであろう。壁溝は浅く途切れながら回っていた。

出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

第13号竪穴状遺構（第45図）

A区北端のAL-46・47グリッドに位置する。重複する第14・16号竪穴状遺構を切って構築され、北西部は調査区外に延びている。第1号掘立柱建物跡とも重複するが、直接切り合い関係をもたないために新旧は不明である。



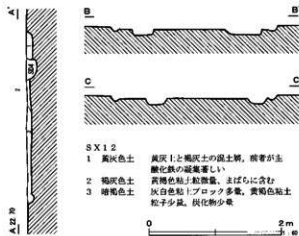
第45図 第12・13号竪穴状遺構

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長4.50m、短軸長3.48m、深さ0.01mである。主軸方位はN-77°-Wを指す。

床面は削平されており、詳細は不明である。カマド状土壇（SK1）は北西壁に設けられていた。カマドとすれば焚口部に相当すると思われる部分の掘り方が僅かに認められたのみで、詳細は不明。埋土中には焼土の堆積は確認できなかった。ピットは遺構内から4本、壁にかかって1本、計5本検出された。深度はいずれも浅く、本遺構に伴う柱穴とは異なるものである。壁溝はカマド状土壇を除き全周する。出土遺物は全くなく、詳細な時期は不明である。

第14号竪穴状遺構（第46図）

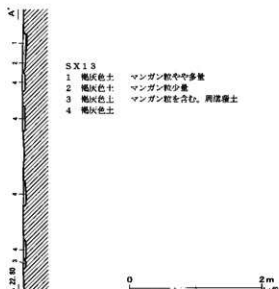
AL-46グリッドに位置する。重複する第13号竪



SK12

- 1 黄灰色土 黄灰色土と焼灰土の混生層、前者が主
酸化鉄の凝集層あり
- 2 黄褐色土 黄褐色粘土粒微量、まばらに含む
- 3 暗褐色土 灰白色粘土ブロック多量、黄褐色粘土
粒子少量、炭化物少量

0 2m



SK13

- 1 焼灰色土 マンガン粒やや多量
- 2 焼灰色土 マンガン粒少量
- 3 焼灰色土 マンガン粒を含む、炭化物土
- 4 焼灰色土

0 2m

穴状遺構、第1号掘立柱建物跡及び第10号溝跡に切られており遺存状態は悪い。また、遺構北半は調査区外に延びていた。第16号竪穴状遺構との新旧関係は不明確であった。

平面形は方形または長方形と推定される。残存規模は長軸長3.30m、短軸長2.80m、深さ0.01mである。主軸方位はN-16°-Eを指す。

床面は削平され、掘り方が露出した状態であった。カマドは調査区内には検出されず、その有無は不明である。ピットは2本あるが、いずれも主柱穴とは認定できないものであった。壁溝は残存部では回っていた。

出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明である。

第15号竪穴状遺構 (第46図)

AL-46グリッドに位置する。重複する第16号竪穴状遺構を切り、第1号掘立柱建物跡、第19-21号土塊、第1・10号溝跡に切られていた。

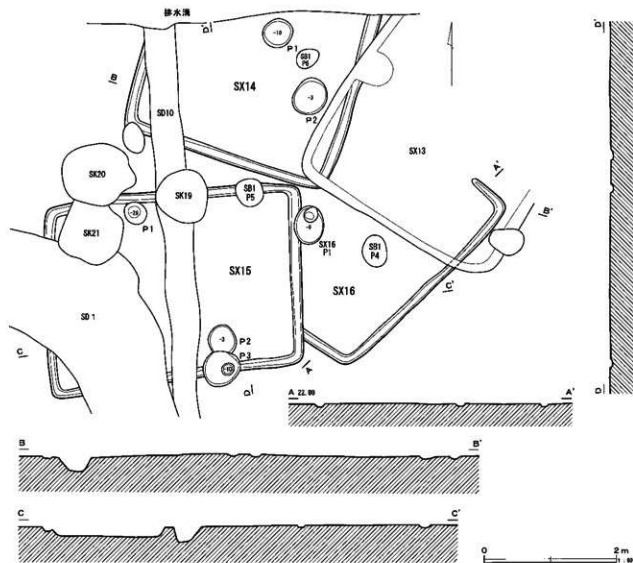
平面形は長方形で、規模は長軸長3.94m、短軸長2.96m、深さ0.01mである。主軸方位はN-86°-Eを指す。

床面は削平されていた。カマドは検出されなかった。ピットは3本検出されたが、主柱穴とは異なるもので遺構に伴う可能性も低い。

出土遺物はなく、時期も不明である。

第16号竪穴状遺構 (第46図)

AL-46グリッドに位置し、重複する第13・15号



第46図 第14～16号竪穴状遺構

竪穴状遺構に切られていた。遺存状態が悪いため、第14号竪穴状遺構との新旧関係は不明である。

平面形は方形または長方形と考えられる。残存規模は長軸長3.58m、短軸長0.92m、深さ0.01mである。主軸方位は南東壁を基準にするとN-44°-Eを指す。

床面は削平されていた。カマドは検出されず、当初から存在しなかった可能性も十分ある。ピットは1本検出されたが、支柱穴とは考えられない。壁溝は南東壁を中心に残存していたが、北西部では検出されなかった。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第17号竪穴状遺構（第47図）

A L-46グリッドに位置し、第14号竪穴状遺構の西側に軸を描いて隣接する。遺構の大部分は調査区外に伸びており、詳細は不明である。

平面形は方形または長方形と推定される。残存規模は長軸長2.64m、短軸長1.30m、深さ0.02mである。主軸方位はN-15°-Eを指す。

床面は削平されていた。カマドは検出されなかった。ピットは南西コーナーから1本検出されたが、性格は明確にできなかった。壁溝は調査範囲の中で

は回っていた。

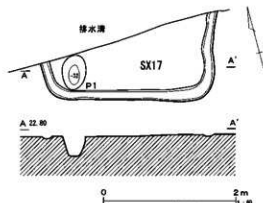
出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第18号竪穴状遺構（第48図）

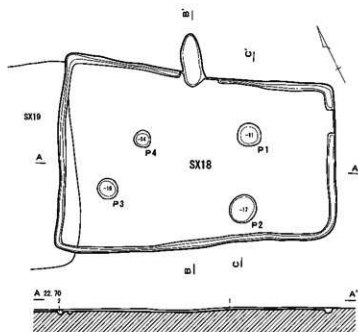
A M・A N-45・46グリッドに位置し、列状に重複する竪穴状遺構群の東端にある。南壁を描えて重複する第19号竪穴状遺構を切っていた。

平面形は横長の不整長方形で、規模は長軸長4.26m、短軸長3.02m、深さ0.02mである。主軸方位はN-27°-Eを指す。

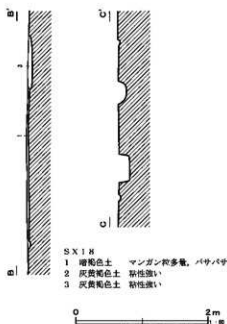
床面は概ね平坦である。カマド状土壌は北壁中央に設置されていた。掘り込みの長さ0.78m、幅0.30m、深さ0.10m、埋土は粘性の強い灰黄褐色土で構



第47図 第17号竪穴状遺構



第48図 第18号竪穴状遺構



成されていた。位置的にカマド掘り方とみることもできるが、焼土や炭化物粒子は全く検出されなかった。詳細は不明とせざるを得ない。壁溝はカマドと東壁の一部を除き回っていた。深さ5~10cmと非常に浅い。

ピットは4本検出されたが、配置が不規則で主柱穴にはならないであろう。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第19号竪穴状遺構 (第49図)

AM-45グリッドに位置し、列状に重複する竪穴状

遺構群の一角にある。重複する第20号竪穴状遺構を切り、第18号竪穴状遺構に切られていた。

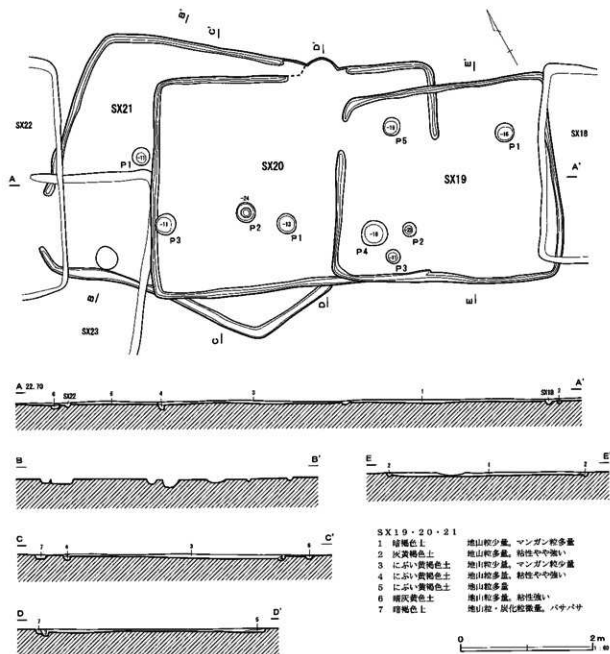
平面形は方形で、規模は長軸長3.50m、短軸長3.16m、深さ0.06mである。主軸方位はN-62°-Wを指す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。壁溝は西壁に一部途切れる個所がある。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第20号竪穴状遺構 (第49図)

AM-45グリッドに位置し、列状に連なる竪穴状



第49図 第19~21号竪穴状遺構

遺構群の一角にある。重複する第21・23号竪穴状遺構を切り、第19号竪穴状遺構に切られていた。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長4.35m、短軸長3.40m、深さ0.04mである。主軸方位はN-27°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。北壁中央付近に一部突出する個所が見受けられ、カマドの痕跡かとも思われたが、理上に焼土粒子や炭化物粒子が含まれず、床面下の掘込みも確認されず、確証は得られなかった。ピットは3本検出されたが、不規則な配置で主柱穴とは考え難い。壁溝はカマドの周囲と東壁に途切れる個所がある。深さは5cmほどと浅い。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第21号竪穴状遺構 (第49図)

A M-44・45グリッドに位置し、列状に連なる竪穴状遺構群の一角にある。重複する第20・22・23号竪穴状遺構に切られていた。

平面形は不整長方形で、南東コーナー付近が大きく歪んでいた。残存規模は長軸長4.62m、短軸長3.88m、深さ0.02mである。主軸方位は北壁を基準にするとN-135°-Eを指す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは1本検出されたが、本遺構に伴う主柱穴とは異なる。壁溝は西壁と東壁部に途切れる個所がある。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第22号竪穴状遺構 (第50図)

A M-44・45グリッドにあり、列状に重複する竪穴状遺構群の一角に位置する。重複する第21・23・24号竪穴状遺構を切っていた。

平面形は長方形で、規模は長軸長4.44m、短軸長3.82m、深さ0.05mである。主軸方位はN-66°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは4本検出されたが、主柱穴となるか否か不明である。壁溝は北壁の一部を除いて回っていた。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第23号竪穴状遺構 (第50図)

A M-45グリッドに位置し、列状に連なる竪穴状遺構群の一角にある。重複する第21号竪穴状遺構を切り、第20・22号竪穴状遺構、第24号土壌に切られていた。

平面形は長方形であるが、平行四辺形状に歪んでいる。規模は長軸長4.44m、短軸長3.04m、深さ0.02mである。主軸方位は北壁を基準にするとN-64°-Wを指す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは1本検出されたが、主柱穴ではなからう。壁溝は西壁と北壁に途切れる個所がある。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第24号竪穴状遺構 (第50図)

A M-44グリッドに位置し、列状に連なる竪穴状遺構群の西端にある。重複する第22号竪穴状遺構、第26号土壌に切られていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.06m、短軸長2.98m、深さ0.09mである。主軸方位はN-64°-Wを指す。

床面は既に削平され掘り方が露出していた。カマドは検出されなかった。ピットは4本検出されたが、いずれも深度が浅く、主柱穴ではないであろう。壁溝は一部途切れる個所がある。

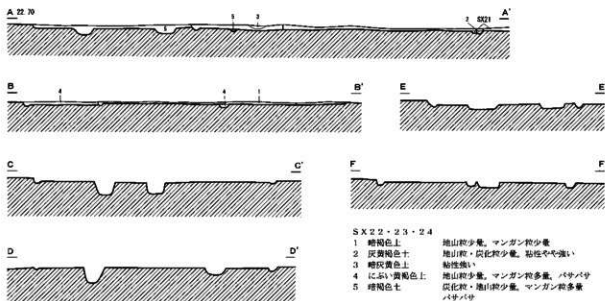
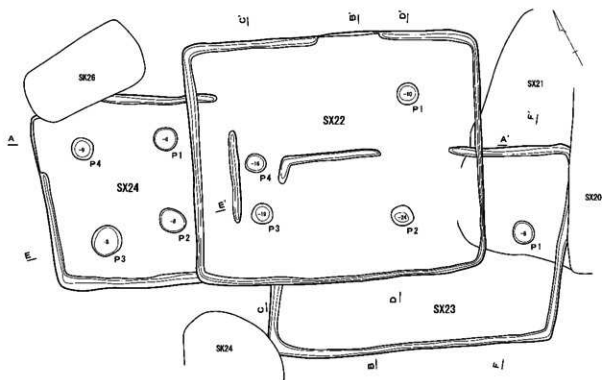
出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第25号竪穴状遺構 (第51図)

A N-45グリッドに位置する。重複する第26号竪穴状遺構、第32号土壌に切られていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.25m、短軸長3.13m、深さ0.07mである。主軸方位はN-17°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。北壁中央付近にはカマド状の土壌(SK1)が掘り込まれていたが、埋土に焼土・炭化物粒子は検出されず、カマドであるとの確証は得られなかった。ピットは2本あるが、いずれも本遺構に伴う柱穴とはならない。壁溝は北壁～西



第50図 第22～24号竪穴状遺構

壁にかけて回っていた。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第26号竪穴状遺構 (第51図)

A N-45グリッドに位置する。重複する第25号竪穴状遺構、第32号土壌を切り、第27号竪穴状遺構に切られていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.50m、短軸長

3.28m、深さ0.07mである。主軸方位はN-16°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは4本あり、規則的に配置されるが深度がいずれも浅く本遺構に伴う柱穴として良いか不明確である。壁溝は北壁の中央を除き回っていた。

出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明である。

第27号竪穴状遺構 (第51図)

A M・A N-45グリッドに位置し、重複する第26・28号竪穴状遺構を切っていた。

平面形は方形で、規模は長軸長3.30m、短軸長3.06m、深さ0.05mである。主軸方位はN-26°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは4本検出されたが、不規則な配置で、深度も浅いことから主柱穴とは異なるものと考えた。壁溝は一部途切れる箇所がある。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第28号竪穴状遺構 (第51図)

A N-45グリッドに位置する。重複する第26・27号竪穴状遺構に切られていた。

平面形は方形または長方形と推定される。残存規模は長軸長2.68m、短軸長0.84m、深さ0.03mである。主軸方位はN-66°-Wを指す。

床面は削平されており詳細は不明。カマド、柱穴などの付属施設は検出されなかった。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第29号竪穴状遺構 (第51図)

A N-48グリッドに位置する。北西コーナー付近は第44号上壊と重複するが、直接切り合いをもたないために新旧関係は不明である。

平面形は方形と推定される。規模は長軸長3.30m、短軸長2.70m、深さ0.01mである。主軸方位はN-71°-Wを指す。

床面は削平されており詳細は不明。カマドは検出されなかった。ピットは3本検出されたが、本遺構に伴う柱穴にはならないであろう。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第30号竪穴状遺構 (第52図)

A N・A O-48グリッドに位置する。重複する第1号溝跡に切られていた。また、東壁部は床面が削平されていた。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長3.73m、短軸長3.42m、深さ0.08mである。主軸方

位はN-10°-Eを指す。

北壁中央付近にカマド状の突出部が検出されたが、床面下の掘込みはなく、埋土中に焼土や炭化物粒子の堆積も認められなかった。その他、壁溝が検出されているが、深度は浅く、東壁部は削平されていた。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第31号竪穴状遺構 (第52図)

A N-47グリッドに位置する。重複する第50号土城、第20・21号溝跡に切られていた。第21号溝跡は掘込みが浅く、床面は遺存していた。

平面形は不整形(台形)で、規模は長軸長4.18m、短軸長2.92m、深さ0.08mである。主軸方位はN-86°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土には黄灰色または灰白色の粘土ブロックが多量に含まれていた。カマドや柱穴、壁溝は検出されなかった。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第32号竪穴状遺構 (第53図)

A N-47グリッドに位置する。重複する第1号溝跡に切られていたが、溝跡の南側には検出されなかった。

平面形は長方形と推定される。残存規模は長軸長3.60m、短軸長1.70m、深さ0.01mである。主軸方位はN-65°-Wを指す。

床面は削平されていた。カマドは検出されなかった。ピットは1本あるが、主柱穴とはならない。壁溝は残存部では回っていた。

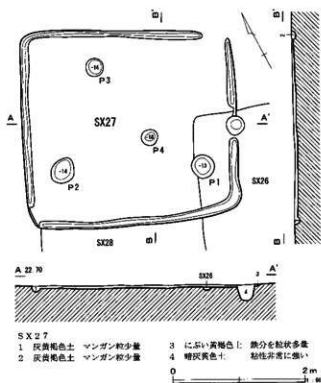
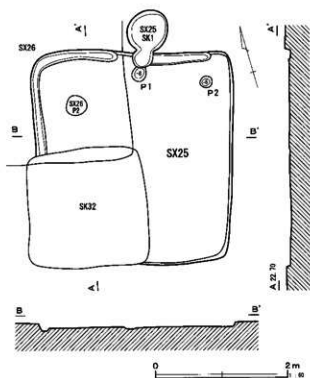
出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第33号竪穴状遺構 (第53図)

A P-47グリッドに位置する。

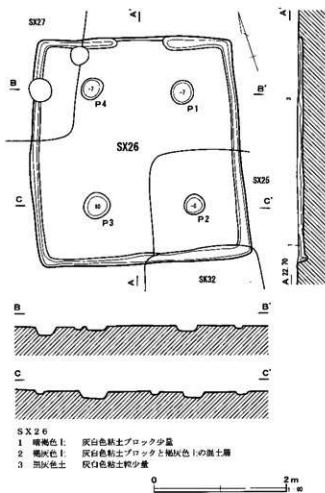
平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.12m、短軸長2.42m、深さ0.01mである。主軸方位はN-5°-Eを指す。

床面は平坦である。カマド状の突出部は北壁の中央から検出されたが、床面下の掘込みはなく、また埋土は粘土ブロックを少量含む黒褐色土で、焼土は検出されなかった。ピットは5本検出されたが、配



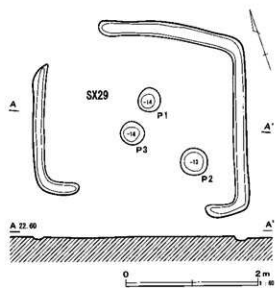
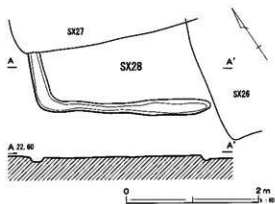
S X 2 7

- 1 灰黄褐色土 マンガン粒少量
2 灰黄褐色土 マンガン粒少量
3 に、灰黄褐色土 鉄分を粒状多量
4 暗灰黄色土 粘柱非常に多い



S X 2 6

- 1 暗褐色土 灰白色粘土ブロック少量
2 暗灰色土 灰白色粘土ブロックと暗灰色土の混土層
3 暗灰色土 灰白色粘土粒少量



第51図 第25～29号竪穴状遺構

置に規則性がなく、深度が浅いものが多いため、主柱穴とは認められなかった。壁溝は東壁および西壁を中心に検出された。

出土遺物はカマド状遺構手前から礫が1点検出されたのみで、土器は検出されなかった。遺構の詳細な時期は不明である。

第34号竪穴状遺構 (第53図)

A O-46・47グリッドに位置する。重複する第1号溝跡、第46号土壌に切られていた。また、南壁部には第54号土壌が重複しているが、壁内にきれいに収まることなどから本遺構に伴う土壌、または掘り方の可能性がある。

平面形は長方形と推定される。残存規模は長軸長4.10m、短軸長3.14m、深さ0.06mである。主軸方位はN-73°-Wを指す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。壁溝は西壁から北壁は削平されており遺存しなかったが、他の部分は巡っていた。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

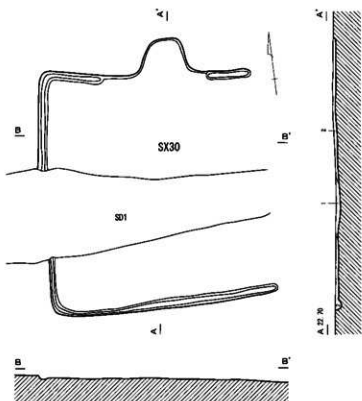
第35号竪穴状遺構 (第53図)

A N-44・45グリッドに位置する。第19号溝跡に切られていた。また、第37号竪穴状遺構、第38号土壌との新旧関係は不明である。

平面形はやや歪んだ長方形と推定される。残存規模は長軸長3.82m、短軸長3.22m、深さ0.01mである。主軸方位はN-26°-Eを指す。

床面は削平されており、詳細は不明である。ピットは2本検出されているが、いずれも深度が浅く主柱穴とするには問題が残る。

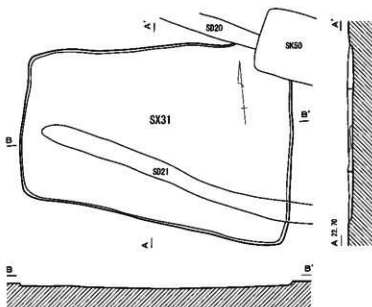
出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明である。



SX30

- 1 黄褐色土 灰褐色粘土粒子多量
- 2 黄褐色土 灰白色粘土ブロック多量

0 2 m

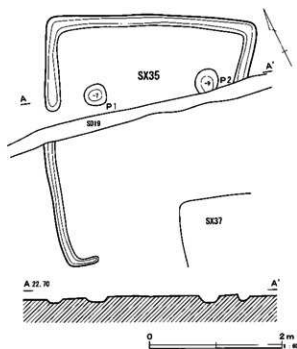
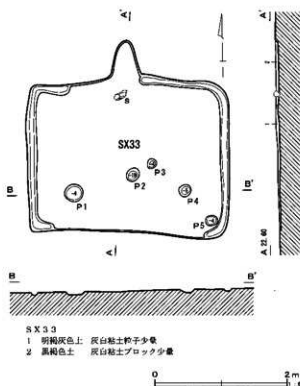
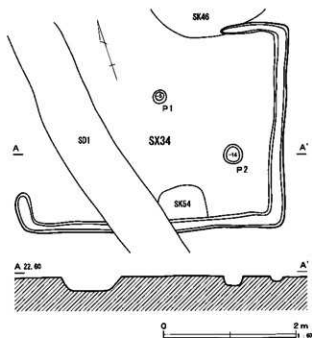
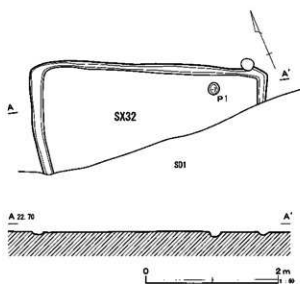


SX31

- 1 黄褐色土 灰褐色粘土ブロック多量
- 2 黄褐色土 灰白色粘土ブロック多量

0 2 m

第52図 第30・31号竪穴状遺構



第53図 第32～35号竪穴状遺構

第36号竪穴状遺構 (第54図)

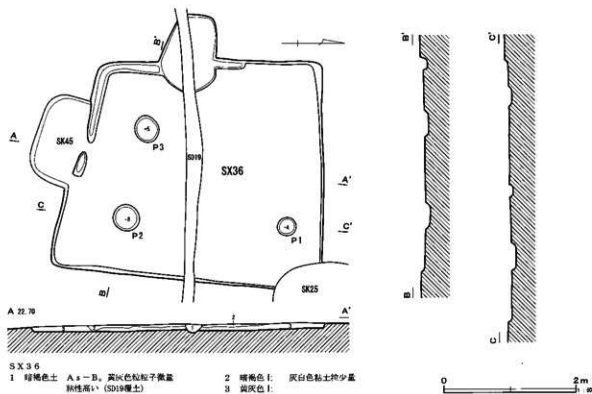
A N-44グリッドに位置する。第19号溝跡、第25号土塊に切られていた。また、第45号土塊とも重複するが、床面は同一レベルで続き、覆土の差異も明瞭ではなく、新旧関係を明確に把握することはできなかった。

平面形は不整形である。規模は長軸長4.15m、短軸長3.50m、深さ0.10mである。主軸方位はN-

89°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。カマド状土塊は西壁中央に設けられ、第19号溝跡に擾乱されていた。埋土には焼土や炭化物粒子の堆積は認められず、カマドとの確認は得られなかった。ピットは3本検出されたが、いずれも深度が浅く支柱穴と見るのは難しい。壁溝は西壁から南壁にかけて回っていた。

出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明である。



第54図 第36号竪穴状遺構

第37号竪穴状遺構 (第55図)

AN・AO-45グリッドに位置する。

平面形は歪んだ方形(台形)で、規模は長軸長4.60m、短軸長3.88m、深さ0.01mである。主軸方位はN-18°-Eを指す。

床面は削平されていた。カマドは検出されなかった。ピットは2本検出されたが、不規則な配置で遺構に伴う可能性は低であろう。壁溝は北壁の一部を除き全周する。

出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明である。

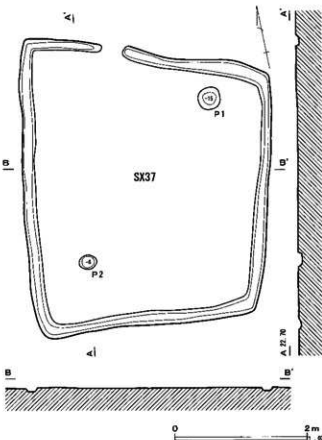
第38号竪穴状遺構 (第56図)

AP-47グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸長2.32m、短軸長2.02m、深さ0.03mである。主軸方位はN-6°-Wを指す。

床面は平坦である。北壁にはカマド状の土壌が検出された。埋土には焼土や炭化物粒子は認められなかった。また、土壌内から土器片が検出されているが、古墳時代前期の所産であり、本遺構に伴うものではない。壁溝は北壁から東壁にかけて巡っていた。

遺構に伴う遺物はなく、時期は不明である。

第39号竪穴状遺構 (第57図)



第55図 第37号竪穴状遺構

AN・AO-44グリッドに位置する。第40・41号竪穴状遺構、第33号土壌と重複するが、直接切り合

わないため、新旧関係は不明である。

平面形は方形で、規模は長軸長3.86m、短軸長3.82m、深さ0.01mである。主軸方位はN-3°-Wを指す。

床面は削平されていた。カマドは検出されなかった。壁溝は部分的に途切れていた。

出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明である。

第40号竪穴状遺構 (第57図)

A・N・A・O-44グリッドに位置する。第39号竪穴状遺構と重複するが直接切り合う部分がないため、新旧関係は不明。遺存状態は極めて悪く、西壁から北壁にかけて壁溝の一部が検出されたのみで詳細は不明である。

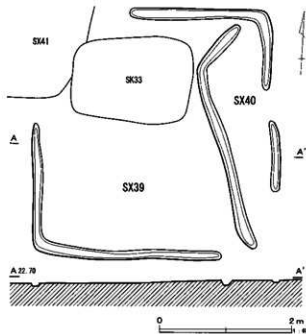
平面形は不整形となろうか。残存規模は長軸長2.92m、短軸長1.00mである。

床面は削平され、付属施設もない。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第41号竪穴状遺構 (第57図)

A・N・A・O-44グリッドに位置する。重複する第33・36号土壁に切られていた。また、第36号竪穴状遺構とも重複するが、直接切り合い関係をもたないため新旧は不明。遺構の遺存状態は極めて悪く、東壁から南壁にかけての壁溝または溝状掘り方が検出



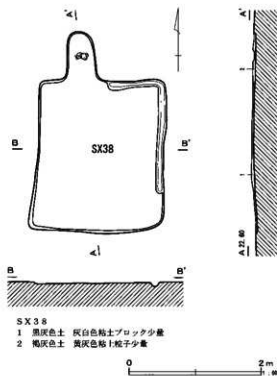
第57図 第39～41号竪穴状遺構

されたにとどまる。

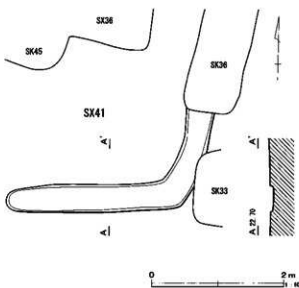
平面形は方形または長方形と推定されるが詳細は不明。残存規模は長軸長2.82m、短軸長1.52m、深さ0.01mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。

床面は遺存しておらず、付属施設もない。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。



第56図 第38号竪穴状遺構



第42号竪穴状遺構 (第58・60図)

A D-32・33グリッドに位置する。調査区際があり、東壁部は第112号溝跡に、中央部は第72号溝跡に削平されていた。北壁と南壁、西壁の一部は壁溝状の溝が巡り、西壁北半には壁溝は認められなかったが、段差が存在する。竪穴住居跡と考えるのは無理があるため、消極的ながら竪穴状遺構と捉えておきたい。

形態は不整形長方形で、規模は長軸長7.23m、短軸長5.75m、深さ0.24mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面は凹凸があり一定しない。壁溝の底面も小さな起伏が顕著である。ピットは1本検出されたが、不定形で浅いため柱穴とはならないであろう。

出土遺物は土師器の甕が1点検出されている(第60図1)。口縁部小片で時期は決定し難いが、9世

紀後半までは降らないであろう。重複する第112号溝跡からは底部糸切り後無調整の須恵器環が出土しており、概ね9世紀中葉またはそれ以前という年代で押さえて置いてよからう。

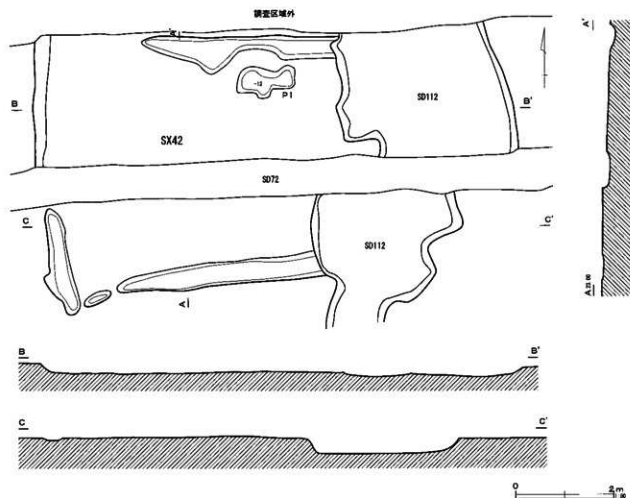
第43号竪穴状遺構 (第59・60図)

A F-35グリッドに位置する。第2号竪穴状遺構に北西隅を切られていた。

形態は不整形で、規模は長軸長2.72m、短軸長2.52m、深さ0.19mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

底面は概ね平坦である。埋没状況は不自然な個所が見られ(第6層)、自然堆積とは思われない。火山灰様の白色粒子が含まれていたが、浅間B軽石とは異なるものであろう。カマド他の付属施設は検出されなかった。

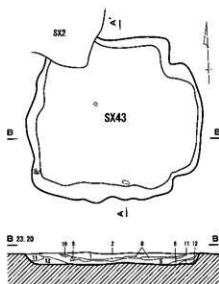
出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・埴・高台



第58図 第42号竪穴状遺構

坏・蓋・甕が検出されている。須恵器は25点検出され、産地別の出土数では南比企産が24点、末野産が1点である。南比企産が圧倒的なシェアを占めている。

第60図2～4は須恵器坏。4の底部は回転糸切り後、周辺及び体部下端を回転ヘラケズリされている。



第59図 第43号竪穴状遺構

5・6は土師器坏。底部を欠くが、扁平な器形で平底風または弱い丸底形態と推定される。7は須恵器蓋、8は無台碗と思われる。9は南比企産の高台坏である。

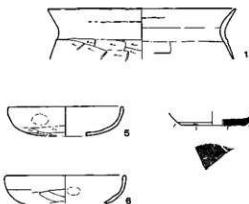
時期は8世紀末葉～9世紀初頭を中心とした年代と推定される。重複する第2号竪穴状遺構とはほぼ同時期と考えられる。おそらく、連続して作り替えられたものであろう。

SX43

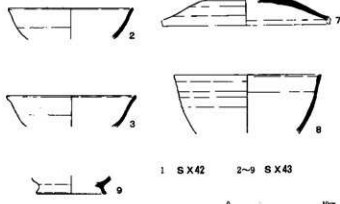
- 1 暗褐色土: 粘土・炭化物やや多量。AS-B風の白色粒少量。鉄粒多量。マンガン結核少量
- 2 灰褐色土: 粘土・炭化物少量。鉄粒・マンガン結核やや多量
- 3 暗灰褐色土: 粘土・炭化物やや多量。AS-B風の白色粒少量。鉄粒多量。マンガン結核少量
- 4 灰褐色土: 粘土・炭化物少量。やや粘質。鉄粒やや多量。マンガン結核多量
- 5 暗褐色土: 粘土・炭化物・灰色粘質土やや多量
- 6 灰褐色土: 粘質。鉄粒・マンガン結核多量
- 7 暗褐色土: 粘土・炭化物少量。粘質。鉄粒・マンガン結核やや多量
- 8 褐色土: 炭化物多量。灰褐色土少量
- 9 黄褐色土: マンガン結核集中してオレンジ色っぽい
- 10 暗褐色土: 粘土・炭化物やや多量。鉄粒・マンガン結核少量。ややふたひ
- 11 暗灰褐色土: 粘土・炭化物少量。白色粒少量(A-S-Bか?)。鉄粒やや多量。マンガン結核少量
- 12 黄褐色土: 炭化物多量。鉄粒多量。マンガン結核少量。やや粘質



SX42



SX43



第60図 第42・43号竪穴状遺構出土遺物

第17表 第42・43号竪穴状遺構出土遺物観察表 (第60図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(19.0)	5.2		BDE	I	棕色	15	SX42 No1
2	須恵坏	(12.6)	3.2		EFH	II	明灰色	10	SX43 南比企産 口料部内部が磨耗している
3	須恵坏	(13.0)	3.2		EF	II	灰色	10	SX43 No1 南比企産 軽量感がある
4	須恵坏		1.4	(6.4)	EF	III	灰色	15	SX43 南比企産 底部B3d手法
5	土師坏	(11.6)	3.0		BDE	II	橙色	10	SX43 風化しており調整不明瞭
6	土師坏	(12.0)	2.6		DE	II	橙色	10	SX43 No4 風化が著しい 調整は不明
7	須恵蓋	(17.0)	2.7		DEF	II	明灰色	10	SX43 No2 南比企産
8	須恵碗	(15.0)	6.0		EF	I	灰色	10	SX43 南比企産
9	須恵高台坏		1.9	(6.8)	EF	II	暗灰色	20	SX43 南比企産

3. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第61図)

AL-46・47グリッドに位置する。一部は調査区外に延びているため、規模は確定できないが、現状では2×2間の側柱建物と考えられる。第14・15・16号竪穴状遺構を切って掘り込まれていた。第13号竪穴状遺構は直接切り合い関係にないため、新旧は不明である。

規模は桁行4.50m、梁行4.20m、主軸方位はN-25°-Eを指す。柱間は桁行2.25m等間、梁行2.10m等間にほぼ揃う。柱穴は円形で、直径0.30~0.50m前後、深さは0.10m前後と非常に浅い。

出土遺物はなく、時期は不明確である。

第2号掘立柱建物跡 (第62図)

AG・AH-27・28グリッドに単独で位置する。周囲には古代の住居跡や建物は存在しない。

2×2間の東西棟の側柱建物である。規模は桁行

5.10m、梁行3.60mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

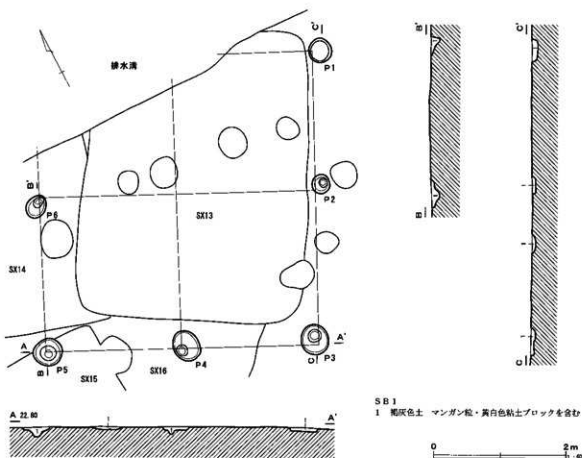
柱筋は概ね通っているが、P6がやや外にずれ気味である。柱間は桁行の中間柱(P4)が南にずれていた。柱穴は円形から楕円形基調で、隅柱が規模が大きく、中間柱が小規模で浅い。P7・P8には柱根が遺存していた。

柱根以外の出土遺物は検出されなかった。建物の時期は堆積状況から浅間B軽石降下以前であるのは確実である。おそらく平安時代後期と思われるが、詳細な時期は不明確である。

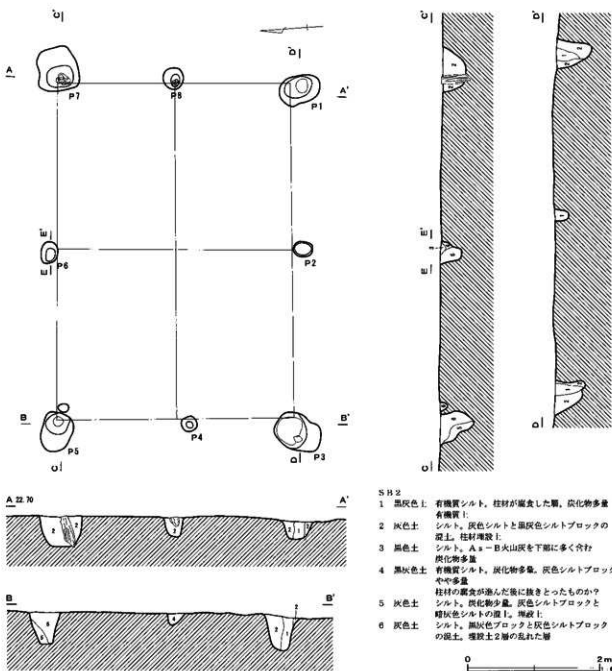
第3号掘立柱建物跡 (第63~65図)

AF・AG-40・41グリッドに位置する。西側に第4号、5号掘立柱建物跡が隣接している。重複する第149号溝跡は本建物跡を切っていた。

5間×3間、東西棟の建物跡で、規模は桁行



第61図 第1号掘立柱建物跡



第62図 第2号掘立柱建物跡

12.00m、梁行5.40mと長大である。主軸方位はN－80°－Wを指す。

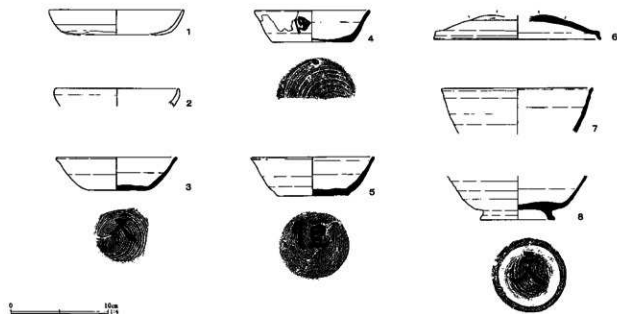
桁行の柱間は2.40mを基準としているようであるが、柱根の遺存する柱穴を測定すると若干ずれるものもある。梁行は等間には揃わない。P1－P16間とP6－P7間は1.20mとほぼ同一間隔であるが、P15とそれに対応するP8は明らかにずれている。また、建物内部にP17とP18が位置するが、柱筋にきれいに乗らない。東柱であろうか。大規模建物で

あることを考慮すれば一部、あるいはすべて床張り構造を想定しても良いかもしれない。

柱穴は方形または長方形を基調とし、規模は長軸長0.90～1.50mと非常に規模が大きい。

出土遺物は柱穴から土師器環・壺・甕、須恵器環・埴・高台埴・蓋が検出された(第63図)。

第63図1・2は土師器環。2は混入か。3～5は須恵器環。いずれも墨書されており、3は「文」、4は「□田」、5は「恒」である。6は須恵器蓋、



第63図 第3号掘立柱建物跡出土遺物

第18表 第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	十師坏	(13.6)	2.6		CDE	Ⅱ	橙色	10	Pt8 器面は風化著しい
2	上師坏	(12.5)	1.9		E	I	橙褐色	10	Pt16
3	須恵坏	(12.2)	3.4	5.5	EF	I	暗紫灰色	40	Pt8 南比企産 底部B0手法 底部に墨書「文」
4	須恵坏	(11.6)	3.3	8.0	CI	I	暗灰色	45	Pt6 末野産 底部B0手法 体部外面に墨書あり「□田」
5	須恵坏	(12.4)	4.0	7.2	EF	Ⅱ	暗灰色	70	Pt4 南比企産 底部B0手法
6	須恵蓋	(17.0)	2.5		EI	Ⅱ	明灰色	10	Pt8・9 末野産
7	須恵埴	(15.4)	4.6		E	Ⅱ	明灰色	8	Pt6 産地不明
8	須恵高台埴		4.5	7.6	EI	Ⅱ	灰色	70	Pt18 末野産 底部回転糸切り 底部に墨書「文」

7は埴、8は高台埴。底部に「文」の墨書がある。建物の時期は9世紀初頭～前半頃と考えられる。

第4号掘立柱建物跡 (第66図)

AF・AG-39・40グリッドに位置する。第3号掘立柱建物跡の西側に位置し、北側柱列と第3号掘立柱建物跡の南側柱列は柱筋がほぼ一致する。また、重複する第5号掘立柱建物跡を切り、第147・150号溝跡に切られていた。

建物南半は攪乱により大きく削平されており規模を確定することはできないが、 $4 \times 3 (+\alpha)$ 間の側柱建物と考えられる。規模は桁行10.20m、梁行10.50(+ α)m、主軸方位はN-80°-Eを指す。

柱間桁行2.55m等間、梁行2.10m等間に復元できる。柱穴は楕円形または隅丸長方形で、長軸長0.84m～1.56mと規模が大きい。また、P3・P5・P6は柱穴が複数認められることから、あるいは建て

替えを行っている可能性もある。

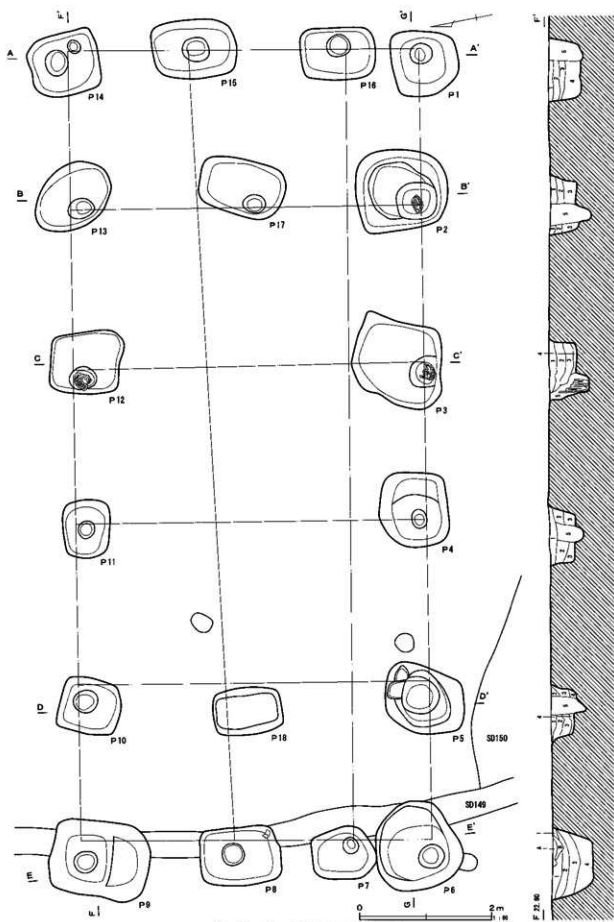
出土遺物は土師器甕が1点検出されたのみである。第66図1は土師器甕で、Pt1から出土した。推定口径20.4cm。残存高5.2cm。焼成は良好で胎土に白色粒子・赤色粒子・角閃石を含む。橙褐色。20%残。

建物の時期は不明確であるが、第3号掘立柱建物跡に近接した時期であろう。

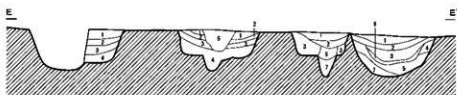
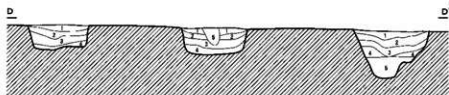
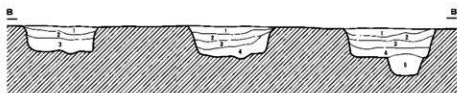
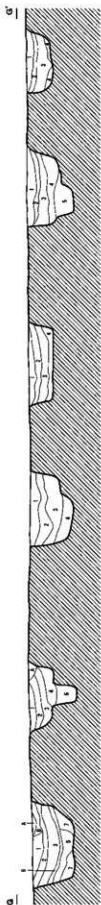
第5号掘立柱建物跡 (第67図)

AF・AG-39・40グリッドに位置する。重複する第4号掘立柱建物跡、第150号溝跡に切られていた。

建物南側は攪乱により削平されており、規模は確定できないが、現状で 3×2 間の総柱建物跡と考えられる。規模は桁行6.75m、梁行4.20m、主軸方位はN-87°-Wを指す。柱間距離は桁行2.25m、梁行2.10mに復元できるが、Pt1・Pt5がややずれ気



第64图 第3号掘立柱建物跡 (1)

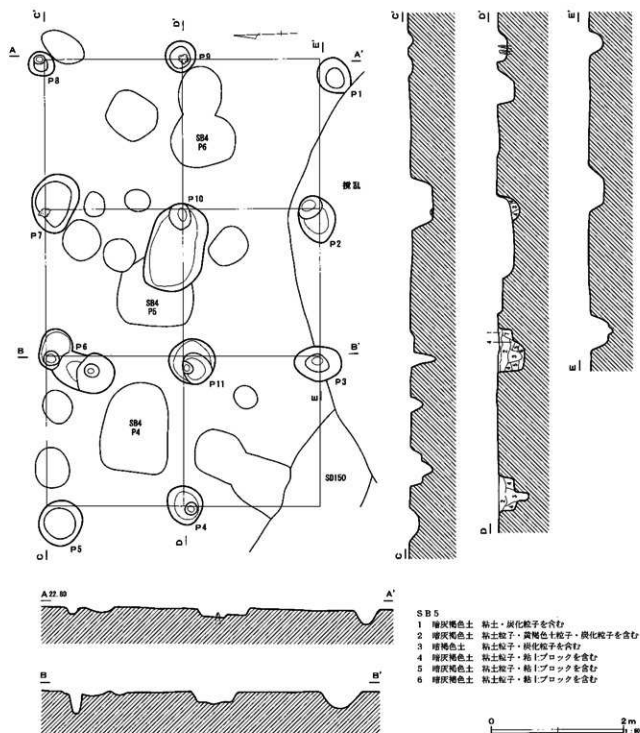


S B 3

- 1 明灰褐色土 炭化物粒子散在、黄褐色土粒子少量、鉄分多量
 2 暗灰褐色土 炭化物粒子少量、明灰色粘土小ブロック少量
 3 暗灰褐色土 炭化物粒子散在、明灰色粘土ブロック多量
 4 暗灰褐色土 炭化物粒子散在、石灰色粘土粒子多量
 5 暗褐色土 炭化物粒子散在、粘粒多
 6 黒褐色土 木質繊維の管状組織
 7 暗緑灰色土 炭化物粒子少量、緑灰色粘土ブロック多量
 A 黒褐色土 SD149層上、白色鉄粒子少量、炭化物粒子少量
 B 黒褐色土 SD149層上、白色鉄粒子多量、炭化物粒子多量



第65図 第3号掘立柱建物跡(2)



第67図 第5号独立柱建物跡

味である。柱穴は円形が主体で、直径0.35～0.65mと比較的規模は小さい。P7とP9には柱根の一部が腐らずに遺存していた。

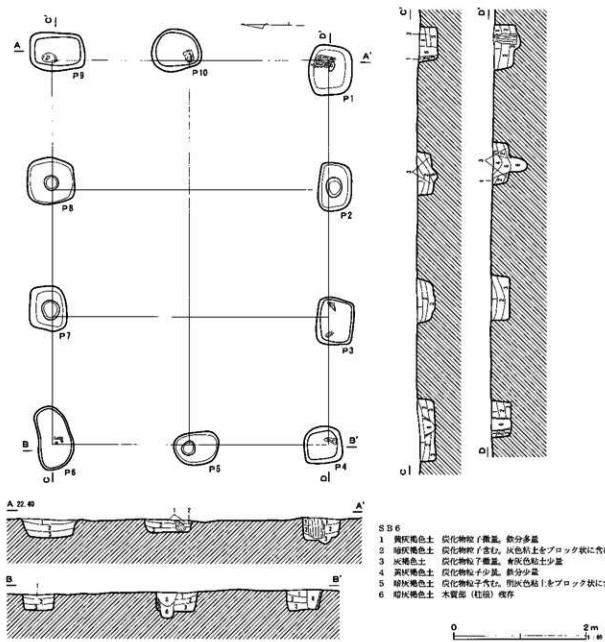
出土遺物はない。建物の時期は不明確である。

第6号独立柱建物跡(第68・69図)

AJ-43グリッドに位置する。重複する第137号

溝跡を切っていた。

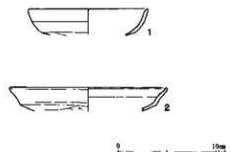
3×2間、東西棟の側柱建物で、規模は桁行5.85m、梁行4.20mである。主軸方位はN-2°-Wを指す。柱間距離は桁行1.95m(6.5尺)、梁行2.10m(7尺)等間にほぼ揃う。P1・P4・P6・P9・P10は柱根または柱根の外皮(木質部)の一部が



第68図 第6号掘立柱建物跡

遺存していた。柱穴は方形または隅丸方形を基調とし、長軸長0.65～0.95mほどである。

出土遺物は土師器杯・皿、須恵器杯・蓋・甕があるが、量的には少ない。第69図1は底部平底風の土師器杯。2は皿で混入か。建物の時期は不明確であるが、8世紀後半～9世紀前半と推定される。



第69図 第6号掘立柱建物跡出土遺物

第19表 第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第69図)

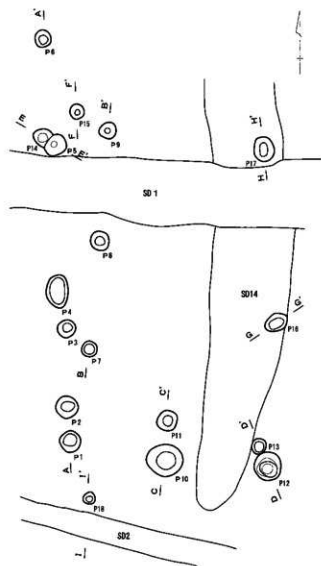
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器杯	(12.1)	2.7		D	I	淡緑褐色	10	PH6
2	土師皿	(16.0)	2.4		D E H	I	褐色	10	PH3

4. ビット列

第1号ビット列 (第70・71図)

A L-45グリッドに位置する。P1～P6・P7～P9という流れで南北にビットが並ぶが、柱筋がきれいに通らず、柱間距離も不揃いであるなど、規則性に欠ける。P10～P17に関しては列状に並ぶとも言えない状態で、小ビット集中区といったほうが実態に即しているかもしれない。

ビットは直径20～60cm前後で、小規模なものが多い。断面観察によっても柱痕の存在するものはなく、少なくとも柵列になるようなものではなからう。性格は不明としたほうが良いであろう。

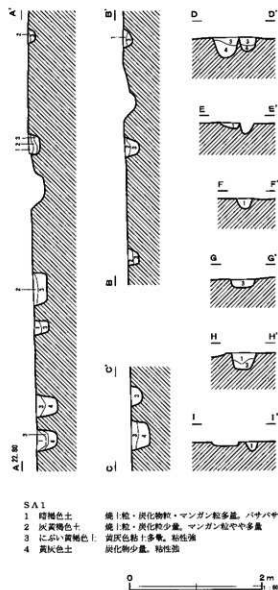


出土遺物は少なく、P7とP17から土師器杯と須恵器杯が出土したのみで、伴う遺物が否かも判然としない。時期は8世紀後葉以降とならう。

第2号ビット列 (第71・72図)

A区東寄りのA N-46グリッドからA Q-46グリッドにかけてほぼ第1号溝跡の西岸に沿うような形で南北方向に延びていた。総延長約38.40mである。

ビット間の間隔は概ね0.80m前後が多いが、一定したものではない。ビット間隔から大きく北からA～E群の5つのブロックに分けられる。また柱筋も直線ではなく、全体に緩やかに蛇行している。



SA11

- | | |
|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 織物・炭化物・マンガン粒多量。バサバサ |
| 2 灰黄褐色土 | 織物・炭化物少量。マンガン粒やや多量 |
| 3 にがい暗褐色土 | 炭灰色粘土多量。粘性強 |
| 4 黄灰土 | 炭化物少量。粘性強 |

第70図 第1号ビット列

SA1



SA3



0 10cm

1・2 SA1

3 SA3

第71図 第1・3号ピット列出土遺物

第20表 第1・3号ピット列出土遺物観察表 (第71図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(12.0)	2.7		A D E	I	橙褐色	20	SA1 Pit7 風化して調整不明瞭
2	須恵環	(13.0)	3.7		E L	III	暗灰色	15	SA1 Pit17 産地不明 内外面とも磨耗
3	須恵環		2.2	6.4	A F	I	紫灰色	50	SA3 南比企塚 底部B0手法

ピットは直径10～40cmほどの小規模で浅いものがほとんどを占める。埋土はほぼ共通し浅間B軽石を含むものであった。

出土遺物は検出されなかった。性格は不明確であるが、断面観察によっても柱痕らしきものは認められず、ほぼ共通した埋土の状態から少なくとも柵列とは考えがたい。浅い溝状遺構の底部の凹凸が残存したものとも考えられようか。時期は浅間B軽石の存在から古代末期～中世にかけての所産と考えておきたい。

第3～7号ピット列 (第71・73図)

F区の中央やや東寄り、AH・AI-41・42グリッドに位置する。第3号竪穴状遺構をコの字形に取り囲むように第3～7号ピット列が検出された。

第5号ピット列と第3号ピット列がほぼ直線的に並び、第3号竪穴状遺構の北側を東西に区画するように延びている。第103号土壌と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。第5号ピット列と第3号ピット列P1・P2までがひとつの単位で、P3

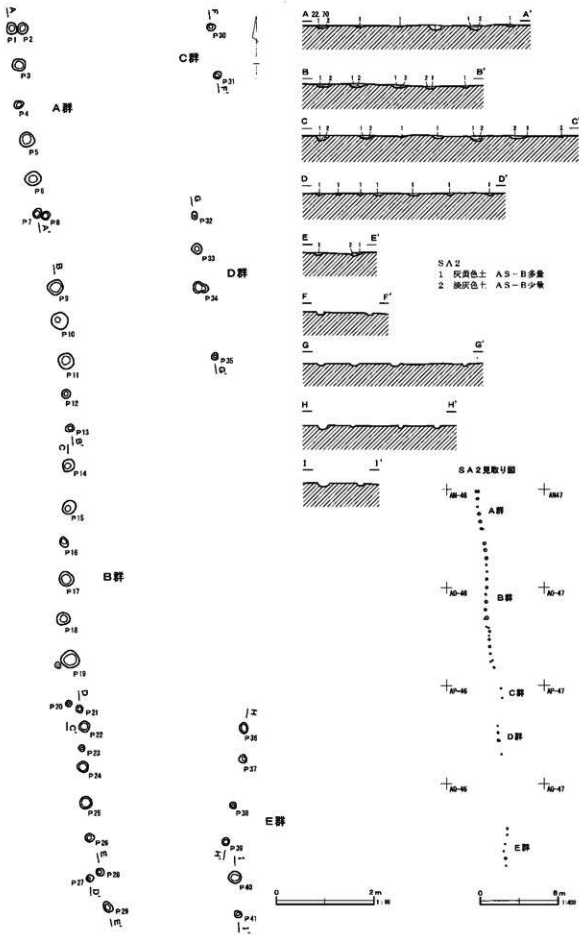
～P6がもうひとつの単位と見たほうが良いかもしれない。

第3号ピット列東端のP7から南に第4号ピット列が延びる。他のピット列に比較して柱穴規模が大きいのが特徴である。P5・P6には柱痕と思われる痕跡が確認された。

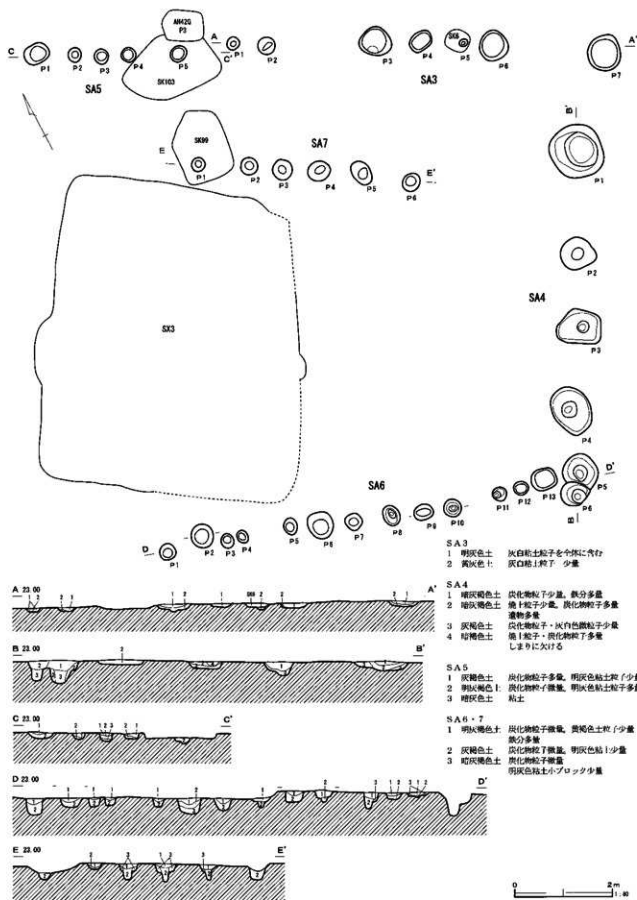
第6号ピット列は第4号ピット列南端から西に向かって延びるが、やや開き気味である。ピットの規模は小さいが、柱痕が認められるものがある。

第7号ピット列は第3・5号ピット列の内側(南側)に位置する。柱穴規模は小さいが、柱痕が残るものが確認されている。第99号土壌との新旧関係は明確に捉えられなかった。

出土遺物は非常に少なく、第3号柱穴列から須恵器の環(第71図3)が検出されたに留まる(但し、出土ピットは不明)。性格は不明確であるが、第3号竪穴状遺構を意識したような柱穴の並びであり、出土遺物の時期も近い。竪穴状遺構に関わる何らかの区画施設かもしれない。



第72図 第2号ピット列



第73図 第3～7号ピット列

5. 土壌

第17地点からは146基の土壌が検出された。このうち、弥生・古墳時代前期のものを除くと109基となる。奈良・平安時代を主体とし、中・近世のものが若干含まれる。

第1号土壌 (第74・75図)

A L-44グリッドに位置し、第2・8号土壌が重複していた。第1号土壌最上層に第2・8号土壌埋土である第1層が堆積していることから第1号土壌が古く、第2・8号土壌が新しいものと考えられる。平面形態は不整楕円形で、規模は長軸長1.84m、短軸長1.44m、深さ0.51mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

出土遺物は土師器環・甕・小型台付甕、須恵器環・甕がある(第75図1~9)。第75図4と5の土師器環は土壌の壁際中層から、正位で2枚重なった状態で出土した。2の須恵器環は底部回転ヘラケズリ調整で、体部外面に不明墨書が記されていた。

土壌の時期は9世紀前半~中頃と思われる。

第2・8号土壌 (第74・75図)

A L-44グリッドに位置する。第1号土壌・第3号溝跡を切っていた。

両土壌共に円形で連結しており埋土も同一であることから、本来一体のものであったと考えられる。

規模は第2号土壌が長軸長1.14m、短軸長1.04m、深さ0.12mである。第8号土壌が長軸長1.32m、短軸長1.20m、深さ0.10mである。

埋土は焼土粒子・炭化物粒子混じりの黄灰色土で、鉄分が多量に含まれていた。出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・甕がある(第75図10~12・17)。時期は9世紀中頃~後半と推定される。第1号土壌との時期差はあまりないであろう。

第3号土壌 (第74図)

A L-44グリッドに位置する。第4号住居跡の南壁を切って掘削されていた。形態は楕円形で、規模は長軸長1.16m、短軸長0.76m、深さ0.16mである。主軸方位はN-12°-Wを指す。

覆土は2層に分かれるが大きな差はなく、黄灰色土を基調としていた。出土遺物は検出されず、時期は不明である。

第4号土壌 (第74図)

A F-39グリッドに位置する。第5号掘立柱建物跡北側にある土壌群の一つで、第123号土壌と第147号溝跡に切られていた。

形態は楕円形と推定される。残存規模は長軸長1.80m、短軸長1.14m、深さ0.20mである。主軸方位はN-35°-Wを指す。

底面は平坦であった。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第5号土壌 (第74・75図)

A L-43・44グリッドに位置する。重複する第6号溝跡を切り、第5号溝跡に切られていると判断された。

形態は方形基調と推定される。残存規模は長軸長1.24m、短軸長0.66m、深さ0.15mである。

出土遺物は須恵器環が1点のみ検出された(第75図13)。木野産のやや厚手の環で、底部は回転糸切り後周辺~体部下端を回転ヘラケズリ調整している。また、底部に「文」の墨書が記されていた。

時期は不明であるが、8世紀末集前後と推定される。

第6号土壌 (第74図)

A H-42グリッドに位置する。第3号ピット列に属するピットを切っていた。形態は円形で、規模は長径0.50m、短径0.46m、深さ0.08mである。

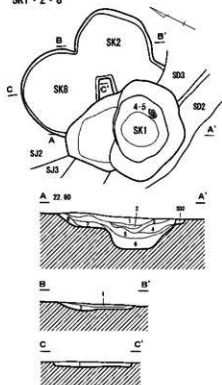
出土遺物はない。詳細な時期は不明である。

第7号土壌 (第74・75図)

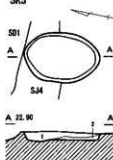
A L-44グリッドに位置する。重複する第5・6号住居跡を切っていた。形態は不整円形で、規模は長軸長1.06m、短軸長0.92m、深さ0.16mである。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・皿・甕がある。第75図14~16は須恵器環及び皿である。時期は9世紀前半~中頃、重複する第5・6号住居跡とほ

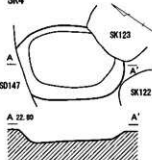
SK1・2・8



SK3



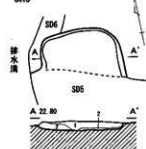
SK4



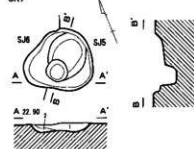
SK6



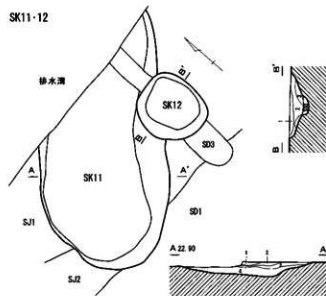
SK5



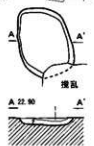
SK7



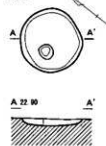
SK11・12



SK9



SK10



SK1

- 1 黄灰色土 焼土粒・炭化粒・地山粒多量
しまり悪い。粘性強。鉄分多量
- 2 暗灰黄色土 焼土粒少量。炭化物を帯状に含む
しまり悪い。粘性強
- 4 黄灰色土 地山ブロック多量。粘性強い。鉄分多量
- 5 暗灰黄色土 地山ブロック少量。それ以外は炭化物
- 6 黄灰色土 炭化粒少量。粘性強い。鉄分やや多量
- 7 黄褐色土 粘性強。しまりよい
- 8 暗灰黄色土 炭化粒少量。粘性高い。しまりよい

SK2

- 1 暗灰黄色土 焼土粒・炭化粒少量。粘性強
- 2 黄灰色土 地山粒少量。粘性強

SK3

- 1 黄灰色土 地山粒少量。粘性強。しまりよい
- 2 暗灰黄色土 地山粒多量。粘性強。しまりよい

SK5

- 1 灰黄褐色土 炭化粒少量。しまりよい。粘性強
- 2 にぶい黄褐色土 炭化粒を若干含む。しまりよい
粘性強

SK6

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物粒子まばら
- 2 暗褐色土 灰多量。炭化物・焼土粒子まばら

SK7

- 1 黄灰色土 焼粒・地山粒少量。炭化粒多量
しまりよい。粘性中や強
- 2 黄灰色土 地山・焼土・炭化粒少量
しまりよい。粘性中や強

SK8

- 1 黄灰色土 地山粒・焼土粒少量

SK9

- 1 黄灰色土 粘性高い。焼土粒・炭化粒少量
しまりよい
- 2 暗灰黄色土 炭化粒・焼土粒少量。ややパサパサ

SK10

- 1 黄灰色土 焼土粒多量。炭化粒少量
しまりよい。粘性強

SK11

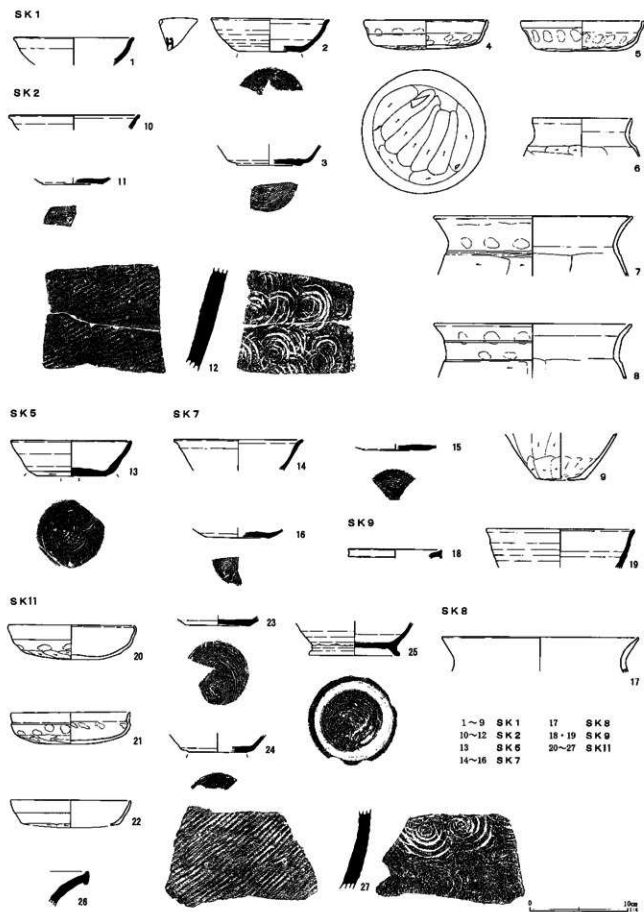
- 1 暗灰黄色土 焼土粒・炭化粒少量。パサパサ
- 2 黄灰色土 灰多量。炭化物・焼土粒少量
- 3 暗灰黄色土 焼土粒・炭化粒多量
- 4 黄灰色土 1層と同じ

SK12

- 1 黄灰色土 焼土粒多量。炭化物をマール状
に含む
白色のつぶつぶ(火山灰?)多量
しまりよい。粘性強
- 2 暗灰黄色土 焼土粒・炭化粒少量
しまりよい。粘性強
- 3 黄褐色土 地山ブロック多量。パサパサ
しまりよい



第74図 土壌(1)



第75図 土壙出土遺物 (1)

ば同時期と思われる。

第9号土壙 (第74・75図)

A L-44グリッドに位置し、南西隅を一部擾乱されていた。形態は楕円形で、規模は長軸長1.02m、短軸長0.84m、深さ0.12mである。主軸方位はN-90°-Wを指す。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・埴・長頸瓶がある。第75図18は須恵器(灰軸?)長頸瓶。非常に焼きが良く、産地は不明確であるが鎗投産の可能性もあろうか。19は須恵器無台壙。時期は9世紀前半~中頃と推定される。

第10号土壙 (第74図)

A L-44・45グリッドに位置する。形態は円形で、規模は直径0.95~0.96m、深さ0.12mである。

底面に小ピットが穿たれ、埋土には焼土粒子が多く含まれていた。出土遺物は土師器杯・甕が少量検出されているが、図化可能な遺物はない。時期は9世紀前半~中頃と思われる。

第11号土壙 (第74・75図)

A L-44・45グリッドに位置する。第1号住居跡・第3号溝跡を切り、第12号土壙に切られていた。また、北部は排水溝に削平されていた。

形態は長楕円形で、残存規模は長軸長2.88m、短軸長2.00m、深さ0.22mである。主軸方位はN-30°-Eを指す。

底面は船底状に浅く窪み、埋土上層には焼土・炭化物混じりの灰層が形成されていた(第2層)。

出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・高台埴・甕がある(第75図20-27)。20-22は土師器杯。20は口唇部を内彎気味に収める杯で、底部は平底風。21は口縁部を強く横ナデする。イレギュラーではあるが、北武蔵型杯と思われる。23の杯は底部回転糸切り後無調整で、底径はまだ大きい。24の底部は再調整されている。25の高台埴は末野産で、高台埴の腰は消失している。時期は9世紀前半~中頃と推定される。重複する第1号住居跡との時期差はあまり認められないこととなろう。

第12号土壙 (第74・85図)

A L-45グリッドに位置し、重複する第11号土壙と第3号溝跡を切っていた。

形態は楕円形で、規模は長径1.04m、短径0.94m、深さ0.20mである。主軸方位はN-5°-Wを指す。

埋土上層には焼土粒子と炭化物が多量に堆積していた(第1層)。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・埴・高台埴がある(第85図28-33)。28は平底化した北武蔵型杯である。時期は9世紀前半~中頃と推定される。第1号住居跡、第11号土壙との時期差はあまりないものと思われる。

第13号土壙 (第76図)

A M-46グリッドに位置する。第15号溝跡覆土上層を横断していた。形態は長方形で、規模は長軸長1.60m、短軸長0.82m、深さ0.24mである。主軸方位はN-6°-Wを指す。

底面は平坦で、埋土には黄灰色または灰白色の粘土ブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻されたものと判断できる。墓塚の可能性も排除できないであろう。

遺物は検出されなかった。時期は不明確である。

第15号土壙 (第76図)

A N-47グリッドに位置し、第4号溝跡に切られていた。

形態は方形と推定される。残存規模は長軸長2.33m、短軸長1.80m、深さ0.12mである。主軸方位はN-62°-Wを指す。

底面は平坦である。埋土は黄灰色土層で、大きな上層変化は観察されなかった。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第16号土壙 (第76図)

A M-47グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.14m、短径0.92m、深さ0.12mである。主軸方位はN-62°-Wを指す。

底面は皿状に窪み、埋土は粘土ブロックと褐色土が混在していた。人為的な堆積であろう。

出土遺物はなく、時期は不明確である。

第17号土壌 (第76図)

A N-46グリッドに位置する。第1号溝跡の内部に収まった状態で検出された。形態は不整楕円形で、規模は長径1.82m、短径1.58m、深さ0.90mである。主軸方位はN-38°-Eを指す。

底面は平坦で壁は急角度で立ち上がる。埋土最上層には浅間B軽石が多量に含まれており、第1号溝跡とほぼ同時期に存在した可能性が高い。寧ろ、第1号溝跡と一体となって機能していたと見た方が良くもかもしれない。用途は不明であるが、第1号溝跡の屈曲点付近に位置すること、周囲3方から土壌に向かって浅い溝が伸びていることなどから、何らかの水溜(集水)用の施設とするのも一案であろう。

遺物は検出されなかった。時期は浅間B軽石の堆積以前、古代末期と推定される。

第18号土壌 (第76図)

A L-45グリッドに位置する。北端は排水溝に切られているが、形態は楕円形と推定される。残存規模は長径0.74m、短径0.72m、深さ0.22mである。

埋土上層には焼土・炭化物が多量に含まれていた。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第19号土壌 (第76・85図)

A L-46グリッドに位置し、第10号溝跡に切られていた。形態は円形で、規模は長径1.82m、短径1.80m、深さ0.80mである。

円筒状に掘り込まれており、小型の井戸に類似するが、確証は得られなかった。出土遺物は土師器片1点のみである。時期は不明であるが、9世紀前半〜中頃と推定しておきたい。

第20号土壌 (第76図)

A L-46グリッドに位置する。第21号土壌と底面は連続するが、断面観察から本土壌の方が第21号土壌を切っていることが判明した。

形態は不整円形で、規模は長径1.08m、短径0.92m、深さ0.33mである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第21号土壌 (第76図)

A L-46グリッドに位置する。第15号竪穴状遺構を切り、第20号土壌に切られていた。

形態は不整形で、規模は長軸長0.94m、短軸長0.88m、深さ0.29mである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第22号土壌 (第76図)

A L-44・45グリッドに位置し、第2号土壌に切られていた。形態は不整形で、規模は長径1.24m、短径1.08m、深さ0.15mである。

底面は皿状に窪んでいた。出土遺物はなく、時期は不明であるが、第2号土壌との関係から9世紀中頃以前となる。

第23号土壌 (第76図)

A M-47グリッドに位置する。形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.78m、深さ0.04mである。

底面は皿状に窪み、小ピットが1本穿たれている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第24号土壌 (第76図)

A M-44グリッドに位置し、第23号竪穴状遺構を切っていた。形態は楕円形で、規模は長径1.64m、短径1.36m、深さ0.40mである。主軸方位はN-38°-Wを指す。

底面は平坦で壁は急角度で立ち上がる。出土遺物はなく、時期は不明である。

第25号土壌 (第77図)

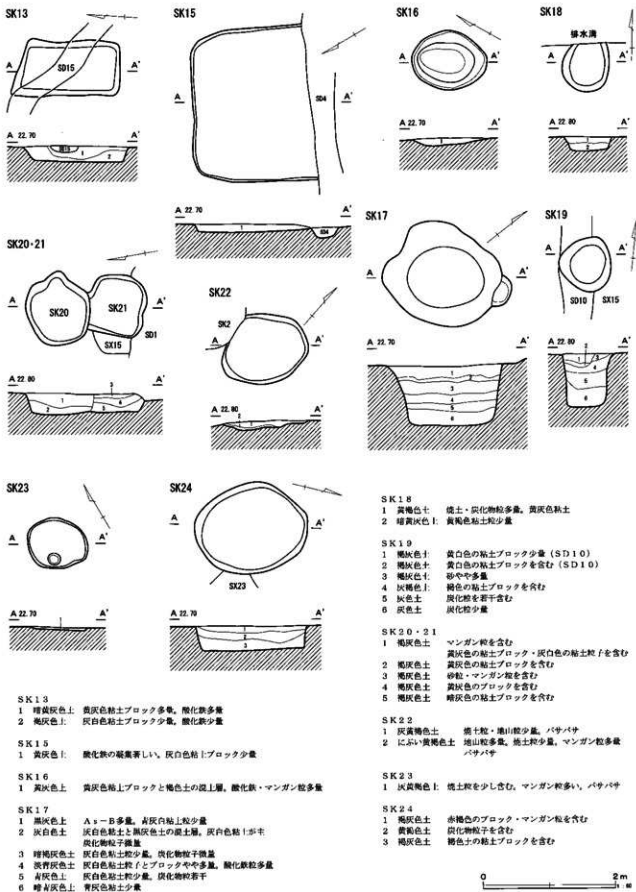
A N-44グリッドに位置し、第36号竪穴状遺構を切っていた。形態は長方形で、規模は長軸長2.34m、短軸長1.52m、深さ0.54mである。主軸方位はN-2°-Wを指す。

箱型の掘込みで、底面は平坦である。埋土には白色〜褐色の粘土ブロックが混在し、最上層には浅間B軽石が多量に含まれていた。墓塚の可能性もあろうか。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、浅間B軽石降灰以前という限定はできる。

第26号土壌 (第77図)

A M-44グリッドに位置し、第24号竪穴状遺構を



SK13

- 1 暗黄灰色土 黄灰色粘土ブロック多量、酸化鉄多量
- 2 褐色土 灰白色粘土ブロック少量、酸化鉄少量

SK15

- 1 黄灰色土 酸化鉄の顕著著しい、灰白色粘土ブロック少量

SK16

- 1 黄灰色土 黄灰色粘土ブロックと褐色土の混層、酸化鉄・マンガン粒多量

SK17

- 1 黄灰色土 A₂-B₂多量、黄灰白粘土粒少量
- 2 灰白色土 灰白色粘土と黄灰色土の混層、灰白色粘土が干、酸化鉄粒子微量
- 3 暗黄灰色土 灰白色粘土粒少量、灰化物粒子微量
- 4 灰黄灰色土 灰白色粘土粒とブロックやや多量、酸化鉄粒多量
- 5 青灰色土 灰白色粘土粒少量、灰化物粒若干
- 6 暗黄灰色土 黄灰色粘土少量

SK18

- 1 黄褐色土 粘土・灰化物粒多量、黄灰色粘土
- 2 暗黄灰色土 黄褐色粘土粒少量

SK19

- 1 褐色土 黄白色の粘土ブロック少量 (SD10)
- 2 褐色土 黄白色の粘土ブロックを含む (SD10)
- 3 褐色土 砂やや多量
- 4 灰褐色土 褐色の粘土ブロックを含む
- 5 灰色土 灰化層を若干含む
- 6 灰色土 灰化粒少量

SK20・21

- 1 褐色土 マンガン粒を含む
黄灰色の粘土ブロック・灰白色の粘土粒を含む
- 2 褐色土 黄灰色の粘土ブロックを含む
- 3 褐色土 砂粒・マンガン粒を含む
- 4 褐色土 黄灰色の粘土ブロックを含む
- 5 褐色土 暗灰色の粘土ブロックを含む

SK22

- 1 灰黄褐色土 腐土粒・地山粒少量、バヤバヤ
- 2 に近い黄褐色土 地山粒多量、粘土粒少量、マンガン粒多量
バヤバヤ

SK23

- 1 灰黄褐色土 粘土粒を少し含む、マンガン粒多い、バヤバヤ

SK24

- 1 褐色土 赤褐色のブロック・マンガン粒を含む
- 2 黄褐色土 灰化物粒子を含む
- 3 褐色土 褐色土の粘土ブロックを含む



第76図 土壌 (2)

切っていた。形態は長方形で、規模は長軸長1.91m、短軸長1.06m、深さ0.50mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

底面は平坦で、壁は直立する。埋土は2層に分かれ、下層には粘土、上層には粘土と褐灰色土ブロックが混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。墓塚の可能性もあろう。

出土遺物はなく、時期は不明確である。

第27号土壌 (第77図)

A N-44グリッドに位置する。第25号土壌の北側1m、第26号土壌の南約10mにあり、規模や形態は酷似している。形態は長方形、規模は長軸長1.78m、短軸長1.04m、深さ0.20mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。

埋土には粘土ブロックが多く含まれ、第1層には浅間B軽石が混入していた。第25・26号土壌と同様、墓塚の可能性もあろう。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが、火山灰の存在から古代末期の所産と推定される。

第28号土壌 (第77図)

A M-44グリッドに位置し、西壁の一部を排水溝に壊されていた。形態は楕円形と考えられ、規模は長径1.30m、短径1.00m、深さ0.14mである。

埋土は暗黄灰色土単層で、大きな土層変化は観察されなかった。

出土遺物はなく、時期は不明確である。

第29号土壌 (第77図)

A N-45グリッドに位置し、第25号竪穴状遺構の東側に隣接する。形態は台形で、規模は長軸長0.88m、短軸最大長0.66m、深さ0.26mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

埋土には浅間B軽石が多量に含まれていた。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが、浅間B軽石の存在から古代末期頃の所産と推定される。

第30号土壌 (第77図)

A N-46グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径0.95m、短径0.72m、深さ0.11mである。

底面は皿状で立ち上がり角度は緩やかである。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第31号土壌 (第77・85図)

A N-45・46グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長軸長2.52m、短軸長1.46m、深さ0.48mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

底面は平坦で、壁は直立する。埋土の状態は明らかな埋め戻し土で、浅間B軽石が含まれていた。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環がある。量的には少なく、岡化可能なものは須恵器環1点である(第85図35)。遺物の時期は9世紀前半であろうが、遺構の時期とすると、浅間B軽石の存在から古代末期頃と推測される。

第32号土壌 (第77図)

A N-45グリッドに位置し、第25・26号竪穴状遺構を切っていた。形態は整った方形で、規模は一辺1.82m、深さ0.08mである。主軸方位はN-24°-Eを指す。

底面は平坦で、埋土の状態は不明。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第33号土壌 (第77図)

A N・A O-44グリッドに位置し、第41号竪穴状遺構を切っていた。形態は不整長方形で、規模は長軸長1.82m、短軸長1.34m、深さ0.23mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

底面は平坦で、壁は直立していた。埋土には黄灰色粘土と浅間B軽石が多量に含まれていた。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが、浅間B軽石の存在から古代末期と推定される。

第34号土壌 (第77図)

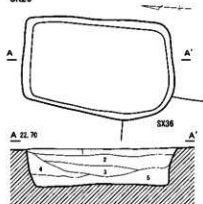
A N・A O-45グリッドに位置する。形態は台形で、規模は長軸長2.64m、短軸長1.80m、深さ0.06mである。主軸方位はN-7°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、埋土は黄灰色土単層であった。出土遺物はなく、時期は不明確である。

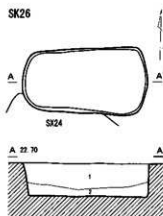
第35号土壌 (第78図)

A O-45・46グリッドに位置する。形態は不整楕

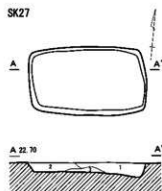
SK25



SK26



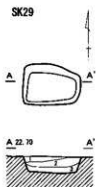
SK27



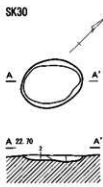
SK28



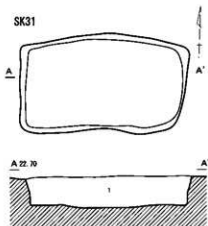
SK29



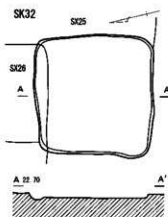
SK30



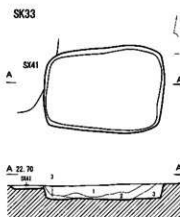
SK31



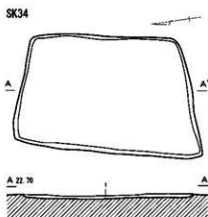
SK32



SK33



SK34



SK 2 5

- 1 褐色土: A s-B多量, マンガン粒を含む
- 2 明黄褐色土: 灰色粘土・明黄褐色粘土・褐色土ブロック
- 3 灰白粘土: 褐色の粘土ブロックを含む
- 4 灰白粘土: 褐色の粘土ブロック多量
- 5 褐色土: 褐色の粘土ブロック微量

SK 2 6

- 1 褐色土: 灰色粘土・黄褐色粘土・褐色土大形ブロック
- 2 褐色土: 粘土, 粘性に富む

SK 2 7

- 1 褐色土: 褐色粘土・灰色粘土ブロックを含む
- 2 褐色土: 褐色土中にA s-Bを含む
- 3 褐色土: 黄白色の粘土ブロック極めて多量

SK 2 8

- 1 暗黄灰色土: マンガン・酸化鉄粒多量

SK 2 9

- 1 黄灰色土: A s-B多量, 粘土
- 2 黄灰色土: A s-Bをまばらに含む
- 3 黒灰色土: 黄灰色土ブロックをまばらに含む

SK 3 0

- 1 灰黄色土: 酸化鉄粒子を含む
- 2 暗黄灰色土: 炭化物粒少量

SK 3 1

- 1 暗褐色土: 暗褐色土・黒灰色土・灰黄色土のブロックがランダムに入る埋め戻し土。A s-B多量

SK 3 3

- 1 黒褐色土: 灰白色粘土ブロックをランダムに含む。A s-B多量
- 2 灰褐色土: 灰白色粘土ブロック少量
- 3 暗褐色土: 黄灰色粘土ブロック少量

SK 3 4

- 1 黄灰色土: マンガン・酸化鉄粒を含む



第77図 土坑 (3)

円形で、規模は長軸長5.02m、短軸長1.86m、深さ0.06mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

大型土塚で、底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第36号土塚 (第78図)

A N-44グリッドに位置し、第41号竪穴状遺構を切っていた。形態は長方形で、規模は長軸長2.23m、短軸長0.81m、深さ0.04mである。主軸方位はN-15°-Eを指す。

埋土は鈍い黄橙色土で構成されていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第37号土塚 (第78図)

A O-46グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.26m、短径0.86m、深さ0.08mである。主軸方位はN-29°-Wを指す。

底面は平坦で、埋土には浅間B軽石が含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確であるが、火山灰の存在から古代末期頃の所産と推定される。

第38号土塚 (第78図)

A N-44・45グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径0.74m、短径0.56m、深さ0.16mである。

出土遺物はなく、時期は不明確である。

第39号土塚 (第78図)

A N-46グリッドに位置し、第1号溝跡に西半を削平されていた。形態は楕円形と推定される。規模は長軸長1.48m、短軸長1.32m、深さ0.10mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第40号土塚 (第78図)

A N-46グリッドに位置する。形態は円形で、規模は直径0.90m、深さ0.05mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第41号土塚 (第78図)

A N-47グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.28m、短径0.83m、深さ0.04mである。

主軸方位はN-22°-Eを指す。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第42号土塚 (第78図)

A N-47グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長軸長3.24m、短軸長1.68m、深さ0.16mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。

底面は平坦である。埋土は明らかな埋め戻し土で、浅間B軽石が多量に含まれていた。出土遺物はない。時期は不明確であるが、古代末期頃と推定される。

第43号土塚 (第78図)

A N-48グリッドに位置する。形態は不整形で、規模は長軸長1.32m、短軸長1.26m、深さ0.04mである。主軸方位はN-36°-Wを指す。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第44号土塚 (第78図)

A N-48グリッドに位置する。形態は不整形楕円形で、規模は長径1.34m、短径0.86m、深さ0.10mである。主軸方位はN-11°-Wを指す。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第45号土塚 (第78図)

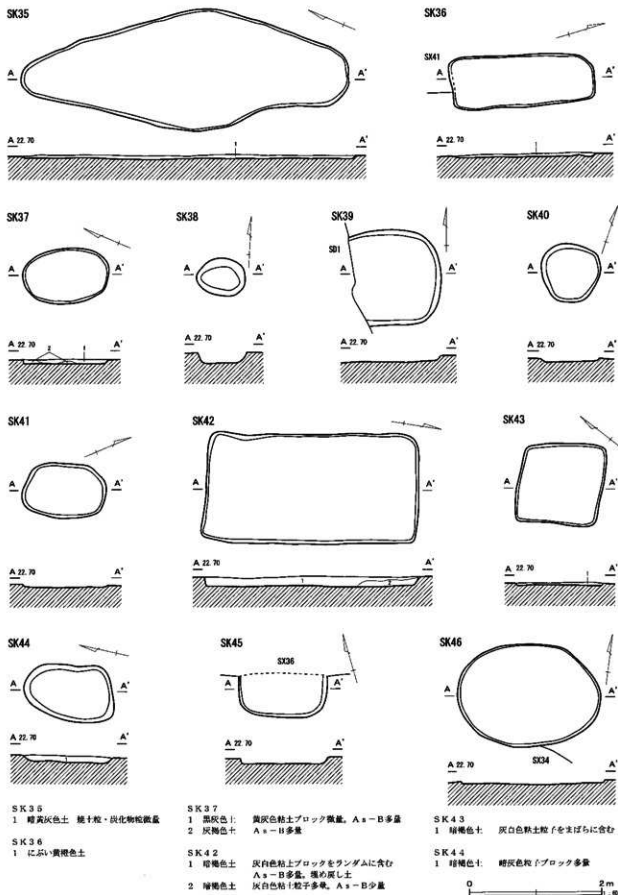
A N-44グリッドに位置する。第36号竪穴状遺構と重複するが、新旧関係は明確に把握することはできなかった。形態は方形と推定され、規模は長軸長1.35m、短軸長0.70m、深さ0.08mである。主軸方位はN-72°-Wを指す。

底面は平坦で、重複する第36号竪穴状遺構とほぼ同一レベルで続く。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第46号土塚 (第78図)

A O-47グリッドに位置し、第34号竪穴状遺構を切っていた。形態は楕円形で、規模は長軸長2.18m、短軸長1.56m、深さ0.06mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。



SK 35
1 暗黄灰色土 軽十粒・炭化物粒混在

SK 36
1 に近い黄褐色土

SK 37
1 黒灰色土 黄灰色粘土ブロック混在。A s-B 多量
2 灰褐色土 A s-B 少量

SK 42
1 暗褐色土 灰白色粘土ブロックをランダムに含む
A s-B 多量。塊の戻し土
2 暗褐色土 灰白色粘土粒子多量。A s-B 少量

SK 43
1 暗褐色土 灰白色粘土粒子を支ばらに含む

SK 44
1 暗褐色土 暗灰色粘土ブロック多量

0 2m

第78図 土壌 (4)

第47号土壌 (第79図)

A O-47・48グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長軸長2.26m、短軸長0.94m、深さ0.09mである。主軸方位はN-50°-Wを指す。

埋土には灰白色粘土ブロックが多く含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第48号土壌 (第79図)

A O-47グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.87m、短径1.16m、深さ0.14mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第49号土壌 (第79図)

A P-47・48グリッドに位置する。形態は不整形長方形で、規模は長軸長3.96m、短軸長2.66m、深さ0.12mである。主軸方位はN-70°-Wを指す。

底面は平坦である。埋土は灰白色粘土ブロックが多量に含まれ、人為的な堆積と推定された。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第50号土壌 (第79図)

A N-47グリッドに位置する。第31号竪穴状遺構と第20号溝跡を切っていた。形態は長方形で、規模は長軸長1.72m、短軸長1.02m、深さ0.06mである。主軸方位はN-67°-Wを指す。

底面は平坦で、黄灰色粘土粒子を多く含む暗褐色土が堆積していた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第51号土壌 (第79図)

A O-48グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.02m、短径0.66m、深さ0.06mである。

底面は平坦で、埋土には黄灰色粘土ブロックが多量に含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第52号土壌 (第79図)

A O-48グリッドに位置する。形態は円形で、規模は長径0.96m、短径0.82m、深さ0.06mである。

底面は平坦で、埋土には灰白色粘土ブロックが多量に含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確

である。

第53号土壌 (第79図)

A P-48グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長軸長4.74m、短軸長1.00m、深さ0.08mである。主軸方位はN-6°-Wを指す。

底面は概ね平坦で、埋土には灰白色粘土ブロックが多く含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第54号土壌 (第79図)

A O-46グリッドに位置する。第34号竪穴状遺構の内部に取まるため、竪穴状遺構に付属する土壌である可能性が高い。形態は半円形で、規模は長軸長0.74m、短軸長0.62m、深さ0.05mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第55号土壌 (第79図)

A L-44グリッドに位置する。形態は円形で、規模は長径0.43m、短径0.37m、深さ0.20mである。

底面は平坦である。埋土は灰褐色の粘質土であった。出土遺物はなく時期は不明確である。

第56号土壌 (第79図)

A W-24グリッドに位置する。第24号溝跡との新旧関係は明確に捉えられなかった。

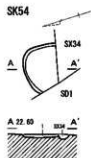
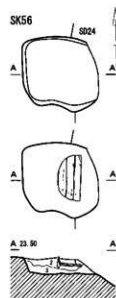
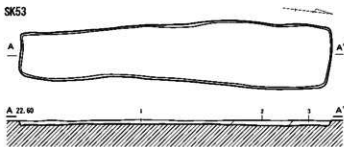
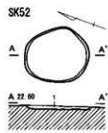
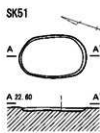
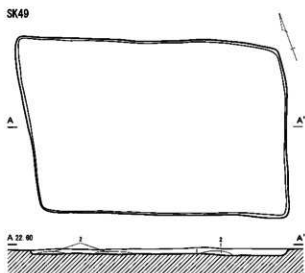
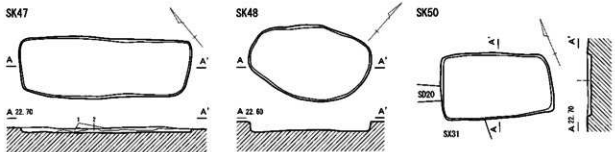
形態は方形と推定され、残存規模は長軸長1.14m、短軸長1.12m、深さ0.24mである。

底面は平坦である。底面から浮いた位置に木桶の底板と思われる木製品が遺存していた。埋土には浅間A軽石が含まれていた。性格は不明である。出土遺物はないが、火山灰の存在から時期は近世以降と推定される。

第57号土壌 (第79図)

A V-24グリッドに位置する。第56号土壌の北側約7mにある。形態は円形で、規模は長径1.26m、短径1.12m、深さ0.43mである。

底面は2段に掘り込まれ、確認面付近で円形の木桶の底板が検出された。また、その下部からも枠板の一部が検出されたことから最低一度は据え直した



- SK 4 7
 1 暗褐色土 灰白色粘土ブロック多量
 2 暗褐色土 黄灰色粘土・粘り少量

- SK 4 9
 1 暗褐色土 灰白色粘土ブロック多量
 2 黄灰色土 暗褐色土ブロックとの最上層
- SK 5 0
 1 暗褐色土 黄灰色粘土・粘り多量
- SK 5 1
 1 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック多量
- SK 5 2
 1 暗褐色土 灰白色粘土ブロック多量
- SK 5 3
 1 暗褐色土 灰白色粘土ブロック多量
 2 黄灰色土 灰白色粘土ブロック多量
 3 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック多量
- SK 5 4
 1 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック多量

- SK 5 6
 1 灰褐色土 砂質、灰褐色粘土少量、ややしまりよい鉄・マンガンをやや多量全体的に粘っぽい
 2 灰褐色土 A・Aバミス少量、シルトブロック多量粘土質シルト・鉄塊少量
 3 灰褐色土 A・Aバミス多量、シルトブロック少量細砂質シルト・鉄塊少量
- SK 5 7
 1 灰褐色土 粘質で硬い、鉄・マンガンを多量
 2 褐色土 粘っぽいがやや粘質、間隙が大きい鉄・マンガンを少量
 3 灰褐色土 砂質、薄片少量、間隙大きく、粗粒の砂シルト質粘土、陶器よい、鉄塊少量
 4 暗褐色土 4層上からの水分運下により鉄塊層となつたもの
 5 暗褐色土 普通粘持の黒粘土
 6 暗褐色土 シルト質粘土・細砂少量、鉄塊多量
 7 灰褐色土



第79図 土壌 (5)

ものと考えられる。出土遺物はロクロ土師器の細片が検出されている。時期は不明確であるが、第56号土壇同様、近世以降と推定される。

第58号土壇 (第80図)

A O-23グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.50m、短径0.92m、深さ0.32mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

底面は2段に掘り込まれ、埋土は灰色系のシルト質土を主体に構成されていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第59号土壇 (第80図)

A N・A O-23グリッドに位置する。形態は不整楕円形で、規模は長径3.38m、短径1.58m、深さ0.38mである。主軸方位はN-0°を指す。

底面は2段に掘り込まれ、小さな凹凸が顕著であった。埋土はシルト質土が主体で、下層には炭化物が混じっていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第60号土壇 (第80図)

A O-42グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長軸長1.42m、短軸長1.20m、深さ0.22mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

底面は小さな凹凸が目立ち、一定しない。埋土には浅間B軽石が多量に含まれていた。出土遺物はなく時期は不明確であるが、火山灰の存在から古代末期と推定される。

第64号土壇 (第80図)

A L-43グリッドに位置する。形態は円形で、規模は長径0.44m、短径0.40m、深さ0.34mである。

底面は平坦で、埋土には炭化物粒子が多量に含まれていた。出土遺物は土師器小片が1点出土したのみで、時期は不明確である。

第65号土壇 (第80・85図)

A G-33グリッドに位置する。南端はトレンチで削平されていた。溝状の上壇で、形態は長楕円形である。規模は長軸長2.58m、短軸長0.74m、深さ0.08mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

底面は凹凸が顕著である。埋土には焼土や炭化物、灰が多量に含まれていた。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環が検出された。第85図36は土師器環。底部は弱い丸底風で、腰をもつ。37は須恵器環。器壁が薄く、直線的に開く。時期は8世紀末葉～9世紀前半頃と推定される。

第66号土壇 (第80・85図)

A E-32グリッドに位置する。形態は不整長方形で、規模は長軸長2.24m、短軸長1.48m、深さ0.24mである。

底面は概ね平坦で、小ピットが1個穿たれていた。埋土中層に焼土泥じりの灰層が形成されていた。

出土遺物は土師器環・甕と須恵器環が検出された(第85図38・39)。時期は不明確であるが、9世紀前半頃と推定される。

第67号土壇 (第80・85図)

A E・A F-32グリッドに位置する。形態は不整形で、規模は長軸長2.82m、短軸長1.88m、深さ0.28mである。

底面は概ね平坦である。埋土には焼土・炭化物・灰が多量に含まれ、灰層も2枚確認された。底面及び側壁には被熱面は検出されなかった。第66号土壇と同タイプの土壇である。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環が検出された(第85図40～45)。時期は9世紀前半～中葉頃と推定される。

第68号土壇 (第81・85図)

A F-33グリッドに位置する。形態は円形で、規模は長径1.38m、短径1.02m、深さ0.36mである。

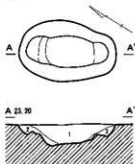
底面緩やかに窪む。埋土最上層に浅間B軽石に似た火山灰状の粒子が認められたが、確定できない。

出土遺物は土師器甕、須恵器環・甕が検出された(第85図46・47)。須恵器環は末野産で、口径は大きい。8世紀末葉～9世紀初頭頃を中心とした時期と考えておきたい。

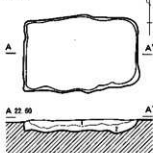
第69号土壇 (第81図)

A F-35グリッドに位置する。形態は不定形で、

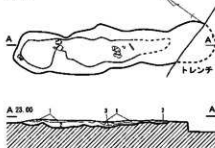
SK58



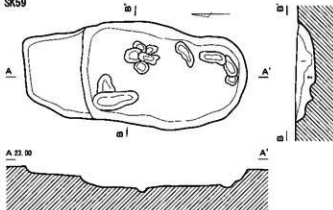
SK60



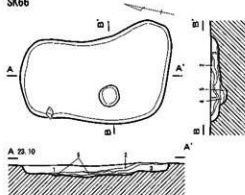
SK65



SK59



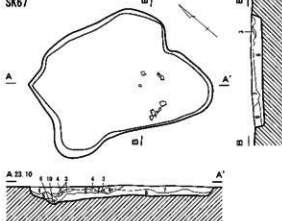
SK66



SK64



SK67



SK58

- 1 灰色シルト質土 鉄珪多量、炭化物少量
黒色シルトブロック少量
マンガン少量
- 2 暗灰色シルト質土 鉄珪少量
有機質黒色シルトブロック多量

SK59

- 1 オリーブ灰色シルト質土 鉄珪多量、鈣法のよいシルト
- 2 灰色シルト質土 鉄珪少量
有機物による炭化物少量

SK60

- 1 褐色土: 粘土質火山灰まじりシルト
A-Bバミス多量、鉄珪多量
マンガン結核少量
暗灰色シルトブロック少量
- 2 灰色粘土質シルト 暗灰色シルトブロックと灰色粘土質シルトの混生、炭化物少量
鉄珪多量、マンガン結核少量

SK64

- 1 灰黄色土細砂質シルト 有機質土ブロック、炭化物多量
- 2 暗灰色土シルト質粘土 鉄珪、炭化物少量

SK65

- 1 灰褐色シルト質土 炭化物・灰多量、焼土小ブロック少量
- 2 黒灰色灰まじりシルト質土 灰・炭化物とシルト粒の混生
焼土ブロック混じる
- 3 黄褐色シルト質土 炭化物多量

SK66

- 1 暗褐色土 基質は暗灰色褐色土、砂質シルト、鉄珪多量
粘土・炭化物やや多量
- 2 黒色土 灰と炭化物の層、ややわからぬ、焼土やや多量
- 3 暗灰色土 粘質でわからない、黄灰色粘土質土ブロックを含む
鉄珪少量、マンガン結核やや多量
- 4 暗褐色土 粘質でわからない、鉄珪やや多量、マンガン結核少量
- 5 灰褐色土 粘質でわからない、黄灰色粘土質土少量含む、鉄珪やや多量

SK67

- 1 暗褐色土 粘土・炭化物やや多量、鉄珪多量、マンガン結核やや多量
- 2 暗褐色土 粘土・炭化物、灰多量、しまりが悪い(黄鉄質層)
- 3 黄褐色土 粘土多量に赤み、オキシ鉄の多い、炭化物・灰多量
2層より粘土づくしよりよい
- 4 暗褐色土 粘土・炭化物少量、やや硬くしまりよい、ブロック状、鉄珪少量
やや硬い、焼土・炭化物少量、鉄珪多量
- 5 黄褐色土 粘土・炭化物、灰多量、2層よりややしまりよい、わからない(第1灰層)
- 6 暗褐色土 やや硬い、焼土・炭化物少量、鉄珪多量
- 7 暗褐色土 硬く、しまりよい、粘質、鉄珪多量、マンガン結核少量
- 8 黄褐色土 粘土・炭化物少量、鉄珪多量
- 9 黄褐色土 粘土・炭化物、灰多量、鉄珪やや多量
- 10 暗褐色土 やわらかい、粘土・炭化物やや多量、鉄珪やや多量



第80図 土壌 (6)

規模は長軸長2.12m、短軸長1.04m、深さ0.18mである。

底面は凹凸が激しい。埋土には焼土・炭化物が少量含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第70号土壌 (第81図)

A F-35グリッドに位置し、第105号溝跡に切られていた。形態は不定形で、規模は長軸長1.30m、短軸長0.90m、深さ0.20mである。

底面は平坦である。埋土の状況は不明。また、出土遺物もなく、時期は不明確である。

第71号土壌 (第81図)

A U-27グリッドに位置する。第72・73号土壌と重複し、最も新しい。西側はトレンチに削平されていた。形態は円形と推定され、規模は長径1.28m、短径0.82m、深さ0.34mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第72号土壌 (第81図)

A U-27グリッドに位置し、重複する第71号土壌に切られていた。形態は不定形で、規模は長軸長1.24m、短軸長0.92m、深さ0.22mである。

底面は緩やかに窪み皿状をなす。埋土には灰白色粘土と炭化物が多量に含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第73号土壌 (第81図)

A U-27グリッドに位置し、重複する第71号土壌に切られていた。形態は円形で、規模は長径0.60m、短径0.51m、深さ0.15mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第79号土壌 (第81・85図)

A K-29グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.86m、短径1.30m、深さ0.20mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

底面は平坦である。埋土には浅間B軽石が部分的に含まれていた。出土遺物は土師器環・甕、ロクロ

土師器環が検出された(第85図48)。時期は不明確であるが、火山灰の存在から見れば古代末期、11世紀頃と推定される。

第80号土壌 (第81図)

A K-30グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長軸長3.20m、短軸長1.36m、深さ0.48mである。主軸方位はN-78°-Eを指す。

底面は概ね平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第81号土壌 (第81図)

A I-32グリッドに位置し、第95号溝跡に切られていた。また、東壁部は調査区外に延びており、詳細は不明である。形態は方形系と推定され、規模は長軸長2.44m、短軸長1.76m、深さ0.20mである。主軸方位はN-83°-Wを指す。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第82号土壌 (第82図)

A J・A K-44グリッドに位置し、第83号土壌と第178号溝跡を切っていた。形態は長方形で、規模は長軸長2.13m、短軸長0.84m、深さ0.10mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

底面は概ね平坦である。埋土は出土遺物はなく、時期は不明確である。

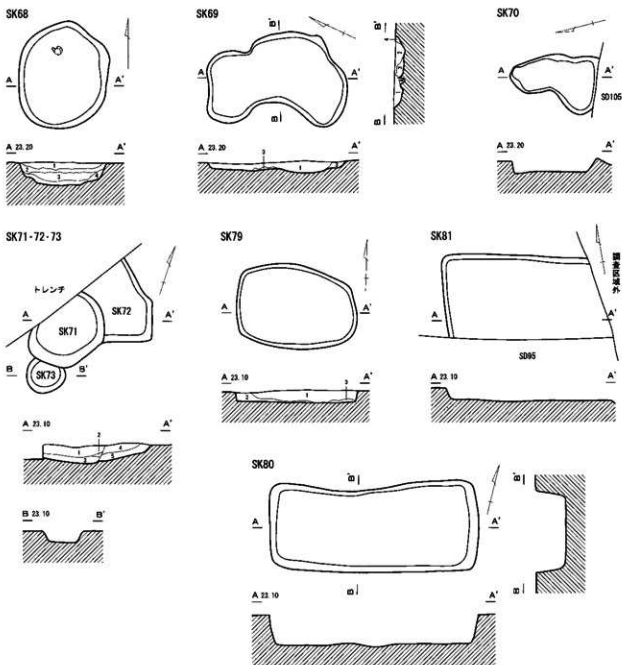
第83号土壌 (第82図)

A J・A K-44グリッドに位置する。重複する第178号溝跡を切り、第82号土壌に切られていた。形態は隅丸長方形で、規模は長軸長1.84m、短軸長0.80m、深さ0.14mである。主軸方位はN-61°-Wを指す。

底面は平坦で、埋土には灰白色粘土と炭化物粒子が多量に含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第84号土壌 (第82・85図)

A J-44グリッドに位置し、第83号土壌の北側に接する位置にある。形態は隅丸方形で、規模は長軸長0.90m、短軸長0.78m、深さ0.44mである。主軸



- SK68
- 1 灰色土 鉄屑やや多量。マンガン結核やや多量
火山灰(A、Bか?)少量。砂質シルトか
 - 2 灰褐色土 鉄屑多量。マンガン結核少量。やや砂質で硬くしまりよい
 - 3 灰白色土 やや強い粘質。鉄屑少量。マンガン結核やや多量
 - 4 暗灰褐色土 暗灰色粘質土が基質。鉄屑少量。マンガン結核やや多量
灰色粘土少量ブロック状に含む

- SK69
- 1 暗灰褐色土 やや粘質。灰(褐)色粘質土やや多量。鉄屑多量
マンガン結核やや多量。焼土・炭化物少量
 - 2 暗灰褐色土 灰(褐)色粘質土少量。鉄屑多量。マンガン結核少量
焼土・炭化物少量
 - 3 茶褐色土 灰(褐)色粘質土少量。鉄屑多量。マンガン結核やや多量
 - 4 暗褐色土 粘質。焼土・炭化物少量。鉄屑少量。マンガン結核少量

- SK71・72
- 1 黒灰色土 炭化物少量。灰白色粘土粒を全層にまばらに含む
 - 2 灰白色土 黒灰色土をブロック状に含む
 - 3 暗黄灰色土 炭化物を若干含む。湖山の区分不明確
 - 4 黒灰色土 灰白色粘土粒・炭化物を全体に含む
 - 5 灰褐色土 灰白色粘土と黒灰色土の混土層。炭化物多量

- SK79
- 1 黒灰色土 黄灰色粘土ブロックとの混土層
下にマンガンの偏集有り
A-S-Bを覆土中に点々と含む
 - 2 暗黄灰色土 粘土質・黄褐色粘土を若干含む。炭化鉄屑多量
マンガン粒少量
 - 3 黒灰色土 灰白色粘土粒少量



第81図 土壌 (7)

方位はN-82°-Wを指す。

底面は平坦である。出土遺物は須恵器環と土師器環が少量出土した。第85図49は南比企産の須恵器環で、底部は回転糸切り後回転ヘラケズリ調整。「X」のヘラ記号が記されていた。50は末野産の環で、底部は回転糸切り後無調整である。時期は9世紀前半頃と推定される。

第85号土壌 (第82・85図)

A J-44グリッドに位置し、重複する第130号溝跡を切り、第131・141号溝跡に切られていた。形態は隅丸長方形と推定され、規模は長軸長1.70m、短軸長1.02m、深さ0.30mである。主軸方位はN-88°-Wを指す。

底面は平坦である。出土遺物は土師器環(第85図51)と須恵器環が各1点検出された。時期は不明確であるが、遺物から見る限り、8世紀末葉頃～9世紀前半頃に位置付けられよう。

第86号土壌 (第82図)

A K-45グリッドに位置する。第4号竪穴状遺構を切り、西半は排水溝によって破壊されていた。形態は円形と推定され、残存規模は長径1.16m、短径0.66m、深さ0.14mである。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第87号土壌 (第82・85図)

A I-43グリッドに位置する。第19号住居跡と重複し、本土壌の方が新しいものと判断されたが、新旧関係は微妙である。方形土壌が3基L字状に連結したような形態で、規模は長軸長1.84m、短軸長1.50m、深さ0.24mである。

底面は2段に掘り込まれていた。埋土には浅間B軽石が少量含まれていた。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・埴・蓋・甕が検出された。出土遺物の時期は8世紀末葉～9世紀中頃と推定されるが、火山灰の存在を考慮すると11世紀頃まで降る可能性もある。遺物と埋土の状況を総合すると、時期の異なる3基の土壌が重複して

いたと考えるのが妥当かもしれない。

第88号土壌 (第82図)

A J-44グリッドに位置する。形態は隅丸方形で、規模は長軸長1.36m、短軸長1.22m、深さ0.16mである。主軸方位はN-62°-Eを指す。

底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第89号土壌 (第82・85図)

A I-42グリッドに位置する。円形土壌と半円状土壌が連結した形態で、規模は長軸長1.48m、短軸長1.28m、深さ0.20mである。

底面は2段に掘り込まれていた。埋土には焼土と炭化物粒子が少量含まれていた。出土遺物は土師器甕、須恵器環・甕(第85図55)が少量検出された。時期は不明確ながら8世紀末葉～9世紀中頃に推定される。

第90号土壌 (第82・86図)

A G-42グリッドに位置し、重複する第195号溝跡に切られていた。形態は不定形で、規模は長軸長2.00m、短軸長1.30m、深さ0.10mである。

底面は概ね平坦であるが、一部溝状に窪む個所がある。埋土には焼土・炭化物・灰が目立った。出土遺物は土師器環・甕が検出された(第86図56・57)。時期は不明確であるが、8世紀末葉～9世紀前半頃と推定される。

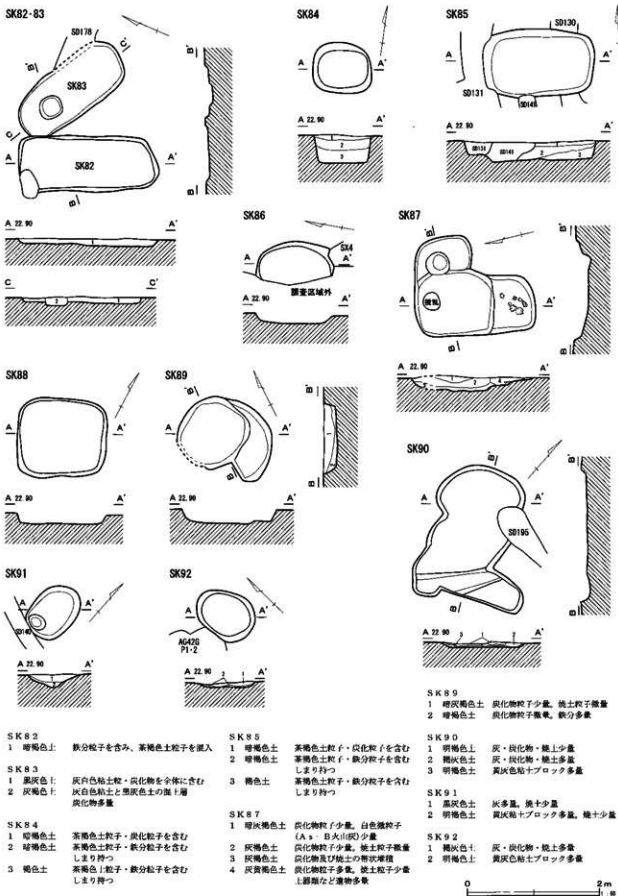
第91号土壌 (第82・86図)

A G-42グリッドに位置し、第140号溝跡と接していた。形態は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.64m、深さ0.20mである。主軸方位はN-0°を指す。

底面は中央に向かって窪んでいる。埋土には少量の焼土と多量の灰が含まれていた。出土遺物は土師器環・甕、須恵器蓋がある(第86図58)。時期は不明確であるが、8世紀末葉～9世紀前半頃と推定される。

第92号土壌 (第82図)

A G-42グリッドに位置し、第194号溝跡を切っ



第82図 土壌 (8)

ていた。形態は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.72m、深さ0.10mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

底面は緩やかな起伏がある。埋土には灰・焼土や炭化物粒子が多量に含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第93号土壌 (第83・86図)

A G-41・42グリッドに位置する。第94号土壌と重複するが、新旧関係は明確に把握できなかった。形態は長方形と推定され、規模は長軸長1.83m、短軸長1.20m、深さ0.12mである。主軸方位はN-1°-Eを指す。

底面は概ね平坦であるが、小ピットが穿たれていた。出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・蓋がある(第86図59・60)。時期は9世紀前半頃と考えられる。

第94号土壌 (第83・86図)

A F・A G-41・42グリッドに位置する。第93号土壌との新旧関係は不明確である。形態は長方形で、規模は長軸長2.52m、短軸長0.84m、深さ0.12mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

底面は緩やかな起伏があり、小ピットが穿たれている。出土遺物は土師器環・甕、須恵器環・甕がある(第86図61)。時期は9世紀前半頃と推定される。

第95号土壌 (第83・86図)

A F-42グリッドに位置する。形態は隅丸方形で、規模は長軸長0.78m、短軸長0.58m、深さ0.12mである。主軸方位はN-8°-Eを指す。

底面は平坦で、浅い小ピットが穿たれていた。出土遺物は土師器環・甕、須恵器環がある(第86図62)。時期は不明確であるが、9世紀前半～中頃と推定される。

第96号土壌 (第83図)

A H-41グリッドに位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.58m、短径0.84m、深さ0.22mである。主軸方位はN-63°-Eを指す。

底面は平坦である。埋土上層には炭化物と焼土粒子が多量に含まれていた。出土遺物はなく、時期は

不明確である。

第97号土壌 (第83図)

A H-42グリッドに位置する。形態は不整形で、規模は直径0.84m、深さ0.20mである。

底面は緩やかな起伏がある。埋土には炭化物粒子と焼土粒子が多量に含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第98号土壌 (第83図)

A H-42グリッドに位置する。形態は不定形で、規模は長軸長1.16m、短軸長1.02m、深さ0.22mである。

底面は緩やかな起伏がある。埋土下層には炭化物粒子が綿状に堆積していた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第99号土壌 (第83・86図)

A H-42グリッドに位置する。第7号ピット列と重複するが、新旧関係は明確にすることができなかった。形態は不整形で、規模は長軸長1.48m、短軸長1.08m、深さ0.16mである。主軸方位はN-3°-Eを指す。

底面は皿状に浅く窪み、埋土には炭化物混じりの灰層が形成されていた。出土遺物は土師器環・甕、須恵器環が検出されている(第86図63-65)。時期は8世紀末葉～9世紀前半頃と考えられる。

第100号土壌 (第83図)

A F-39グリッドに位置する。第5号掘立柱建物跡の北側にあり、第4号土壌と接していた。形態は隅丸長方形で、規模は長軸長1.11m、短軸長0.83m、深さ0.22mである。主軸方位はN-35°-Eを指す。

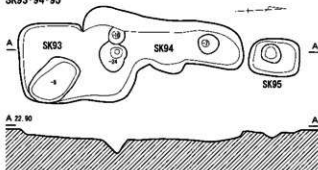
底面は皿状に窪み、埋土には炭化物粒子が少量含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第101号土壌 (第83図)

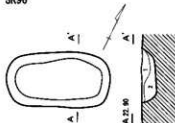
A F-39グリッドに位置する。第4号土壌を切り、第105号土壌に切られていた。形態は円形で、規模は長径1.06m、短径1.03m、深さ0.26mである。

底面は皿状に窪む。出土遺物はなく、時期は不明確である。

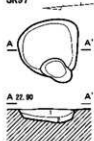
SK93-94-95



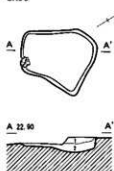
SK96



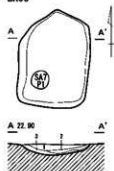
SK97



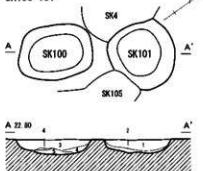
SK98



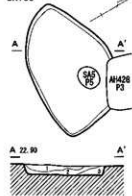
SK99



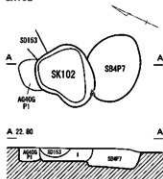
SK100-101



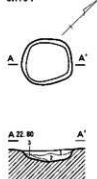
SK103



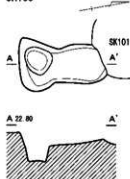
SK102



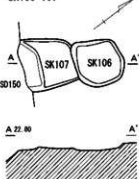
SK104



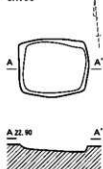
SK105



SK106-107



SK108



- SK 9 6
 1 暗褐色土 炭化物粒子・粘土粒子多量
 明灰色粘土少量
 2 暗灰褐色土 炭化物粒子・明灰色粘土少量

- SK 9 7
 1 暗灰褐色土 炭化物粒子・粘土粒子多量
 炭化土粒子少量
 2 暗灰褐色土 明灰色粘土をブロック状に含む

- SK 9 8
 1 暗灰褐色土 炭化物粒子・粘土粒子少量
 2 暗灰褐色土 炭化物粒子帯状堆積
 明灰色粘土をブロック状に含む

- SK 9 9
 1 灰褐色土 炭化物粒子・粘土粒子少量
 黄褐色土粒子少量
 2 黒褐色土 炭化物土灰の層
 3 暗灰褐色土 炭化物粒子少量、明灰色粘土多量

- SK 1 0 0 - 1 0 1
 1 黒灰色土 地山ブロック・カーボン少量
 2 暗灰色土 地山ブロックやや多量、カーボン少量
 3 暗灰色土 カーボン少量
 4 黒灰色土 地山ブロック・カーボン少量
 5 暗褐色土 地山ブロック・カーボン少量

- SK 1 0 2
 1 灰褐色土 地山ブロックやや多量、カーボン・白色粘土微量

- SK 1 0 3
 1 暗灰褐色土 炭化物粒子多量、粘土粒子少量
 2 暗灰褐色土 炭化物粒子少量、明灰色粘土をブロック状に含む
 3 灰褐色土 炭化物粒子微量、明灰色粘土少量

- SK 1 0 4
 1 灰褐色土 粘土ブロック・カーボン少量
 2 暗褐色土 粘土ブロック少量、カーボンやや多量
 3 黒灰色土 粘土ブロックやや多量、カーボン少量

0 2m
 1:10

第83図 土壌 (9)

第102号土壌 (第83・86図)

A G-40グリッドに位置し、重複する第4号掘立柱建物跡を切り、第153号溝跡に切られていた。形態は不整楕円形で、規模は長径1.02m、短径0.83m、深さ0.22mである。

底面は平坦で、白色粒子と炭化物粒子が微量含まれていた。出土遺物は土師器環(第86図66)と土師器甕がある。時期は不明確であるが、第4号掘立柱建物跡との関係から9世紀前半またはそれ以降となる。

第103号土壌 (第83図)

A H-42グリッドに位置し、A H-42グリッド Pit 3に切られていた。また、第5号ビット列と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。形態は不整三角形で、規模は長軸長2.04m、短軸長1.18m、深さ0.14mである。

底面は平坦で、埋土には炭化物粒子の混入が目立った。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第104号土壌 (第83図)

A F-39グリッドに位置し、第5号掘立柱建物跡の内部にある。形態は不整方形で、規模は長径1.05m、短径0.89m、深さ0.10mである。

底面は皿状に窪み、埋土には炭化物と粘土ブロックが含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

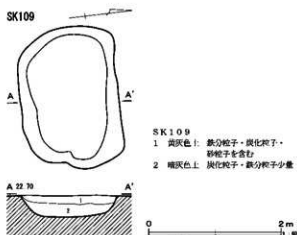
第105号土壌 (第83図)

A F-39グリッドに位置し、重複する第101号土壌を切っていた。形態は不整楕円形で、規模は長径1.29m、短径0.82m、深さ0.16mである。

底面は概ね平坦で、南端部はビットが切り込んでいた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第106号土壌 (第83図)

A G-39グリッドに位置し、第107号土壌が連結するが新旧関係は不明確であった。形態は不整円形で、規模は長径0.78m、短径0.70m、深さ0.07mで



第84図 土壌 (10)

ある。底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第107号土壌 (第83図)

A G-39グリッドに位置し、第106号土壌の南側に重複する。新旧関係は明らかにできなかった。南側は第150号土壌に切られていた。形態は不明確であるが不整楕円形であろうか。規模は長軸長0.83m、短軸長0.80m、深さ0.08mである。

底面は2段に掘り込まれていた。出土遺物はなく、時期は不明確である。

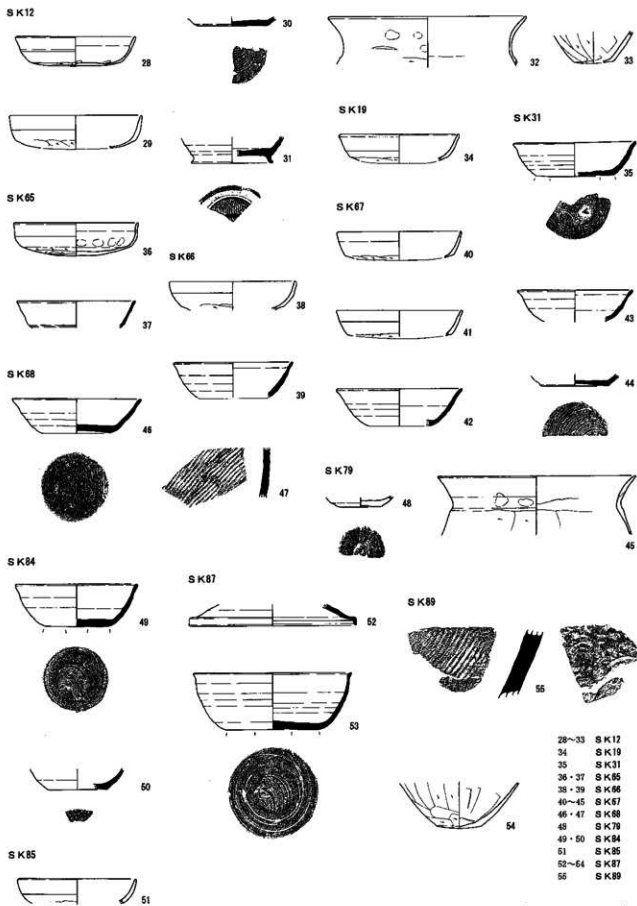
第108号土壌 (第83図)

A F-38グリッドに位置する。形態は方形で、規模は長軸長0.79m、短軸長0.70m、深さ0.16mである。主軸方位はN-88°-Wを指す。底面は平坦である。出土遺物はなく、時期は不明確である。

第109号土壌 (第84・86図)

A I-43グリッドに位置する。形態は不整楕円形で、規模は長軸長2.18m、短軸長1.52m、深さ0.32mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

底面は皿状に窪む。出土遺物は須恵器環と土師器甕が検出された。須恵器環は底部を欠くが南比企産である(第86図67)。時期は不明確であるが9世紀前半～中頃に位置付けられようか。



28~33 SK 12
 34 SK 19
 35 SK 31
 36・37 SK 65
 38・39 SK 66
 40~45 SK 67
 46・47 SK 68
 48 SK 79
 49・50 SK 84
 51 SK 85
 52~54 SK 87
 55 SK 89

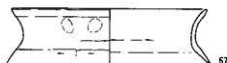
0 10cm

第85図 土壙出土遺物 (2)

SK90



56



57

SK91



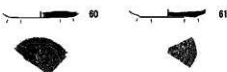
58

SK93



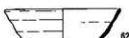
59

SK94



61

SK95

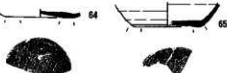


62

SK99

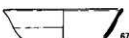


63



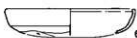
64

SK100



67

SK102



66

56・57 SK90 59・60 SK93 62 SK95 66 SK102
58 SK91 61 SK94 63~65 SK99 67 SK100

0 10cm

第86図 土壇出土遺物 (3)

第21表 土壇出土遺物観察表 (第75・85・86図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵環	(12.2)	2.9		E F	Ⅱ	暗褐色	8	SK1 A区水田 南北企産
2	須恵環	(11.8)	3.4	(6.4)	E F	Ⅱ	灰色	35	SK1 南北企産 底部B3a手法 不明墨書
3	須恵環		2.1	(6.5)	I J	I	灰色	30	SK1 末野産 底部B0手法
4	土師環	12.4	3.1	10.6	D H K	Ⅱ	褐色	95	SK1 No2・4・7
5	土師環	12.4	3.1	9.4	D E H	Ⅱ	褐色	85	SK1 No1・3・5・6
6	土師小壺台付甕	(10.0)	3.9		D H	Ⅱ	暗褐色	20	SK1 外面二次被熱 器面剥落
7	土師甕	(20.0)	6.1		D E H	Ⅱ	明褐色	15	SK1
8	土師甕	(20.0)	5.6		D E H	Ⅱ	褐色	20	SK1
9	土師甕		4.7	(5.0)	D E H	Ⅱ	明褐色	35	SK1
10	須恵環	(13.2)	1.5		F	Ⅱ	灰白色	5	SK2 南北企産
11	須恵環		0.7	(6.0)	C F	Ⅱ	灰色	5	SK2 南北企産 内面に火瘃
12	須恵甕				C	I	暗赤褐色		SK2 群馬産か?
13	須恵環	(12.2)	3.7	7.0	C I	Ⅱ	灰色	50	SK5 末野産 底部B3d手法 底部に墨書「文」
14	須恵環	(13.0)	3.2		A I	Ⅲ	灰白色	5	SK7 末野産 風化して軟質
15	須恵皿		0.5	(6.4)	C F	Ⅱ	灰白色	20	SK7 南北企産 底部B0手法 不明墨痕あり
16	須恵環		1.0	(6.4)	F	Ⅱ	灰色	15	SK7 南北企産 底部B0手法 内外面とも火瘃
17	土師甕	(20.0)	3.5		B D E	Ⅱ	橙褐色	10	SK8 器面風化
18	須恵長頸瓶	(9.4)	0.9		E F	I	灰色	5	SK9 狼産?
19	須恵甗	(15.0)	4.0		E F	Ⅱ	濃灰色	5	SK9 南北企産
20	土師環		12.7	3.6	D E H	Ⅱ	褐色	90	SK11
21	土師環		12.0	3.3	D E H	Ⅱ	淡褐色	50	SK11 口縁部強いヨコナデ
22	土師環	(12.1)	2.6	(9.8)	D E H	Ⅱ	褐色	15	SK11 内面風化
23	須恵環		1.0	6.5	F H	I	紫灰色	80	SK11 南北企産 底部B0手法
24	須恵環		1.8	(5.9)	E F	Ⅱ	灰色	20	SK11 南北企産 底部B3a手法
25	須恵高台埴		3.4	9.0	I J	Ⅱ	明灰色	80	SK11 末野産 底部回転糸切り
26	須恵甕		3.6		H	I	明灰色		SK11 産地不明 口縁小片 内外面自然釉
27	須恵甕				B E J	Ⅱ	褐色		SK11 未野または群馬産(藤岡か)
28	土師環	(12.0)	3.1		D H	Ⅱ	褐色	20	SK12
29	土師環	(13.4)	3.4		D H K	Ⅱ	明褐色	10	SK12
30	須恵環		0.9	(7.0)	E F	I	赤褐色	25	SK12 南北企産 底部B0手法

第22表 土壌出土遺物観察表 (第75・85・86図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
31	須恵高白陶		2.7	(8.0)	I J	II	明灰色	25	S K 12 未野産 底部回転糸切り 墨書あるが字形不明
32	土師甕	(20.0)	5.2		DEH	II	明褐色	10	S K 12
33	土師甕		3.2	(4.0)	DEH	II	明褐色	30	S K 12
34	土師環	(12.0)	2.8		H	I	褐色	25	S K 19
35	須恵環	(12.4)	3.5	(8.0)	E F	II	淡青灰色	30	S K 31 南比企産 底部B3b手法
36	土師環	(12.5)	3.4		DH	II	褐色	35	S K 65 No1
37	須恵環	(12.0)	2.8		FH	II	青灰色	10	S K 65 No6 南比企産
38	土師環	(12.7)	3.0		BDE	II	褐色	15	S K 66
39	須恵環	(12.0)	3.7		E F	II	淡青灰色	15	S K 66 南比企産
40	土師環	(12.6)	2.7	(11.2)	DK	I	橙褐色	15	S K 67 No3 髷っぽい胎土
41	土師環	(12.7)	2.6	(10.5)	DEH	II	明褐色	10	S K 67
42	須恵環	(12.6)	3.9	(6.2)	E F	II	灰色	40	S K 67 南比企産 底部B0手法
43	須恵環	(11.6)	3.2		F	II	淡青灰色	35	S K 67 南比企産
44	須恵環		1.2	6.8	E F J	II	灰色	55	S K 67 南比企産 底部B0手法
45	土師甕	(20.0)	6.0		D F H	II	褐色	15	S K 67 風化著しい
46	須恵環	13.0	3.6	6.9	I J	III	褐灰色	70	S K 68 No1 未野産 底部B0手法
47	須恵甕				EH	I	明灰色		S K 68 No2・3 東海産か?
48	ロクロ土師環		1.0	4.3	BDE	I	淡褐色	50	S K 79 C区 器面は風化が進み調整は不明
49	須恵環	(12.3)	4.4	6.6	C F	II	灰色	45	S K 84 南比企産 底部B3b手法 底部に「X」のへり記号
50	須恵環		2.1	(6.0)	C I	III	淡褐色	8	S K 84 未野産 底部B0手法 器面は風化が進んでいる
51	土師環	(12.0)	2.5		DK	III	褐色	8	S K 85 内面は風化している
52	須恵蓋	(17.0)	2.2		C F	II	暗灰色	10	S K 87 No2 南比企産
53	須恵塊	(15.9)	5.9	9.3	C E F	II	灰色	40	S K 87 南比企産 底部B3b手法
54	土師甕		4.7	4.6	DH	II	褐色	40	S K 87 No5
55	須恵甕				C	III	褐色		S K 88 群馬産か? 内面やや風化進む
56	土師環	12.8	(3.1)		D	I	褐色	30	S K 90
57	土師甕	(19.8)	5.6		DE	I	橙褐色	8	S K 90
58	須恵蓋		2.0		E F	I	黒灰色	10	S K 91 南比企産
59	土師環	(13.2)	3.0		CDE	I	淡褐色	30	S K 93 やや風化
60	須恵環		0.5	(6.4)	E F	II	明灰色	25	S K 93 南比企産 底部B3b手法 底部に墨書
61	須恵環		0.8	(6.0)	E F	I	暗灰色	15	S K 94 南比企産 底部B3b手法
62	須恵環	(11.6)	3.3		E F	II	暗灰色	30	S K 95 南比企産 口唇部内面磨耗している
63	土師環	(12.8)	2.8		DEH	II	褐色	35	S K 99
64	須恵環		0.7	(7.0)	C F	I	暗灰色	50	S K 99 南比企産 底部B3b手法
65	須恵環		2.5	(6.6)	C F	I	灰色	15	S K 99 南比企産 底部B3d手法 胎土は緻密
66	土師環	(13.0)	(3.0)		DE	I	橙褐色	20	S K 102 内面は風化 鉄分付着?
67	須恵環	(12.0)	3.1		E F	I	明灰色	8	S K 109 南比企産

6. 池状遺構

第1号池状遺構 (第87・88図)

A F-39・40グリッド、第5号掘立柱建物跡の北側に隣接する。重複する第199・200号溝跡を切り、第146・147号溝跡に切られていた。形態は不整楕円形で、規模は長径7.40m、短径5.10m、深さ0.30m

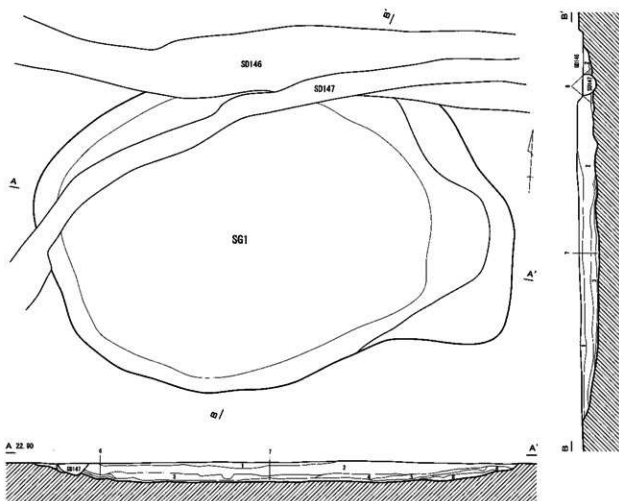
である。

底面は中心部に向かって皿状に窪む。埋土は緻密な粘質土で構成され、薄い炭化物や有機質土層が楕円状に堆積していた。

性格は不明確であるが、常時滞水していたような

第23表 第1号池状遺構出土遺物観察表 (第88図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵環	(12.2)	3.0		E F	I	暗灰色	15	南比企産 口唇部内面が摩滅している
2	土師環	(12.0)	3.0		DE	II	橙褐色	30	
3	ロクロ土師甕		1.1		A	III	褐色	50	著しく風化している
4	ロクロ土師甕	(14.2)	4.4		E	II	淡褐色	30	風化著しい 高台欠失
5	土師甕	(21.4)	6.3		ABD	II	淡褐色	8	口縁部内外面に黒色物付着
6	土師環か?	(12.4)	3.1		ADE	I	褐色	5	風化著しい 体部にケズリなし

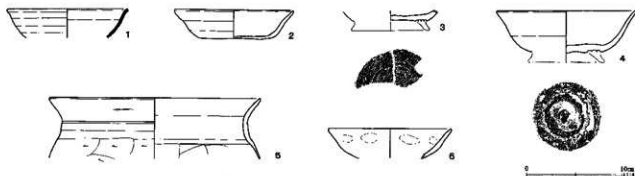


SG1

- | | | | |
|---------|--------------------|---------|-----------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 炭化物粒子微量 | 6 黒色土 | 炭化物が多く埋け込んだ土の層。5層に準ずるが、より深い |
| 2 明黒色土 | 炭化物粒子微量。粘性あり。しまる | 7 明青灰色土 | 粘土質。上面、下面を挟む層に炭化物が薄く堆積している |
| 3 明黒色土 | 炭化物粒子微量。粘性あり。しまる | 8 灰白色土 | 粘土質 |
| 4 明黒色土 | 炭化物微量。ブロック状の灰白色土多量 | | |
| 5 明黒色土 | 炭化物が多く埋け込んだ土の層 | | |



第87図 第1号池状遺構



第88図 第1号池状遺構出土遺物

環境下で形成された土壌と推定されたため、池状遺構として捉えることとした。但し、自然の凹地なのか、人為的な掘込みなのかは確証に欠ける。

出土遺物は土師器環・甕、須恵器環、ロクロ土師

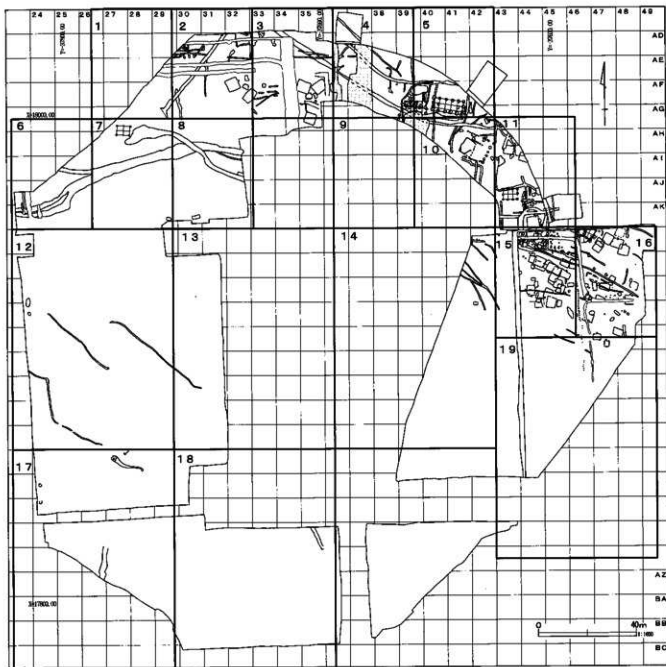
器高台碗がある(第88図)。ロクロ土師器高台碗は摩滅しており、内面の黒色処理とミガキの有無は不明である。時期は9世紀後半～10世紀後半頃と推定しておきたい。

7. 溝跡

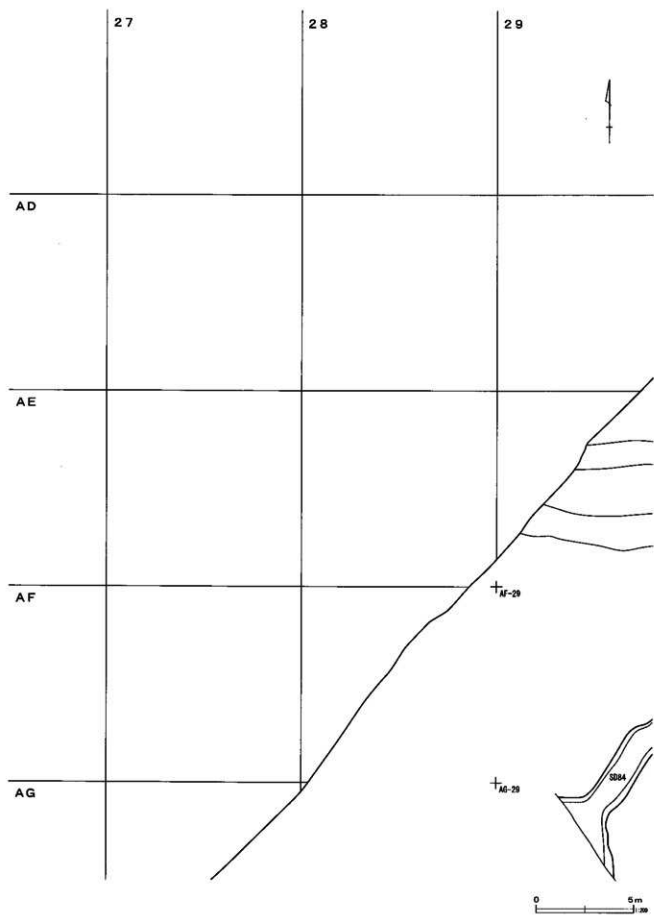
すでに「Ⅲ 遺跡の概要」で述べたように、北島遺跡の多くの調査区では、遺構確認面が複数に及ぶ。第17地点も同様で、一つの鍵層として浅間B軽石の堆積層が挙げられる。この上層は、2次的に堆積したものであるが、この土層を追いながら検出した面(本書では便宜上、第一面と呼称する)と、さらに

この土層よりも下層で検出される浅間B軽石降灰前後の遺構確認面(二面=7層上面)が、本書で報告する遺構と遺物である。

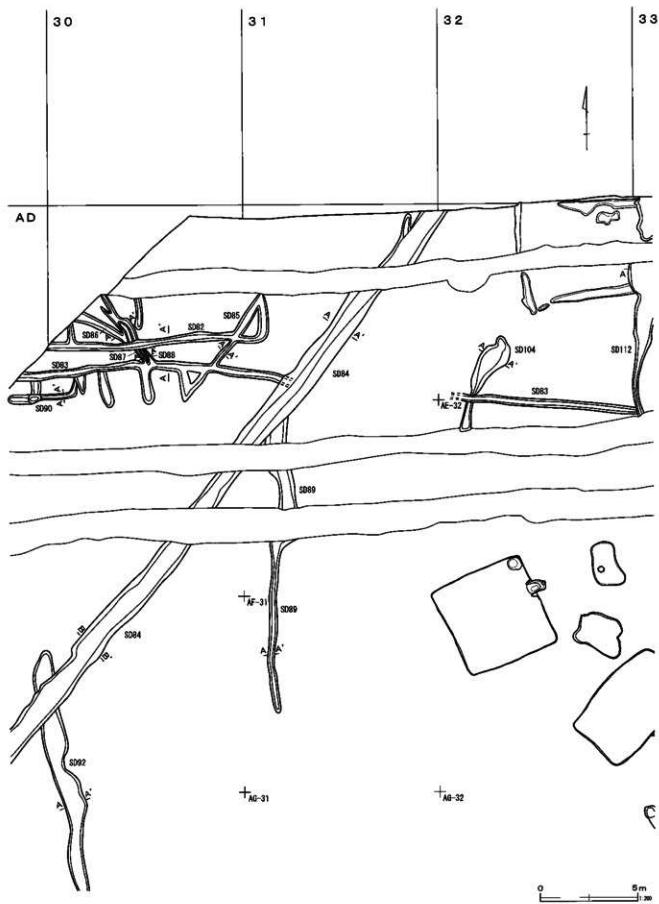
さらに下層の面については、弥生時代は当事業団報告書第291集「北島遺跡Ⅶ」(2004)、古墳時代前期は同報告書第303集「北島遺跡Ⅷ」(2005)を参照願いたい。



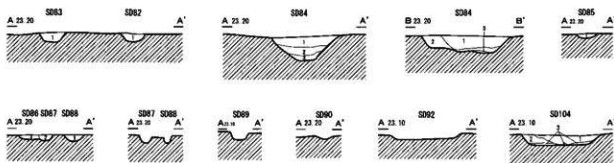
第89図 溝跡その1 第17地点溝跡区割図(1)



第90図 溝跡 (1)



第91図 溝跡 (2)



SD82・83

- 1 灰色シルト質土 鉄斑多量、マンガン結核少量
下層に地山ブロック・土器片少量

SD84

- 1 灰褐色土細砂質シルト 鉄斑多量、炭化物少量
七瀬片少量、水田耕作上
- 2 暗灰色シルト質中細砂 鉄斑少量、土器片少量
- 3 暗灰色土細砂質シルト 鉄斑少量、炭化物少量

SD85

- 1 暗灰色シルト質中細砂 鉄斑少量、土器片少量

SD86・87・88

- 1 灰色シルト質土 鉄斑・マンガン結核多量、下層に準山ブロック、耕作痕
- 2 灰色シルト質土 鉄斑多量、マンガン結核少量、耕作痕
- 3 灰色シルト質土 鉄斑・マンガン結核少量、耕作痕

SD104

- 1 暗褐色土 ややかたく、しまりよい、鉄斑・マンガン結核やや多量
上層に火山灰状の白色粒子少量、焼土・炭化物少量
- 2 暗灰褐色土 しまりよい、マンガン結核少量、炭化物少量
- 3 灰褐色土 やや黄色味がかった色調、しまりよい
黄褐色土やや多量、鉄斑・マンガン結核やや多量



第92図 溝跡 (2)

報告の手順として、時期の古いものから順次報告するという原則に則り、第二面目から記述を始め、次いで第一面目を扱うこととする。

但し、第17地点では、第二面目と第一面目の層的な隔たりが小さい上に、当時の微地形が微妙に反映をしており、調査時において、その別を認識することは容易ではなかった。つまり、遺構確認面を検出する場合、重機によって表土から徐々に水平に掘り下げる作業を繰り返すことになる。

その際に鍵層が存在すれば、これが地形を追求一つの手掛かりともなるが、存在していない場合や、存在しても顕著ではない場合は、水平な掘り下げを繰り返すことによって、微地形をある程度失うことは避けられない。そのために、第一面目を検出している過程で、第二面目に達してしまうことは、残念ではあるが起り得る。

今回の調査でも、北島遺跡の他地点と同じく細心の注意を払ったが、上記の結果が生じた部分もある。第一面と第二面とは、認識できた範囲で別々に掲載するが、厳密なものではないといわざるを得ない。

では、なぜ別々に掲載するのか。時間的な厳密性

は乏しくとも、調査過程において各々、別の調査面で検出されており、調査をされている遺構である。

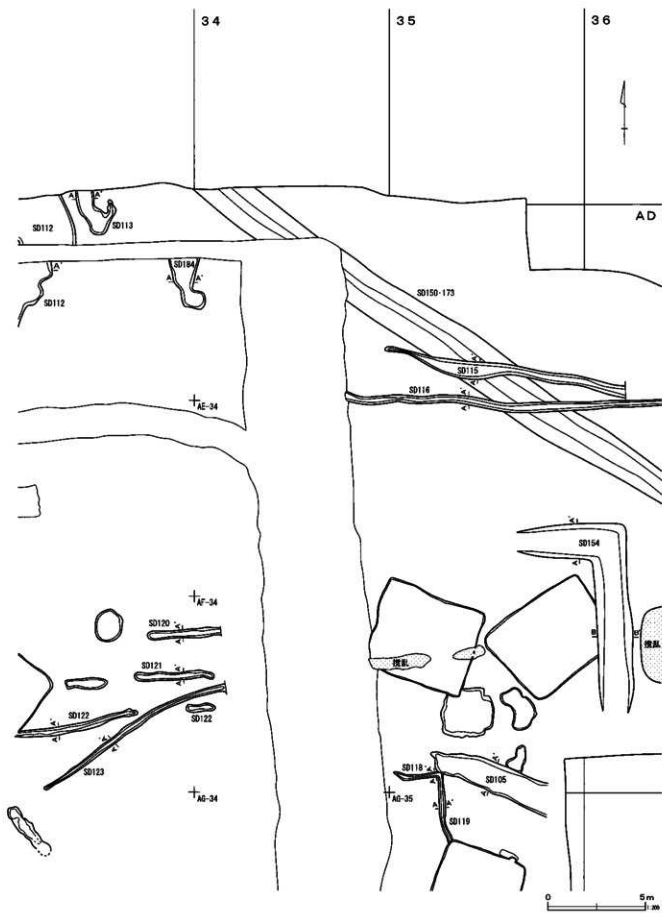
言い換えるならば、別々の平面図上に調査情報を取り込まれているものである。これを調査面として表現しようとする、二面と一面の標高差等によって、遺構図の表現に大きな不具合が生ずる箇所が多発する。

できる限り、遺構を面ごと振り分けるべく努めたが果たせなかったものについては、調査時の帰属に従って掲載をした。また、全体的に遺構の遺存度が低いため、これらの溝跡が途切れている事例も多い。

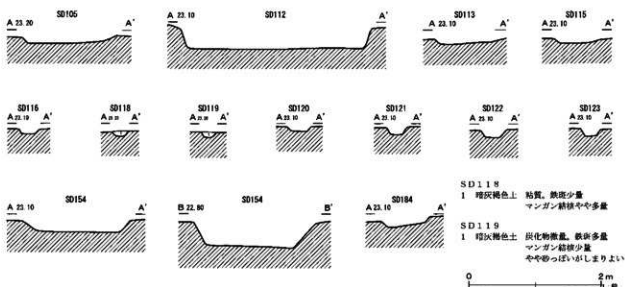
その結果、同一の溝跡に別個の遺構番号を付したり、逆に別個の遺構に同じ遺構名を付してしまっている可能性もある。

ここで報告する溝跡は、既に述べたように、占代～中近世、そして近代のものである。これらの溝跡の多くは、東西または南北に直線的に走っており、それらの溝跡は、数条ごとにある程度まとまった状況で並行している状況がみて取れる。

これらのまとまりを、「一町」単位で試みに図上に線引きしてみると、第17地点およびこれに隣接す



第93図 溝跡 (3)



第94図 溝跡 (3)

る範囲内に、12箇所の一町四方の区画を観えてくる。それらの溝跡は一町方格の土地区画、言い換えるならば、「条里型地割」を成すための、古代の溝跡や、その区画を踏襲した中世～近世さらには近現代にまで続いた遺構であると推定される。そして、位置や方位を踏襲して掘り返されたために、何条かの溝跡が並行したものと考えられるのである。

今回の調査で検出された条里型地割が、この条里内におけるどの里の、どの坪であるのかについては、到底ここでは論じることはできない。

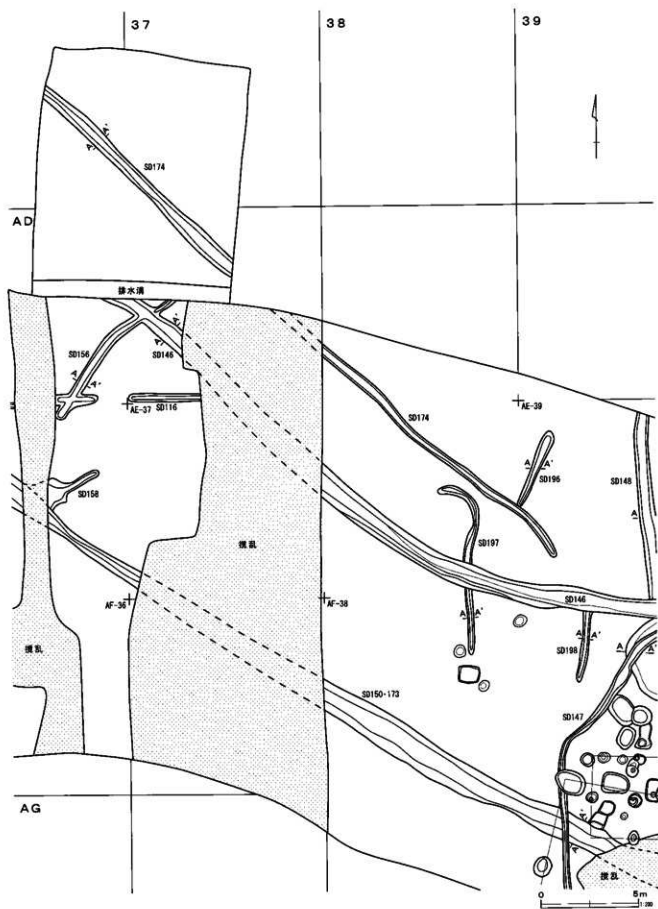
そのため便宜上の手立てとして、第17・18地点の範囲内、およびこれと隣接する部分について、溝によって区画された一町四方の坪型区画に、第1～12号坪型区画跡といった仮称番号を振ることとした(第5図)。

これらの条里関連と思われる溝跡以外にも、古代の溝跡が検出されている。そういった溝跡は、条里関連溝と基本的に同じ調査面で検出されており、時期的にも重なるものもあるが、基本的にはこれを遡るものが多いといえる。

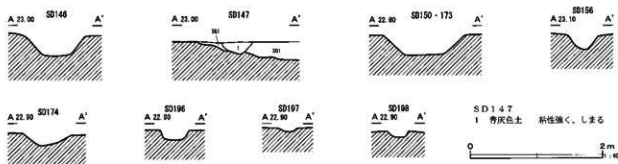
そこで、条里関連溝と、それ以外の溝跡とを互いに際立たせる意味も込めて、後者を第三面として掲げることとした。

説明が長くなったが、溝跡の掲載方法を簡条書きにしておきたい。

- 1: 古代の面の溝跡のうち、条里関連の遺構ではないと思われる遺構を、第二面として掲載する。
- 2: 古代の面の溝跡のうち、条里関連と考えられる遺構を第二面として掲載する。その場合、中世にまで続くものも含まれる。
- 3: 古代の面の溝跡のうち、浅間B軽石降灰前後から中近世、さらに近代にまで続く遺構を、第一面として掲載する。
記述したように、第二面・第一面の分離については、慎重は期したが厳密なものではない。
- 4: 第三面・二面・第一面の順序で、遺構図を掲載する。
- 5: 全溝跡の全遺物図版は、第一面の遺構図版の次に、遺構番号順に掲載する。そのため、面ごとの順序と一致していない。
- 6: 事実記載は、遺構図版の途中から、遺構番号順に掲載する。そのため、面ごとの順序と一致していない。つまり、各溝跡に関する図版と文章が、比較的大きく離れる結果となる。
- 7: 溝跡の掲載の次に、水田跡を掲載し、これについても第二面・第一面の順とする。



第95図 溝跡 (4)



第96図 溝跡 (4)

8 : 溝跡の写真図版についても、遺構番号順に掲載する。

非常に煩雑な掲載方法となるが、遺跡・調査地点・遺構の性格上、何卒ご容赦願いたい。

では、第17地点の、古代およびそれ以降の溝跡についての報告を開始する。

第1号溝跡 (第155・160・161図)

A L-43-46、A M-A R-46、A N・A O-46～48グリッドにかけて位置する。第10・11・14・16号溝跡を切っている。西から東へN-88°-Wの方位で走り、ほぼ直角に曲がってN-8°-Wの方位で南下している。

A Q-46グリッド内で部分的(2.8m)に途切れているが、一連の溝跡と判断した。また、これとは別に、A Oグリッドライン付近で分岐した溝跡が、N-90°-Eの方位で東西に走っている。遺構としては別個である可能性もあるが、発掘調査時の所見から同一番号として扱った。溝跡の西側は調査区外に続き、南側・東側は途切れている。

検出し得た溝の長さは東西部分で24.4m、南北部分は途切れている部分も含めて59.4m、分岐する東西部分で19.6mを測る。

上幅0.4～2.4m、下幅0.3～2.0m、深さは15～30cmを測る。平面形は各々直線状で、断面形は比較的平坦で、壁面が緩やかに立ち上がる逆台形もしくは皿状を呈する。近世以降の遺構であるが、地割溝であろうか。

図化し得た遺物が2点あるが、流れ込みと思われ

る。

第2号溝跡 (第113～115・161図)

A L-44・45、A M-45・46グリッドにかけて位置する。西側は途切れ、東側は第1号溝跡に切られ、その先には現れていない。第3号溝跡を切っていると思われる。

検出し得た溝跡の長さは18.6m、上幅0.3～1.2m、下幅0.2～1.0m、深さは15cm前後である。溝跡はN-74°-Wの方位で、西北西から南南東方向に走る。溝跡の平面形は概ね直線状、断面形は碗状を呈す。

図化し得た遺物は3点であった。

第3号溝跡 (第113・114・161図)

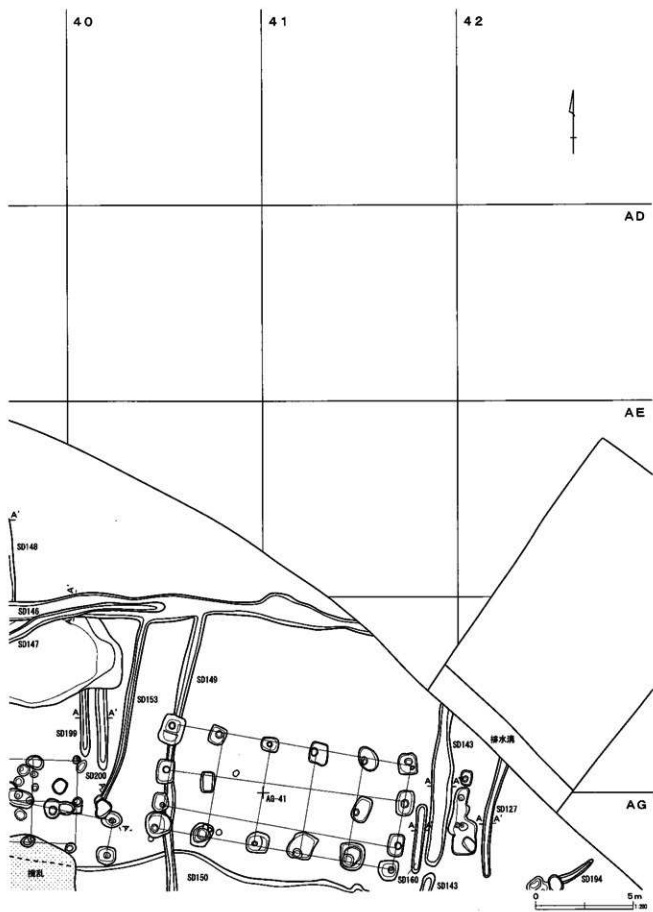
A L-44・45グリッドに位置する。西側は他遺構との重複によって、遺構のプランが失われている。北側は、調査区外に続く。A L-45グリッド内で、ほぼ直角に屈曲する。

検出し得た溝跡の長さは南北方向6.6m、東西方向2.2m、上幅0.3～0.9m、下幅0.2～0.6m、深さは12～24cmである。溝跡はN-5°-EとN-85°-Wの方位を指す。溝跡の流れとしては、南→北→西と推定される。溝跡の平面形は、南東部にコーナーを有するL字状、断面形は碗状を呈す。

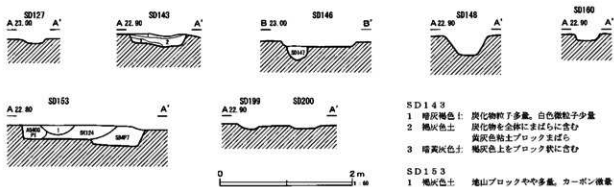
図化し得た遺物8点であった。

第4号溝跡 (第113～115図)

A L-44・45、A M-44-47、A N-47・48グリッドにかけて位置する。第4号住居跡・第5号溝跡を切っている。



第97図 溝跡 (5)



第98図 溝跡 (5)

西側は攪乱によって、遺構のプランが失われており、東側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは50.0m、上幅0.8~1.0m、下幅0.2~0.7m、深さは10~20cmである。溝跡はN-75°-Wの方角で、西北西から東南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、西北西→東南東と推定される。溝跡の平面形はほぼ直線状、断面形は底部が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。

土師器・須恵器の小破片が少数出土したが、図化には至らなかった。

第5号溝跡 (第113・114・161図)

A L-43・44グリッドに位置する。第4号溝跡に切られている。

東側は第4号溝跡によって、遺構のプランが失われており、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは13.6m、上幅0.8~1.7m、下幅0.5~1.4m、深さは6~12cmである。溝跡はN-80°-Wの方角で、西北西から東南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、西北西→東南東と推定される。溝跡の平面形はほぼ直線状、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈す。

図化し得た遺物は1点であった。

第6号溝跡 (第113・114・161図)

A L-43・44グリッドに位置する。第5号溝跡と重複している。

北側は第1号溝跡、南側は第5号溝跡によって、

遺構のプランが失われている。

検出し得た溝跡の長さは2.8m、上幅0.4~0.5m、下幅0.2~0.3m、深さは9cmである。溝跡はN-37°-Eの方角で、北東から南西方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、北東→南西と推定される。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。

図化し得た遺物は1点であった。

第7号溝跡 (第113・114図)

A L-44グリッドに位置する。第9号溝跡を切っていると思われる。

南側は途切れ、北側は第1号溝跡によって、遺構のプランが失われている。

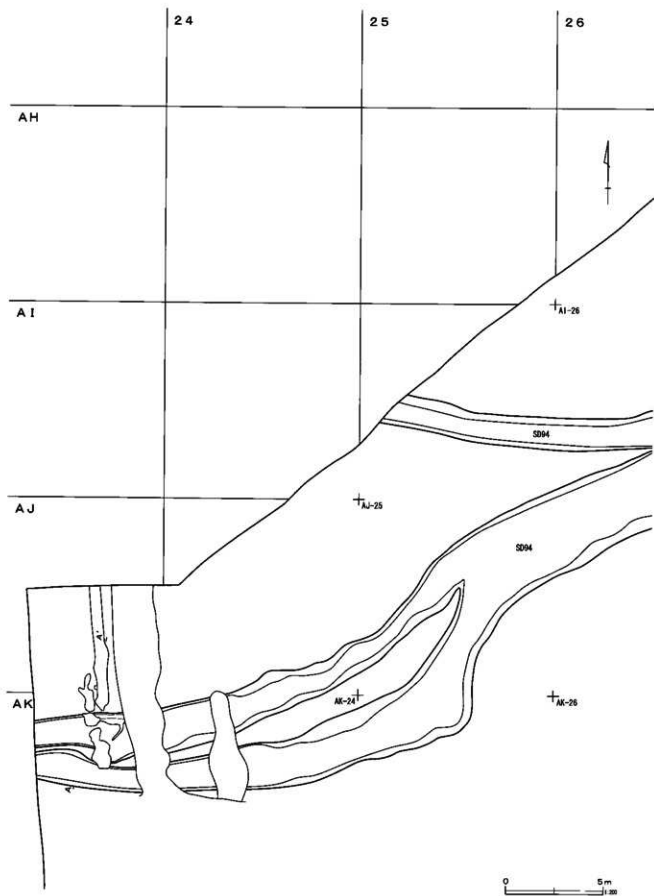
検出し得た溝跡の長さは2.4m、上幅0.2~0.3m、下幅0.1~0.2m、深さは9cmである。溝跡はN-17°-Eの方角で、北北東から南南西方向に走る。北東から南中央付近は少し低くなっている。溝跡の平面形は直線状、断面形は碗状もしくは皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

第8号溝跡 (第113・114・161図)

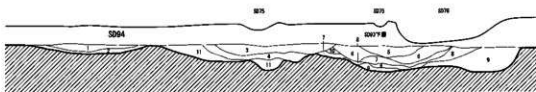
A L-44グリッドに位置する。第9号溝跡を切っていると思われる。

北側は第1号溝跡、南側は攪乱によって、遺構のプランが失われている。

検出し得た溝跡の長さは1.6m、上幅0.4~0.7m、下幅0.2~0.5m、深さは15cmである。溝跡はN-



第99图 遗迹(6)



SD94

- | | |
|-----------------|---------------------------------------|
| 1 黄褐色中細砂層 | 鉄屑多量、炭化物少量、木材・腐木痕少量 |
| 2 黄褐色～灰褐色粘土質シルト | 鉄屑多量、マンガン筋粒多量、炭化物少量 |
| 3 灰褐色粘土質シルト | 2層に非常に近い、やや均一化されている。中細砂ブロック多量 |
| 4 黒灰色粘土質シルト | 黒色シルト、灰色シルト質粘土ブロックの混入、木材・土器少量、炭化物少量 |
| 5 黄褐色～灰色中細砂層 | 鉄屑多量、シルトブロック多量、A _u -Cパミス少量 |
| 6 灰褐色粘土 | 鉄屑多量、シルトブロック多量、A _u -Cパミス少量 |
| 7 中細砂～粘土 | 黄灰色、黄褐色、鉄屑多量 |
| 8 黄褐色～黒灰色粘土質シルト | 炭化物ブロック、黄褐色粘土小ブロックが黒灰色粘土質シルトに多く混入 |
| 9 黒灰色粘土質シルト | 炭化物やや多量 |
| 10 黄褐色粘土質シルト | 炭化物少量、細砂多量 |
| 11 灰褐色粘土質シルト | 炭化物少量、鉄屑少量 |

0 2m

第100図 溝跡(6)

32°-Eの方位で、北東から南西方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、北東→南西と推定される。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

図化し得た遺物は1点であった。

第9号溝跡(第113・114図)

A L-43・44グリッドに位置する。第6～8号溝跡に切られていると思われる。

東側は攪乱によって遺構のプランが失われており、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは2.7m、上幅0.2～0.3m、下幅0.1～0.2m、深さは6cmである。溝跡はN-70°-Wの方位で、西北西から東南東方向に走る。標高はほぼ等しい。溝跡の平面形は直線状、断面形は碗状もしくは皿状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第10号溝跡(第145・148・155・160図)

A・F区にまたがって、A J～A L-46グリッドに位置する。第1号溝跡に切られている。

第10・11・14・16号溝跡は、並行してほぼ南北に走る。第10号溝跡の南側は、第1号溝跡に切られて失われている。北側については、4m程離れたF区でも確認されているが、さらに北側に続いていく。

途中が途切れるものの、F区部分も含めて検出し得た溝の長さは21.2m、上幅0.4～0.5m、下幅0.2～0.4m、深さは20cm前後である。また、溝跡はN-4°-Wの向きで、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が窪み、壁面の立ち上がりが急な、逆台形もしくはU字形を呈する。並行する第11・14・16号溝跡は、たびたび行われたであろう溝の掘り返しの結果であろうか。

奈良～平安時代の、第5・6号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は、出土しなかった。

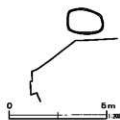
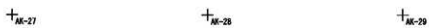
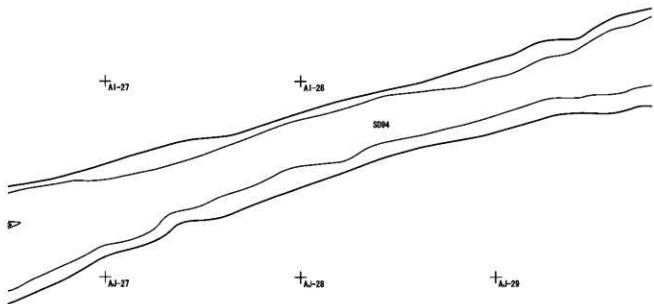
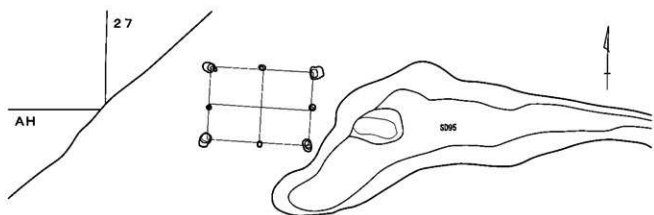
第11号溝跡(第145・148・155・160図)

A・F区にまたがって、A J～A M-45・46グリッドに位置する。第16号溝跡を切り、第1号溝跡に切られている。本遺構は、第16号溝跡を掘り直したものと考えられる。また、土層の層序から第192号溝跡よりも新しいと判断される。

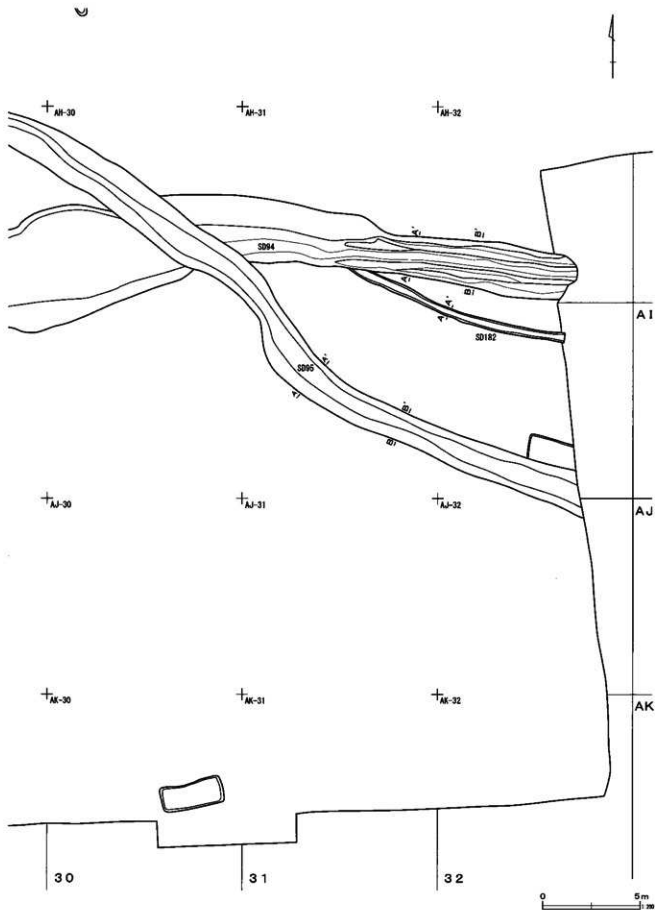
第10・11・14・16号溝跡は、並行してほぼ南北に走る。

第11号溝跡の南側は途切れ、北側については、4m程離れたF区でも確認されているが、さらに北方向に続いていく。

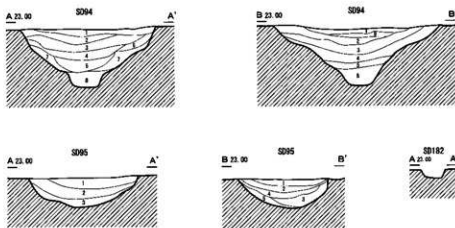
途中が途切れるものの、F区部分も含めて検出し



第101図 溝跡 (7)



第102図 溝跡 (8)



SD94

- 1 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック少量、炭化物をまばらに含む
- 2 黄灰色土 黄灰色土ブロックにより構成される。シルト質
硬成それほどでない。F.A.か?
- 3 暗褐色土 炭化物をまばらに含む
- 4 暗褐色土 灰白色粘土をまばらに含む、炭化物少量
- 5 暗褐色土 灰白色粘土をまばらに含む、炭化物少量
- 6 暗褐色土 灰白色粘土をまばらに含む、炭化物少量
- 7 暗褐色土 灰白色粘土をまばらに含む、炭化物少量
- 8 暗褐色土 灰白色粘土をまばらに含む、炭化物少量
- 9 暗褐色土 灰白色粘土をまばらに含む、炭化物少量

SD95

- 1 暗褐色土 炭化物・黄灰色粘土粒子をまばらに含む
- 2 黄灰色土 炭化物を層状に全体に含む。黄灰色粘土ブロックをまばらに含む
シルト質
- 3 暗褐色土 炭化物をまばらに全体に含む。灰白色粘土ブロックを全体に含む
- 4 暗褐色土 炭化物と黄灰色土を層状に含む。シルト質
- 5 暗褐色土 灰白色粘土ブロック少量、粘土



第103図 溝跡 (B)

得た溝の長さは23.8mで、上幅1.5~1.7m、下幅0.9~1.5m、深さは15cm前後である。また、溝跡はN-4°-Wの向きで、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が平坦で、壁面が緩やかに立ち上がる逆台形または皿状を呈する。並行する第10・14・16号溝跡は、たびたび行われたであろう溝の掘り返しの結果であろうか。平安時代の、第5・6号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

土師器・須恵器の小破片がごく少数出土したが、凶化に至るものはなかった。

第12号溝跡 (第115・116図)

A L-48・49グリッドに位置する。他遺構との重複はみられない。

東側は途切れ、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは10.0m、上幅0.4~0.6m、下幅0.1~0.3m、深さは15~20cmである。溝跡はN-66°-Wの方位で、西北西から東南東方向に走る。同様に溝の流れは、西北西→東南東と推定され

る。溝跡の平面形は緩やかに湾曲する直線状、断面形は皿状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第13号溝跡 (第115・116図)

A L-48グリッドに位置する。他遺構との重複はみられない。

南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

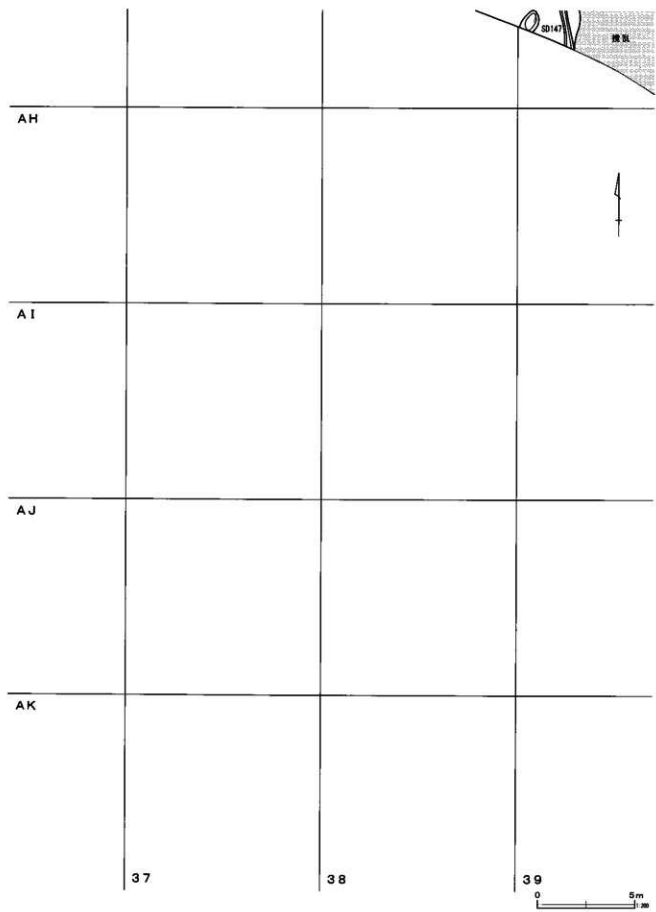
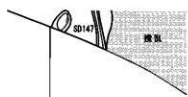
検出し得た溝跡の長さは4.3m、上幅0.5~0.9m、下幅0.1~0.4m、深さは25~30cmである。溝跡はN-3°-Eの方位で、南北方向に走る。同様に溝の流れは、南→北と推定される。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

遺物は出土しなかった。

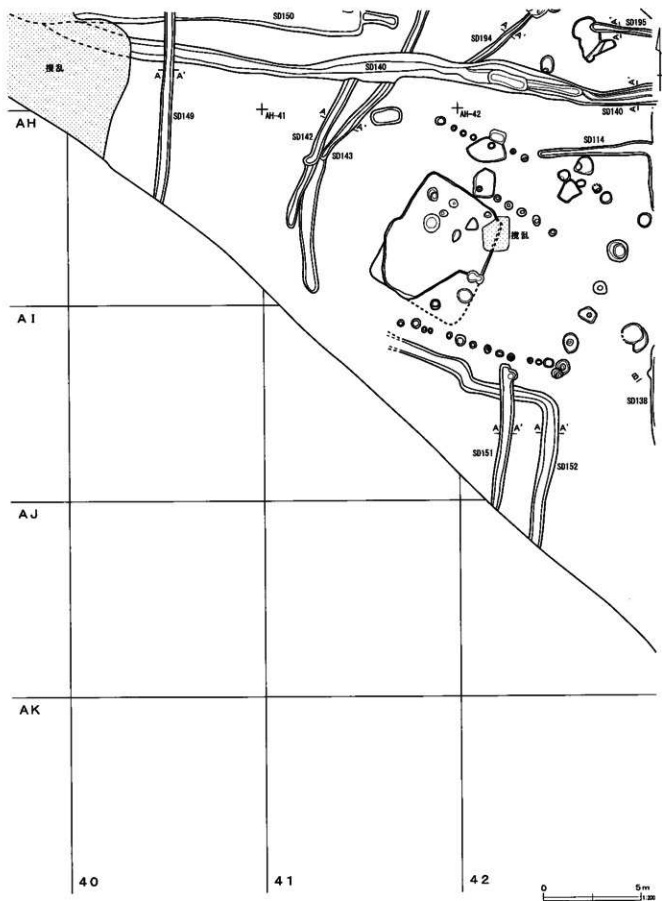
第14号溝跡 (第155・160図)

A L-45グリッドに位置する。第1号溝跡に切られている。第10・11・14・16号溝跡は、並行してほぼ南北に走る。

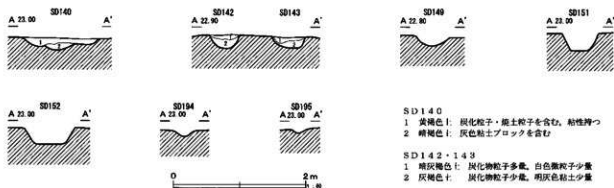
第14号溝跡の南側は途切れ、北側は調査区外に続くが、4m程離れたF区でも確認されていない。



第104圖 溝跡 (9)



第105図 溝跡 (10)



第106図 溝跡 (10)

検出し得た溝の長さは7.9mで、上幅0.3~1.4m、下幅0.2~1.1m、深さは10cm前後である。また、溝跡はN-6°-Eの向きで、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形は直線状、断面形は底面に凹凸のある皿状を呈する。並行する第10・11・16号溝跡は、たびたび行われたであろう溝の掘り返しの結果であろうか。平安時代の、第5・6号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第15号溝跡 (第113・115・116図)

A L-46、A M-46・47グリッドに位置する。第1号溝跡に切られる。両端共に途切れる。

検出し得た溝跡の長さは15.5m、上幅0.3~0.6m、下幅0.1~0.4m、深さは10cm前後である。溝跡はN-61°-Wの方位で、西北西から東南東方向に走る。溝跡の平面形は直線状、断面形は皿状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第16号溝跡 (第145・148・155・160図)

A・F区にまたがって、A J-A L-45グリッドに位置する。第1・11号溝跡に切られている。第11号溝跡は本遺構を掘り直したものと考えられる。また、土層の層序から第192号溝跡よりも新しいと判断される。第10・11・14・16号溝跡は、並行してほぼ南北に走る。

第16号溝跡の南側は途切れ、北側については、4m程離れたF区でも確認されているが、第16号溝跡

が合流するため、途中でプランを失っている。

途中が途切れるものの、F区部分も含めて検出し得る溝の長さは21.2mで、上幅0.5~0.7m、下幅0.2~0.4m、深さは20cm前後である。

また、溝跡はN-7°-Eの向きで、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が平坦で、壁面が緩やかに立ち上がる逆台形または皿状を呈する。

平安時代の条里関連の溝跡と思われるが、並行する第10・11・14号溝跡は、たびたび行われたであろう溝の掘り返しの結果であろうか。平安時代の、第5・6号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

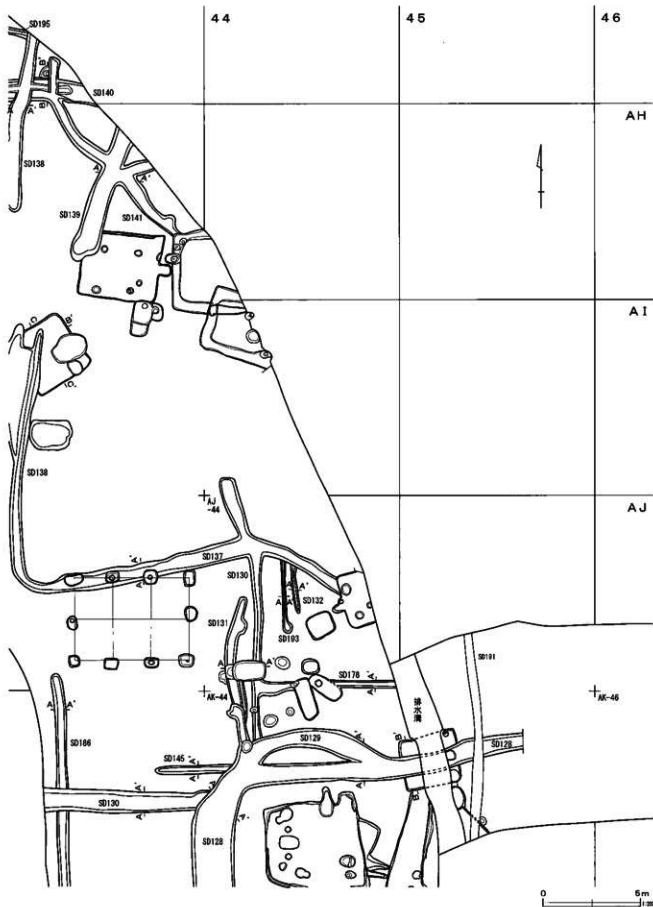
遺物は出土しなかった。

第17号溝跡 (第113~115図)

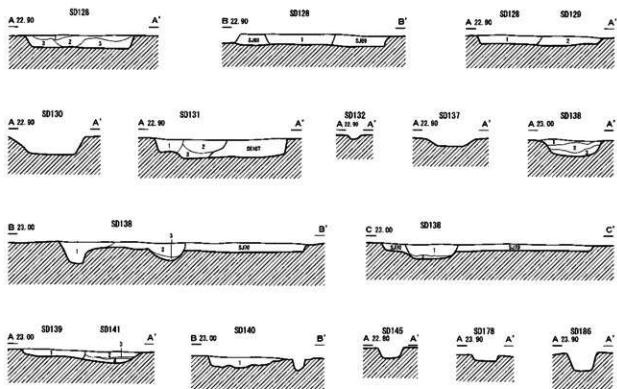
A L-45、A M-45・46グリッドにかけて位置する。第2号溝跡と重複している。

西側は第2号溝跡、東側は第1号溝跡によって遺構のプランが失われている。

検出し得た溝跡の長さは8.2m、上幅0.1~0.6m、下幅0.2~0.3m、深さは6cmである。溝跡は概ねN-82°-Wの方位で、西北西から東南東方向に、蛇行して第2号溝跡と2箇所重なるようにして走る。溝跡の流れとしては、東→西と推定される。溝跡の断面形は、底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。



第107図 溝跡 (11)



- SD128 (A-A')
- 1 暗灰色土 粘土粒子・炭化粒子・灰色粘土を含む
 - 2 黄褐色土 黄褐色土・炭化粒子・灰色粘土を含む
 - 3 黄灰色土 黄褐色土・灰色粘土を含み、しまりやかもつ

- SD128 (B-B')
- 1 灰褐色土 炭化粒子少量

- SD128・129
- 1 暗赤褐色土 粘土粒子・炭化粒子・鉄分粒子を含む
 - 2 暗茶褐色土 灰褐色粘土粒子・鉄分粒子を含む

- SD131
- 1 茶褐色土 鉄分粒子・炭化粒子・茶褐色土粒子を含む
 - 2 茶褐色土 鉄分粒子・炭化粒子少量、茶褐色土粒子を含む
 - 3 茶褐色土 鉄分粒子・茶褐色土粒子を含む

- SD138 (A-A')
- 1 黄褐色土 炭化粒子少量、砂質土、黄褐色粒を含む
 - 2 灰褐色土 炭化粒子少量、砂質土、黄褐色粒を含む
 - 3 灰褐色土 炭化粒子少量、砂質土、黄褐色粒を含む、粘性持つ

- SD138 (B-B')
- 1 暗灰褐色土 炭化物粒子多量
白色炭粒 (A₁-H 大粒径) 少量
 - 2 灰褐色土 炭化物粒子少量
 - 3 灰褐色土 炭化物粒子微量

- SD138 (C-C')
- 1 暗褐色土 炭化物粒子・炭粒少量
 - 2 灰褐色土 炭化物粒子少量

- SD139・141
- 1 黄褐色土 炭化粒子少量
 - 2 黄褐色土 炭粒・炭化粒子を含む
 - 3 黄褐色土 炭化物を主体とする
 - 4 灰褐色土 砂質土を含み、黄褐色粒を混入

- SD140
- 5 黄褐色土 炭化粒子・炭粒を含む、粘性持つ



第108図 溝跡 (11)

遺物は出土しなかった。

第19号溝跡 (第113・114図)

A N-43~46グリッドに位置する。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。第34号住居跡を切る。

検出し得た溝跡の長さは20.6m、上幅0.2~0.3m、下幅0.1~0.2m、深さは6~12cmである。溝跡はN-84°-Wの方位で、ほぼ東西方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、東→西と推定される。溝跡

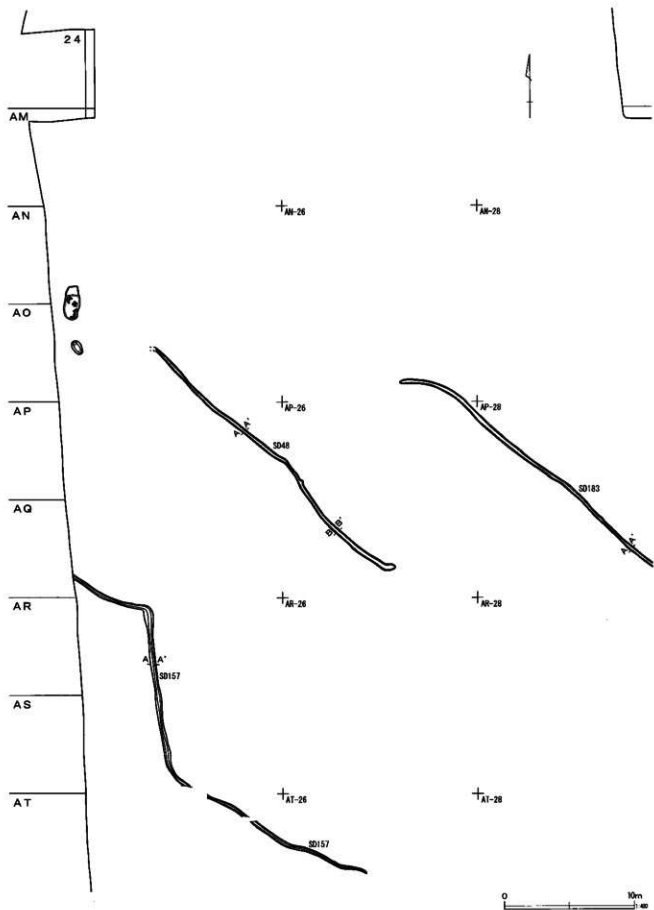
の平面形は緩やかに湾曲する直線状、断面形は碗状を呈す。

遺物は出土しなかった。

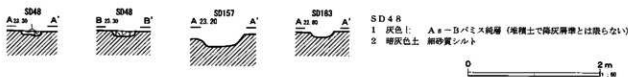
第20号溝跡 (第115・116図)

A M-46・47、A N-46・47グリッドに位置する。2箇所途切れているが、A M-46グリッド内でほぼ直角に屈曲する溝跡と判断した。

検出し得た溝跡の長さは南北方向1.7m、東西方



第109圖 溝跡 (12)



第110図 溝跡 (12)

向9.4mの計11.1m、上幅0.3~0.4m、下幅0.2m、深さは10cm前後である。溝跡は南北方向N-15°-E、東西方向N-61°-Wを指す。溝跡の平面形は北西にコーナー部分を有するL字状、断面形は皿状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第21号溝跡 (第115・116図)

A N-47・48グリッドに位置する。両端共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは9.6m、上幅0.2~0.4m、下幅0.1~0.2m、深さは5cm前後である。溝跡はN-75°-Wの方位で西北西から東南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、西北西→東南東と推定される。溝跡の平面形は緩やかに湾曲するが概ね直線状を呈し、断面形は皿状に近い。

遺物は出土しなかった。

第22号溝跡 (第113~115図)

A P-45・46グリッドに位置する。他遺構との重複はみられない。

東側はピットによって遺構のプランが失われており、西側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは5.4m、上幅0.2~0.3m、下幅0.1~0.2m、深さは12cmである。溝跡はN-62°-Wの方位で、西北西から東南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、西北西→東南東と推定される。4m程南に位置する第23号溝跡(第113・118図)と並行する形となる。溝跡の平面形は直線状、断面形はU字状もしくは碗状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第23号溝跡 (第113・119・120図)

A P-45・46グリッドに位置する。他遺構との重

複はみられない。東側はピットによって遺構のプランが失われており、西側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは9.2m、上幅0.2~0.6m、下幅0.1~0.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-65°-Wの方位で、西北西から東南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、西北西→東南東と推定される。4m程南に位置する第23号溝跡(第113・118図)と並行する形となる。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が平坦な皿状を呈す。

遺物は出土しなかった。

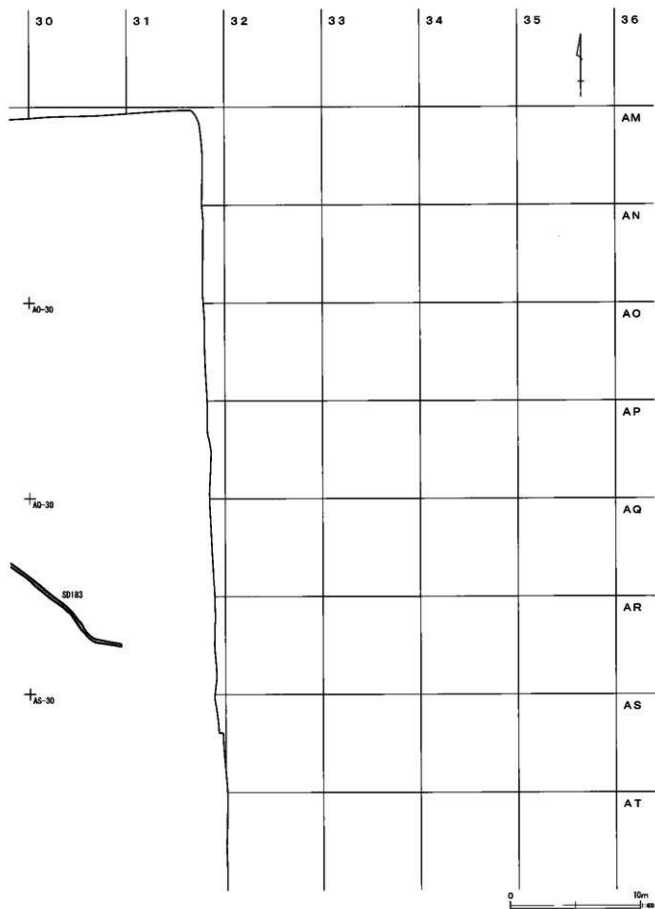
第24号溝跡 (第150~153・159・160・161図)

A V-24~30, A W-25~30, A X-35・36, A Y-37・38, A Z-37・38, B A-38・39, B B-39グリッドに位置する。第28~33・39号溝跡を切る。その他、第33・36・39・42・43号溝跡等も、遺構検出時点ではプランが途切れてはいたものの、本来は南北方向にさらに延びており、第24号溝跡に切られていたものと推定される。西側・南東側共に調査区外に続く。

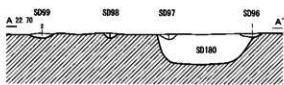
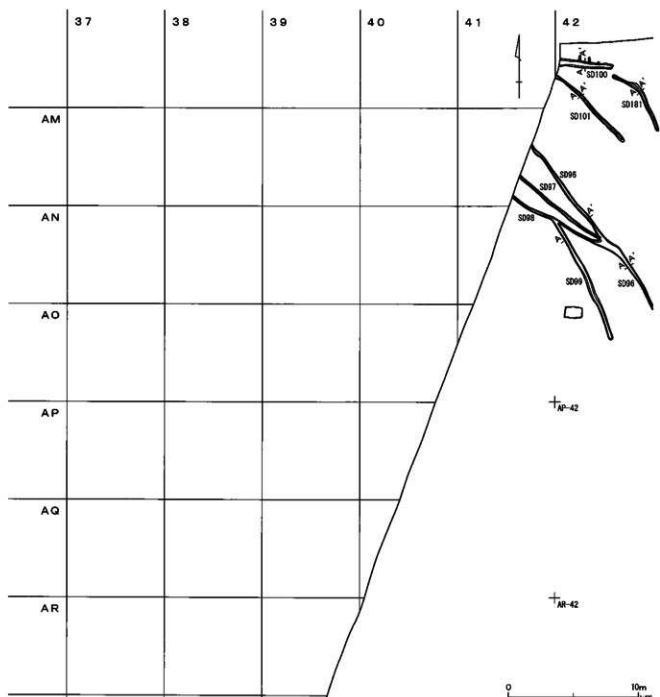
途中が途切れるものの、D・E区部分も含めて検出し得た溝の長さは133.2mで、上幅3.4~5.6m、下幅2.5~3.0m、深さは75~150cmである。土層断面を観察すると、壁面の立ち上がりが現在の地表面まで達している箇所がある。

また、検出された第24号溝跡の西半部は、N-85°-Wの向きで、ほぼ東西に走るが、東半部ではN-32°-Wの方位で屈曲もしくは湾曲している。断面形は、底面中央がやや窪み、壁面が緩やかに立ち上がる碗状を呈する。

まず西側の、東西に走る部分(B区)から観察したい。第32号溝跡の土層断面(第153図)の26層は、



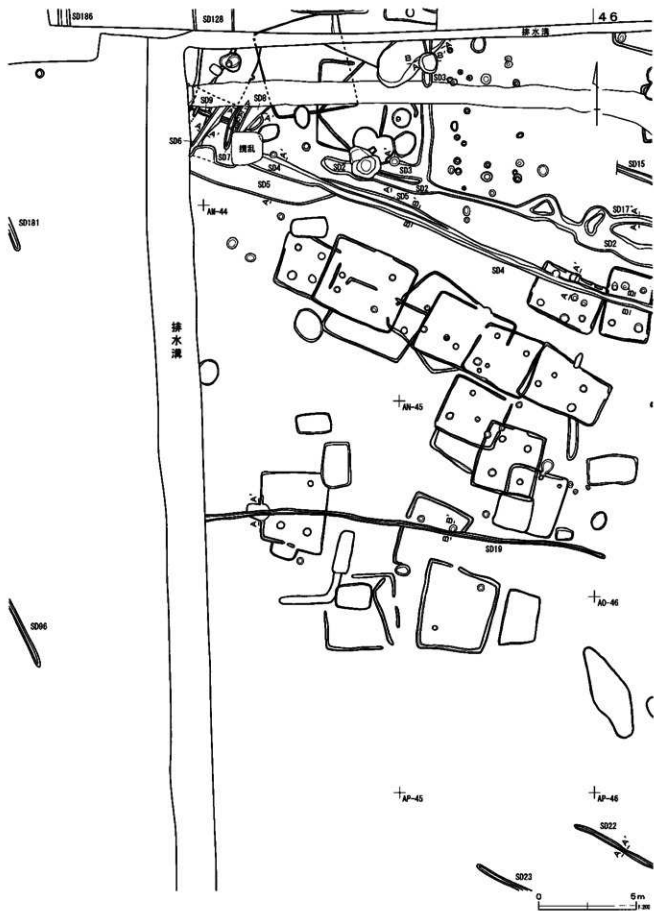
第111图 溝跡 (13)



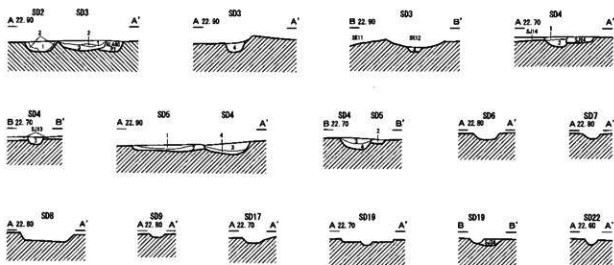
SD96・97・98・99・100・101・181
 1 灰色土 粘土質シルト。鉄泥多量。マンガシ結核少量
 土礫片少量。16C埋
 2 暗灰色土 粘土質シルト。鉄泥少量。マンガシ結核少量
 1層よりやや古い土



第112図 溝跡 (14)



第113図 溝跡 (15)



SD 2

- 1 黄灰色土 焼土粒・炭化粒少量、粘性強い
- 2 灰黄褐色土 パチパチの地山を多く含む、鉄分多量、粘性弱い

SD 3

- 1 焼灰色土 焼土粒・炭化粒多量
- 2 灰黄褐色土 地山粒多量
- 3 焼灰色土 炭化粒少量
- 4 暗黄灰色土 しまりむら、焼土粒・炭化粒を若干含む
鉄分のかたまりを含む、粘性強い

SD 4

- 1 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック多量
- 2 暗褐色土 黄灰色粘土粒子少量
- 3 焼灰色土 灰白色粘土ブロックまばらに含む
- 4 焼灰色土 灰白色粘土ブロック多量

SD 5

- 1 暗褐色土 灰白色粘土粒子をまばらに含む
- 2 灰褐色土 灰白色粘土ブロック多量



第114図 溝跡 (15)

中世以前と考えられる七層である。そして第32・24号溝跡の北側には、浅間B軽石降灰時の大畦畔の基部と推定される土層(同図28～30層)が認められる。調査区全体における溝の位置、および溝の規模・溝と畦畔の位置関係等から、第32号溝跡は平安時代から続く第7・11号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

次いで、第24号溝跡6層は18世紀中頃までと考えられる土層であり、この土層と浅間B軽石降灰時の大畦畔の基部にのる形で、江戸時代と思われる堤(8・9層)が設けられている。

言い換えるならば、平安時代から続く条里に関わる大畦畔や大溝を踏襲する形で掘削し直した溝が、第24号溝跡であり、古代より浅く、北岸も縮小しつつも江戸時代を経て近代まで続いたものと考えられる。

因みに、同図31・32層は、近代の松原堀の土堤の基部に相当する。9層にみた土堤は、この松原堀の

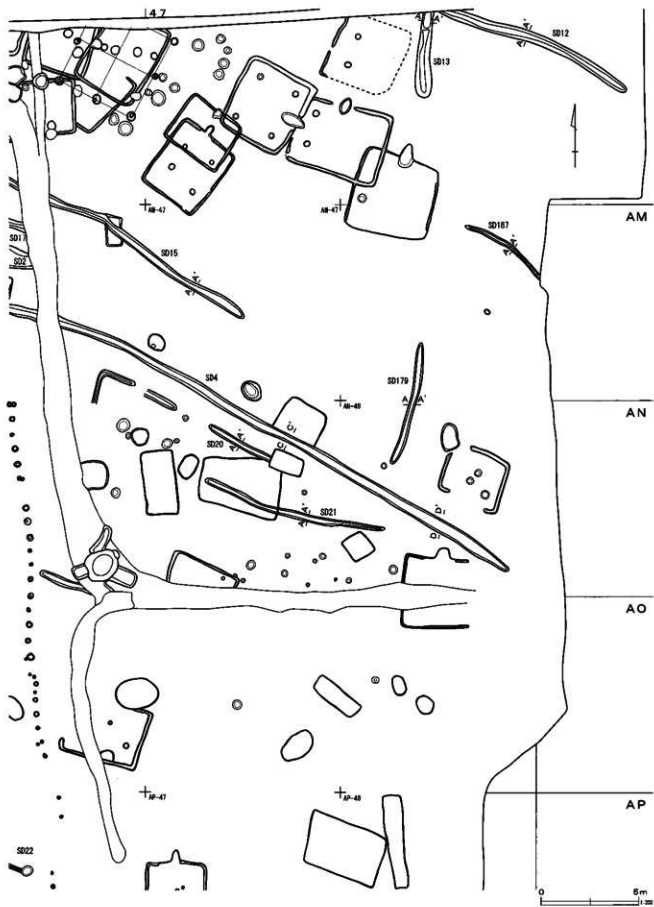
土堤にのると考えられる。

続いて、東側部分(D区)を観察してみる。ここで検出された幅広い溝跡を、B区内の第24号溝跡と同一遺構としたのは、E区部分も含めた遺構の位置関係・規模・形態・時期等による。

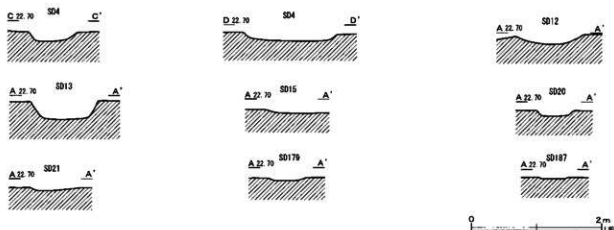
換言するならば、A・D区間の空白部分に、すっぽりと納まった状態で東西に走っており、そこからD区方向に分岐しているとの可能性も否定できない。その場合でも、両溝は同時に機能していたといえよう。D区内の第24号溝跡は、18世紀代にはこの溝は存在していたことになる。

第160図における、第24号溝跡の土層断面23層は18世紀中頃までに形成されたものと考えられる。10層は、浅間A軽石降下に近い時期の土層と思われ、この時期には溝はかなり浅くなった状態であったことが分かる。

そして20・21層は、浅間A軽石降灰以前の土堤と



第115号 溝跡 (16)



第116図 溝跡 (16)

推定される。なお16層は、浅間A軽石降灰以前の水田耕作土と思われる。本遺構は、後代に松原堀と称される溝跡で、迅速測図にも表現されていることから、明治時代までは利用されていたことになる。その後、埋め戻され水田化したといえよう。

別の表現をするならば、第24号溝跡は、奈良時代・平安時代からの条里関連溝の、位置と方位を近世まで踏襲し、後に松原堀として南東部へと流れを変更したといえようか。

図化し得た遺物は、陶磁器等10点と木製品9点(第172図)の計19点である。

第172図1は、桶もしくは曲物の底板と思われる。板の周縁部は、斜めに面取りされている。残存最大長11.9cm、残存最大幅3.5cm、残存最大厚0.9cmを測る。

同図2は、桶もしくは曲物の底板と思われる。但し、目釘が無いことから桶の可能性が高い。風化しており、刃痕などの加工痕は観察できない。残存最大長25.8cm、残存最大幅11.4cm、残存最大厚1.2cmを測る。

同図3は、機種不明である。組み合わせの部材(枠)であろうか。木取りは柁目で、針葉樹と思われる。板材の先端を削って尖らせ、長辺の二箇所に貫通孔を設けている。頂部は部分的に欠損している。残存最大長25.8cm、残存最大幅4.1cm、残存最大厚1.0cmを測る。

同図4は、漆塗椀であるが、残存率が極めて低い。木取りは横木取りで、針葉樹製と思われる。法量は不明であるが、底部に高台が付くと考えられる。下地に黒漆を塗り、その上に朱漆重ね塗りしている。残存最大長5.6cm、残存最大幅3.7cm、残存最大厚1.0cmを測る。

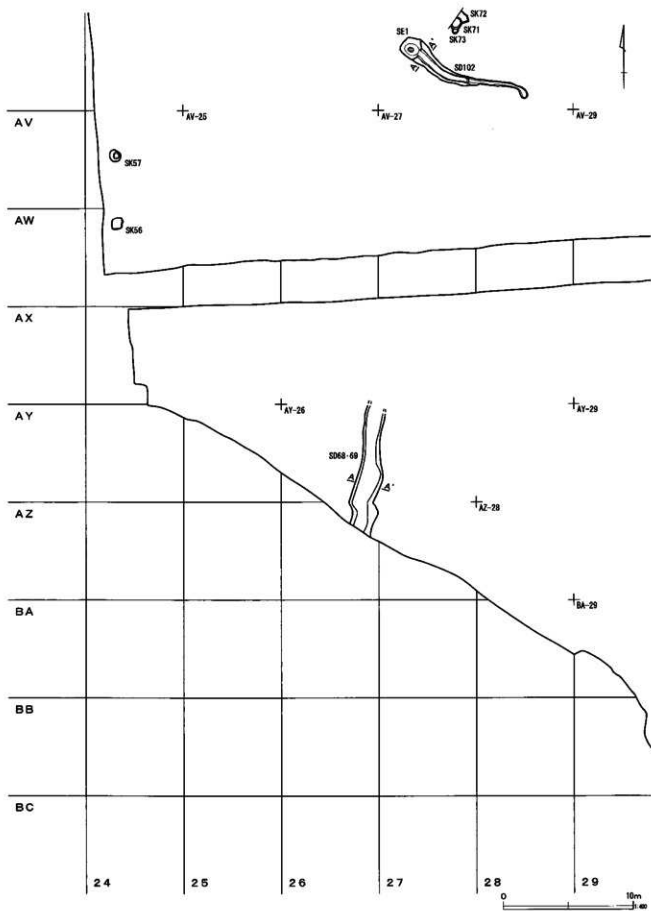
同図5は、漆塗椀であるが、側縁部の一部のみの残存である。断面が薄いため、他の機種の可能性もある。木取りは横木取りで、針葉樹製と思われる。法量は不明である。下地に黒漆を塗り、その上に朱漆を重ね塗りしている。残存最大長2.5cm、残存最大幅2.2cm、残存最大厚0.3cmを測る。

同図6は、桶の側板と思われる。針葉樹製か。緩やかな曲面をもつ。残存最大長2.5cm、残存最大幅2.7cm、残存最大厚0.9cmを測る。

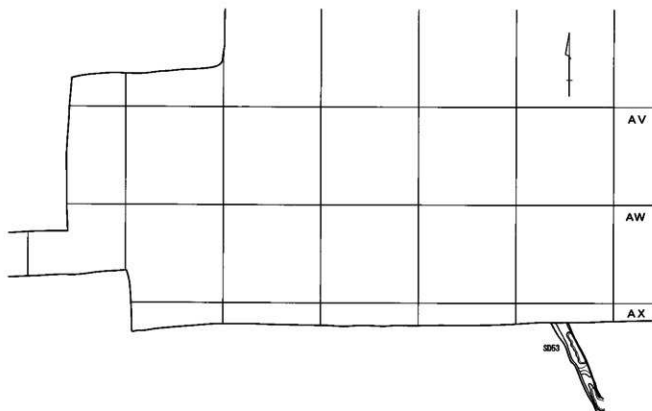
同図7は、曲物側板と思われる。木取りは柁目(薄板)で、一部欠損するが樹皮による止め目穴および目釘穴が認められる。残存最大長10.9cm、残存最大幅1.8cm、残存最大厚0.9cmを測る。

同図9は、組合せ容器側板か。木取りは柁目で、針葉樹製である。長辺部を欠損しているが、板材を平坦に面取りしている。残存最大長5.8cm、残存最大幅2.5cm、残存最大厚0.4cmを測る。

同図10は、組合せ容器側板か。木取：辺材。やや湾曲する板の側面に目釘穴5孔が設けられている。残存最大長8.9cm、残存最大幅1.9cm、残存最大厚0.5



第117图 溝跡 (17)



+AZ-31

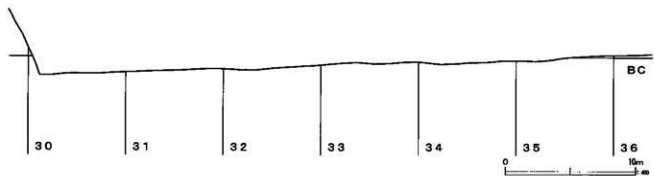
+AZ-33

+AZ-35

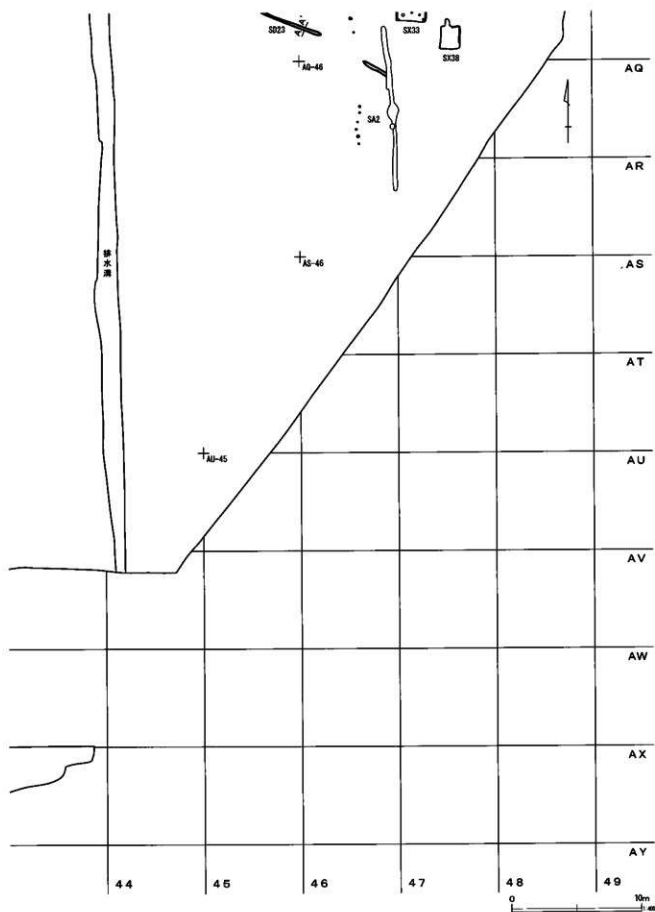
+BB-31

+BB-33

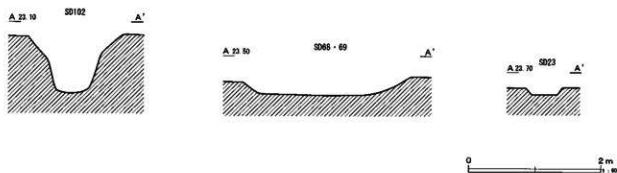
+BB-35



第118图 沟跡 (18)



第119図 清跡 (19)



第120図 溝跡 (17・19)

cmを測る。

同図11は、建築部材か。板状を呈す。左端部に5cm程の突起が設けられている。下辺左側は切り込まれて細く作られているため、合せ式の部材と思われる。現存最大長42.8cm、現存最大幅11.2cm、現存最大厚1.0cmを測る。

同図12は、組合せの板材と考えられる。木取りは柾目で、表面は丁寧な加工されているが、裏面の加工はやや粗い。木口および木端は、丁寧な面取りが施されている。残存最大長20.4cm、残存最大幅10.4cm、残存最大厚0.8cmを測る。

第25号溝跡 (第159・160図)

A Y-37・38、A Z-38・39、B A-38・39グリッドにかけて位置する。第26号溝跡と重複しているが、共に遺構の境目が不明瞭で、プランの特定は困難である。新旧関係についても不明である。両端とも調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは30.3m、上幅1.0m前後、下幅0.4～0.8m、深さは20cm前後である。溝跡はN-30°-Wの方で、北西から南東に走る。平面形はほぼ直線状で、断面形は底面が平坦に近い皿状を呈する。

第26号溝跡遺構と同様に、浅間A軽石降灰以前の、第24号溝跡(松原塚と思われる)を埋め立てた遺構の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

第26号溝跡 (第157・159・160図)

A Y-37・38、A Z-38・39、B A-38・39グリッドにかけて位置する。第25号溝跡と重複しているが、共に遺構の境目が不明瞭で、プランの特定は困難である。新旧関係についても不明である。両端とも調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは31.4m、上幅0.5～2.0m、下幅0.3～1.8m、深さは10cm前後である。溝跡はN-30°-Wの方で、北西から南東に走る。平面形はほぼ直線状で、断面形は底面が平坦に近い皿状を呈する。

第25号溝跡と同様に、浅間A軽石降灰以前の、第24号溝跡(松原塚と思われる)を埋め立てた遺構の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

第27号溝跡 (第156・158・160図)

A X～A Z-35、A X～B B-36グリッドにかけて位置する。両端共に調査区外に続く。他遺構との新旧関係はみられない。

検出し得た溝の長さは47.9mで、上幅1.6～3.0m、下幅0.3～1.0m、深さ50cm前後である。概ねN-5°-Wの方で、ほぼ南北に走る。平面形は直線状、断面形は、底面が部分的に段をもつ碗状を呈する。C区にみえる第71号溝跡と同一の可能性が考えられる。

浅間B軽石降灰前後から中世に及ぶ、第10・11号

坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第28号溝跡 (第150・153・154図)

B・E区にまたがってAW-A Y-24グリッドにかけて位置する。B・E区最西端に位置するため、検出できた範囲はごく限られたものとなった。第24・29・32号溝跡に切られている。北側は第24・32号溝跡以北にはみられない。遺構の残りが悪く、失われている可能性が高い。南側については、調査区外に続く。

E区内にある第29-31号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。

B・E区をまたいで、検出し得た溝の長さは20.1m、上幅0.6m前後、下幅0.4m前後、深さは20cm前後である。溝跡はN-7°-Wの方位でほぼ南北に走る。溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は緩やかな逆台形や碗状を呈する。

1m程東に位置する第29号溝跡は、浅間B軽石降灰以前の溝跡と考えられるが、本遺構はこれに切られていることから、さらに時期的にさかのぼると言えよう。第29号溝跡は、本遺構を掘り直した溝跡であろうか。両溝共に、第11・12号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第29号溝跡 (第150・153・154図)

B・E区にまたがって、AW-24、AX・AY-24グリッドにかけて位置する。第28号溝跡と同様に、E区最西端に位置するため、検出できた範囲はごく限られたものとなった。第28号溝跡を切り、第24・32号溝跡に切られている。土層の層序からみて、第30号溝跡よりも新しいと考えられる。

北側については、第24・32号溝跡以北に溝跡のプランはみられない。遺構の残りが悪く、プランが失われているか、B区外に出ている可能性が考えられる。南側については、調査区外に続く。

第30号溝跡 (第150・153・154図)

AW-24・25、AX・AY-24・25グリッドにか

けて位置する。E区最西端に位置するため、検出できた範囲はごく限られたものとなった。

第32号溝跡に切られている。南側については、調査区外に続く。第28・30・31・58-69号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。

第24号溝跡以北ではプランを確認できなかった。他の多くの溝跡と同様に、遺構の残りが悪いために痕跡が失われている可能性が高い。

また、この項の始めに述べたように、同一遺構に別の遺構番号を付してしまっている可能性も否定できない。ここではB・E区を挟んで、E区内にある第28・30・31号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。

B・E区を挟んで検出し得た溝の長さは21.0m、上幅0.7-1.0m、下幅0.3-0.4m、深さは10-50cmである。溝跡はN-11°-Wの方位でほぼ南北に走る。

溝跡の平面形は、やや湾曲するもののほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦で、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。

第153図26層は、浅間B軽石降下時の条里坪界溝と推定されるが、この時点では数十cm程埋没していたようである。

本遺構は、1m程西に位置する第28号溝跡や、同じく1m程東に位置する第30号溝跡よりも新しいことから、どちらか一方の掘り直しをした条里関連の溝跡と思われる。

土師器や須恵器の小破片が少数出土したが、図化に至る遺物はなかった。

30号溝跡と認識できる部分での、遺構範囲と計測値を記すことにする。

検出し得た溝の長さは20.6m、上幅1.4m前後、下幅0.4-0.8m、深さは30-40cmである。溝跡はN-5°-Wの方位でほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦で、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。

同図の24・25層が、第30号溝跡の覆土に相当するが、この上の上のっている23層が浅間B軽石降下時に近い土層と推定される。この点から、下層部分は浅

間B軽石降下以前から存在する遺構といえるが、上層部分については遺構の検出状況から、近代まで降ると判断できる。この間に、継続性があるか否かは不明であるものの、第28・29・31号溝跡と同様に、第11・12号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

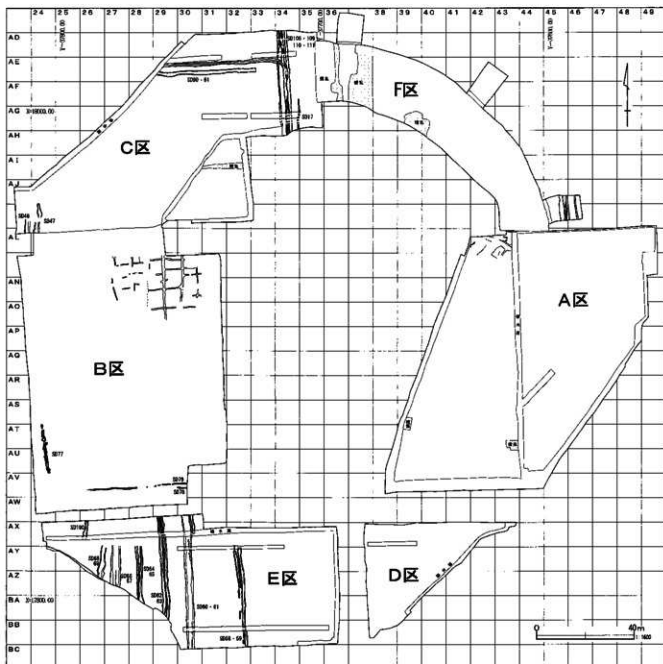
遺物は出土しなかった。

第31号溝跡（第150・153・154図）

本遺構はB・E区にまたがっているが、第24号溝

跡以北ではプランを確認できなかった。他の多くの溝跡と同様に、遺構の残りが悪いために痕跡が失われている可能性が高い。

また、この項の始めに述べたように、同一遺構に別の遺構番号を付してしまっている可能性も否定できない。ここではB・E区を扶んで、第31号溝跡と認識できる部分での、遺構範囲と計測値を記すことにする。



第121図 溝跡その2 第17地点遺構全体図

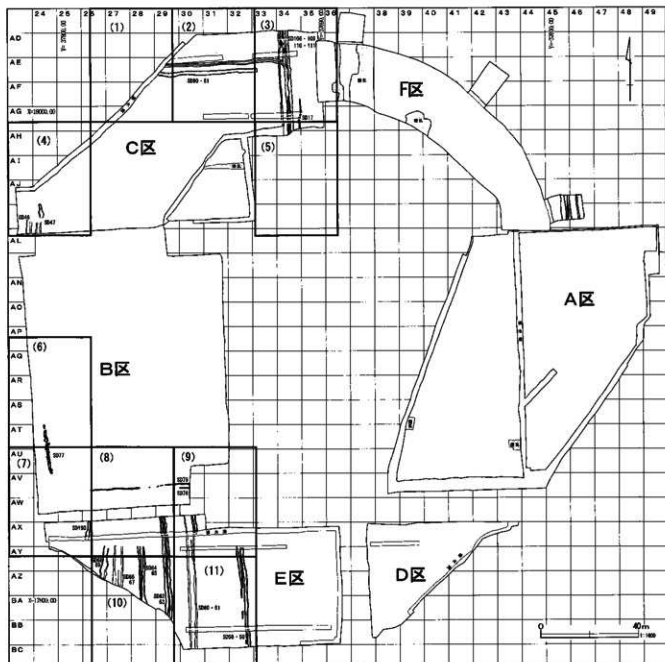
AW～AY-25グリッドにかけて位置する。第32号溝跡に切られている。南側については、調査区外に続く。

検出した溝の長さは22.3m、上幅1.4～2.0m、下幅0.4～0.8m、深さは30～40cmである。溝跡はN-3°-Wの方位でほぼ南北に走る。

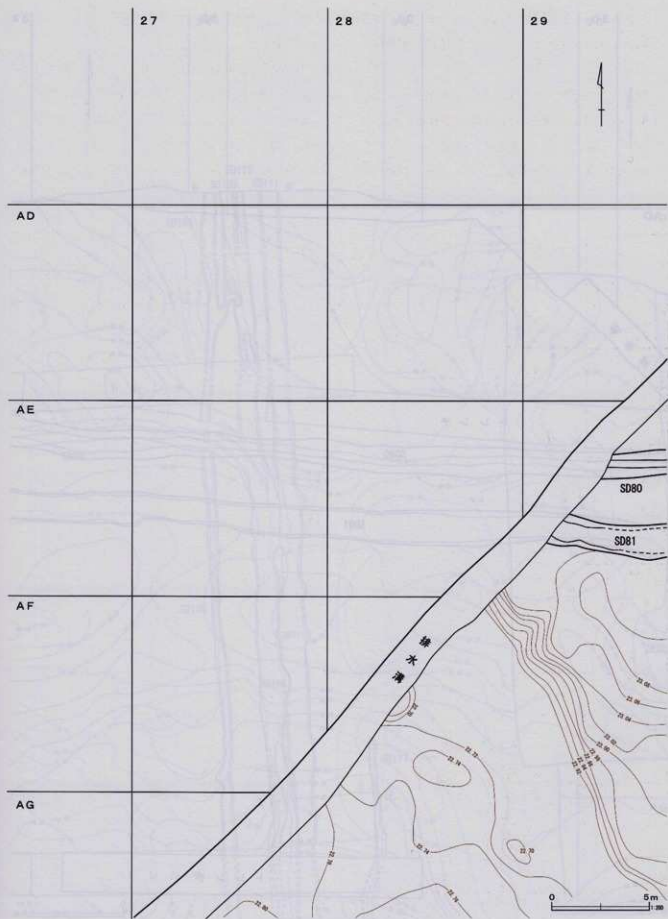
溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面

が平坦で、立ち上がりの緩やかな逆台形もしくはU字形に近い。

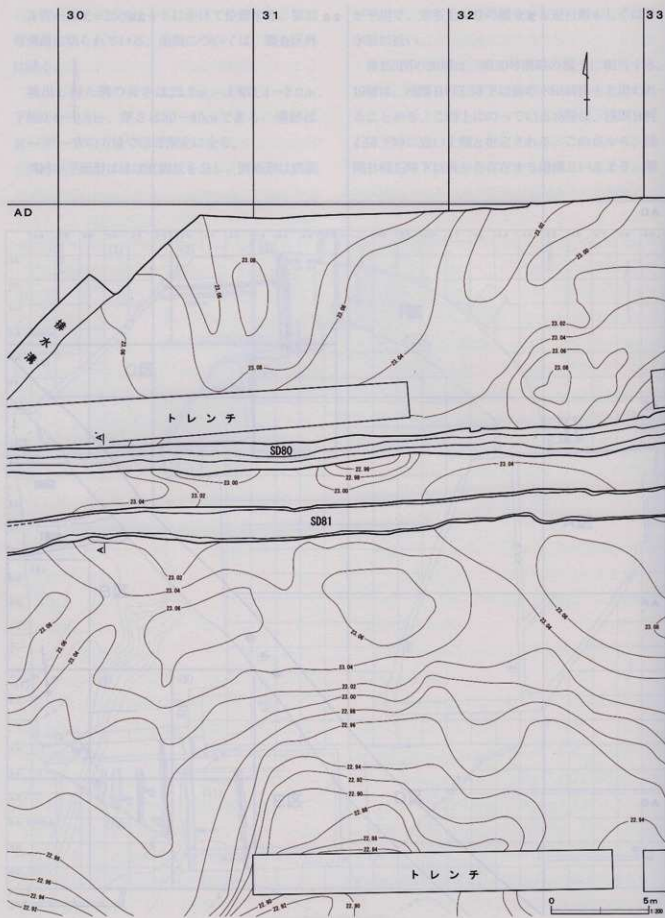
第153図の20層は、第30号溝跡の覆上に相当する。19層は、浅間B軽石降下以前の水田耕作土と思われることから、この上に乗っている18層は、浅間B軽石降下時に近い土層と推定される。この点から、浅間B軽石降下以前から存在する遺構といえよう。第



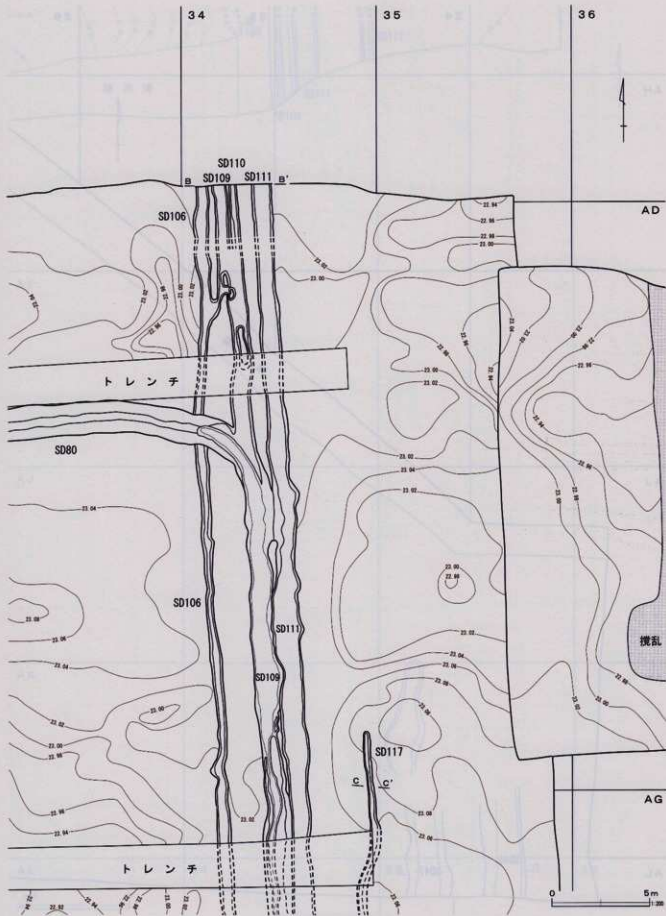
第122図 第17地点溝跡区割図(2)



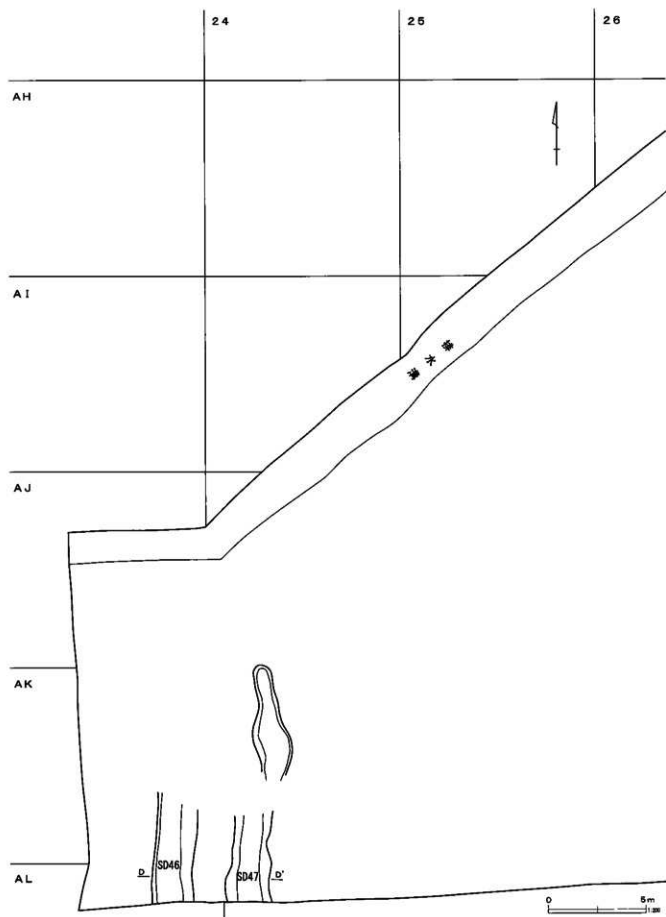
第123圖 溝跡 (1)



第124図 溝跡 (2)



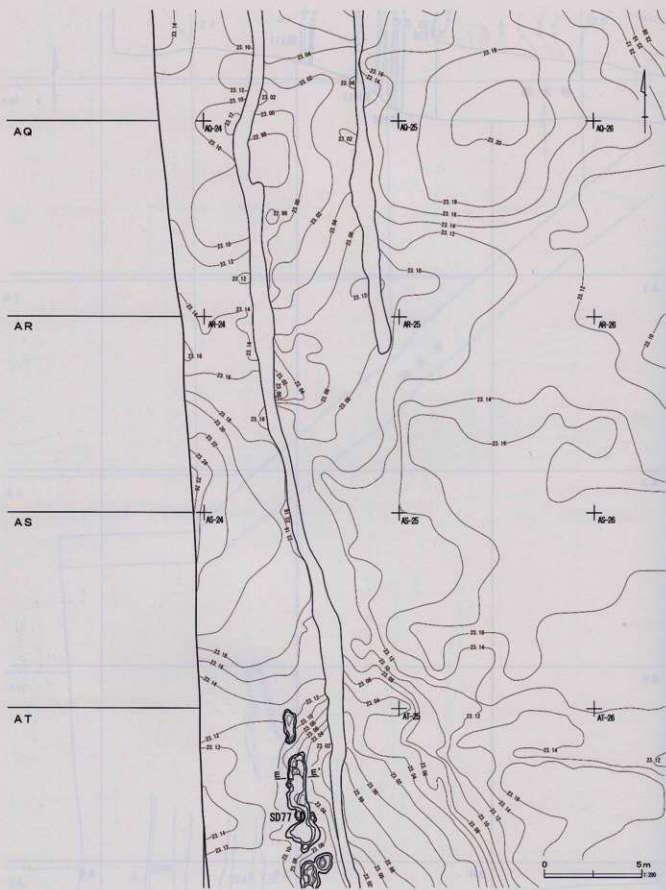
第125図 溝跡 (3)



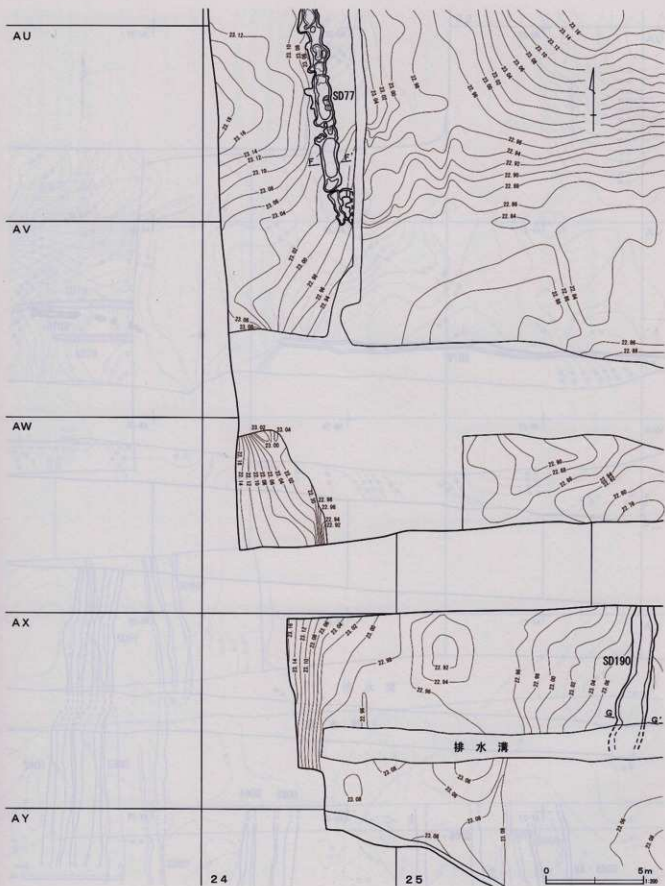
第126図 溝跡(4)



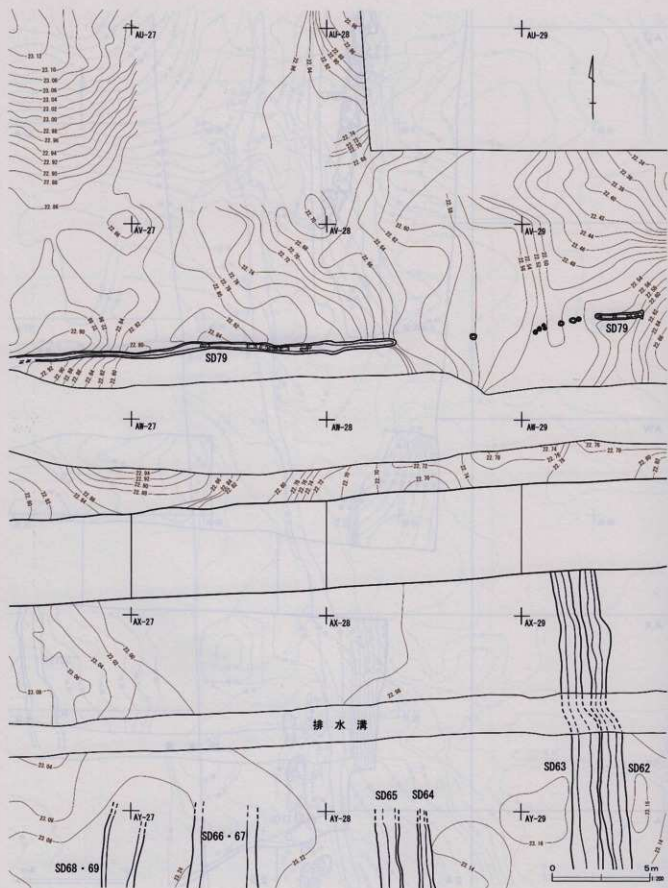
第127図 溝跡 (5)



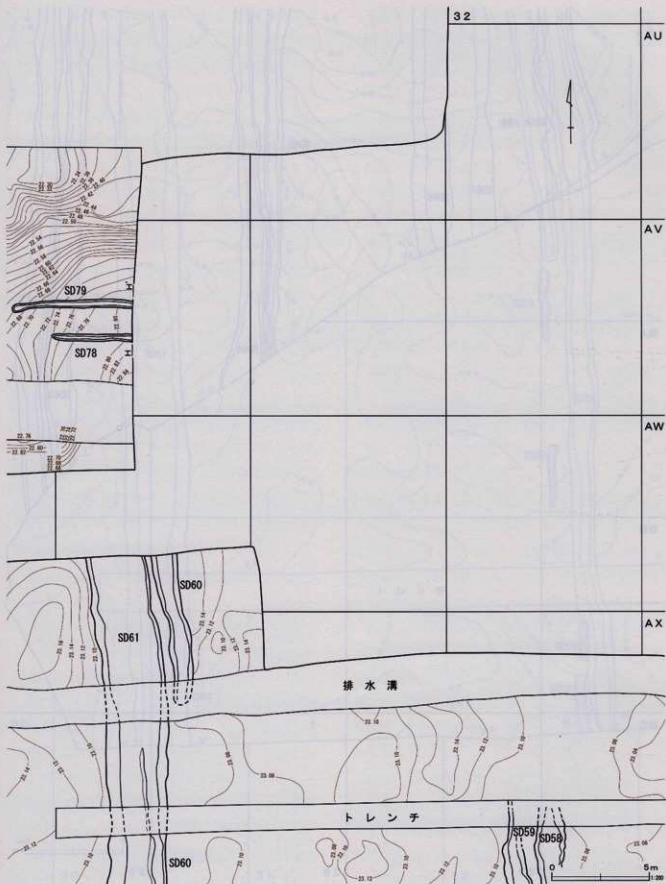
第128図 溝跡 (6)



第129図 溝跡 (7)



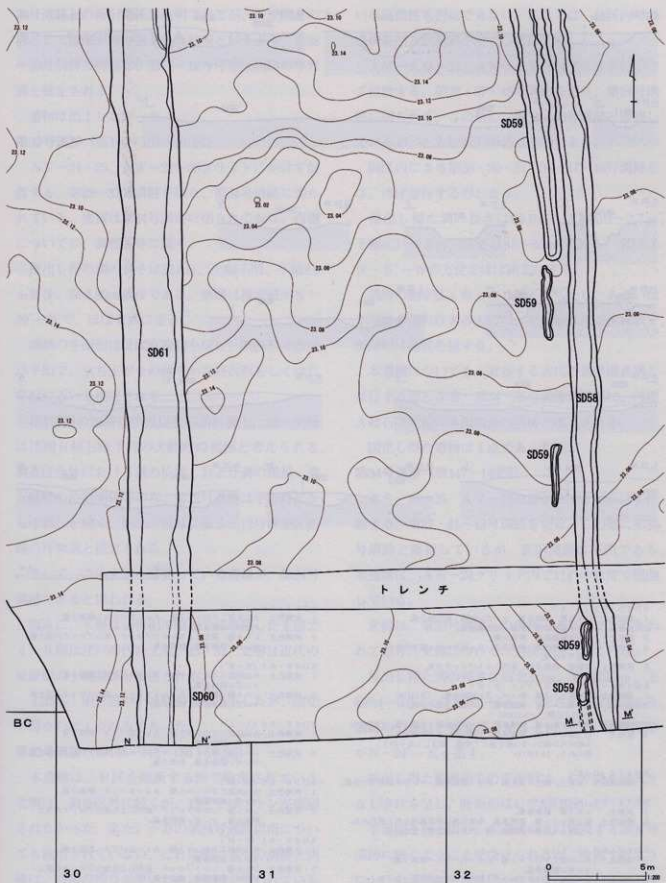
第130図 溝跡 (8)



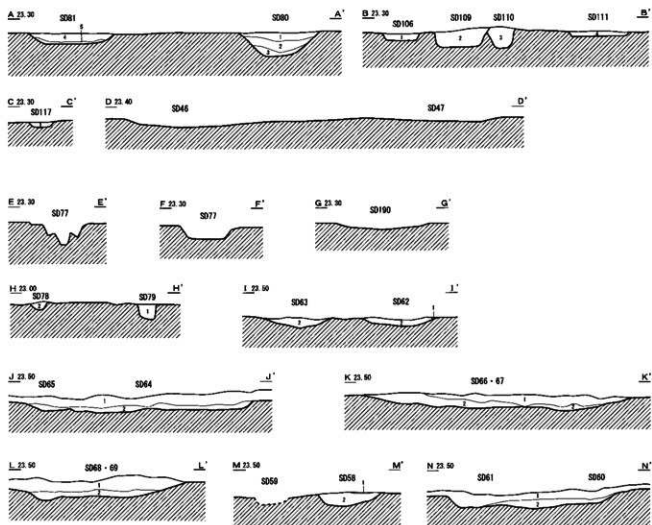
第131図 溝跡 (9)



第132図 溝跡 (10)



第133図 溝跡 (11)



0 2m

SD 80・81 (A-A')

- 1 褐色土 シルト層 鉄斑多量、マンガン結核・炭化物少量。
- 2 灰色土 シルト質細砂層 鉄斑・炭化物少量。
- 3 灰色土 シルト質細砂層 鉄斑少量。
- 4 灰色土 シルト質細砂層 鉄斑多量、9c 後平～10c 前平中心の干器やや多量。
- 5 灰褐色土 細砂層 鉄斑多量、灰色シルトブロック少量。

SD 106・109・110・111 (B-B')

- 1 黒灰色土 細砂質シルト層 鉄・マンガン結核少量。(SD106)
- 2 灰色土 粘土質シルト層 鉄斑多量、白色砂・土滴片少量、9c～10c 以前。(SD109)
- 3 暗灰色土 粘土質シルト層 鉄斑多量、マンガン結核・土滴少量。(SD110)
- 4 灰色土 粘土質シルト層 鉄斑多量、土滴少量、8c 中頃か、大畹中央の溝か、2・3層を通じて堆積、屈曲したものとされる。(SD111)

SD 117 (C-C')

- 1 暗灰色土 粘質土、炭土・炭化物・鉄分・鉄斑少量、マンガン結核やや多量。
- 2 灰色土 シルト層 鉄斑多量。
- 3 暗灰色土 粘土質シルト層 鉄斑多量、多重初現の浮屠級用水跡と思われる、1・2層とも若い水浸か、滞った水による層と思われる。

SD 52・63 (I-I')

- 1 灰褐色土 火山灰混じりのシルト層 A s-B パミス・鉄斑少量、マンガン結核多量。
- 2 灰褐色土 シルト層 シルトブロック・耕作による地山ブロックの混土層、マンガン結核多量、鉄斑少量。

SD 64・65 (J-J')

- 1 灰褐色土 火山灰混じりのシルト層 A s-B パミス・鉄斑少量、マンガン結核多量。
- 2 灰褐色土 シルト層 耕作によるシルトブロック・地山ブロックの混土層、マンガン結核多量、鉄斑少量。

SD 66・67 (K-K')

- 1 灰褐色土 火山灰混じりのシルト層 A s-B パミス・鉄斑少量、マンガン結核多量。
- 2 灰褐色土 シルト層 耕作によるシルトブロック・地山ブロックの混土層、マンガン結核多量、鉄斑少量。

SD 68・69 (L-L')

- 1 灰褐色土 火山灰混じりのシルト層 A s-B パミス・鉄斑少量、マンガン結核多量。
- 2 灰褐色土 シルト層 耕作によるシルトブロック・地山ブロックの混土層、マンガン結核多量、鉄斑少量。

SD 58・59 (M-M')

- 1 灰褐色土 火山灰混じりのシルト層 A s-B パミス・鉄斑少量、マンガン結核多量。
- 2 灰褐色土 シルト層 シルトブロック・耕作による地山ブロックの混土層、鉄斑少量、マンガン結核多量。

SD 60・61 (N-N')

- 1 灰褐色土 火山灰混じりのシルト層 A s-B パミス・鉄斑少量、マンガン結核多量。
- 2 灰褐色土 シルト層 シルトブロック・耕作による地山ブロックの混土層、マンガン結核多量、鉄斑少量。

第134図 溝跡断面図(1)

30号溝跡との新旧関係は不明であるが、条里関連の溝として掘削が繰り返された結果といえよう。第28～30号溝跡と同様に、第11・12号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第32号溝跡 (第150・153・161図)

A V-24・25、A W-24～26グリッドにかけて位置する。第28～31号溝跡を切り、第24号溝跡に切られている。東側は第24号溝跡に切られており、西側については、調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは22.4m、上幅不明、下幅2.0m前後、深さ80cm前後である。溝跡は推定値がN-89°-Wで、ほぼ東西に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦で、立ち上がりの緩やかな逆台形もしくはU字形に近いと推定される。

第153図の26層は中世以前の溝跡覆土、28～30層は浅間B軽石降下時の大畦畔の基部と考えられる。調査区全体における溝の位置、および溝の規模、溝と畦畔の位置関係等から、第32号溝跡は平安時代から中世へと続く、第7・11号、第8・12号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

そして、この大溝を踏襲している遺構が、第24号溝跡であると思われる。

因みに、6層は18世紀中頃までに堆積した土層で、8・9層は江戸時代の土堤、13・31・32層は近代の松原堀の土堤基部と推定される。

土師器・須恵器の小破片が少量出土したが、図化し得たのは1点のみであった。

第33号溝跡 (第146～148・150・162図)

本遺構は、B区を縦断する形で検出されている。北側は、調査区外に続くが、C区ではプランが確認されなかった。また、一方の第24号溝跡以南についても検出されていない。これは他の多くの溝跡と同様に、遺構の残りが悪いために痕跡が失われている可能性も考えられる。また、この項の始めに述べたように、同一遺構に別の遺構番号を付してしまっ

ている可能性も否定できない。ここでは、B区内での遺構範囲と計測値を記すことにする。

A M～A O-23、A N～A V-24グリッドにかけて位置する。第32・37・45号溝跡を切り、第24号溝跡に切られる。この他に、第34・35号溝跡と重複しているが、ともに新旧関係は不明である。

同区内にある第28・30・31・36～47・49号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。

検出し得た溝の長さは96.0m、上幅1.0～2.7m、下幅0.3～1.5m、深さは35～50cmである。溝跡はN-6°-Wの方位でほぼ南北に走る。

溝跡の幅が広くなったり狭くなったり、あるいは下線縁の揺れはあるものの、平面形はほぼ直線状で、断面形は碗状を呈する。

本遺構についても、近在する古代の条里関連溝と並行する形となる。第34・35号溝跡と同様に、浅間A軽石降下後の水田関係の溝跡と推定される。

図化し得た遺物は4点であった。

第34号溝跡 (第147～149図)

A S-24・25、A T-25～27グリッドにかけて位置する。第37・41～43号溝跡を切る。この他に第33号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。本遺構は、A S-24グリッド内で114°の角度で屈曲している。

北側は、第33号溝跡との重複によりプランが失われており、東側については遺構が途切れている。

検出し得た溝の長さは南北3.0m、東西22.3m、上幅0.4～0.6m、下幅0.2～0.4m、深さ30cm前後である。溝跡の方位は、南北部分がN-10°-W、東西部分がN-94°-Eを指す。

検出し得た範囲内での平面形は、やや開きが大きなL字状を呈し、断面形はU字形に近い。

平面図を見る限り、本遺構の北に位置する第37号溝跡に続くようにも見受けられるが、後述するように、この溝跡は平安時代から中世に続く、条里関連の溝跡と推定されることから、時期的に大きな隔たりのある。

24・25グリッド付近で南北に走る溝跡は、第33・35号溝跡と同様に、浅間A軽石降灰後の、水田関係の溝跡と推定される。

混入したと思われる土師器の小破片が、ごく少数出土したのみで、図化には至らなかった。

第35号溝跡 (第147・149・153・154図)

A T-24~29グリッドにかけて位置する。第40・42号溝跡を切る。この他に第33号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

西側は、第33号溝跡との重複によりプランが失われており、東側については遺構が途切れている。

検出し得た溝の長さは45.1m、上幅1.0~1.4m、下幅0.3~0.5m、深さ20cm前後である。N-89°-Wの方位で、ほぼ東西に走る。平面形はほぼ直線状、断面形は碗状を呈する。

第33・34号溝跡と同様に、浅間A軽石降灰後の、水田関係の溝跡と推定される。

遺物は出土しなかった。

第36号溝跡 (第150・153図)

A U-24、A V-24・25グリッドにかけて位置する。重複関係は見られない。南北共に遺構は途切れている。

検出し得た溝の長さは10.6m、上幅0.9~1.5m、下幅0.2~0.6m、深さ20cm前後である。N-10°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。

平面形は、やや湾曲しているものの、基本的には直線状を呈すると思われる。断面形は、底面が平坦に近く、壁面が緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。第7・8号坪型区画跡の平安時代の、坪界溝と推定される。

遺物は出土していない。

第37号溝跡 (第147・148図)

A P~A U-24グリッドにかけて位置する。第33号溝跡に切られている。この他、第41・45号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

南側は、第33号溝跡との重複によりプランが失われており、北側については遺構が途切れている。

検出し得た溝の長さは南北46.0m、上幅0.6~0.8m、下幅0.2~0.8m、深さ10~20cmである。南北部分がN-7°-Wの方位でほぼ南北に走る。平面形は概ね直線状で、断面形は底面のやや平坦な逆台形に近い。

平安時代から中世に及ぶ、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

土師器の小破片がごく少数出土したが、図化に至るものはなかった。

第39号溝跡 (第150・153図)

A T~A V-25グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。南北端およびA V-25グリッドで、遺構が途切れている。

検出し得た溝の長さは17.2m、上幅0.5~0.8m、下幅0.3~0.6m、深さ30~40cmである。南北部分がN-5°-Wの方位でほぼ南北に走る。平面形は概ね直線状、断面形は底面のやや平坦で、壁面の立ち上がりやや急な逆台形を呈する。

平安時代から中世に及ぶ、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第40号溝跡 (第146~148・150~154図)

A M~A R-24、A R-25、A V-26~29グリッドにかけて位置する。A V-25グリッド内で、105°の角度でL字状に屈曲している。第34・35号溝跡に切られている。北側と東側で、遺構が途切れている。

検出し得た溝の長さは南北方向が95.2m、東西方向が46.5m、上幅0.5~2.0m、下幅0.4~1.6m、深さ20~50cmである。遺構はほぼ直線状で、南北部分N-3°-W、東西方向N-92°-Eの方位で走るL字状を呈する。断面形は、底面が比較的平坦な逆台形に近い。溝の東側に大畦の痕跡が認められた。

平安時代から江戸時代にまで及ぶ、第7・8・11号坪型区画跡の坪界溝と推定される。土師器の小破片がごく少数出土したが、図化に至るものはなかった。

第41号溝跡 (第147・148図)

AR~AS-24グリッドにかけて位置する。第34号溝跡に切られている。第37号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。北側と東側で、遺構が途切れている。遺構の遺存度が極めて悪く、底部の窪みがピット列状に検出された。

検出し得た溝の長さは11.6m、上幅0.3~1.0m、下幅0.2~0.8m、深さ10cm前後である。N-12°-Wの方位を指すと推定される。

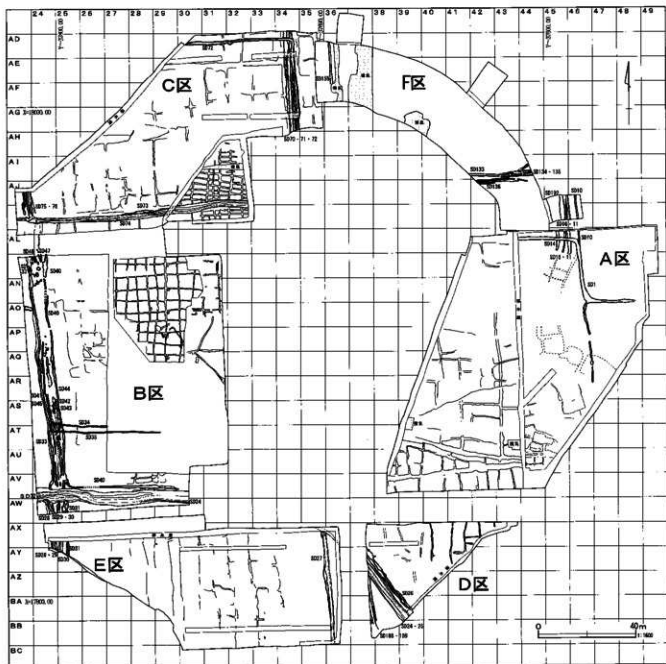
平面形はほぼ直線状で、断面形は逆台形もしくは腕状を呈すると思われる。

平安時代から中世にまで及ぶ、第7・8号坪型区画跡の界界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第42号溝跡 (第147・148図)

AR~AT-24、AT-25グリッドにかけて位置する。第34・35号溝跡に切られている。第43号溝跡



第135図 溝跡その3 第17地点遺構全体図(2)

と重複するが、新旧関係は不明である。

遺構の遺存度が極めて悪く、底部の窪みが途切れ途切れの状態と検出された。

検出し得た溝の長さは21.2m、上幅0.3~1.9m、下幅0.2~1.5m、深さ5cm前後である。N-6°-Wの方位を指すと推定される。

現状から推し測るのは困難であるが、基本的に平面形はほぼ直線状で、断面形は逆台形もしくは腕状

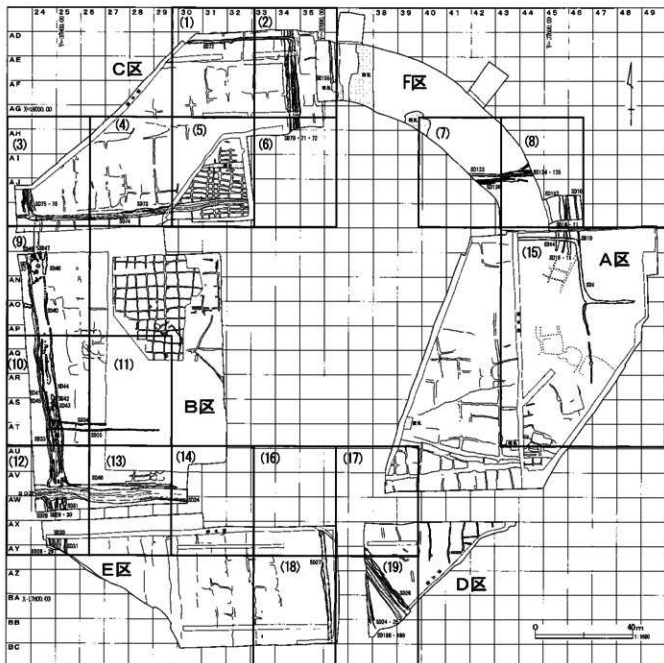
を呈すると思われる。

平安時代から中世にまで及ぶ、第7・8号坪型区画跡の堺界溝と推定される。

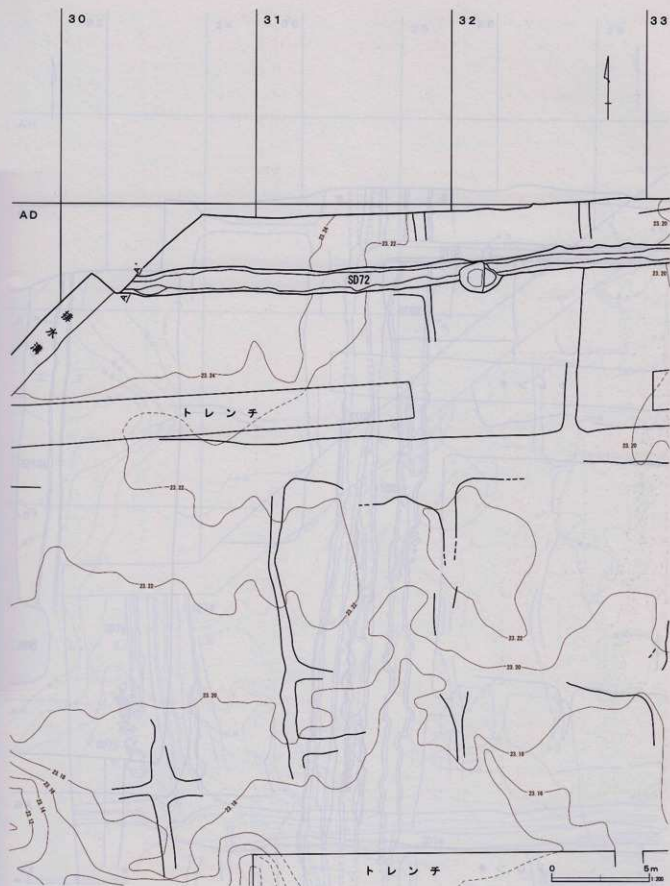
遺物は出土しなかった。

第43号溝跡 (第147・148区)

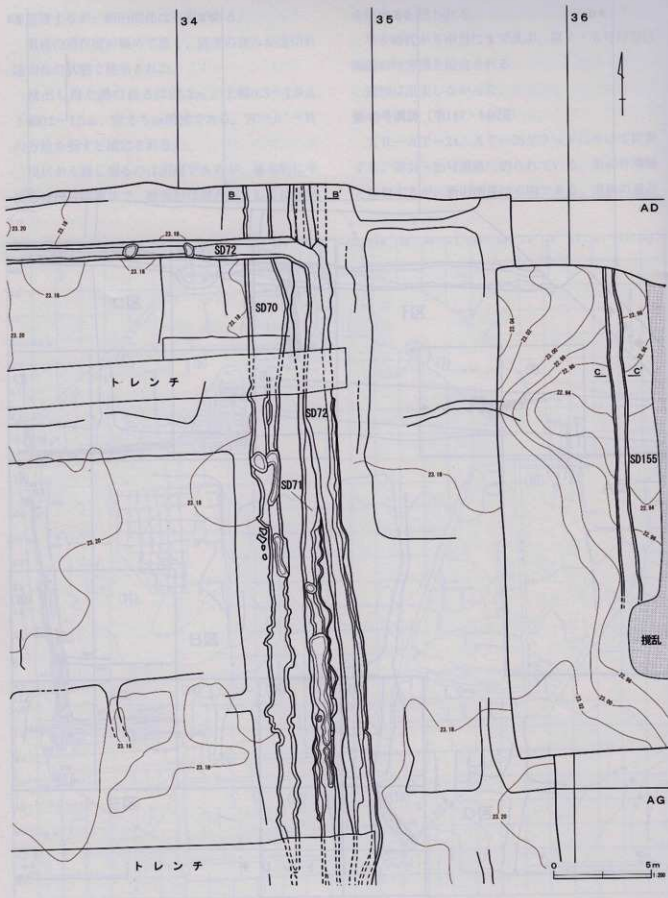
AR~AT-24、AT-25グリッドにかけて位置する。第34・35号溝跡に切られている。第40号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。遺構の遺存



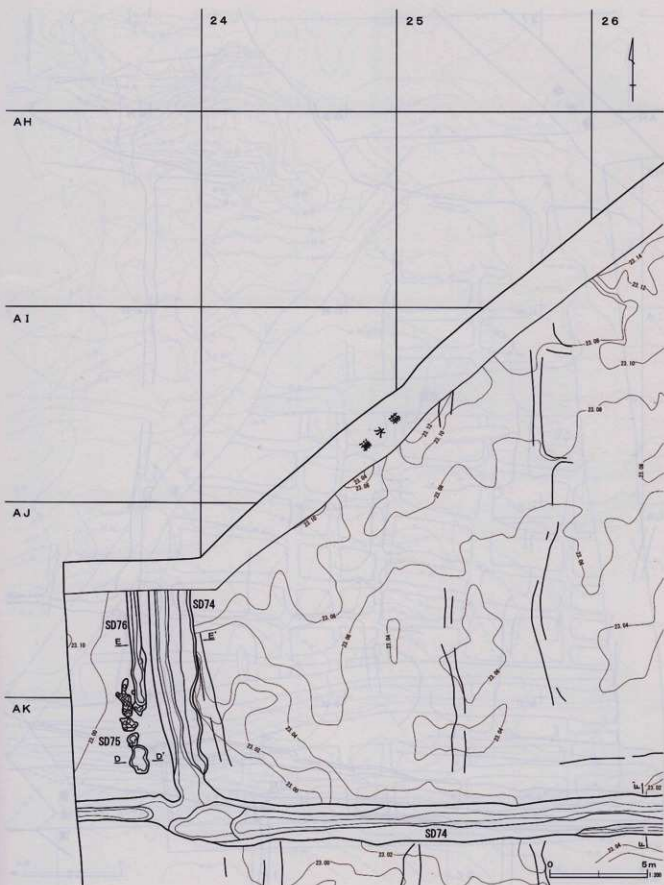
第136図 第17地点溝跡区割図 (3)



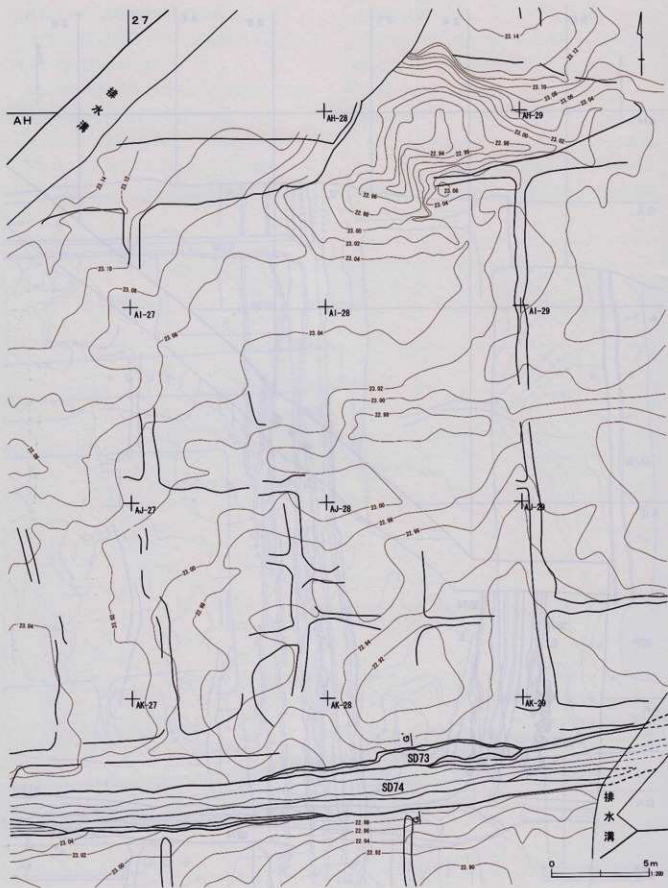
第137図 溝跡 (1)



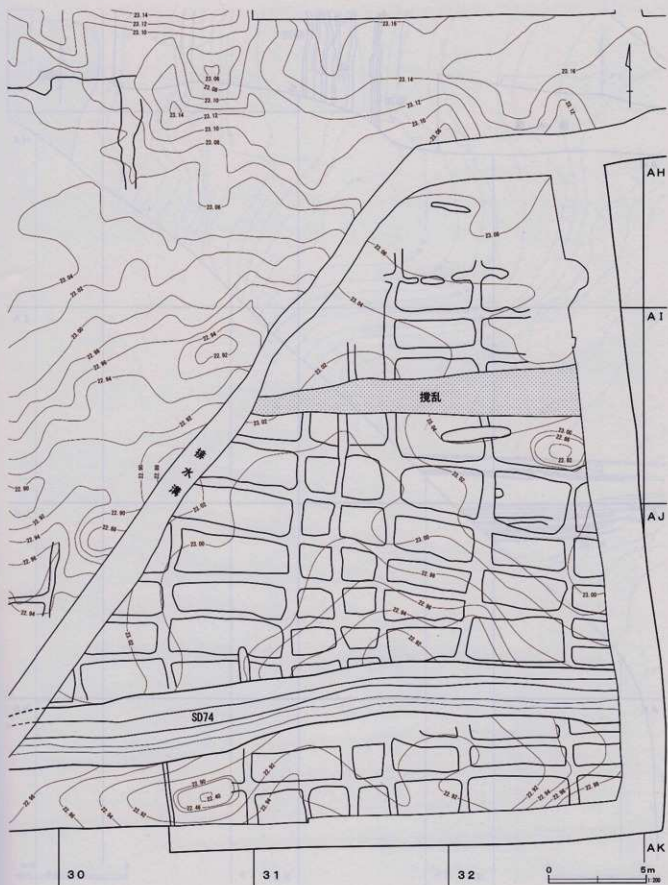
第138図 溝跡 (2)



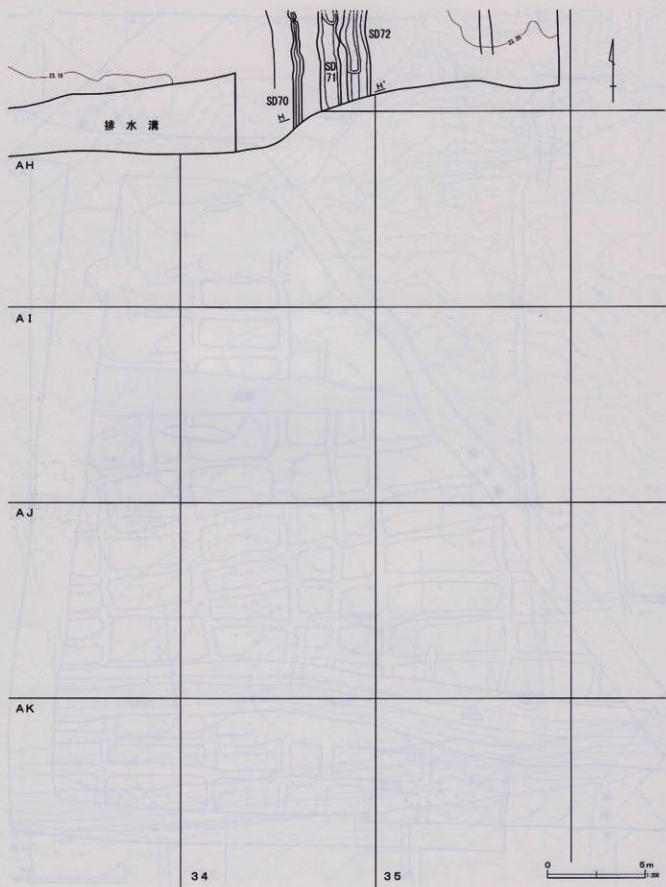
第139图 溝跡 (3)



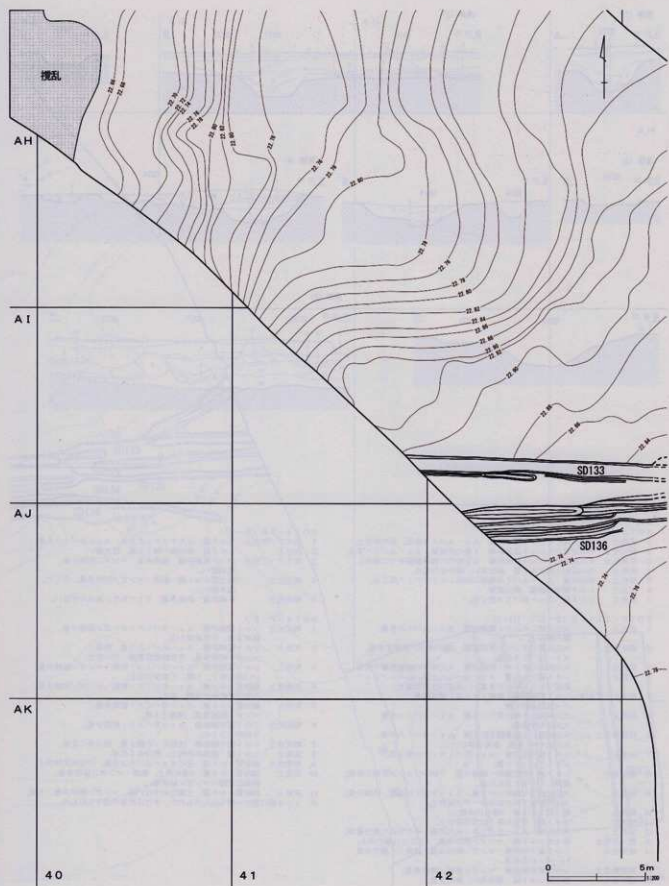
第140图 溝跡 (4)



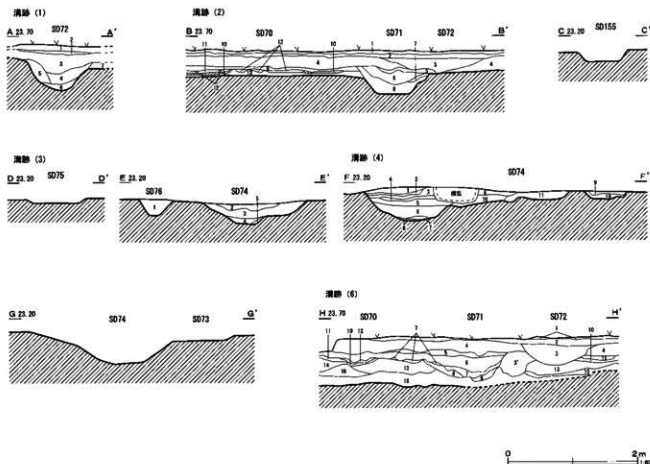
第141图 溝跡 (5)



第142图 清跡 (6)



第143图 清跡 (7)



SD72 (A-A')

- 1 灰色土 火山灰混じりシルト質細砂層 A s-Aバミス多量。現代耕作土。
- 2 暗灰色土 火山灰混じりシルト質細砂層 1層の鉄皮層。A s-Aバミス多量。
- 3 灰褐色土 火山灰混じりシルト質細砂層 大正時代の築港整備時の埋戻し。
- 4 灰色土 火山灰混じりシルト層 高次良い。量や中心低劣。
- 5 灰色土 火山灰混じりA s-Aバミス編層に灰色シルトブロック混じる。
- 6 灰色土 シルト質中細砂層 鉄皮少量。
- 7 灰色土 シルト層 A s-Bバミス混じる。

SD70・71・72 (B-B') (H-H')

- 1 灰色土 火山灰混じりシルト質細砂層 A s-Aバミス多量。現代耕作土。
- 2 暗灰色土 火山灰混じりシルト質細砂層 1層の床土。鉄皮少量層。A s-Aバミス多量。
- 3 灰色土 火山灰混じりシルト質細砂層 大正時代の築港整備で埋戻し。シルト質火山灰層 A s-Aバミス主体。シルトブロック・鉄皮シルトブロック多量。(本案のSD72層土)
- 4 灰オリーブ色土 シルト質細砂層 鉄皮・マンガン結核多量。
- 5 灰色土 半～近意水田土層。火山灰混じり細砂質シルト層 A s-Bバミス少量。火山灰やや多量。
- 6 灰褐色土 火山灰混じり細砂質シルト層 A s-Bバミス少量。火山灰やや多量。鉄皮全体につく。
- 7 灰色土 シルト質火山灰層 A s-Bバミス・火山灰土床。シルトブロック少量。
- 8 暗灰色土 シルト層 炭化物粒・鉄皮少量。中細砂ブロック下層に多量。濃濁していると思われる。
- 9 灰色土 火山灰混じり細砂シルト層 A s-Bバミス多量。鉄皮少量。A s-B互換下の目水田～中位耕作土。
- 10 褐色土 シルト層 平定B降下以前の耕作土。
- 11 灰色土 シルト層 A s-Bバミス・火山灰層。やや高れた降伏層。
- 12 灰色土 粘土質シルト層 マンガン結核多量。9または11層の床土。
- 13 暗灰色土 シルト質中細砂層 マンガン結核多量。鉄皮・土器片少量。8c～9cの赤面層。
- 14 灰褐色土 シルト質中細砂層 マンガン結核・鉄皮多量。
- 15 暗灰色土 粘土質シルト層 高次良い。鉄皮多量。

SD74・76 (E-E')

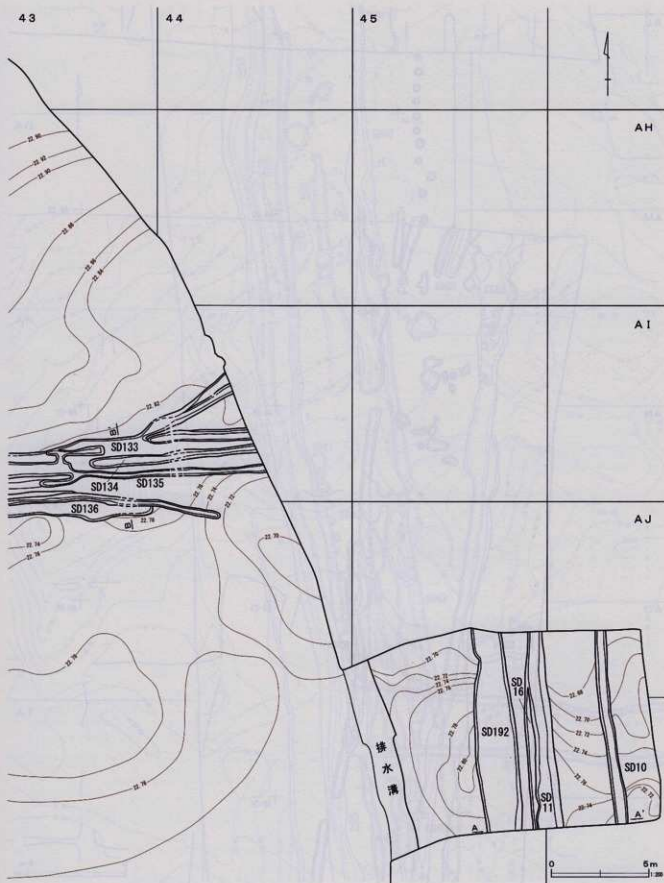
- 1 灰オリーブ色土 シルト層 シルトブロック主体。A s-Bバミス少量。
- 2 灰色土 シルト層 炭化物・種子少量。洗水良い。
- 3 灰オリーブ色土 シルト質細砂層 鉄皮多量。マンガン結核少量。洗水良い。
- 4 暗灰色土 粘土質シルト層 鉄皮・マンガン結核多量。ラミナ。洗水良い。
- 5 暗灰色土 中細砂層 鉄皮多量。ラミナあり。洗水やや悪い。

SD74 (F-F')

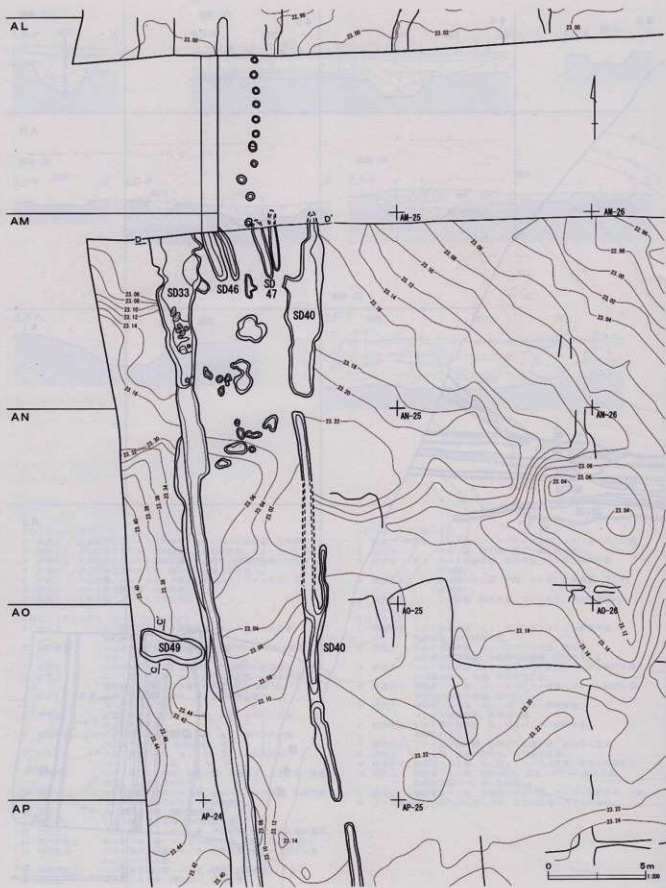
- 1 暗灰色土 シルト質細砂層 A s-Bバミス・マンガン結核少量。鉄皮多量。中位耕作土①。
- 2 灰色土 シルト質細砂層 A s-Bバミス少量。鉄皮・マンガン結核多量。中位鉄皮少量層 ①の床土。
- 3 灰色土 シルト質細砂層 A s-Bバミス・鉄皮・マンガン結核少量。1～2層の床土。大粒。中位耕作土②。
- 4 灰褐色土 細砂質シルト層 A s-Bバミス・鉄皮・マンガン結核少量。中位②の鉄皮少量層。床土。
- 5 灰色土 細砂質シルト層 A s-Bバミス・鉄皮多量。マンガン結核少量。濃濁土上層。
- 6 暗灰色土 シルト質中細砂層 A s-Bバミス・鉄皮少量。中細砂のラミナ。
- 7 暗灰色土 シルト質中細砂層 土器片・小礫少量。鉄皮多く沈着。
- 8 灰色土 シルト層 濃濁の粘性土。鉄皮多量沈着。
- 9 暗灰色土 細砂質シルト層 ⑧にA s-Bバミス多量。平定水田耕作土。
- 10 灰色土 細砂質シルト層 ⑨層の床土。鉄皮・マンガン結核多量。鉄皮少量層～マンガン結核層。
- 11 灰色土 細砂質シルト層 ⑩層の少ない層。マンガン結核多量。大粒。

※ 1～4層は溝中へ落ち込んだものか、または武者が透下したの。

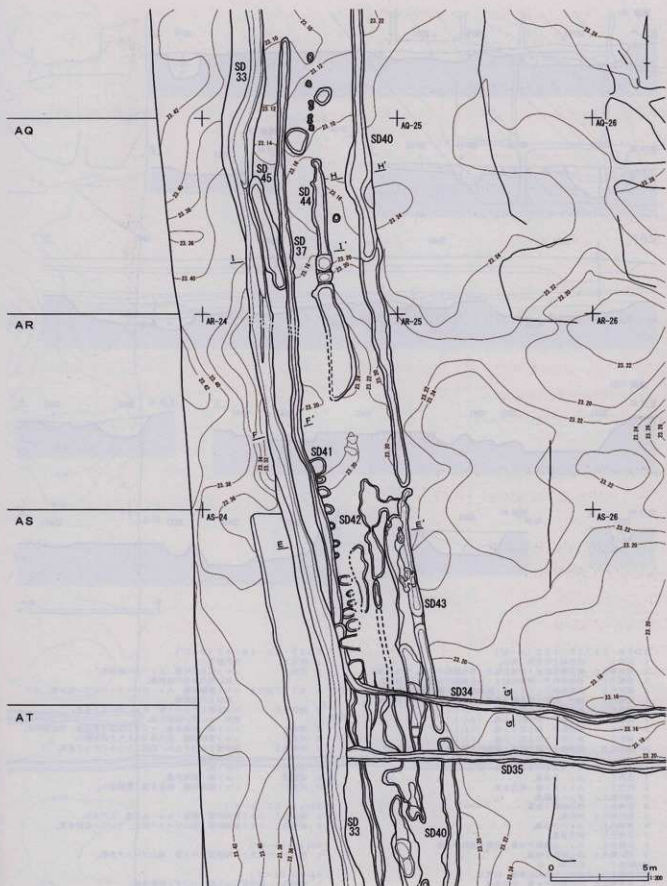
第144図 溝跡断面図 (2)



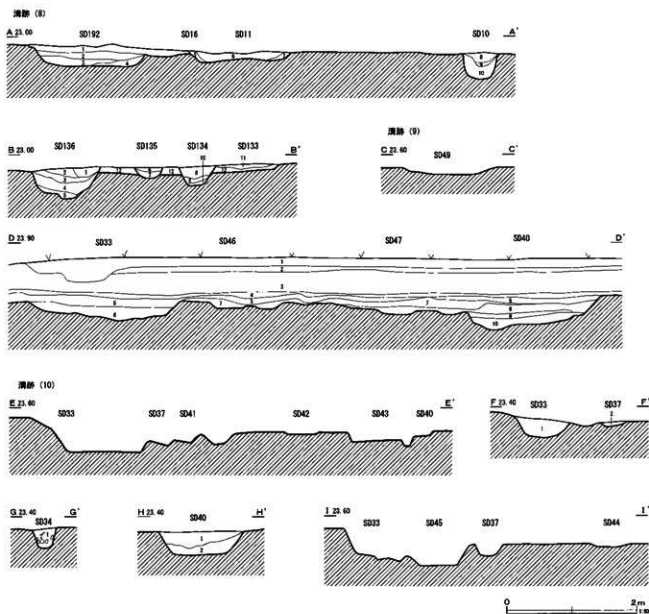
第145图 沟迹 (B)



第146图 清跡 (9)



第147図 満跡 (10)



SD10・11・16・192 (A-A')

- 1 灰色土 灰色粘土を主体、地山。
- 2 暗灰色土 暗灰色粘土・灰色粘土・黄色微粒子少量。(SD192)
- 3 黄褐色土 黄褐色粘土・灰色粘土・黒色微粒子少量。(SD192)
- 4 黄灰色土 黄褐色粘土・ブロック、灰色粘土・黒色微粒子少量。(SD192)
- 5 灰褐色土 凝土・粘土・炭化粒子少量、灰色粘土多量。(SD116)
- 6 褐色土 粘土・炭化粒子少量。(SD11)
- 7 褐色土 粘土・炭化粒子少量。(SD11)
- 8 褐色土 鉄分粘土・粘土粒少量。(SD10)
- 9 褐色土 鉄分粘土・粘土粒少量。(SD10)
- 10 黄褐色土 鉄分粘土・粘土粒・黄褐色土少量。(SD10)

SD133・134・136・136 (B-B')

- 1 灰色土 A s-B多量。
- 2 灰色土 A s-B少量、鉄分多量。
- 3 暗灰色土 A s-B微量。
- 4 灰褐色土 炭化物粒子微量。
- 5 暗褐色土 凝土。
- 6 暗褐色土 A s-B少量。
- 7 暗褐色土 鉄分多量。
- 8 灰褐色土 A s-A微粒子少量、暗褐色微粒子多量。
- 9 明灰褐色土 炭化物粒子微量。
- 10 灰色土 凝土。
- 11 灰色土 A s-B火山灰多量、粘質土。
- 12 灰黄褐色土 炭化物粒子少量、鉄分多量。

SD33・40・46・47 (D-D')

- 1 灰色土 現代耕作土。
- 2 灰色土 シルト質火山灰層 A s-Aの純度高、上面に現代水田の微鉄層。
- 3 オリーブ灰色土 シルト質細砂層 A s-Bバミス・マンガン灰少量、上面以上の凝状層。
- 4 暗灰色土 火山灰層Cリシルト層 A s-Bバミス多量、鉄層・マンガン凝状少量。
- 5 黒色土 シルト層 鉄泥多量、マンガン凝状やや多量、平安耕作土。
- 6 灰色土 シルト質細砂層 洪水等でもたらされた砂か、細砂層またはF Aか、鉄泥多量、シルトブロック多量、色層層土。
- 7 灰褐色土 シルト層。
- 8 灰褐色土 シルト層。
- 9 灰色土 シルト層 鉄泥少量。
- 10 灰色土 シルト質細砂層 鉄泥多量、植物根か。

SD33・37 (E-E')

- 1 暗灰色土 シルト質細砂層 鉄泥・A s-A少量、江戸木か。
- 2 暗褐色土 シルト質細砂層 地山ブロック多量、マンガン結核多量。

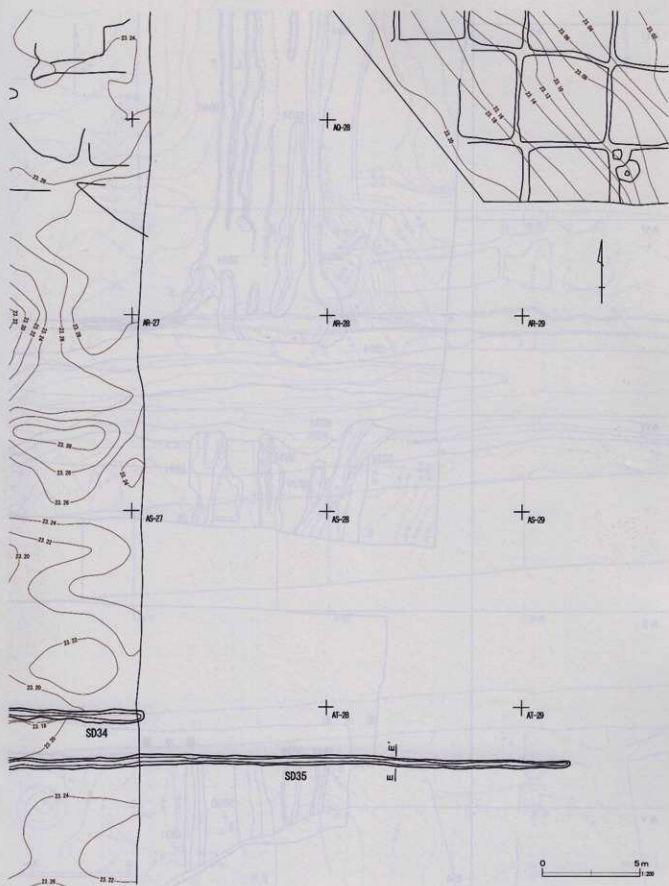
SD34 (G-G')

- 1 暗オリーブ灰色土 細砂質シルト層 地山ブロック多量。

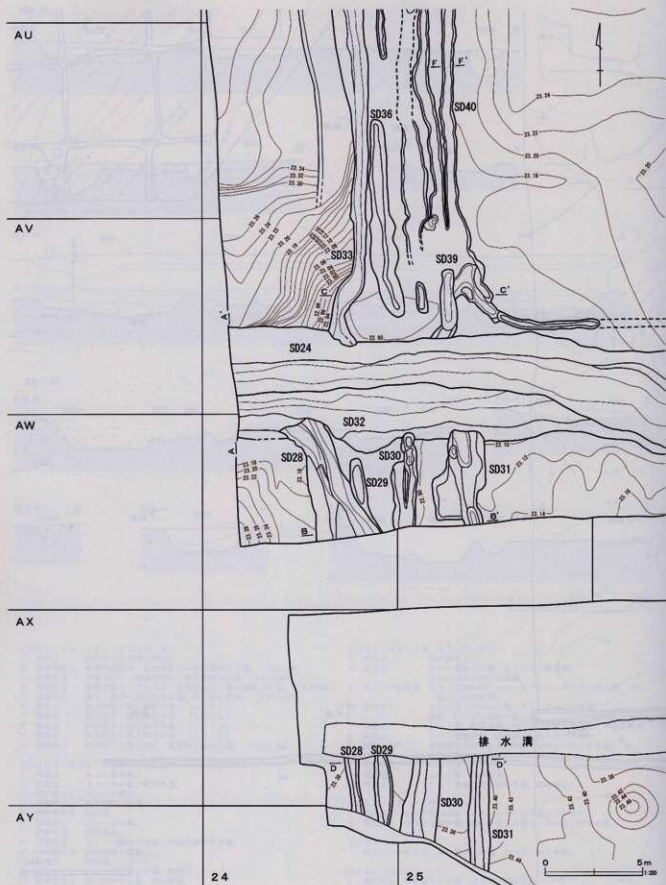
SD40 (H-H')

- 1 暗灰色土 細砂質シルト層 マンガン結核多量。
- 2 暗灰色土 細砂質シルト層 地山ブロック少量。

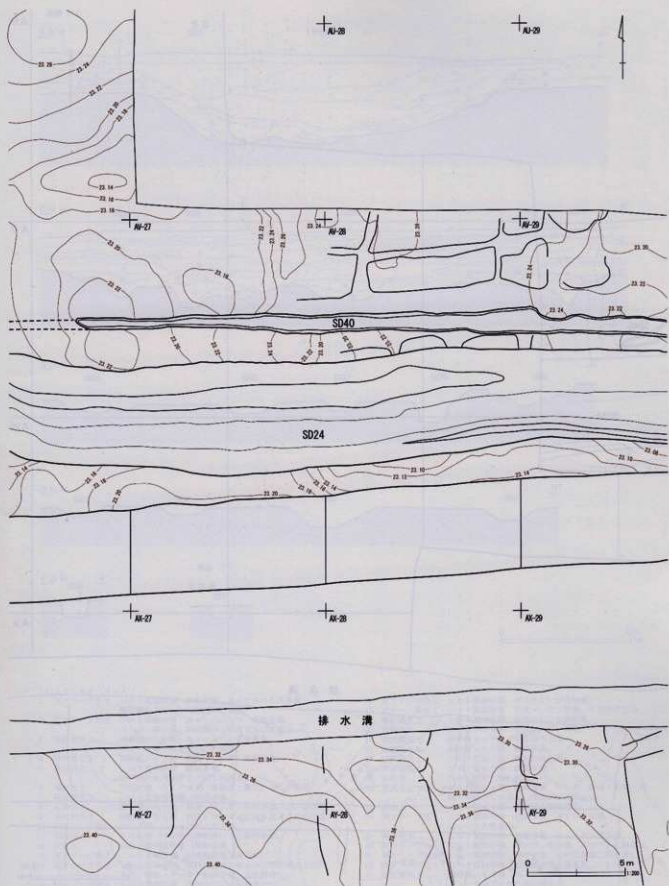
第148図 清跡断面図 (3)



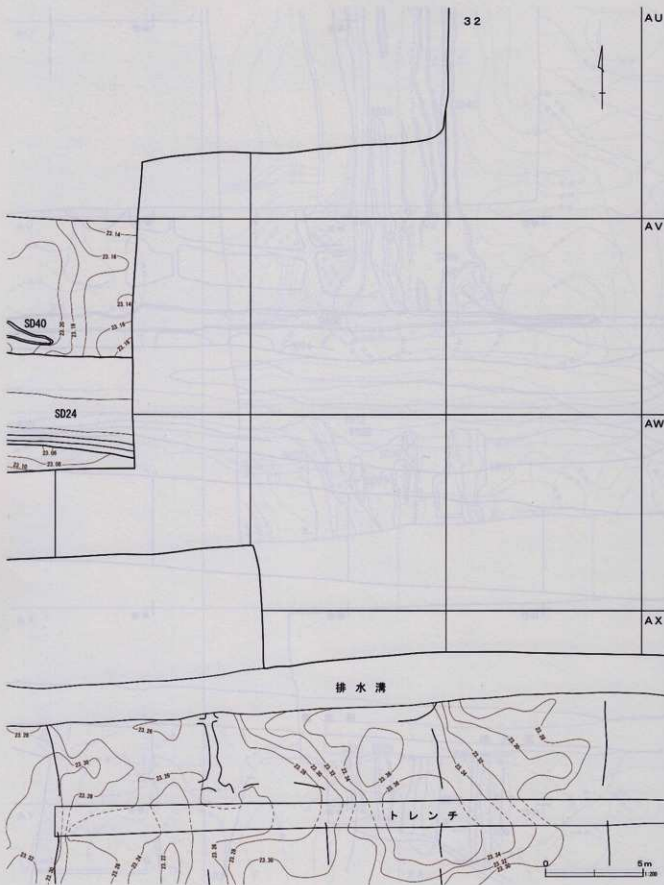
第149図 溝跡 (11)



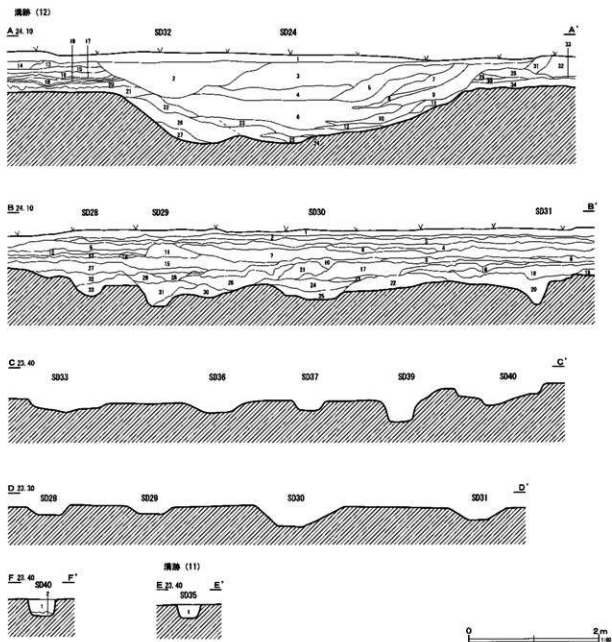
第150図 溝跡 (12)



第151图 溝跡 (13)



第152図 溝跡 (14)



SD24・32 (A-A')

- 1 灰オリーブ色土 シルト質細砂層 鉄痕少量、A s-A'バミス多量、現代耕作土(大正の耕地整理以後)。
- 2 暗オリーブ色土 シルト質細砂層 A s-A'バミス・鉄痕多量、マンガン少量、現代耕作土の灰土及び腐植土。
- 3 暗灰黄色土 細砂質シルト層 A s-A'バミス極多量、A s-A'層下層を含む、松原層。
- 4 暗灰黄色土 細砂質シルト層 鉄痕・マンガン結核多量、シルト質細砂層 鉄痕多量、江戸時代末以降の土に属する地層層。
- 5 黄灰色土 江戸時代末以降の土に属する地層層、中粗砂層 ラミナ構造・遺物出土層位、18c 中頃迄。
- 6 暗灰黄色土 シルト質中細砂層 鉄痕多量、シルト質細砂層 鉄痕多量、A s-B'大時基部、中世オレンジ質鉄層、中世耕作土②
- 7 暗灰黄色土 細砂質シルト層 鉄痕・マンガン結核多量、江戸時代末、江戸時代末、中世オレンジ質鉄層が上部にあり、鉄痕・マンガン結核少量、近世耕作土。
- 8 灰オリーブ色土 シルト層 シルトブロック主体、シルト質 ヨシ等の植物根による鉄痕多量、シルト質中粗砂層 鉄痕多量。
- 9 暗灰黄色土 シルト質細砂層 近代砂礫土層基部、シルト質細砂層 近代水田土、オレンジ質鉄層が上部にあり、鉄痕・マンガン結核少量、近世耕作土。
- 10 灰オリーブ色土 シルト質細砂層 近代オレンジ質鉄層、シルト質細砂層 近代マンガン泥層、中世耕作土①
- 11 暗オリーブ色土 シルト質細砂層 中世オレンジ質鉄層、中世耕作土②
- 12 暗オリーブ色土 シルト質細砂層 中世マンガン泥層、中世耕作土②
- 13 暗灰黄色土 シルト質細砂層 中世オレンジ質鉄層、中世マンガン泥層、中世耕作土②
- 14 暗灰黄色土 細砂質シルト層 中世耕作土②
- 15 暗灰黄色土 細砂質シルト層 鉄痕多量、マンガン結核・遺物少量、層へ中砂ラミナあり、中世以前の溝、シルト質粘土層 地山粘土層薄高土、シルト質細砂層 鉄痕多量、A s-B'少量、A s-B'大時基部、シルト質細砂層 鉄痕多量、A s-B'大時基部、マンガン泥多量、A s-B'大時基部、シルト質細砂層 鉄痕多量、近代砂礫土層基部、シルト質細砂層 近代砂礫土層基部、A s-B'少量、A s-B'層下を含む層の覆層上、細砂質シルト層 B 水田マンガン結核層。

第153図 溝跡断面図 (4)

SD 25・29・30・31 (H-B)

1 暗オリーブ色土	赤灰質シリント層	A s-A型による現代耕作土。
2 灰オリーブ色土	シルト質火山灰層。	A s-Bパミス少量。
3 暗灰黄色土	上面1層に対する灰被覆。	
4 にぶい黄褐色土	細砂質シルト層	1層に対するマンガン結核。近世耕作土。
5 暗褐色土	細砂質シルト層	3層に対する近代鉄層。
6 暗灰黄色土	シルト質細砂層	3層に対する近代鉄層に土層化。
7 暗褐色土	シルト質細砂層	3層に対するマンガン結核。鉄皮多量。A s-Bパミス少量。
8 暗オリーブ褐色土	細砂質シルト層	上面にマンガン結核。鉄皮多量。A s-Bパミス少量。
9 暗オリーブ色土	火山灰混じり細砂質シルト層	上面にマンガン結核。鉄皮・A s-Bパミス多量。
10 黒褐色土	火山灰混じり細砂質シルト層	上面にマンガン結核。鉄皮・A s-Bパミス多量。9層に類似。
11 灰黄褐色土	火山灰混じり細砂質シルト層	A s-Bパミス少量。中世以降。
12 黒褐色土	火山灰混じり細砂質シルト層	A s-Bパミス少量。中世耕作土。
13 暗褐色土	火山灰混じり細砂質シルト層	12層に対応するマンガン結核。鉄皮・A s-B少量。中世以降。
14 暗褐色土	火山灰混じり細砂質シルト層	層に12層に対応するマンガン結核。鉄皮・A s-B少量。中世耕作土。
15 黒褐色土	火山灰混じり細砂質シルト層	12層に対するマンガン結核。鉄皮・A s-B多量。
16 灰黄褐色土	火山灰混じりシルト層	A s-Bパミス少量。マンガン結核・鉄皮多量。
17 黄灰色土	シルト質細砂層	A s-Bパミス・鉄皮多量。マンガン結核少量。
18 灰オリーブ色土	シルト質細砂層	A s-Bパミス・鉄皮多量。A s-B降灰時に近い。

19 オリーブ黒色土	シルト層	鉄皮多量。A s-B降灰時の耕作土。
20 灰色土	シルト層	シルトブロックと粘土ブロックの混生土。
21 黒褐色土	火山灰混じりシルト層	A s-Bパミス・鉄皮多量。
22 暗灰黄色土	シルト層	鉄皮多量。陶瓦片。
23 オリーブ黒色土	火山灰混じりシルト層	A s-Bパミス多量。降下に近い。
24 灰オリーブ色土	シルト層	鉄皮少量。
25 暗灰黄色土	粘土質シルト層	火山灰混じりシルト層
26 暗灰黄色土	火山灰混じりシルト層	A s-Bパミス・鉄皮多量。地山ブロック・マンガン結核少量。
27 にぶい黄褐色土	A s-Bの降下時の全土層境界線。	火山灰混じりシルト層
28 暗灰黄色土	火山灰混じりシルト層	A s-Bパミス・鉄皮少量。マンガン結核多量。
29 オリーブ黒色土	火山灰混じり細砂質シルト層	A s-Bパミス・マンガン結核少量。鉄皮多量。
30 灰オリーブ色土	火山灰混じり細砂質シルト層	A s-Bパミス・鉄皮・マンガン結核多量。A s-B降下時に近い。
31 灰色土	シルト層	鉄皮多量。
32 暗オリーブ色土	粘土質シルト層	粘土ブロック・鉄皮多量。
33 灰色土	火山灰混じりシルト層	A s-Bパミス・鉄皮多量。シルト層

SD 35 (H-E)

1 褐色土 黄灰色粘土粒(φ=2mm)少量。

SD 40 (F-F)

1 暗灰色土 細砂質シルト層

マンガン結核多量。

2 暗灰色土 細砂質シルト層

地山ブロック少量。

第154図 満跡断面図(5)

度が極めて悪く、不整形の状態で検出された。南北共に途切れている。

検出し得た溝の長さは16.7m、上幅0.4~1.3m、下幅0.2~0.9m、深さ20cm前後である。N-7°-Wの方位を指すと推定される。

現状から推し測るのは困難であるが、基本的に平面形はほぼ直線状で、断面形は逆台形もしくは椀状を呈すると思われる。

浅間B軽石降灰以前の、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第44号溝跡(第147・148・162図)

A P-A R-24グリッドにかけて位置する。A P-A Qグリッドにみられるピット列も、本遺構と同一のものと判断した。南北共に途切れている。遺構の遺存度が極めて悪く、不整形の状態で検出された。第42号溝跡とした遺構も、第44号溝跡の続きであろうか。

検出し得た溝の長さは21.3m、上幅0.3~1.2m、下幅0.1~0.8m、深さ5~10cmである。N-5°-Wの方位を指すと推定される。

現状から推し測るのは困難であるが、基本的に平

面形はほぼ直線状で、断面形は逆台形もしくは椀状を呈すると思われる。

平安時代~中世に及ぶ、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

土師器の小破片がごく少数検出されているが、図化には至らなかった。図化し得た遺物は凝灰岩製の砥石が1点のみであった。法量は、長さ5.2cm、幅3.9cm、厚さ1.6cm、孔径0.7cm、重量47.6gを測る。

第45号溝跡(第147・148図)

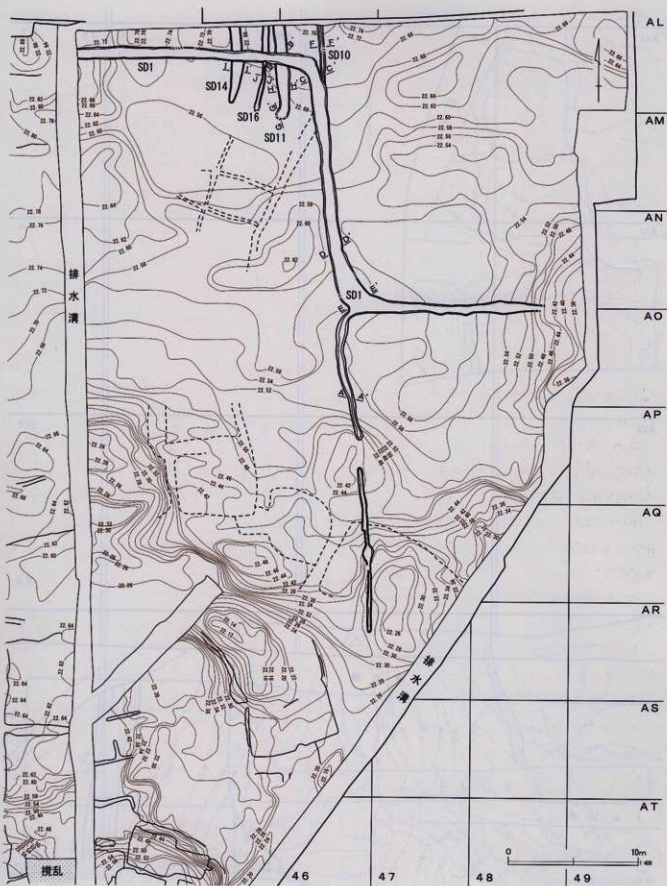
A Q-24グリッドにかけて位置する。南北共に途切れている。第33号溝跡に切られている。第37号溝跡とも接しているが、本遺構が切られていると思われる。

検出し得た溝の長さは6.0m、上幅0.5~1.0m、下幅0.3~0.5m、深さ30cm前後である。N-5°-Wの方位で、概ね南北に走る。平面形はほぼ直線状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

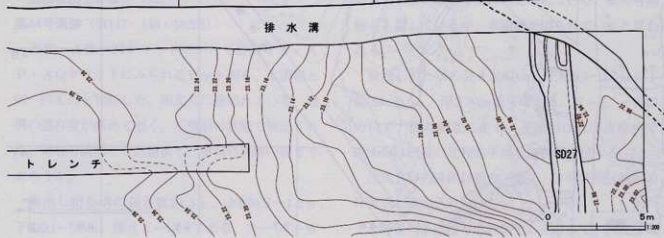
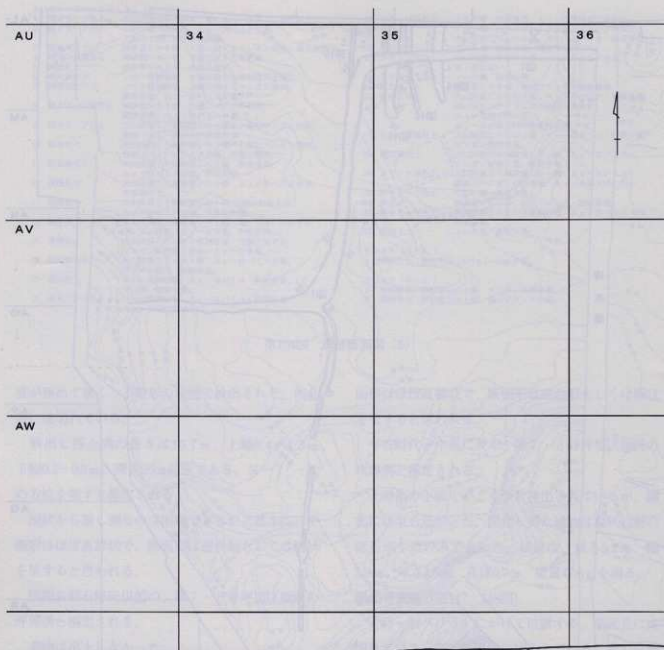
浅間B軽石降灰以前の、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

土師器の小破片が1点出土したのみで、図化には至らなかった。

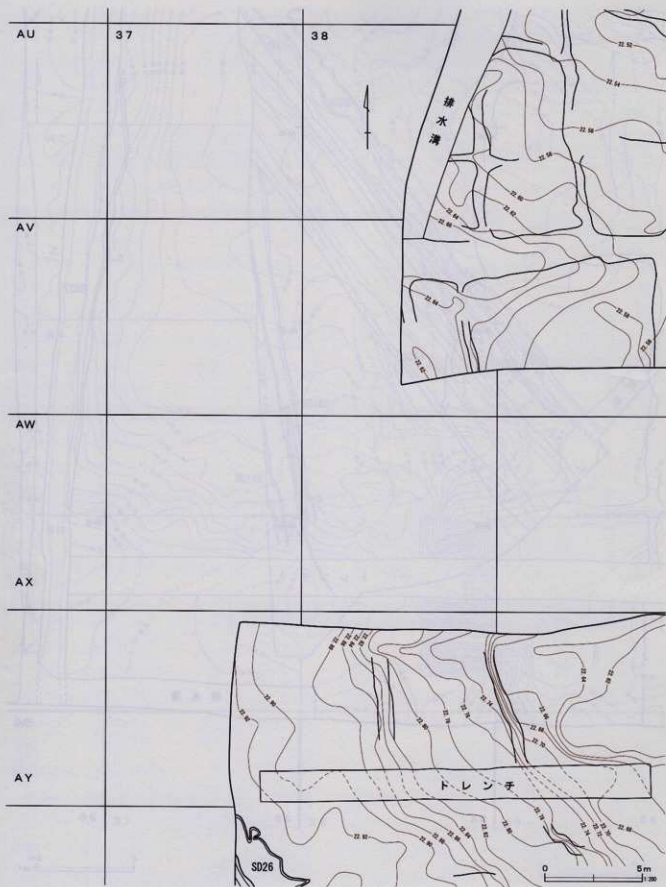
第46号溝跡(第126・134・146・148図)



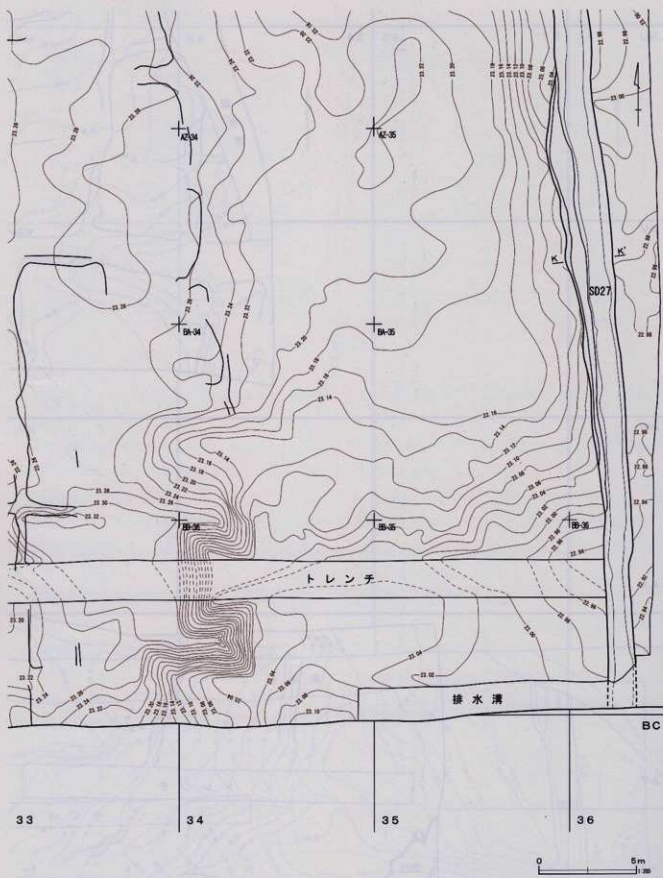
第155圖 溝跡 (15)



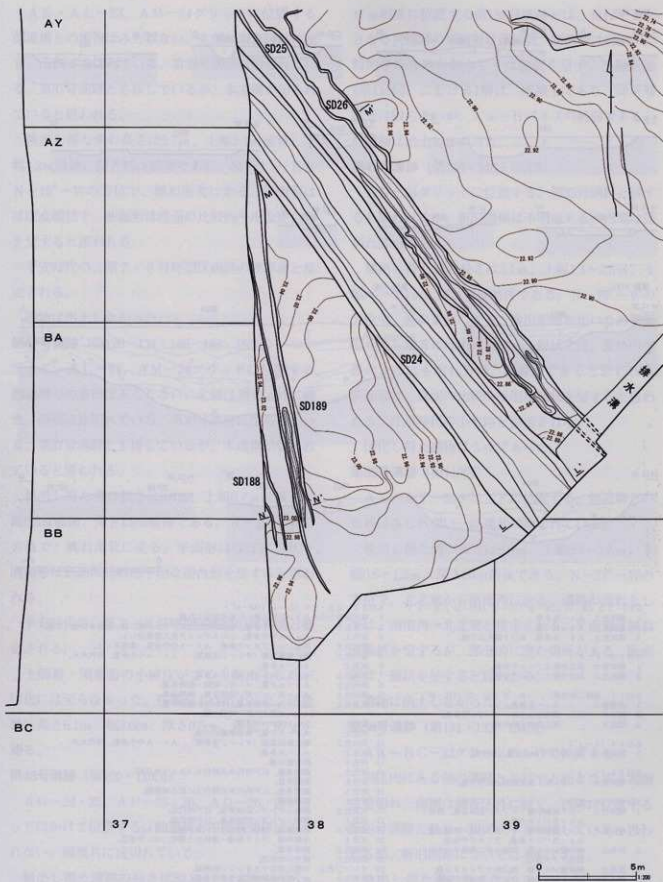
第156図 溝跡 (16)



第157図 溝跡 (17)

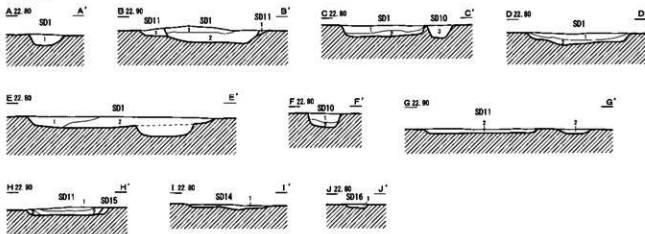


第158図 溝跡 (18)

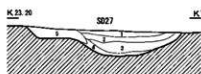


第159図 溝跡 (19)

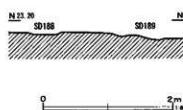
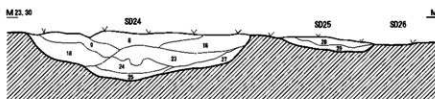
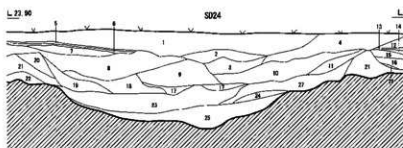
溝跡 (15)



溝跡 (16)



溝跡 (18)



SD1・10 (A-A')(B-B')(C-C')(D-D')(E-E')

- 1 黒灰色土 A s-B多量。
 - 2 黒灰色土 A s-B少量。
 - 3 黒灰色土 A s-B多量。SD1層土より厚。
- SD10 (F-F')
- 1 地灰色土 黄白色粘土ブロック少量。
 - 2 地灰色土 黄白色粘土ブロック少量。

SD11 全体に粘性強い。(B-B')(G-G')(H-H')

- 1 灰褐色土 A s-B少量。
- 2 灰オリ・褐色土 黄灰色粘土層・マンガン粒多量。
- 3 灰褐色土 黄灰色粘土粒少量。

SD14 (I-I')

- 1 褐色土 地山粒(φ0.5cm)少量。粘性強。

SD16 (J-J')

- 1 地灰色土 マンガン粒・黄灰色粘土粒子少量。

SD27 (K-K')

- 1 暗灰色土 シルト質砂層 マンガン結核多量、鉄斑・A s-Bパミス少量。
- 2 暗灰色土 シルト質砂層 マンガン結核・鉄斑少量、A s-Bパミス少量。ラミナや砂層。
- 3 灰色土 細砂質シルト層 均質な中に黒色ラミナと黄色ラミナ混在。
- 4 灰色土 細砂質シルト層 地山粘土ブロック少量。
- 5 暗灰色土 シルト質砂層 マンガン結核やや多量、鉄斑少量。

SD24・25・26 (L-L')(M-M')

- 1 現代耕作土のカクランが硬くなった後水田化した層。
- 1 黒灰色土 A s-Aやや多量。現代耕作土のカクランが硬くなった後水田化した層。
- 2 灰褐色土 A s-Aやや多量。シルトブロック混入硬直化した土。
- 3 灰褐色土 灰褐色シルトブロック多量。A s-Aやや多量。接壤灰土。
- 4 黄灰色土 黄化鉄斑層(オレンジ斑鉄層)、A s-Aやや多量。現代水田。
- 5 灰褐色土 A s-A多量。
- 6 灰褐色土 シルトブロック・A s-A多量。
- 7 黄灰色土 A s-A少量。マンガン結核・鉄斑多量。
- 8 黄灰色土 A s-A・マンガン結核少量。鉄斑多量。
- 9 灰褐色土 A s-A・鉄斑多量。マンガン結核少量。
- 10 灰褐色土 A s-A層下に近い時層の順。シルトブロック主体。
- 11 灰褐色土 A s-A少量。層境整齊な境。
- 12 灰褐色土 黄化鉄斑層(オレンジ斑鉄層)、A s-Aやや多量。現代水田。
- 13 灰褐色土 A s-A多量。
- 14 灰褐色土 鉄斑少量。
- 15 灰褐色土 鉄斑多量。江戸時代水田耕作土(A s-A以前)。
- 16 灰褐色土 鉄斑多量。
- 17 灰褐色土 鉄斑多量。江戸時代水田耕作土に似る堆積層。
- 18 灰褐色土 鉄斑・マンガン結核多量。江戸時代。
- 19 灰褐色土 鉄斑・マンガン結核少量。江戸時代。
- 20 暗灰色土 鉄斑多量。地山。鉄斑は玉等の粒によるもの。
- 21 灰褐色土 中層砂質ラミナ発達・遺物出土層位。18c中頃迄。
- 22 暗灰色土 鉄斑多量。
- 23 暗灰色土 線やかな水沈。
- 24 オレンジ色土 16層に対応するオレンジ斑鉄層。
- 25 灰褐色土 ヲシ等の礫物堆による鉄斑多量。
- 26 灰褐色土 A s-A少量。鉄斑多量。直正がボコボコの溝。離立(クロヌリ溝)。
- 27 暗灰色土 鉄斑少量。直正がボコボコの溝。離立(クロヌリ溝)。

第160図 溝跡断面図 (6)

A K・A L-23、A M-24グリッドに位置する。他遺構との重複はみられない。北側は調査区外に続き、南側は途切れている。第33号溝跡に切られている。第37号溝跡とも接しているが、本遺構が切られていると思われる。

検出し得た溝の長さは5.7m、上幅2.1m前後、下幅1.2m前後、深さ15cm前後である。N-1°-EとN-19°-Wの方位で、概ね南北に走る。平面形はほぼ直線状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈すると思われる。

平安時代の、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第47号溝跡 (第126・134・146・148・162図)

A K・A L-24、A M-24グリッドに位置する。他遺構との重複はみられない。北側は調査区外に続き、南側は途切れている。第33号溝跡に切られている。第37号溝跡とも接しているが、本遺構が切られていると思われる。

検出し得た溝の長さは2.6m、上幅0.7m前後、下幅0.3m前後、深さ15cm前後である。N-19°-Wの方位で、概ね南北に走る。平面形はほぼ直線状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈すると思われる。

平安時代の、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

土師器・須恵器の小破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。石帯が1点出土した。法量は、長さ6.1cm、幅3.0cm、厚さ0.6cm、重量27.97gを測る。

第48号溝跡 (第109・110図)

A O-24・25、A P-25・26、A Q-26・27グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。両端共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは32.8m、上幅0.2~0.6m、下幅0.1~0.4m、深さは5~10cmである。溝跡は概ねN-47°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。

17m程東に位置する第183号溝跡とは、並行する形となる。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。土層断面(第110図)における1層は、堆積土であり、降灰層準とは限らないが、A s-Bバミスの純層である。

遺物は出土しなかった。

第49号溝跡 (第146・148・162図)

A U-24グリッドに位置する。第33号溝跡と接すると思われるが、新旧関係は不明である。西側は途切れている。

検出し得た溝の長さは3.1m、上幅1.4~2.5m、下幅0.7~1.1m、深さ15cm前後である。N-79°-Wの方位で、概ね東西に走る。検出範囲が短いため平面形を推し量るには困難を伴う。現状では、長めの土塊のようにも取れるが、直線状であると思われる。断面形は、底面の比較的平坦な皿状を呈すると思われる。江戸時代の小水路と推定される。

図化し得た遺物は5点であった。

第53号溝跡 (第118図)

A X・A Y-35グリッドに位置する。他遺構との重複はみられない。両端共に途切れている。

検出し得た溝の長さは9.6m、上幅0.8~1.6m、下幅0.6~1.2m、深さ20cm前後である。N-27°-Wの方位で、北北東から南南西に走る。溝跡の流れとしては、南南西→北北東と推定される。平面形は概ね直線状を呈するが、部分的に窪み箇所がある。断面形は、皿状を呈すると思われる。

遺物は出土しなかった。

第58号溝跡 (第131・133・134図)

A X-B C-32グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡と並行する形となる。北側は途切れ、南側は調査区外に続く。西隣に位置する第59号溝跡とB B-32グリッドで接していると思われるが、新旧関係については不明である。

検出し得た溝の長さは40.9m、上幅1.0~1.5m、下幅0.6m前後、深さは20cm前後である。溝跡はN-6°-Wの方位で南北方向に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる椀形を呈する。浅間B軽石降灰以前の、地割溝と考えられる。

第58・59は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返しの結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第59号溝跡（第131・133・134図）

A X～B B-32グリッドにかけて位置する。途中4箇所ほど途切れて入るが、底面の浅い部分が失われた結果と判断して、同一の遺構として扱った。同区内にある他の溝跡と並行する形となる。南北とも途切れている。東隣に位置する第58号溝跡とB B-32グリッドで接していると思われるが、新旧関係については不明である。

途切れている部分も含めて、検出し得た溝の長さは40.2m、上幅0.3～1.3m、下幅0.1～0.3m、深さは10～20cmである。溝跡はN-6°-Wの方位でほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる椀形に近い。平安時代の地割溝と考えられる。

第58・59は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返しの結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第60号溝跡（第131・133・134図）

A W～B C-30グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。南側は途切れ、北側は調査区外に続くが、北側に位置するB区では、続き部分は確認されなかった。

A V・A X-30グリッドでは、西隣に位置する第61号溝跡と接していない。しかし、A X・A Y-30グリッドでは第61号溝跡と重複している溝跡が検出されており、これを第60号溝跡として判断した。但し、両者の新旧関係については、残念ながら確認できなかった。

検出し得た溝の長さは19.3m、上幅1.0～1.3m、下幅0.5～0.8m、深さは10～20cmである。溝跡は

N-2°-Wを指す。

第60号溝跡は、底面の浅い部分が失われていることから、溝跡の平面形を窺うには無理があるが、概ね直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。平安時代の地割溝と考えられる。

第60・61号溝跡は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返しの結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第61号溝跡（第131・133・134図）

A W～B C-30グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。南北とも途切れているが、北側に位置するB区では、この溝跡の続きの部分は確認されなかった。

A V・A X-30グリッドでは、東隣に位置する第60号溝跡と接していないものの、A X・A Y-30グリッドでは本遺構と重複する溝跡が検出されており、これを第60号溝跡として判断した。但し、両者の新旧関係については、残念ながら確認できなかった。

検出し得た溝の長さは54.6m、上幅2.7～3.3m、下幅1.8m前後、深さは20cm前後である。溝跡はN-2°-Wを指す。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。平安時代の地割溝と考えられる。

第60・61号溝跡は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返しの結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第62号溝跡（第130・132・134図）

A W～B A-29グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。

26～29グリッドにかけて、第62・63号溝跡、第64・65号溝跡、第66・67号溝跡、第68・69号溝跡といったように、2条ずつ重なるようにして検出されている状況が見て取れる。

南北とも途切れているが、北側に位置するB区では、この溝跡の続き部分は確認されなかった。

西隣の第63号溝跡とは、位置的に非常に近いが、

重複関係はみられない。

検出し得た溝跡の長さは42.6m、上幅0.8～1.3m、下幅0.5～0.8m、深さは20～30cmである。溝跡はN-4°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。平安時代の地割溝と考えられる。

第62・63号溝跡は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返しの結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第63号溝跡 (第130・132・134区)

A W～B A-29グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。

26～29グリッドにかけて、第62・63号溝跡、第64・65号溝跡、第66・67号溝跡、第68・69号溝跡といったように、2条ずつ重なるようにして検出されている状況が見て取れる。

南北とも途切れているが、北側に位置するB区では、この溝跡の続き部分は確認されなかった。東隣の第62号溝跡とは、位置的に非常に近いが、重複関係はみられない。

検出し得た溝跡の長さは40.4m、上幅0.9～1.8m、下幅0.5～1.5m、深さは20～30cmである。溝跡はN-4°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。平安時代の地割溝と考えられる。

第62・63号溝跡は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返しの結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第64号溝跡 (第130・132・134区)

A Y～B A-28グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。

26～29グリッドにかけて、第62・63号溝跡、第64・65号溝跡、第66・67号溝跡、第68・69号溝跡といったように、2条ずつ重なるようにして検出されている状況が見て取れる。

北側は途切れており、北側に位置するB区でも、この溝跡の続き部分は確認されていない。南側は調査区外に続いている。

西隣の第65号溝跡とは、位置的に非常に近いが、重複関係はみられない。南側の調査区境界線の壁面部分では合流しているが、残念ながら新旧関係は認められなかった。

検出し得た溝跡の長さは23.8m、上幅0.6～1.8m、下幅0.5～1.8m、深さは20～30cmである。溝跡はN-1°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。平安時代の地割溝もしくは条里溝と考えられる。

第64・65号溝跡は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返しの結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第65号溝跡 (第130・132・134区)

A Y～B A-28グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。

26～29グリッドにかけて、第62・63号溝跡、第64・65号溝跡、第66・67号溝跡、第68・69号溝跡といったように、2条ずつ重なるようにして検出されている状況が見て取れる。

北側は途切れており、北側に位置するB区でも、この溝跡の続き部分は確認されていない。南側は調査区外に続いている。

東隣の第64号溝跡とは、位置的に非常に近いが、重複関係はみられない。南側の調査区境界線の壁面部分では合流しているが、残念ながら新旧関係は認められなかった。

検出し得た溝跡の長さは22.3m、上幅0.6～1.3m、下幅0.3～0.6m、深さは20～30cmである。溝跡はN-2°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、南側でやや幅広になる。断面形は、壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。平安時代の地割溝と考えられる。

第64・65号溝跡は、新旧関係は不明であるが、掘

削の繰り返し結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第66号溝跡 (第130・132・134図)

A Y～A Z-27グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。

26～29グリッドにかけて、第62・63号溝跡、第64・65号溝跡、第66・67号溝跡、第68・69号溝跡といったように、2条ずつが重なるようにして検出されている状況が見て取れる。

北側は途切れており、北側に位置するB区でも、この溝跡の続き部分は確認されていない。南側は調査区外に続いている。

西隣の第67号溝跡と重複関係にあるが、残念ながら新旧は不明である。検出状況からみて、本遺構が切られているのであろうか。

検出し得た溝跡の長さは6.6m、上幅2.2m前後、下幅0.4～1.2m、深さは30cm前後である。溝跡はN-1°-Eの方位で、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。平安時代の地割溝と考えられる。

第66・67号溝跡は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返し結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第67号溝跡 (第130・132・134図)

A X～A Z-27グリッドにかけて位置する。

同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。

26～29グリッドにかけて、第62・63号溝跡、第64・65号溝跡、第66・67号溝跡、第68・69号溝跡といったように、2条ずつ重なるようにして検出されている状況が見て取れる。

北側は途切れており、北側に位置するB区でも、この溝跡の続き部分は確認されていない。南側は調査区外に続いている。

第67号溝跡と重複関係にあるが、残念ながら新旧は不明である。検出状況からみて、本遺構が切られているのであろうか。

検出し得た溝跡の長さは16.5m、上幅4.8～5.0m、下幅0.3～3.5m、深さは20～30cmである。溝跡はN-1°-Eの方位で、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状を呈す。平安時代の地割溝と考えられる。

第66・67号溝跡は、新旧関係は不明であるものの、掘削の繰り返し結果であろうか。

遺物は出土しなかった。

第68・69号溝跡 (第117・120・130・132・134・162図)

A X～A Z-26・27グリッドにかけて位置する。同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。

26～29グリッドにかけて、第62・63号溝跡、第64・65号溝跡、第66・67号溝跡、第68・69号溝跡といったように、2条ずつ重なるようにして検出されている状況が見て取れる。北側は途切れており、北側に位置するB区でも、この溝跡の続き部分は確認されていない。南側は調査区外に続いている。

発掘調査時に、2条の溝跡との認識から第68・69号溝跡と銘々されたが、両溝跡のプランが確定できなかった。そのため、平面図上では1条のみの表現となった。新旧関係については、第69号溝跡に切られていると判断した。

遺構の計測値については、2条の溝跡が重複した状態での数値である。検出し得た溝跡の長さは13.2m、上幅3.6～4.2m、下幅2.1～2.8m、深さは20～30cmである。溝跡はN-9°-Eの方位で、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形は底面が比較的平坦で、壁面が緩やかに立ち上がる皿状に近い。

第69号溝跡は、第68号溝跡を掘り直したものと推定される。共に平安時代の溝跡と思われるが、条里関連であるのか、または地割溝であるのかは不明である。

第69号溝跡からは、土師器・須恵器が少数出土し

たが、図化し得たのは1点のみであった。

第70号溝跡 (第138・142・144・162図)

A C～A G-34グリッドにかけて位置する。南北共に調査区外に続く。第72号溝跡に切られている。位置・方位・規模・時期等からみて、E区内の第27号溝跡と、同一遺構の可能性も考えられる。

C区内で検出した溝の長さは41.6mで、上幅0.8～1.0m、下幅0.3～0.7m、深さ10cm前後である。N-3°-Wの方位で、南北に走る。第27号溝跡を同一遺構とした場合の、検出できた長さは249.6mとなる。平面形はほぼ直線状で、断面形は碗状または皿状を呈する。

浅間B軽石降灰以前の、第2・3号坪型区画跡の坪界溝と推定される。第27号溝跡も本遺構と同一遺構であれば、さらに第6・7号、第10・11号坪型区画跡の坪界溝となる。

図化し得た遺物は3点であった。

第71号溝跡 (第138・142・144・162図)

A C～A G-34グリッドにかけて位置する。南北共に調査区外に続く。第72号溝跡に切られている。第70号溝跡と同様に、位置・方位・規模・時期等からみて、E区内の第27号溝跡と同一遺構の可能性も考えられる。

C区内で検出した溝の長さは40.6mで、上幅1.4m前後、下幅0.4～0.7m前後、深さ40cm前後である。N-2°-Wの方位で、南北に走る。第27号溝跡を同一遺構とした場合の、検出できた長さは249.2mとなる。平面形はほぼ直線状で、断面形は碗状を呈する。

第144図の土層断面B-1'にみえる第11層は、浅間B軽石降灰以前の水田耕作土、第9層は、浅間B軽石降灰後復旧し、中世まで継続した水田耕作土と推定される。本遺構は、この水田耕作土を切っている。第71号溝跡は、平安時代から中世まで及んだ、第2・3号坪型区画跡の坪界溝と推定される。第27号溝跡も同一遺構であれば、さらに第6・7号、第10・11号坪型区画跡の坪界溝となる。

出土した遺物は1点のみであった。

第72号溝跡 (第137・138・142・144・162図)

A D-30-34、A E～A G-34グリッドにかけて位置する。第70・71号溝跡を切っている。西から東へN-86°-Eの方位で走り、A D-34グリッド内で直角に曲がってN-4°-Wの方位で南下している。

検出し得た溝の長さは東西部分で43.0m、南北部分で37.0m、上幅1.3～1.7m、下幅0.6～0.8m、深さは20～40cmである。平面形は各々直線状で、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる逆台形もしくは碗状を呈する。なお調査時点で、A D-34グリッド内で南方向に屈曲する溝跡と判断したが、調査区北側の境界線壁面での土層断面にも第72号溝跡のものと思われる土層が確認されている(第144図C-C'3層)。この部分の確認距離は2.8mで、調査区北側に続く。この点について、考えられる可能性としては、

- 1: L字型の第72号溝跡の屈曲部分に南北方向の近世の溝が重複しており、時期的にも異なる場合。
- 2: L字型ではなく、T字型を呈する場合。
- 3: L字状の溝跡に、北側から南北方向の溝跡が合流しており、一緒に機能していた場合。

3の場合が、可能性としては最も高いと思われる。なお、同図3'層は、当初の第72号溝跡の覆土であり、3層はこれを掘り直した溝跡であると推定される。江戸時代の地割溝、または水田関連の溝と考えられる。南北に走る部分については、位置的にも方位的にも踏襲していると思われる。第70～72号溝跡脇に大畦が認められた。

図化し得た遺物は3点であった。

第73号溝跡 (第140・144図)

A J-30-32、A K-23・24・29-32グリッドにかけて位置する。72号溝跡の東西に走る部分とは並行する形となる。第74号溝跡を切る。両溝跡のプランは、検出時点では非常に複雑に絡み合っており、平面図(第4図)上では、遺構の深度のために、本遺構が第74号溝跡に切られているかの様相を呈して

いる。そのため、本遺構の西側部分については、直線状に調査区外に続くのか、あるいは第74号溝跡と同様に、A K-23グリッドで北側に屈曲するのかが、確定できなかった。そのため、両方の場合での計画地を示す。なお、第144図H-H'土層断面の5~8層は第73号溝跡覆土、9層は平安時代の水田耕作土、1~4層は中世の水田関連の土層と考えられる。

1:東西に直線状に走る場合。A J-30~32、A K-23~32グリッドにかけて位置する。72号溝跡の東西に走る部分とは並行する形となる。第74号溝跡を切る。N-86°-Eの方角で、ほぼ東西に走る。西側・東側共に調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは56.2m、となるが、C区の東西幅である95.4m以上と推定される。上幅1.6~1.9m、下幅0.2~0.7m、深さ10cm前後である。断面形は、皿状に近い。

東側延長線上の、F区にみられる第133~136号溝跡と、ほぼ同じ方位を示す。

本遺構は中世の、第3・7号、第4・8号坪型区画跡の坪界溝、あるいは畦立ての溝と推定される。

2:L字状に走る場合。

A J・A K-23グリッド内では、第74号溝跡と同様に、N-8°-Wの方角でほぼ南北に走る。A K-23・24・29~32グリッド内では、N-86°-Eの方角で、ほぼ東西に走り、北側と東側は、調査区外に続くと推定される。

検出し得た溝の長さは南北方向12.6m、東西方向30.6m、上幅0.5m前後、下幅0.2m前後、深さ500cm前後である。溝跡の平面形は94°の角度でL字状に開き、断面形はU字状を呈する。

2の可能性の場合、第74号溝跡を踏襲したものとえよう。

遺物は出土しなかった。

第74号溝跡 (第139~141・144・162・173図)

A J-23・30~32、A K-23~32グリッドにかけて位置する。72号溝跡の東西に走る部分とは並行する形となる。第73号溝跡に切られる。両溝跡のブラ

ンは、検出時点では非常に複雑に絡み合っており、平面図(第4図)上では、遺構の深度のために、本遺構が第73号溝跡を切っているかの様相を呈している。

A J・A K-23グリッド内では、N-8°-Wの方角でほぼ南北に走り、A K-23・24・29~32グリッド内では、N-86°-Eの方角で、ほぼ東西に走る。北側と東側は、調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは南北方向12.6m、東西方向90.8m、上幅1.6~1.9m、下幅0.2~0.7m、深さ10cm前後である。溝跡の平面形は、94°の角度でL字状に開く。遺存状況は悪く浅い断面形は皿状を呈する。東側延長線上の、F区にみられる第133~136号溝跡と、ほぼ同じ方位を示す。

第144図H-H'土層断面の5~8層は第73号溝跡覆土、9層は平安時代の水田耕作土、1~4層は中世の水田関連の土層と考えられる。

本遺構は浅間B軽石降灰以前の第3・4号、第3・7号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

図化した遺物は、鉄製品1点を含め計6点であった。

第173図1は、鞘・柄を含めた全長は40.5cm、木製鞘の現存長28.0cm、最大幅2.9cm。柄の拵は比較的良く残っており、遺存する木質の形状から幅2.1cm、厚さ0.7cmの把りと考えられる。鉄製直刀の全長は23.9cm、莖長は6.9cmの平棟造りである。刀身開付近で棟幅0.6cm、身幅2.3cmを測り、刃部は鋭利に残り、開は共に直角に近い。孔径0.3cmの目釘穴には、長さ1.6cmの目釘が貫通した状態で遺存していた。

柄部拵は、木製把の上から幅1mm前後に擦られた糸を柄巻に施している。

第75号溝跡 (第139・144図)

A J・A K-23グリッドに位置する。他遺構との新旧関係はみられない。遺存状況が非常に悪く、不整形な土壌が並んだように検出された。

検出し得た溝の長さは4.9mで、上幅0.2~1.0m、下幅0.1~0.7m、深さ5~10cm前後である。概ね

N-10°-Wの方位で、南北に走ると思われる。

平面形は基本的に直線状と考えられる。断面形は、底面の比較的平坦な逆台形または皿状を呈する。

浅間B軽石降灰前後の、第3・4号坪型区画跡の坪界溝と推定される。遺物は出土しなかった。

第76号溝跡 (第139・144図)

A J・A K-23グリッドに位置する。他遺構との新旧関係はみられない。

検出し得た溝の長さは6.4mで、上幅0.6~0.8m、下幅0.2~0.5m、深さ25cm前後である。概ねN-6°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。平面形は直線状、断面形は、底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

平安時代から中世に及んだ第3・4号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

遺物は出土しなかった。

第77号溝跡 (第128・129・134・163図)

B区での、A T~A V-24グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。

N-9°-Wの向きで、西北西から東北東に走り、同区内にある第78・79号溝跡とは直行する方位である。

溝跡の両端は途切れており、検出し得た溝の長さは20.3mで、上幅1.3~1.8m、下幅0.4~0.7m、深さは25~30cmである。溝の底面付近が残るのみであり、底面の凹凸がピット状を呈して直線状に並んだ形状の部分もある。そういった箇所では、断面形もピットに近いが、それ以外の部分では底面は比較的平坦で、断面形は逆台形を呈する。第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

凶化し得た遺物は須恵器坏1点であった。

第78号溝跡 (第131・134図)

A V-29・30グリッドに位置する。他遺構との重複関係はみられない。

溝跡の西側は途切れており、東側は調査区外に続いている。溝跡はN-90°-Eの向きで東西方向に走る。同区内にある第79号溝跡とはほぼ並行し、第77号溝跡とは直行する方位である。

溝跡の平面形は直線状、断面形は立ち上りの緩やかなU字形を呈する。検出し得た溝の長さは4.0mで、上幅0.4m前後、下幅0.2m前後、深さは10~15cmである。凶化に至る遺物は出土しなかった。奈良時代の、第7・11号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

第79号溝跡 (第130・131・134図)

A V-26~30グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。A V-28グリッドで途切れるが、溝跡底面の浅い箇所が失われていると考え、同一遺構と判断した。西側は途切れ、東側は調査区外に続いている。同区内にある第78号溝跡とはほぼ並行し、第77号溝跡とは直行する形となる。

溝跡の平面形は直線状、断面形はU字形を呈する。検出し得た溝の長さは42.0mで、上幅0.3m前後、下幅0.2m前後、深さは20cm前後である。溝跡はN-86°-Eの方位で、ほぼ東西方向に走る。

奈良時代から平安時代へと続く、第7・11号、第8・12号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

凶化に至る遺物は出土しなかった。

第80号溝跡 (第123~125・134・163図)

A E-29~34グリッドにかけて位置するが、A E-34グリッド内で屈曲すると思われる。その際に、第109号溝跡を切っていると思われる。西側・南側は調査区外に続いている。同区内にある第78号溝跡とはほぼ並行し、第77号溝跡とは直行する形となる。

検出し得た溝の長さは東西部分が47.8m、南北部分が29.6m、上幅2.4~2.7m、下幅0.3m~1.3m、深さ40cm前後である。また、溝跡は東西方向部分でN-88°-E、南北部分でN-42°-Wを指す。

溝跡の平面形は東西部分・南北部分ともに直線状、断面形は平面が平坦面に近く、立ち上りの緩やかな逆台形を呈する。9~10世紀代の第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

凶化し得た遺物は須恵器坏1点であった。

第81号溝跡 (第123・124・134・163図)

A E-29~33グリッドにかけて位置する。他遺構

との重複関係はみられない。西側は調査区外に続き、東側は途切れている。同区内にある第78号溝跡とはほぼ並行し、第77号溝跡とは直行する形となる。

検出し得た溝の長さは40.4m、上幅0.7~1.0m、下幅1.1~1.3m、深さは20cm前後である。溝跡はN-88°-Eの方で、2m程北側に位置する第80号溝跡と並行して、ほぼ東西方向に走る。

溝跡の平面形は西側でやや蛇行するものの、ほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦面に近く、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。10世紀前半の、第3・7号、第4・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

図化し得た遺物は、須恵器環1点であった。

第82号溝跡 (第91・92図)

途中途切れるものの、AD-29~31グリッドにかけて位置する。1m程南に位置する第83号溝跡と並行している。第86~88号溝跡を切っていると思われる。この他、第85号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。AD-31グリッド内で、北方向にほぼ直角に屈曲する。西側は調査区外に続き、北側はプランが失われている。

検出し得た溝跡の長さは13.4m、上幅0.3~0.6m、下幅0.2~0.3m、深さは15cm前後である。東西方向についてはN-87°-E、南北方向はN-3°-Wを指す。溝跡は直線状で、平面形はL字形を呈し、断面形はやや窪む碗状に近い。

遺物は出土していない。

第83号溝跡 (第91・92図)

途中途切れるもののAD-29~32、AE-32グリッドにかけて位置する。1m程北に位置する第82号溝跡と並行している。第84・85・87・88・104・112号溝跡等と重複するが、新旧関係は不明である。東側は第112号溝跡によってプランが失われている。西側については調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは22.8m、上幅0.3~0.5m、下幅0.1~0.3m、深さは15cm前後である。溝跡はN-84°-Eの方で、ほぼ東西に走る。底面の標

高差は小さいが、溝跡の流れとしては、西→東と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形はやや窪む逆台形もしくは碗状を呈する。

遺物は出土していない。

第84号溝跡 (第90・91・92・163図)

AG・AF-29、AF・AE-30、AE・AD-31、AD-32グリッドにかけて位置する。南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは40.8m、上幅1.0~1.4m、下幅0.4~1.0m、深さは40cm前後である。溝跡はN-40°-Eの方で、北東から南西に走る。同様に溝跡の流れとしては、北東→南西と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形は平坦に近い逆台形を呈する。

土師器・須恵器の小破片がごく少量出土したが、図化し得た遺物は1点であった。

第85号溝跡 (第91・92図)

AD-30・31グリッドに位置する。第82・83号溝跡等と重複するが、新旧関係は不明である。南側は、途切れているのか、北西方向に屈曲するのかわからない。北側は他遺構に切られているが、その先には現れていない。

検出し得た溝跡の長さは7.4m、上幅0.3~0.6m、下幅0.1~0.4m、深さは5~10cmである。溝跡はN-37°-Eの方で、北東から南西に走る。同様に溝跡の流れとしては、北東→南西と推定される。因みに、北西方向へはN-15°-Wである。

溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形はやや窪む碗状もしくは皿状を呈する。

遺物は出土していない。

第86号溝跡 (第91・92・163図)

AD-30グリッドに位置する。第82・87号溝跡に切られている。東側は、第87号溝跡によってプランが失われており、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは3.0m、上幅0.3~0.5m、下幅0.2~0.3m、深さは5~10cmである。溝跡はN-64°-Wの方で、西北西から東南東に走る。

同様に溝跡の流れとしては、西北西→東南東と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形はやや窪む椀状もしくは皿状を呈する。

図化し得た遺物は3点であった。

第87号溝跡 (第91・92図)

A D-30グリッドに位置する。第86号溝跡を切り、第82号溝跡に切られているが、第83・88号溝跡との新旧関係は不明である。南側は、第83号溝跡によってプランが失われており、その南側には現れていない。北側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは40.8m、上幅1.0~1.4m、下幅0.4~1.0m、深さは35cm前後である。溝跡はN-40°-Eの方位で、北西から南東に走る。溝跡底面の標高差はきわめて小さいが、流れとしては南東→北西と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形はやや窪む椀状もしくは皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第88号溝跡 (第91・92図)

A D-30グリッドに位置する。第83・87号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。南側は、第83号溝跡によってプランが失われており、その南には現れていない。北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは4.4m、上幅0.2~0.3m、下幅0.1~0.2m、深さは15cm前後である。溝跡はN-35°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。溝跡の流れとしては、南東→北西と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形は椀状もしくはU字状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第89号溝跡 (第91・92・163図)

A E・A F-31グリッドに位置する。第84号溝跡と重複し、第83号溝跡とも重複すると思われるが、その南側には現れていない。南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは14.6m、上幅0.3~1.2m、下幅0.1~0.6m、深さは15cm前後である。溝跡はN-2°-Eの方位で、ほぼ南北方向に走る。同様

に溝跡の流れとしては、南→北と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状であるが、南半部は急激に細くなってしまっている。断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

図化し得た遺物は1点であった。

第90号溝跡 (第91・92図)

A D-29・30グリッドに位置する。第83号溝跡に切られる。北側は、第83号溝跡によってプランが失われており、その北側には現れていない。西側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは東西部分が3.3m、南北部分が1.7mの計5.0m、上幅0.2~0.4m、下幅0.1~0.2m、深さは5~10cmである。溝跡の東西部分はN-89°-E、西側部分はN-16°-Eの方位を指す。溝跡底面の高低差は小さいが、溝跡の流れとしては、西→東と推定される。第90号溝跡の平面形は、概ね直線的にL字状を呈し、断面形は皿状に近い。

遺物は出土しなかった。

第92号溝跡 (第91・92・163図)

A F-29・30、A G-30グリッドに位置する。第84号溝跡を切っていると思われる。南北共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは12.6m、上幅0.6~1.2m、下幅0.4~1.0m、深さは5~10cmである。溝跡はN-9°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状を呈し、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

図化し得た遺物は1点であった。

第94号溝跡 (第99~103図)

A H-28~32、A I-25~30、A J-24~26、A K-23~25グリッドにかけて位置する。第95・182号溝跡に切られていると思われる。

A I-26・A J-25グリッドの2箇所分岐しているが、同一番号とした。

検出し得た溝跡の長さはA I-26グリッドで分岐している溝跡の場合の総計は76.0m、A J-25グリ

ッドで分岐している北溝跡の場合の総計は97.8m、南溝跡の場合は99.8mを測る。上幅1.2~5.8m、下幅0.6~4.4m、深さは70~90cmである。溝跡の方位は、第95号溝跡との交点以西では概ねN-65°-E、以东では概ねN-85°-Wを指す。溝跡は、緩やかに湾曲しながら西北西から東南東に走る。溝跡の平面形はやや円弧状で、断面形は西側で皿状、東側では箱葉研状に近い。

土師器・須恵器の小破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第95号溝跡 (第101~103・163図)

AG-28・29、AH-27~31、AI-31・32、AJ-32グリッドにかけて位置する。第94号溝跡を切っていると思われる。西側は途切れ、東側は調査区外に続く。AH-29・30グリッド内で、緩やかに屈曲する。

検出し得た溝跡の長さは、屈曲点以西が17.6m、以东が37.0mで、総計54.6mを測る。上幅は1.2~5.2m、下幅は0.6~3.4m、深さは40cm前後である。溝跡の方位は、交点以西でN-75°-E、以东でN-59°-Wを指し、全体としては、概ねN-65°-Wとなる。溝跡は、緩やかに湾曲しながら、西北西から東南東に走る。溝跡の平面形は緩やかなS字状を呈し、西端部が膨らむ形となる。断面形は椀状を呈する。

図化し得た遺物は6点であった。

第96号溝跡 (第112・163図)

AM-41・42、AN-42、AO-43グリッドにかけて位置する。古墳時代前期の調査面で検出された。第180号溝跡を切っている。第97・98号溝跡と重複する。南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは24.0m、上幅0.4~0.8m、下幅0.1m前後、深さは5~10cmである。溝跡は概ねN-36°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。4m程西に位置する第99号溝跡、7m程東に位置する第101号溝跡とは、並行する形となる。溝跡

の平面形は概ね直線状、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈す。

図化し得た遺物は1点であった。

第97号溝跡 (第112図)

AM-41・42、AN-41・42グリッドに位置する。古墳時代前期の調査面で検出された。第180号溝跡を切っている。南側は第96号溝跡と重複し、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは10.4m、上幅0.1~0.4m、下幅0.1m前後、深さは10cm前後である。溝跡は概ねN-50°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。10m程東に位置する第101号溝跡とは、並行する形となる。溝跡の平面形は概ね直線状、断面形は浅い椀状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第98号溝跡 (第112図)

AM-41、AN-41・42グリッドに位置する。第96・99号溝跡と重複する。北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは10.2m、上幅0.3~0.4m、下幅0.1~0.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-62°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状、断面形は浅い椀状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第99号溝跡 (第112図)

AN-41・42、AO-42グリッドに位置する。北側で第98号溝跡と重複するが、その先には現れていない。南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは14.9m、上幅0.3~0.6m、下幅0.2~0.3m、深さは30cm前後である。溝跡は概ねN-28°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。4m程東に位置する第96号溝跡とは、並行する形となる。溝跡の平面形は概ね直線状、断面形は浅い椀状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第100号溝跡 (第112図)

A L-42グリッドに位置する。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは5.6m、上幅0.4~0.9m、下幅0.2~0.4m、深さは10cm前後である。溝跡はN-85°-Wの方位で、ほぼ東西方向に走る。溝跡底面の高低差はきわめて小さいが、流れとしては東→西と推定される。溝跡の平面形は直線状、断面形は浅い椀状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第101号溝跡 (第112・163図)

A L・A M-42グリッドに位置する。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは9.7m、上幅0.3~0.5m、下幅0.1~0.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-48°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。溝跡底面の高低差はきわめて小さいが、流れとしては北東→南西と推定される。溝跡の平面形は直線状、断面形は浅い椀状を呈す。

図化し得た遺物は2点であった。

第102号溝跡 (第117・120・164・172図)

A U-27・28グリッドに位置する。西側は第1号井戸跡に切られ、その先には現れていない。東側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは12.8m、上幅1.8~2.8m、下幅1.2~2.0m、深さは90cm前後である。溝跡はN-68°-Eの方位で、北西から南東方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。溝跡の平面形は緩やかに湾曲する円弧状を呈し、断面形はU字形もしくは漏斗状に近い。

図化し得た遺物は木製品1点を含め計24点であった。

第172図11は、建築部材としての板材と思われる。実測図における左上の部分には突起が設けられ、左下の部分は他よりも細く切り込まれている。残存最大長42.9cm、現存最大幅11.2cm、現存最大厚1.2cmを

測る。

第104号溝跡 (第91・92図)

A D・A E-32グリッドに位置する。南側は第80号溝跡によってプランが失われており、その南には現れていない。北側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは5.2m、上幅0.3~1.4m、下幅0.8~1.0m、深さは15cm前後である。溝跡はN-25°-Eの方位で、東北東から南南西に走る。溝跡の流れとしては、南南西→東北東と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状に近いが、南側は大きくずぼんでいる。断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第105号溝跡 (第93・94・165図)

A F・A G-35グリッドに位置する。第118・119号溝跡と接しているが、新旧関係は不明である。東西共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは6.6m、上幅1.0~1.6m、下幅0.8~1.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-72°-Wの方位で、西南西から東南東に走る。溝跡底面の高低差はきわめて小さいが、流れとしては西南西→東南東と推定される。溝跡の平面形はほぼ直線状で、断面形は、底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈する。

図化し得た遺物は12点であった。

第106号溝跡 (第125・127・134図)

A C~A G-34グリッドにかけて位置する。位置的に第80号溝跡と重複関係にあるが、本遺構が切れていると思われる。A D・A E-34グリッド内で途切れているが、同一の溝跡として扱った。北側は調査区外に続き、南側は途切れている。

同区内にある第109~111・117号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。これらの溝跡は、位置的・方位的・規模的にも近く、これらを踏襲しているものと推定される。

検出し得た溝の長さは38.8m、上幅0.4~0.6m、下幅0.2m~0.4m、深さは15cm前後である。溝跡は

N-3°-Wの方位でほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦面に近く、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。10世紀前半浅間B軽石降下以前の遺構と考えられる。

図化に至る遺物は出土しなかった。

第109号溝跡 (第125・127・134図)

AC~AH-34グリッドにかけて位置する。第110号溝跡を切っている。また、位置的に第80号溝跡と重複関係にあるが、本遺構が切られていると思われる。南北ともに調査区外に続く。

同区内にある第106・110・111・117号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。これらの溝跡は、位置的・方位的・規模的にも近く、これらを踏襲しているものと推定される。

検出し得た溝の長さは42.5m、上幅0.8~1.0m、下幅0.5~0.8m、深さは30cm前後である。溝跡はN-5°-Wの方位でほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦面に近く、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。平安時代の第2・3号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

図化に至る遺物は出土しなかった。

第110号溝跡 (第125・134・165図)

AC~AD-34グリッドにかけて位置する。第109号溝跡に切られている。北側は調査区外に続き、南側は途切れている。AG-34グリッド内で一部途切れるが、同一の遺構であると判断した。

同区内にある第106・109・111・117号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。これらの溝跡は、位置的・方位的・規模的にも近く、これらを踏襲しているものと推定される。

検出し得た溝の長さは5.8m、上幅0.3~0.5m、下幅0.3m前後、深さは35cm前後である。溝跡はN-5°-Wの方位でほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦面に近く、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈

する。8世紀後半代の、第2・3号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

図化し得た遺物は須恵器6点であった。

第111号溝跡 (第125・127・134・165図)

AC~AH-34グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。AG-34グリッド内で一部途切れるが、同一の遺構であると判断した。南北ともに、調査区外に続く。

同区内にある第106・109・110・117号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。これらの溝跡は、位置的・方位的・規模的にも近く、これらを踏襲しているものと推定される。

検出し得た溝の長さは41.8m、上幅0.8~1.5m、下幅0.7~1.1m前後、深さは10cm前後である。溝跡はN-3°-Wの方位でほぼ南北方向に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦面に近く、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。8世紀後半代の、大畦中央の第2・3号坪型区画跡の坪界溝と推定される。

図化し得た遺物は須恵器6点であった。

第112号溝跡 (第91・93・94・166図)

AC-33、AD-32・33、AE-33グリッドにかけて位置する。第80号溝跡に切られている。南側は第80号溝跡によってプランが失われており、その南には現れていない。北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは11.4m、上幅0.3~3.6m、下幅0.1~3.2m、深さは35cm前後である。溝跡はN-7°-Eの方位で、概ね南北方向に走る。同様に溝の流れとしては南→北と推定される。溝跡の平面形は基本的に直線状であるが、南側は急激にすばんでおり、北側と大きく幅の規模が異なる。断面形は、北側では底面が比較的平坦な逆台形、南側ではU字形を呈する。

図化し得た遺物は6点であった。

第113号溝跡 (第93・94図)

AC・AD-33グリッドに位置する。他遺構との

重複関係はない。南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは3.6m、上幅0.4～1.0m、下幅0.2～0.8m、深さは5～10cmである。溝跡の方位は、南北方向の部分でN-23°-W、もう一方はN-29°-Eを指す。溝跡の流れとしては、北→南と推定される。溝跡の平面形は不整形なもので、ややJ字状に近い。断面形は、底面が比較的平坦で壁面の立ち上がりの小さな皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第114号溝跡 (第105図)

AH-42・43グリッドに位置する。東端部で第138号溝跡と重複し、その東には現れていない。南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは東西部分が5.7m、上幅0.4～0.8m、下幅0.1～0.4m、深さは20cm前後である。溝跡は、N-86°-Eの方位で、ほぼ東西方向に走る。溝跡の流れとしては、西→東と推定される。溝跡の平面形はほぼ直線状で、北東にコーナー部分をもつL字型を呈する。断面形は、椀状もしくは皿状を呈する。

土師器・須恵器の小破片が少数出土したが、図化には至らなかった。

第115号溝跡 (第93・94図)

AD-34～36グリッドに位置する。第150・173号溝跡を切る。東西共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは12.4m、上幅0.2～0.9m、下幅0.1～0.6m、深さは5～10cmである。溝跡はN-81°-Wを指す。溝跡底面の高低差はきわめて小さいが、流れとしては西→東と推定される。溝跡の平面形はほぼ直線状で、断面形は底面が比較的平坦で、壁面の立ち上がりの小さな皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第116号溝跡 (第93～95図)

一部途切れるものの、AD-34～37、AE-34～36グリッドにかけて位置する。第150・173号溝跡を切り、第80号溝跡に切られている。西側は第70～72

号溝跡によってプランが失われており、その西側には現れていない。東側は視乱を受けており、その東側にはみられない。

検出し得た溝跡の長さは26.0m、上幅0.3～0.4m、下幅0.1～0.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-88°-Eの方位で、概ね東西方向に走る。同様に溝跡の流れとしては、西→東と推定される。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

土師器・須恵器の小破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第117号溝跡 (第125・127・134図)

AF・AG-34、AG-35グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。AG-34・35グリッド内で一部途切れるが、同一の遺構であると判断した。北側部分は途切れ、南側部分は調査区外に続く。

同区内にある第106・109～111号溝跡とは、ほぼ並行する形となる。これらの溝跡は、位置的・方位的・規模的にも近く、これらを踏襲しているものと推定される。

検出し得た溝の長さは12.1m、上幅0.4m前後、下幅0.3m前後、深さは10cm前後である。溝跡はN-1°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が平坦面に近く、立ち上がりの緩やかな逆台形を呈する。覆土中に浅間B軽石を含む。平安時代から近世にまで続く、第7・8号坪型区画跡の坪界溝と推定される。条里関連の溝跡と思われる。

図化に至る遺物は出土しなかった。

第118号溝跡 (第93・94図)

AF-35グリッドに位置する。第105・119号溝跡と重複しているが、これらを切っていると思われる。東端部で第119号溝跡と直行するが、別遺構と判断した。

検出し得た溝跡の長さは2.4m、上幅0.2～0.4m、下幅0.1～0.2m、深さは10cm前後である。溝跡は

N-2°-Eの方位で、概ね東西方向に走る。溝跡底面の高低差は、ほとんどみられない。溝跡の平面形は直線状で、断面形は碗状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第119号溝跡 (第93・94図)

A F・A G-35グリッドに位置する。第118号溝跡と重複しているが、切られていると思われる。北端部で第118号溝跡と直行するが、別遺構と判断した。

検出し得た溝跡の長さは3.8m、上幅0.2~0.3m、下幅0.1~0.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-9°-Wの方位で、概ね南北に走る。溝跡底面の高低差は、ほとんどみられない。溝跡の平面形は直線状で、断面形は碗状を呈する。

須恵器甕の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

第120号溝跡 (第93・94図)

A F-33・34グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは3.8m、上幅0.4~0.5m、下幅0.2~0.3m、深さは10cm前後である。溝跡はN-85°-Eの方位で、概ね東西に走る。溝跡底面の高低差は、ほとんどみられない。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

須恵器甕の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

第121号溝跡 (第93・94図)

A F-33・34グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。東西共に途切れている。途中1箇所途切れているが、同一遺構と判断した。

検出し得た溝跡の長さは4.0m、上幅0.3~0.5m、下幅0.1~0.3m、深さは15cm前後である。溝跡はN-89°-Eの方位で、概ね東西方向に走る。溝跡底面の高低差は、ほとんどみられない。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第122号溝跡 (第93・94図)

A F-33・34グリッドに位置する。第123号溝跡と重複するが、本遺構が切られていると思われる。東西共に途切れている。途中1箇所途切れているが、同一遺構と判断した。

検出し得た溝跡の長さは10.0m、上幅0.2~0.4m、下幅0.1~0.2m、深さは15cm前後である。溝跡はN-82°-Eの方位で、概ね東西方向に走る。溝跡底面の高低差は、ほとんどみられない。

溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第123号溝跡 (第93・94図)

A F-33・34グリッドに位置する。第122号溝跡と重複するが、本遺構が切られていると思われる。東西共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは10.6m、上幅0.2~0.4m、下幅0.1~0.2m、深さは15cm前後である。溝跡はN-59°-Eの方位で、南西から北東に走る。溝跡底面の高低差は、ほとんどみられない。溝跡の平面形は直線状であるが、やや湾曲している。断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第127号溝跡 (第97・98図)

A F・A G-42グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは6.2m、上幅0.3~0.4m、下幅0.2~0.3m、深さは10cm前後である。溝跡はN-8°-Eの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の流れとしては、北→南と推定される。溝跡の平面形はやや湾曲するものの概ね直線状で、断面形は皿状に近い。

遺物は出土しなかった。

第128号溝跡 (第107・108・113・166・167図)

A K-43~45、A L-43・45グリッドにかけて位

置する。第69号住居跡・第129号溝跡を切る。北側は途切れ、東側は途切れ、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは東西部分が14.8m、南北部分が9.2m、上幅0.8~2.2m、下幅0.5~1.9m、深さは10~20cmである。溝跡は東西部分がN-82°-E、南北部分がN-10°-Eの方位で、ほぼ直角に走る。溝跡の流れとしては、東→西→南と推定される。溝跡の平面形は直線状で、北西にコーナー部分をもつL字状を呈し、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

第128号溝跡出土遺物として図化し得た遺物は3点である。また、第128・129号溝跡のいずれに帰属するのであるか確定できなかった遺物の内、図化し得たのは14点であった。

第129号溝跡 (第107・108・167図)

A K-43グリッドに位置する。第128号溝跡に切られる。両端部共に第128号溝跡によって遺構のプランが失われている。あるいは、第128号溝跡の南北部分と連結していた可能性も考えられる。

検出し得た溝跡の長さは7.1m、上幅0.8~1.2m、下幅0.5~0.9m、深さは15cm前後である。溝跡の流れとしては、東→西と推定される。溝跡の平面形は、概ね東西方向に走る円弧状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。

第128・129号溝跡のいずれに帰属するのであるか確定できなかった遺物の内、図化し得たのは14点であった。

第130号溝跡 (第107・108・167図)

A I・A J-44、A K-43・44グリッドに位置する。第186号溝跡を切り、第128号溝跡に切られていると思われる。東側は第128号溝跡によって遺構のプランが失われており、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは東西部分が8.0m、南北部分が13.4m、上幅0.3~1.2m、下幅0.1~0.8m、深さは30cm前後である。溝跡は東西部分がN-89°-W、南北部分がN-7°-Wの方位で、東西方向に走る。溝跡の流れとしては、北→南→西と推定され

る。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

図化し得た遺物は3点であった。

第131号溝跡 (第107・108・167図)

A J・A K-44グリッドに位置する。第107号土壌・第129号溝跡を切っていると思われる。南側第129号溝跡によって遺構のプランが失われており、その先には現れていない。北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは7.3m、上幅0.4~0.8m、下幅0.3~0.6m、深さは30cm前後である。溝跡はN-1°-Wの方位で、概ね南北方向に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。溝跡の平面形は、やや湾曲するものの概ね直線状、断面形は、底面に段を有する逆台形もしくは碗状を呈す。

図化し得た遺物は4点であった。

第132号溝跡 (第107・108・167図)

A J-44グリッドに位置する。第137号溝跡を切っていると思われる。北側は第137号溝跡によって遺構のプランが失われており、その先には現れていない。南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは2.5m、上幅0.1~0.2m、下幅0.1m、深さは5~10cmである。溝跡はN-7°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。

図化し得た遺物は1点であった。

第133号溝跡 (第143・145・148・168図)

A I-43~44グリッドにかけて位置する。第134号溝跡に切られている。西側は第134号溝跡によって遺構のプランが失われ、東側は調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは12.3mで、上幅0.6m前後、下幅0.4m前後、深さ10cm前後である。概ねN-85°-Eの方位で、ほぼ東西に走る。平面形は基本的に直線状を呈すると思われる。断面形は、底面が平坦な皿状を呈する。本遺構もしくは第135・136号溝跡は、C区の第74号溝跡につながる可能性が考え

られる。

奈良時代から平安時代にわたる、第2・6号坪型区画跡の坪界溝と思われる。

図化し得た遺物は、8点であった。

第134号溝跡 (第145・148図)

A I-42~44グリッドにかけて位置する。第133・135号溝跡を切っている。両端共に調査区外に続くが、西側はC区に現れていない。

検出し得た溝の長さは25.2mで、上幅0.3~0.8m、下幅0.2~0.7m、深さ25cm前後である。概ねN-88°-Eの方で、ほぼ東西に走る。平面形は基本的に直線状を呈すると思われる。断面形は、底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

奈良・平安時代における、第2・6号坪型区画跡の坪界溝を踏襲した近世の溝跡と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第135号溝跡 (第145・148・168図)

A I-43・44グリッドに位置する。第134号溝跡に切られている。西側は途切れ、東側は調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは11.7mで、上幅0.4m前後、下幅0.3m前後、深さ15cm前後である。概ねN-88°-Eの方で、ほぼ東西に走る。平面形は基本的に直線状を呈すると思われる。断面形は、底面が窪む碗状を呈する。本遺構もしくは第133・136号溝跡は、C区の第74号溝跡につながる可能性が考えられる。

奈良時代から平安時代にわたる、第2・6号坪型区画跡の坪界溝と思われる。

第135・136号溝跡のいずれとも特定できない中で、図化し得た遺物は2点であった。

第136号溝跡 (第143・145・148・168図)

A I-43、A J-42~44グリッドにかけて位置する。遺構のプランがやや複雑ではあるものの、他遺構との重複関係はみられない。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは11.7mで、上幅0.4m前後、

下幅0.3m前後、深さ15cm前後である。概ねN-88°-Eの方で、ほぼ東西に走る。平面形は基本的に直線状を呈すると思われる。断面形は、底面が窪む碗状を呈する。本遺構もしくは第133・135号溝跡は、C区の第74号溝跡につながる可能性が考えられる。

奈良時代から平安時代にわたる、第2・6号坪型区画跡の坪界溝と思われる。

第135・136号溝跡のいずれとも特定できない中で、図化し得た遺物は2点であった。

第137号溝跡 (第107・108・168図)

A J-43・44グリッドに位置する。第138号溝跡と連結しているが、同一の遺構であろうか。東側は住居跡によって遺構のプランが失われている。第130号溝跡との交点付近で、緩やかに屈曲する。この交点よりも東側ではN-65°-W、西側ではN-79°-Eの方で、概ね東西方向に走る。溝跡の流れとしては、西→東と推定される。

検出し得た溝跡の長さは東側部分で5.0m、西側部分で11.6mの計16.6m、上幅0.5~1.0m、下幅0.2~0.7m、深さは15cm前後である。

溝跡の平面形は直線による「く」の字状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。

第135~137号溝跡の、いずれに帰属するか特定できない遺物で、図化し得たものは2点であった。

第138号溝跡 (第105・107・108・168図)

A G-43、A H-42・43、A I・A J-43グリッドに位置する。南側で第137号溝跡と合流するが、同一の遺構であろうか。北側は調査区外に続く。第70号住居跡を切る。

検出し得た溝跡の長さは27.7m、上幅0.4~1.9m、下幅0.2~1.0m、深さは21~33cmである。溝跡はN-1°-Eの方で、概ね南北方向に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。

溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

図化し得た遺物は7点であった。

第139号溝跡 (第107・108図)

AH-43グリッドに位置する。第141号溝跡を切っている。南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは6.9m、上幅1.0~1.4m、下幅0.7~1.0m、深さは15cm前後である。溝跡はN-22°-Eの方位で、概ね南北方向に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。

溝跡の平面形は概ね直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

遺物は出土しなかった。

第140号溝跡 (第105~108・169図)

AG-40~43、AH-43グリッドにかけて位置する。第173号溝跡と同一の遺構であろうか。第138・141・149号溝跡に切られていると思われる。また第150号溝跡は、AG-39グリッドで本遺構から分岐している可能性も考えられる。東側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは34.6m、上幅0.6~1.6m、下幅0.2~1.0m、深さは20cm前後である。溝跡はN-83°-Wの方位で、ほぼ東西方向に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。溝跡の平面形は概ね直線状で、断面形は底面に凹凸をもった皿状を呈す。

図化し得た遺物は7点であった。

第141号溝跡 (第107・108・169図)

AH-43グリッドに位置する。第139号溝跡に切られている。この他、第140号溝跡と重複する。北側は途切れ、南側は他遺構との重複により、遺構のプランを失っている。

検出し得た溝跡の長さは11.5m、上幅0.4~0.9m、下幅0.2~0.6m、深さは20cm前後である。溝跡は概ねN-43°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。溝跡の平面形は概ね円弧状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。

実測し得た遺物は1点であった。

第142号溝跡 (第105・106図)

AG・AH-41グリッドに位置する。第137号溝

跡と同一の遺構であろうか。第140号溝跡と重複しているが、その北側にはみられない。東側は調査区外に続く。南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは8.2m、上幅0.4~0.6m、下幅0.2~0.4m、深さは20cm前後である。溝跡はN-24°-Eの方位で、北北西から南南西に走る。溝跡の平面形は直線状で、断面形は皿状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第143号溝跡 (第97・98・105・106・169・170図)

AF~AH-41グリッドに位置する。第140・142号溝跡と重複するが、前者を切っていると思われる。AG-41グリッド内と南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは24.3m、上幅0.6~1.1m、下幅0.2~0.8m、深さは20cm前後である。溝跡はN-19°-Eの方位で、緩やかに蛇行しながら南北方向に走る。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。

溝跡の平面形はややクランク状で、断面形は底面にやや凹凸のある逆台形、もしくは皿状に近い。

図化し得た遺物は、16点であった。

第145号溝跡 (第107・108図)

AK-43・44グリッドに位置する。第129号溝跡と重複する。東側は第129号溝跡によってプランを失っており、西側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは3.8m、上幅0.4m、下幅0.2m、深さは15cm前後である。溝跡は概ねN-89°-Eの方位で、東西方向に走る。溝跡の流れとしては、西→東と推定される。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

図化し得た遺物は1点であった。

第146号溝跡 (第95~98・170図)

AD-36・37、AE-37~41、AF-38~41グリッドにかけて位置する。第116・147~149・153・156・197・198号溝跡、第1号池状遺構と重複関係にある。西側は途切れ、東側は調査区外に続く。AE・AF-39グリッド内でやや湾曲する。

検出し得た溝跡の長さは、湾曲する箇所の西側が26.0m、東側が24.4mの計50.4m、上幅0.8~1.3m、下幅0.3~1.0m、深さは40cm前後である。A E-38グリッド内で湾曲する。この湾曲する部分以西はN-62°-W、以东はN-87°-Wを指す。溝跡の流れとしては、東→西と推定される。

溝跡の平面形は円弧状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

図化し得た遺物は5点であった。

第147号溝跡 (第95・98・104・170図)

A F-39・40、A G-39グリッドにかけて位置する。第146・150・173号溝跡、第1号池状遺構と重複する。東側は途切れ、南側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは7.6m、上幅0.3~0.7m、下幅0.1~0.4m、深さは20cm前後である。溝跡はN-5°-Wを指す。南北方向の溝がA F-39グリッド内で、N-38°-Eの方位で北東に傾き、A E・A F-39グリッド内で東西方向に転じる。溝跡の流れとしては、北東→南と推定される。

溝跡の平面形は円弧状に近く、断面形は椀状に近い。

図化し得た遺物は8点である。

第148号溝跡 (第95・97・98・170図)

A E-39グリッドに位置する。南側は第146号溝跡、第1号池状遺構によってプランが失われており、北側については調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは9.6m、上幅0.7~0.9m、下幅0.3~0.5m、深さは30cm前後である。溝跡はN-2°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の流れとしては、北東→南と推定される。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面が比較的平坦で、壁面が直線的に立ち上がる逆台形を呈する。

図化し得た遺物は、3点であった。

第149号溝跡 (第97・105・106・170・171図)

A F・A H-40グリッドに位置する。第137号溝跡と同一の遺構であろうか。第3号掘立柱建物跡を切る。南側は、調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは23.6m、上幅0.4~0.6m、下幅0.2~0.4m、深さは20cm前後である。溝跡はN-5°-Eの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の流れとしては、北→南と推定される。溝跡の平面形は直線状で、断面形は椀状を呈す。

図化し得た遺物は2点であった。

第150号溝跡 (第93・95~97・105・171図)

A D-34・35、A E-35~37、A F-38、A G-38~41グリッドにかけて位置する。第115・116・147・158号溝跡と重複している。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。擾乱を受けているため詳細は不明であるが、第140号溝跡から分岐している可能性が考えられる。

検出し得た溝跡の長さは86.2m、上幅0.5~2.6m、下幅0.1~2.4m、深さは約33cm前後である。A G-39グリッド内でやや湾曲する。この湾曲する部分以西はN-57°-W、以东はN-84°-Wを指す。溝跡の流れとしては、東→西と推定される。

溝跡の平面形は、湾曲部分以外では各々、直線状であるが、全体的には円弧状、断面形は底面が比較的平坦で、壁面が直線的に立ち上がる逆台形を呈す。

図化し得た遺物は2点であった。

第151号溝跡 (第105・106・171図)

A I・A J-42グリッドに位置する。第152号溝跡を切る。北側は途切れ、南側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは7.2m、上幅0.4~0.9m、下幅0.2~0.6m、深さは30cm前後である。溝跡はN-5°-Eの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の流れとしては、北→南と推定される。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

図化し得た遺物は3点であった。

第152号溝跡 (第105・106・171図)

A I-41・42、A J-42グリッドに位置する。第151号溝跡に切られる。西側は途切れ、南側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは東西部分が8.3m、南北

部分が7.0mの総計15.3m、上幅0.6～0.9m、下幅0.2～0.6m、深さは30cm前後である。溝跡は東西部分がN-71°-W、南北部分がN-6°-Eを指す。また、A I-42グリッド内で屈曲してクランク状に西方向に延びる。溝跡の流れとしては、西→東→南と推定される。

溝跡の平面形は直線状で、概ね北東にコーナー部分をもつL字状を呈する。断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

図化し得た遺物は4点であった。

第153号溝跡 (第97・98図)

A F-40グリッドに位置する。第146号溝跡と重複する。第124号土壌とピットを切っている。南側は第124号土壌の南側にはみられない。北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは9.4m、上幅0.2～0.4m、下幅0.1～0.2m、深さは15cm前後である。溝跡はN-15°-Eの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の流れとしては、北→南と推定される。溝跡の平面形はやや湾曲するものの概ね直線状で、断面形は碗状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第154号溝跡 (第93・94・171図)

A E-35・36、A F-36グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はない。A E-36グリッド内で屈曲し、西端部・南端部共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは東西方向4.6m、南北方向8.6mの計13.2m、上幅1.5～1.8m、下幅1.0～1.4m、深さは20cm前後である。溝跡は東西方向N-89°-E、南北方向N-4°-Wの方位で、ほぼ直角に曲がる。溝跡の流れとしては、西→東→南と推定される。溝跡の平面形は直線状でL字状、断面形は底面の比較的平坦で、壁面が直線状に立ち上がる逆台形を呈する。

土師器・須恵器の小破片がごく少数出土したが、図化には至らなかった。

第155号溝跡 (第138・144図)

A D-A F-36グリッドにかけて位置する。他遺構との重複はみられない。北側は調査区外に続くが、南側は擾乱によりプランが失われている。

検出し得た溝の長さは16.8mで、上幅0.8～1.0m、下幅0.3～0.7m、深さ20cm前後である。概ねN-4°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。平面形は基本的に直線状、断面形は碗状を呈する。

今回調査した部分とその近辺について、1町四方の条里区画を想定して、図上に線引きしたところ、12の区画(坪型区画跡)を得ることができた。

しかし、本遺構とD区第188・189号溝跡は、条里区画を成すと思われる多くの溝跡と方位的には共通するものの、位置的に17～18m程東へずれている。なおこの南北ラインから1町の距離をあっても、東西共に南北溝はみられない。

基本的には、奈良～平安時代の、第2・3号坪型区画跡の坪界溝と思われる。なお、第188・189号溝跡のいずれか一方は、位置・方位からみて、本遺構と同一遺構の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

第156号溝跡 (第95・96図)

A D-36・37、A E-36グリッドにかけて位置する。第116号溝跡に切られていると思われる。南側は擾乱によって失われ、北側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは8.4m、上幅0.3～0.6m、下幅0.1～0.3m、深さは20cm前後である。溝跡はN-44°-Eの方位で、北東から南西方向に走る。溝跡の流れとしては、南西→北東と推定される。溝跡の平面形はほぼ直線状で、断面形は碗状に近い。

遺物は出土しなかった。

第157号溝跡 (第109・110図)

A Q-23・24、A R-24、A S-24・25、A T-25・26グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。A R-24、A S-24グリッド内で、方位を転じており、北西から南東方向・北北西から南南東方向・西北西から東南東方向の部分からなる。

検出し得た溝跡の長さは各々西から8.6m、16.5m、22.8mの計57.9mであり、上幅0.2~0.8m、下幅0.1~0.4m、深さは15cm前後である。溝跡の方位は、各々西から概ねN-65°-W、N-8°-W、N-62°-Wを指す。平面形はクランク状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

遺物は出土しなかった。

第158号溝跡 (第95図)

A E-36グリッドに位置する。第150号溝跡に切られていると思われる。東側は途切れ、西側は第150号溝跡と視乱によって、遺構のプランは失われている。

検出し得た溝跡の長さは2.8m、上幅0.4~1.5m、下幅0.2~0.7m、深さは20cm前後である。溝跡の方位は、N-65°-Eを指す。溝跡の流れとしては、北東→南西と推定される。平面形は西側が大きく広がる団扇状を呈し、断面形は逆台形もしくは碗状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第160号溝跡 (第97・98・171図)

A G-41グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。南北共に途切れる。

検出し得た溝跡の長さは3.6m、上幅0.4~0.6m、下幅0.2~0.3m、深さは10~15cmである。溝跡はN-5°-Eの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡底面の高低差はきわめて小さいが、流れとしては、北→南と推定される。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈する。

図化し得た遺物は1点であった。

第173号溝跡 (第93・95・96図)

一部、視乱によって失われているが、A D-34・35、A E-35~38、A F-37・38、A G-38・39グリッドにかけて位置すると思われる。第115・116・150号溝跡に切られている。検出し得た溝跡の長さは63.4m、上幅0.5~2.1m、下幅0.1~0.9m、深さは30cmである。溝跡はN-57°-Wで、ほぼ直線的に

北西から南東に走る。溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。断面形は、逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第174号溝跡 (第95・96図)

A C-36・37、A D-37・38、A E-38・39グリッドにかけて位置する。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。第196号溝跡には切られていると思われる。

検出し得た溝跡の長さは34.2m、上幅0.3~1.0m、下幅0.1~0.6m、深さは20cm前後である。溝跡はN-48°-Wの方位で、北西から南東に走る。溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。溝跡の平面形は直線状で、断面形は碗状に近い。

遺物は出土していない。

第178号溝跡 (第107・108図)

A J-44グリッドに位置する。第130号溝跡と重複する。西側は第130号溝跡によってプランを失っており、東側は調査時に設けた排水溝によって失われており、その先には現れていない。

検出し得た溝跡の長さは7.0m、上幅0.3~0.6m、下幅0.2~0.4m、深さは10cm前後である。溝跡は概ねN-89°-Eの方位で、ほぼ東西方向に走る。溝跡底面の高低差はきわめて小さいが、溝跡の流れとしては、北東→南と推定される。平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

遺物は出土しなかった。

第179号溝跡 (第115・116図)

A M・A N-48グリッドに位置する。両端共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは6.3m、上幅0.3~0.4m、下幅0.1~0.2m、深さは5cm前後である。溝跡はN-14°-Eの方位で北北東から南南西方向に走る。溝跡底面の高低差はきわめて小さいが、溝跡の流れとしては、北北東→南南西と推定される。溝跡の平面形は緩やかに湾曲するが概ね直線状を呈し、断面形は皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第181号溝跡 (第112・113図)

A L-42、A M-42・43グリッドに位置する。他遺構との重複関係はみられない。両端共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは8.0m、上幅0.2～0.6m、下幅0.1～0.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-25°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。溝跡の平面形は緩やかに湾曲する円弧状を呈し、断面形は椀状に近い。

遺物は出土しなかった。

第182号溝跡 (第102・103図)

A H-31、A I-31・32グリッドに位置する。第94号溝跡を切っていると思われる。西側は第94号溝跡以北にはみられない。東側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは11.0m、上幅0.4～0.6m、下幅0.2～0.4m、深さは15cm前後である。溝跡はN-72°-Wの方位で、西北西から東南東に走る。溝跡の流れとしては、西北西→東南東と推定される。溝跡の平面形は緩やかに湾曲する直線状で、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

遺物は出土しなかった。

第183号溝跡 (第109・110・111図)

A O-27、A P-27～29、A Q-29・30、A R-30グリッドにかけて位置する。他遺構との重複関係はみられない。両端共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは45.6m、上幅0.2～0.4m、下幅0.1～0.2m、深さは5～10cmである。溝跡は概ねN-49°-Wの方位で、北西から南東方向に走る。溝跡の流れとしては、北西→南東と推定される。17m程西に位置する第48号溝跡とは、並行する形となる。溝跡の平面形は概ね直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形もしくは皿状を呈す。

遺物は出土しなかった。

第184号溝跡 (第93・94図)

A D-33・34グリッドにかけて位置する。第72号溝跡に切られている。北側は第72号溝跡より先には

現れておらず、南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは2.6m、上幅0.6～1.6m、下幅0.4～1.3m、深さは15cm前後である。溝跡は概ねN-16°-Wを指す。溝跡の流れとしては、南→北と推定される。溝跡の平面形は不整形で、断面形は底面の比較的平坦な逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第186号溝跡 (第107・108・113図)

A J～A L-43グリッドに位置する。第130号溝跡と重複する。北側は途切れ、南側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは11.6m、上幅0.4～0.6m、下幅0.3～0.4m、深さは30cm前後である。溝跡は概ねN-30°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦で、壁面の立ち上がりの急な逆台形を呈す。

遺物は出土しなかった。

第187号溝跡 (第115・116図)

A M-48・49グリッドに位置する。西側は途切れ、東側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは4.6m、上幅0.2～0.3m、下幅0.1～0.2m、深さは5cm前後である。溝跡はN-55°-Wの方位で北西から南東方向に走る。溝跡の平面形は緩やかに湾曲する円弧状を呈し、断面形は底面の平坦な皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第188号溝跡 (第159・160図)

B A・B B-37グリッドに位置する。他遺構との新旧関係はみられない。南側は途切れ、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝の長さは6.4mで、上幅0.6～0.8m、下幅0.4～0.6m、深さは5cm前後である。概ねN-10°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。平面形は基本的に直線状を呈すると思われる。断面形は底面の平坦な皿状を呈する。

今回調査した部分とその近辺について、1町四方の条里区画を想定して、図上に線引きしたところ、

12の区画（坪型区画跡）を得ることができた。

しかし、第188・189号溝跡および、F区の第155号溝跡は、条里区画を成すと思われる多くの溝跡と方位的には共通するものの、位置的に17～18m程東へずれている。なおこのラインから1町の距離をあたっても、東西共に南北溝はみられない。

基本的には、平安時代の第10・11号坪型区画跡の坪界溝と思われる。なお、第188・189号溝跡のいずれか一方は、位置・方位からみて、F区の第155号溝跡と同一遺構の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

第189号溝跡（第159・160図）

AZ～BB-37、BA・BB-38グリッドにかけて位置する。第24号溝跡に切られ、プランが失われている。南側は途切れている。

検出し得た溝の長さは22.4mで、上幅0.8～1.1m、下幅0.4～0.7m、深さ10cm前後である。概ねN-10°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。平面形は、基本的に直線状を呈すと思われる。断面形は、凹凸の多い皿状を呈する。

今回調査した部分とその近辺について、1町四方の条里区画を想定して、図上に線引きしたところ、12の区画（坪型区画跡）を得ることができた。

しかし、第188・189号溝跡および、F区の第155号溝跡は、条里区画を成すと思われる多くの溝跡と方位的には共通するものの、位置的に17～18m程東へずれている。なおこのラインから1町の距離をあたっても、東西共に南北溝はみられない。

基本的には、平安時代の第10・11号坪型区画跡の坪界溝と思われる。なお、第188・189号溝跡のいずれか一方は、位置・方位からみて、F区の第155号溝跡と同一遺構の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

第190号溝跡（第129・134図）

AW・AX-26グリッドにかけて位置する。同区内にある他の溝跡とは並行する形となる。南側は途切れており、北側は調査区外に続く。しか

し、北側に位置するB区では、この溝跡の続き部分は確認されていない。なお、他遺構との重複関係はみられない。

検出し得た溝跡の長さは7.7m、上幅1.0～1.6m、下幅0.4～1.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-8°-Eの方位で、ほぼ南北に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は壁面が緩やかに立ち上がる皿状を呈す。平安時代の地割溝と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第191号溝跡（第107図）

AJ・AK-45グリッドに位置する。第128号溝跡と重複する。南側は他遺構との重複により遺構のプランが失われており、北側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは10.4m、上幅0.4～0.6m、下幅0.2～0.5m、深さは20cm前後である。溝跡はN-3°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は椀状もしくは皿状を呈す。平安時代の第5・6号坪型区画跡の坪界溝と思われる。

遺物は出土しなかった。

第192号溝跡（第145・148図）

AJ・AK-45グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。両端共に、調査区外に続く。第10・11・16号溝跡と並行関係にある。

検出し得た溝跡の長さは10.3m、上幅1.3～2.1m、下幅1.1～1.8m、深さは30cm前後である。溝跡はN-9°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。

溝跡の平面形はほぼ直線状を呈し、断面形は底面が比較的平坦な逆台形、もしくは皿状を呈する。平安時代の第5・6号坪型区画跡の坪界溝と思われる。

遺物は出土しなかった。

第193号溝跡（第107・108図）

AJ-44グリッドに位置する。第137号溝跡と重複する。第137号溝跡によって遺構のプランを失っており、その先には現れていない。南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは3.7m、上幅0.1～0.5m、下幅0.1～0.3m、深さは9.0cmである。溝跡は概ねN-5°-Wの方位で、ほぼ南北方向に走る。溝跡の平面形は直線状、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈す。

遺物は出土しなかった。

第194号溝跡 (第97・105・106図)

AG-42グリッドに位置する。第140号溝跡と重複する。西側はこの第140号溝跡によって遺構のプランを失っており、その先には現れていない。東側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは7.5m、上幅0.2～1.1m、下幅0.1～0.9m、深さは10cm前後である。溝跡は概ねN-54°-Eの方位で、北東から南西方向に走る。溝跡の平面形は直線状、断面形は碗形を呈す。

遺物は出土しなかった。

第195号溝跡 (第105～107図)

AG-42・43グリッドに位置する。第140号溝跡と重複する。西側はこの第140号溝跡によって遺構のプランを失っており、その先には現れていない。東側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは4.1m、上幅0.3～0.5m、下幅0.1～0.3m、深さは10cm前後である。溝跡は概ねN-82°-Wの方位で、北東から南西方向に走る。溝跡の平面形は直線状、断面形は皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第196号溝跡 (第95・96図)

AE-39グリッドにかけて位置する第174号溝跡を切っていると思われる。東側は途切れ、西側は調査区外に続く。

検出し得た溝跡の長さは4.1m、上幅0.3～0.6m、下幅0.1～0.3m、深さは15cm前後である。溝跡はN-23°-Eの方位で、北東から南西に走る。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

遺物は出土していない。

第197号溝跡 (第95・96図)

AE・AF-38グリッドに位置する。第146号溝跡に切られていると思われる。南北共に途切れている。

検出し得た溝跡の長さは9.7m、上幅0.2～0.5m、下幅0.1～0.3m、深さは5～10cmである。溝跡は北側の湾曲する部分を除いて、N-3°-Wの方位で概ね南北に走る。溝跡の平面形は、北側は円弧状、南側は直線状であり、全体的に鍵の手状に近い。断面形は、碗状もしくは皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

第198号溝跡 (第95・96図)

AF-39グリッドに位置する。第146号溝跡に切られていると思われる。北側は第146号溝跡によってプランが失われており、南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは3.6m、上幅0.3～0.4m、下幅0.1～0.2m、深さは10～15cmである。溝跡はN-7°-Eの方位で、ほぼ南北に走る。溝跡の平面形は直線状で、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

遺物は出土しなかった。

第199号溝跡 (第97・98図)

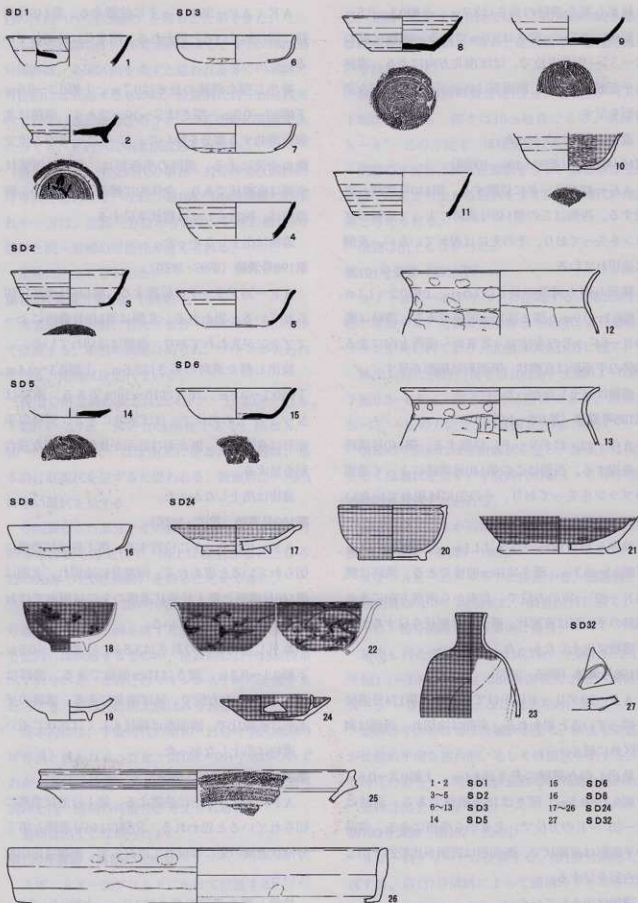
AF-40グリッドに位置する。第1号池状遺構に切られていると思われる。両端共に途切れ、北側は第146号溝跡と第1号池状遺構の先には現れてはおらず、南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは3.8m、上幅0.4～0.5m、下幅0.1～0.2m、深さは10cm前後である。溝跡はN-4°-Eの方位で、ほぼ南北に走る。溝跡の平面形は直線状で、断面形は碗状もしくは皿状に近い。遺物は出土しなかった。

第200号溝跡 (第97・98図)

AF-40グリッドに位置する。第1号池状遺構に切られていると思われる。北側は146号溝跡と第1号池状遺構の先には現れてはおらず、南側は途切れている。

検出し得た溝跡の長さは4.0m、上幅0.5～0.6m、下幅0.2～0.3m、深さは5～10cmである。溝跡は



第161図 満跡出土遺物 (1)

SD33



28



29



29



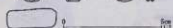
30

31

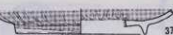
SD44



33

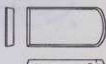


33



37

SD47



34

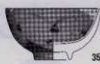


34



38

SD49



35



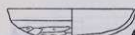
36

SD38

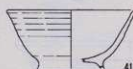


32

SD69



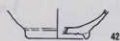
40



41



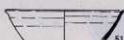
43



42

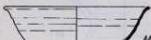


SD74

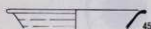


51

SD70



44



45



52



52

SD71



47

SD72



47



48



48



53



49



53



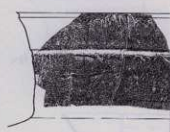
49



50



54



1000 400
1000 400



46



55



55

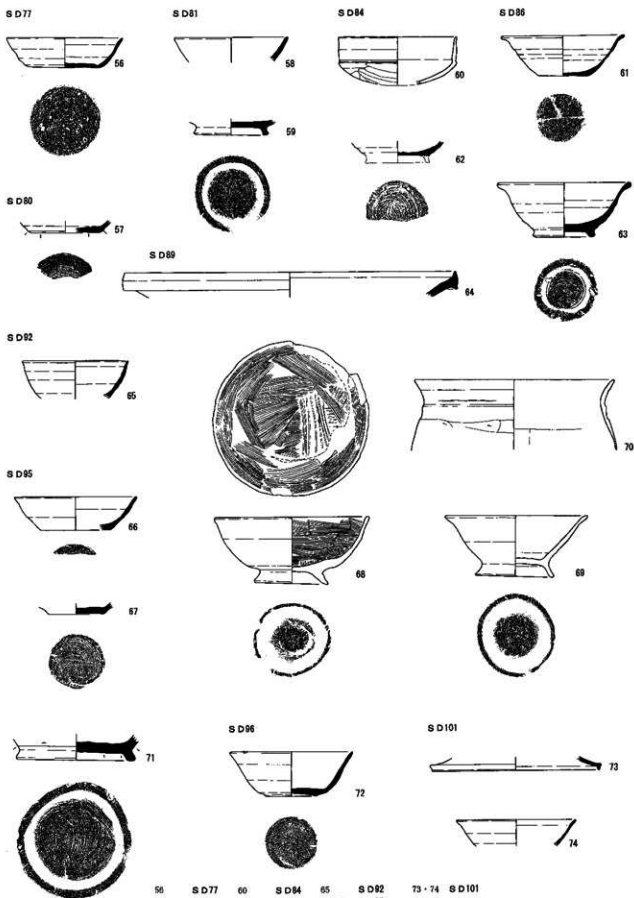
28~31 SD33
32 SD38
33 SD44
34 SD47

35~39 SD49
40~43 SD69
44~46 SD70

47 SD71
48~50 SD72
51~55 SD74

第162图 满跡出土遺物 (2)

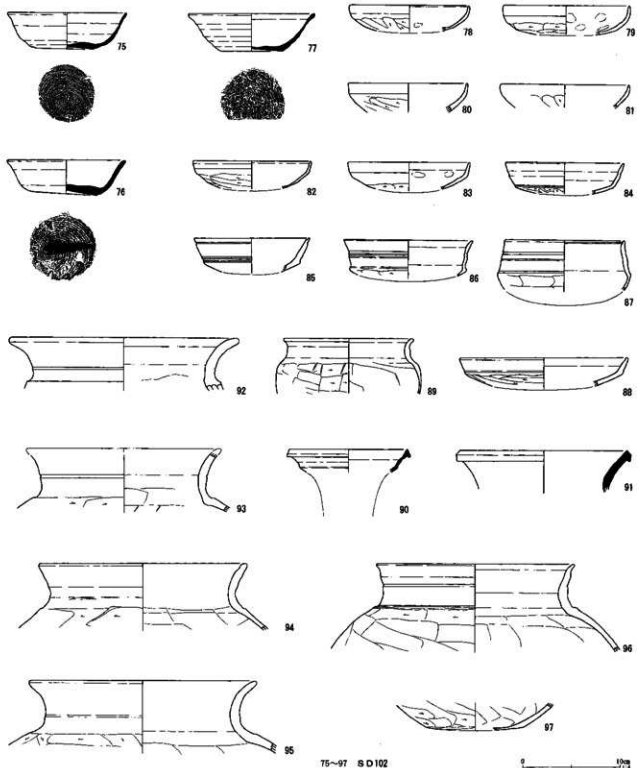
0 10cm



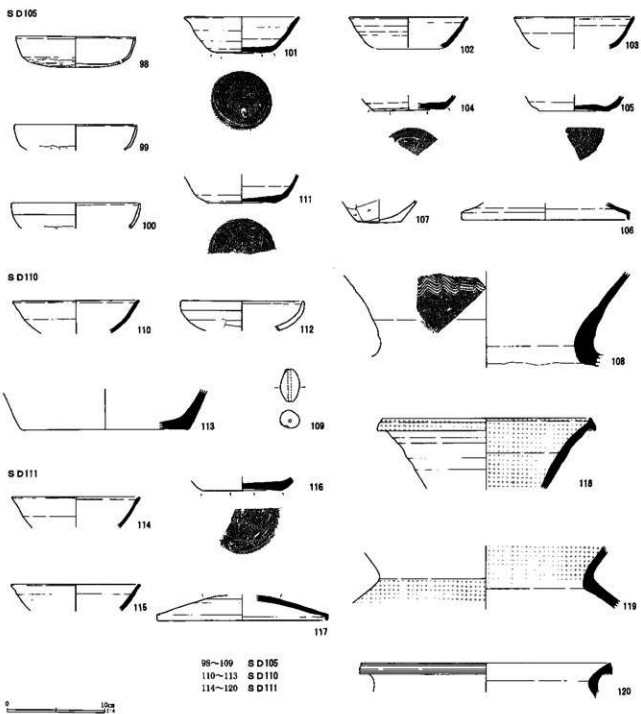
56 SD77 60 SD84 65 SD82 73・74 SD101
 57 SD80 61~63 SD86 66~71 SD95
 68・69 SD81 64 SD89 72 SD96

第163图 清跡出土遺物 (3)

8 D 102



第164图 清跡出土遺物 (4)

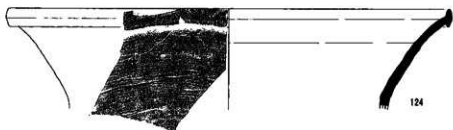


第165図 溝跡出土遺物 (5)

SD112



121



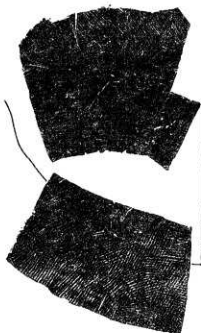
124



122



123



125

SD128



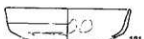
127



130



128



131



132



126



129



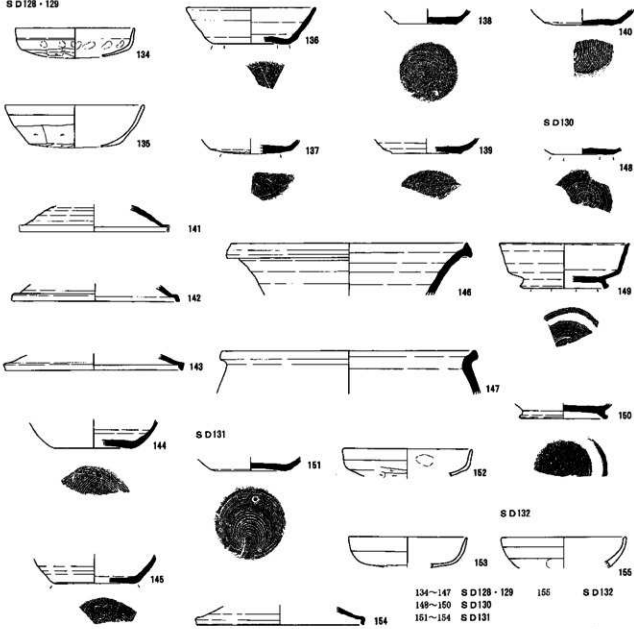
133

121~126 SD112
127~133 SD128



第166网 满跡出土遺物 (6)

SD128・129



134~147 SD128・129
 148~150 SD130
 151~154 SD131
 155 SD132

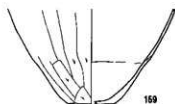
0 10cm

第167図 溝跡出土遺物 (7)

SD133



156



159



161



157



160

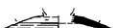
SD135~137



158



164



165



162



SD138



166



163



167



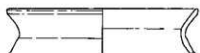
168



169



172



170



171

156~163 SD133
164・165 SD135~137
166~172 SD138



第168図 溝跡出土遺物(8)

SD140



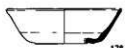
173



174



175



176

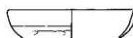


178



179

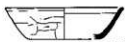
SD143



181



185



177



190



191

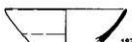
SD141



180



183



187



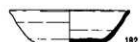
192



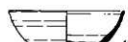
188



192



182



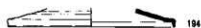
184



189



193



194



196



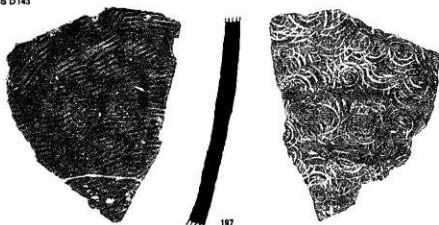
195

173~179 SD140
180 SD141
181~196 SD143

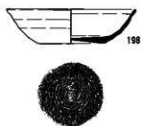


第169图 满跡出土遺物 (9)

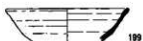
SD143



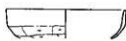
SD144



SD146



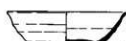
199



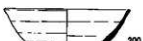
201



204



206



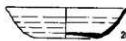
200



202



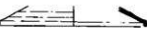
205



207



203



210



208



209



211



212



SD148

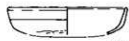


213

SD149



215



216



214



197

SD143

198

SD144

199~203

SD146

204~211

SD147

212~214

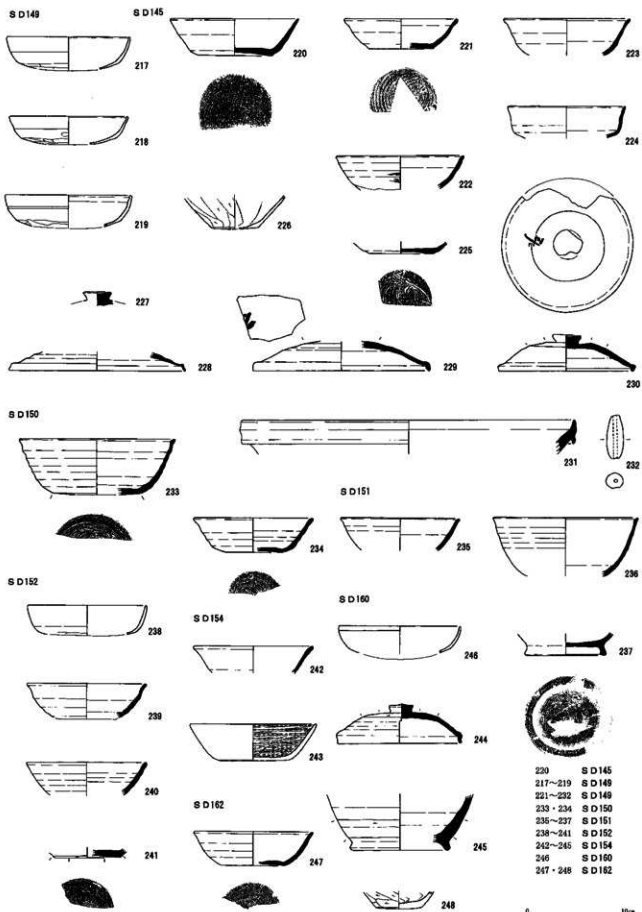
SD148

215~216

SD149

第170図 溝跡出土遺物 (10)





第171図 溝跡出土遺物 (11)

第24表 溝跡出土遺物観察表 (第161・162図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵环	(12.6)	3.1		E	Ⅱ	明灰色	5	S D1 末野産か 不明墨書あり
2	須恵高台碗		2.8	(7.6)	E I	Ⅰ	明灰色	45	S D1 末野産 底部回転糸切り 外面墨書「綱」か
3	須恵环	(12.0)	3.7	(7.2)	E F	Ⅱ	明灰色	15	S D2 南比企産 底部B3a手法
4	須恵环	(12.0)	3.8		E F	Ⅱ	明灰色	20	S D2 南比企産 底部B0手法
5	須恵环	(12.0)	3.6		E F	Ⅱ	灰色	15	S D2 南比企産 大塚あり
6	土師环	(12.0)	2.8		D E	Ⅱ	褐色	10	S D3
7	土師环	(12.0)	2.8		D E	Ⅱ	褐色	20	S D3 全体に風化
8	須恵环	(12.2)	3.6	6.4	E F	Ⅱ	青灰色	35	S D3 南比企産 底部B0手法
9	須恵环		2.8	6.0	E F	Ⅱ	灰色	35	S D3 南比企産 底部B0手法
10	ロクロ土師环		3.8	(5.8)	A E	Ⅲ	淡茶褐色	20	S D3 内黒ミガキ処理 底部糸切り?
11	須恵环	(14.0)	4.5	(10.0)	E H	Ⅰ	灰色	15	S D3 東海産か 肌目細かく緻密な胎土 焼成堅緻
12	土師壺	(20.0)	6.5		D E H	Ⅱ	褐色	25	S D3
13	土師壺	(20.1)	6.0		A D E H	Ⅱ	褐色	30	S D3
14	須恵环		0.8	(6.0)	D E H	Ⅱ	灰色	40	S D5 南比企産 底部B0手法
15	須恵环	(12.0)	3.1	(7.0)	E F	Ⅱ	暗青灰色	30	S D6 南比企産 底部B0手法
16	土師环	(12.6)	2.6		E K	Ⅰ	橙褐色	10	S D8 全体に風化し調整不明瞭
17	灰輪小皿	(13.0)	2.9	(7.0)	C	Ⅰ	灰褐色	20	S D24 瀬戸美濃系 灰輪流掛け 外部体部一底部は露胎
18	磁器中碗	(9.4)	5.0	3.6		Ⅰ	灰緑色	60	S D24 №11 肥前系 染めは外面草花文 内面無地
19	陶器中碗		2.1	4.4		Ⅰ	薄茶褐色	10	S D24 一括 唐津産 胎土灰色 内外面巻刷毛目
20	灰輪小鉢	(11.0)	5.6	6.9		Ⅱ	黄白色	70	S D24 №4一括 瀬戸産 底部置付露胎 削り出し高台
21	鉄輪鉢		3.8	(12.6)	H	Ⅱ	茶褐色	30	S D24 瀬戸美濃系 体部・内外面施釉 高台一底部は露胎
22	磁器中皿	(21.0)	5.4			Ⅰ	白色	10	S D24 №10・23 肥前系 染付
23	鉄輪瓶		3.0	10.7		Ⅰ	灰白色	60	S D24 瀬戸美濃系 肩張「べこかん」形
24	鉄輪灯明受皿	11.1	2.6	5.9		Ⅲ	茶褐色	80	S D24 №7 焼成は不良で土師質 底部は露胎
25	常滑磁鉢	(32.0)	3.4		H	Ⅰ	茶褐色	5	S D24 №23 7本1單位の罐目が2單位入る
26	内耳土器(陶器)	(38.6)	5.6	(37.2)	E	Ⅰ	黒灰色	8	S D24 在地系 瓦質 体部下端は横方向のケズリ
27	青磁碗		1.4			Ⅰ	暗緑色	10	S D32 飯泉系青磁 底部は露胎
28	磁器小碗	(7.2)	5.8	(4.8)		Ⅰ	白色	30	S D33 染付 透明釉 胎土白色 文様
29	陶器中碗		3.1	(5.0)		Ⅰ	黄白色	30	S D33 肥前系京焼風か 体部下端一底部露胎 内外面透明釉
30	磁器碗					Ⅰ	乳白色	10	S D33 形状は丸形 胎土白色
31	磁器碗					Ⅰ	白色	10	S D33 染めは肥前系 形状は丸形 胎土白色
32	須恵环	(12.0)	2.7		E H J	Ⅱ	明灰色	25	S D38・157 末野産か どちらの溝から出土か確定できない
33	砥石						灰白色	10	S D44 №1 長さ5.2cm 最大幅3.9cm 厚さ1.7cm
34	石帯						暗灰白色	10	S D47 長さ6.1cm 幅3.0cm 厚さ0.6cm 重量27.97g
35	磁器中碗	9.6	5.3	3.5	M	Ⅰ	白色	70	S D49 №2・6 波佐見、平戸系 染付外面草花文
36	播鉢				C F	Ⅰ	暗灰色	10	S D49 №1 肥前系? 近世 欄目の角が少し摩滅
37	陶器中皿		2.6	(13.0)	M	Ⅰ	灰白色	8	S D49 №5 瀬戸美濃系 菊花皿 近世
38	陶器香炉?		3.9		M	Ⅱ	明灰色	15	S D49 №4 瀬戸美濃系 鉄輪 近世
39	陶器鉢	(28.0)	4.3		M	Ⅱ	黄白色	5	S D49 №8 瀬戸美濃系 灰輪十緑色釉 近世 器面は風化
40	土師环	(13.0)	3.3		D H	Ⅱ	褐色	60	S D69 2片あり接合しない 内面風化
41	ロクロ土師碗	(13.0)	(6.2)	(6.6)	A E H	Ⅰ	橙褐色	35	S D69 2片を器上覆元 底部調整不明 内面ミガキなし
42	ロクロ土師碗				E J	Ⅲ	灰褐色	25	S D69 底部回転糸切り 土師質
43	須恵高台碗	(14.6)	6.0	(6.6)	E I	Ⅱ	灰色	25	S D69 末野産 底部回転糸切り 作り雑
44	須恵高台碗	(14.6)	3.7		I J	Ⅱ	暗灰色	15	S D70 L・17・Cグリップ 末野産
45	須恵高台碗	(14.0)	1.9		E I	Ⅱ	青灰色	5	S D70 末野産
46	須恵大甕		13.0		E H I J	Ⅰ	青灰色	20	S D70 末野産 頸部沈輪十擬波流状文(5本単位)
47	須恵壺				E H J	Ⅱ	褐色	10	S D71 群馬産か 外面平行(擬斜格子)卑き 内面同心円文斗具
48	磁器碗		4.6		M	Ⅰ	白色	10	S D72 C区 肥前系 染付丸形 近世
49	磁器碗		3.6		M	Ⅰ	白色	10	S D72 C区 肥前系 染付丸形 近世
50	磁器碗		2.3	(5.2)	M	Ⅰ	黄白色	30	S D72 №1 肥前系京焼風 透明釉 貫入あり
51	須恵环	(12.0)	3.3		E F	Ⅱ	青灰色	10	S D74 C区 南比企産
52	須恵环		1.2	(6.0)	E F	Ⅱ	青灰色	20	S D74 南比企産 底部B0手法
53	須恵長頸瓶		3.6		F J	Ⅱ	灰色	80	S D74 №4 南比企産 胴部一底部回転ヘラケズリ
54	土師質羽釜	(24.0)	4.7		A H J	Ⅲ	淡褐色	5	S D74 下層 大きき、傾き不明瞭 ロクロナデ調整か
55	須恵壺		2.6		C F	Ⅱ	暗灰色	40	S D74 №8 南比企産 体部下端ヘラケズリ

第25表 溝跡出土遺物観察表 (第163・164・165図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
56	須恵環	11.8	3.1	7.1	C I	Ⅱ	灰色	100	S D 77 No1 未野産 底部B0手法 底部糸切痕磨耗
57	須恵環		1.3	(7.0)	E F	Ⅱ	灰色	30	S D 80 南比企産 底部B3d手法
58	須恵環	(11.4)	2.5		H	I	灰色	20	S D 81 No1 群馬産か 胎土やや砂っぽいが精選
59	須恵高台埴		1.6	6.6	E I J	Ⅱ	灰色	90	S D 81 No2 未野産 底部糸切り 風化している
60	土師環	(12.0)	4.9		A E H	I	橙褐色	25	S D 84 風化により調整不明瞭
61	須恵貫環	12.4	4.2	5.1	I J	Ⅲ	黒灰色	95	S D 86 未野産 底部B0手法 軟質須恵
62	須恵高台埴		1.5		E I J	Ⅱ	青灰色	55	S D 86 S・8グリッド 未野産 底部回転糸切り
63	須恵貫高台埴	(13.4)	5.6	5.4	I J	Ⅲ	黒灰色	60	S D 86 S・18グリッド 底部回転糸切り 須恵貫土器
64	須恵甕	(33.6)	2.6		E F	I	紫灰色	5	S D 89 No1 南比企産
65	須恵環	10.6	3.9		E F	Ⅱ	暗灰色	90	S D 92 No1 南比企産 底部欠失
66	須恵環	(12.4)	3.5	(7.1)	C I	Ⅱ	黒灰色	10	S D 95 No9 未野産 底部B0手法 口縁部内面摩滅
67	須恵環		1.2	5.5	C E F	I	灰色	70	S D 95 No8 南比企産 底部B0手法 底部「-」ヘラ記号
68	ワコ土師高台埴	15.6	6.9	7.4	B C D	Ⅱ	淡黄褐色	20	S D 95 No1・2・3・4 内黒処理 口縁部外面にも炭素が吸着
69	ワコ土師高台埴	14.5	6.3	7.9	D E	Ⅲ	灰白色	60	S D 95 No6 底部内面重ね焼き
70	土師壺	(20.2)	7.2		A D E	I	淡褐色	10	S D 95 No1・5
71	須恵壺		2.7	11.9	C E F	I	灰色	80	S D 95 No7 南比企産 底部B3d手法 転用祝か
72	須恵環	12.4	4.6	5.3	C F	Ⅱ	灰色	95	S D 96 No1 南比企産 底部B0手法
73	須恵蓋	(17.0)	1.4		E F	Ⅱ	青灰色	5	S D 101 南比企産
74	須恵環	(12.0)	2.7		E F	Ⅱ	青灰色	10	S D 101 南比企産
75	須恵環	12.0	3.8	5.8	E F	Ⅱ	暗青灰色	75	S D 102 南比企産 底部B0手法
76	須恵環	12.0	3.7	6.5	C I	Ⅱ	灰色	100	S D 102 No5 未野産 底部B0手法 底部に墨書「-」
77	須恵環	(12.6)	3.9	6.3	E I J	Ⅱ	明灰色	40	S D 102 未野産 底部B0手法
78	土師環	(12.0)	2.7		D E H	Ⅱ	淡褐色	20	S D 102 外面黒染あり ヨコナデ範囲不明瞭
79	土師環	(12.8)	3.0		D E H	Ⅱ	橙褐色	20	S D 102 西側
80	土師環		3.0		A D E H	Ⅱ	橙褐色	15	S D 102 西側
81	土師環	(13.0)	2.4		D E H	Ⅱ	橙褐色	10	S D 102 風化著しい
82	土師環	(12.0)	2.8		D E H	I	橙褐色	30	S D 102
83	土師環	(12.4)	2.8		D E H	Ⅱ	橙褐色	20	S D 102 西側
84	土師環	(12.0)	3.2		D H	Ⅱ	褐色	10	S D 102 内外面黒色処理か
85	土師環	(11.8)	(3.8)		A D	I	淡褐色	10	S D 102 西側
86	土師環	(13.0)	3.7		D H	Ⅱ	褐灰色	10	S D 102
87	土師環	(12.1)	5.1		D E H	Ⅱ	黄灰色	15	S D 102
88	土師壺	(17.0)	2.9		D E H	Ⅱ	淡褐色	15	S D 102 風化著しく暗文の有無は不明
89	土師小壺台付甕	(13.0)	5.7		A D H K	Ⅱ	黄褐色	20	S D 102 No4
90	須恵長頸瓶	(12.0)	2.3		L	I	灰白色	10	S D 102 湖西産 フラスコ類の可能性もあり
91	須恵壺	(17.0)	4.3		E F	I	灰青灰色	10	S D 102 南比企産
92	土師壺	(23.0)	5.4		D H	Ⅱ	灰白色	25	S D 102 接合しない口縁部片あり
93	土師壺		6.3		A E H J	Ⅱ	淡褐色	20	S D 102 口縁部欠失
94	土師壺	(21.0)	6.8		A E H	Ⅱ	暗褐色	15	S D 102 風化著しい
95	土師壺	(23.0)	7.4		A C E H	Ⅱ	淡褐色	20	S D 102 西側
96	土師壺	(20.0)	8.9		A C E H	I	橙褐色	30	S D 102 西側 粉っぽい胎土 接合しない破片多い
97	土師壺		2.8	(10.0)	D E H	Ⅱ	黄灰褐色	20	S D 102
98	土師環	(12.0)	3.2		D E	Ⅱ	橙褐色	35	S D 105 No6 風化著しい
99	土師環	(12.4)	2.6		B D E	Ⅱ	褐色	10	S D 105 風化著しい
100	土師環	(13.0)	2.6		D H	I	淡褐色	10	S D 105 風化
101	須恵環	11.6	3.7	6.1	E F	Ⅱ	灰色	100	S D 105 No5 南比企産 底部B3b手法
102	須恵環	(12.0)	3.2		E F	Ⅱ	灰色	20	S D 105 No4 南比企産
103	須恵環	(12.0)	3.3		E F J	Ⅱ	灰色	15	S D 105 南比企産 全体に風化
104	須恵環		1.5	(7.0)	E F	Ⅱ	暗灰色	20	S D 105 南比企産 底部B3d手法
105	須恵環		1.6	(7.0)	F	Ⅱ	灰色	20	S D 105 No4 南比企産 底部B0手法回転糸切り
106	須恵蓋	(17.0)	1.7		E F	Ⅱ	青灰色	5	S D 105 南比企産
107	土師壺		2.3	4.6	D E H	Ⅱ	淡褐色	80	S D 105 内面風化
108	須恵壺		9.7		E I J	Ⅱ	灰色	20	S D 105 未野産 頸部欄楯波状文
109	土師				E	Ⅱ	暗褐色	90	S D 105 長さ3.4cm 最大径2.0cm 孔径0.3cm 重量8.0g 被熱
110	須恵環	(12.8)	3.4		E F	Ⅱ	灰色	10	S D 110 南比企産
111	須恵環		2.9	7.0	C E F	I	暗灰色	40	S D 110 南比企産 底部B0手法
112	土師環	(12.4)	3.1		D E	Ⅱ	褐色	5	S D 110 風化著しい

第26表 湧跡出土遺物観察表 (第165・166・167・168図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
113	須恵壺		4.1	(17.0)	AH	I	橙褐色	15	S D 110 No.23 産地不明 酸化焼成焼 髹っばい土 精選
114	須恵杯	(13.0)	3.2		E F	II	暗灰色	8	S D 111 南比企産
115	須恵杯	(13.0)	2.7		E F	II	灰色	5	S D 111 南比企産
116	須恵碗		1.3		F	II	灰色	80	S D 111 No.1 南比企産 底部B3b手法
117	須恵蓋	(17.2)	2.6		E F	II	灰色	10	S D 111 No.1 南比企産
118	須恵壺	(21.2)	7.3		C E F	I	明灰色	15	S D 111 No.2 南比企産
119	須恵壺		6.5		E F	I	明灰色	8	S D 111 南比企産
120	須恵鉢	(25.4)	3.7		E F	III	明灰色	20	S D 111 No.5 南比企産 風化著しい
121	須恵杯	12.2	3.5	6.5	E F	II	灰色		S D 112 No.11 南比企産 底部B0手法 墨書「十」
122	須恵杯	(12.0)	3.5	(6.0)	E F	II	青灰色	35	S D 112 No.12 南比企産 底部B0手法
123	須恵杯		2.6	(6.8)	E I J	III	灰色	25	S D 112 No.7 木野産 底部B0手法
124	須恵壺	(45.0)	10.3		E F H	II	灰色	25	S D 112 No.10・23 南比企産 外面平行印き
125	須恵壺		16.4		E F H	II	褐色	90	S D 112 No.13・15・17・19 南比企産 数片あるが接合しない
126	土師壺	(20.3)	11.4		D E H	II	褐色	25	S D 112 No.24
127	須恵杯	(11.8)	3.5	(6.1)	B E F	I	暗青灰色	20	S D 128 南比企産 底部B0手法
128	須恵杯		2.4	(6.0)	E F	II	青灰色	30	S D 128 南比企産 底部B0手法
129	須恵杯		0.8	6.0	E F	II	明灰色	50	S D 128 南比企産 底部B0手法
130	土師杯	(12.0)	3.0	(9.2)	D H	II	褐色	15	S D 128
131	土師杯	(12.5)	3.0		D E H	II	褐色	20	S D 128
132	土師小壺台付甕		3.0	(7.4)	D E H	II	褐色	40	S D 128
133	土師壺	(22.0)	6.4		D H	II	黄褐色	15	S D 128
134	土師杯		12.0	3.0	D H	I	橙褐色	20	S D 128・129
135	土師杯	(14.0)	4.3	(9.5)	D E H	II	褐色	15	S D 128・129 体部+底部ヘラケズリ
136	須恵杯	(13.0)	3.7	(7.8)	E F	II	灰色	15	S D 128・129 南比企産 底部B3b手法 外面体部火傷
137	須恵杯		1.5	(8.2)	F	II	明灰色	20	S D 128・129 南比企産 底部B2a手法
138	須恵杯		1.5	5.8	F	II	明黄灰色	90	S D 128・129 南比企産 底部B0手法 ヘラ切「キ」 墨書か?
139	須恵杯		1.5	(7.0)	E F	II	青灰色	35	S D 128・129 南比企産 底部B0手法
140	須恵杯		1.6	(6.0)	B E F	II	暗灰色	20	S D 128・129 南比企産 底部B0手法
141	須恵蓋		2.8		E F	II	暗灰色	20	S D 128・129 南比企産 口唇部欠失
142	須恵蓋	(16.8)	1.7		F	II	灰色	5	S D 128・129 南比企産
143	須恵蓋	(18.0)	1.6		F	II	灰色	5	S D 128・129 南比企産
144	須恵碗		2.9	(8.0)	E F	II	灰色		S D 128・129 南比企産 底部B0手法
145	須恵碗		2.9	(8.0)	E F	II	灰色	20	S D 128・129 南比企産 底部B3a手法
146	須恵壺	(24.0)	5.3		E F H	II	灰色	10	S D 128・129 南比企産
147	須恵鉢	(26.0)	4.4		E I	II	明灰色	10	S D 128・129 木野産
148	須恵杯		0.7	(6.2)	E F	II	明灰色	45	S D 130 南比企産 底部B3b手法
149	須恵高台杯	(13.2)	4.6	(9.0)	E F	II	暗灰色	20	S D 130 南比企産 底部B3b手法 内径(8.2)cm
150	須恵高台杯		1.5	(9.0)	C I	II	明灰色	40	S D 130 木野産 底部回転未切り 器面風化 内径(8.2)cm
151	須恵碗		1.4	7.0	C E F	I	暗灰色	90	S D 131 No.1 南比企産 底部B0手法
152	土師杯	(13.0)	2.8		E	II	褐色	8	S D 131 風化著しい
153	土師杯	(12.0)	3.1		C D E	II	橙褐色	20	S D 131 風化している
154	須恵蓋	(17.0)	1.9		C F	II	灰色	5	S D 131 南比企産
155	土師杯	(12.6)	3.2		B D E	I	橙褐色	8	S D 132 器面は風化し剥離不明瞭
156	須恵杯	(13.0)	3.7		E H	III	暗灰褐色	20	S D 133 産地不明 (木野産か)
157	須恵杯		1.7	6.5	E I	III	明灰色	55	S D 133 木野産 底部B0手法
158	須恵杯		1.5	(6.4)	E F J	II	青灰色	35	S D 133 南比企産 底部B3b手法 墨書「綱」か
159	土師壺		9.8	(4.7)	D H	II	褐色	20	S D 133 二次被熱
160	土師小壺台付甕		3.0		D H	II	暗褐色	80	S D 133 二次被熱している
161	須恵壺				A E H J	II	灰褐色		S D 133 群馬または木野産か 内面同心円文当具
162	須恵壺				A E J	II	灰褐色		S D 133 群馬または木野産か 内面同心円文当具十カキ目
163	須恵壺				E I J	II	灰褐色		S D 133 群馬または木野産か 内面同心円文当具十カキ目
164	須恵蓋		1.2		E F	II	灰色	95	S D 135-137 トレンチ 南比企産 つまみのみ残存
165	須恵蓋		1.6		F	II	灰色	20	S D 135-137 トレンチ 南比企産
166	須恵杯	(12.0)	2.9		F	II	青灰色	10	S D 138 南比企産
167	土師(陶文)杯		(3.2)		C D E H	I	茶褐色	10	S D 138 内面暗文風化して見えない
168	須恵高台杯		1.9	(9.1)	B I J	II	灰白色	40	S D 138 木野産 底部回転ヘラケズリ
169	土師小壺台付甕		3.4		D E H	II	茶褐色	45	S D 138

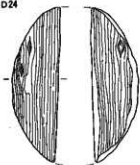
第27表 清跡出土遺物観察表 (第168・169・170・171図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
170	土師甕	(19.0)	4.8		DEH	Ⅱ	茶褐色	20	S D138
171	須恵甕	(26.0)	4.0		FH	Ⅱ	青灰色	10	S D138 南比企産
172	須恵大甕				E I J	Ⅱ	灰褐色		S D138 群馬か木野産 内面同心円文当具
173	須恵坏	12.1	4.0	6.3	C E F	Ⅱ	灰色	100	S D140 No.4 南比企産 底部B0手法 底部に墨書「福」
174	須恵坏	12.3	3.8	7.1	F	Ⅱ	明灰色	80	S D140 No.2 南比企産 底部B0手法 底部に墨書「文」
175	須恵坏	11.3	3.1	5.3	C F	Ⅱ	暗灰色	100	S D140 No.1 南比企産 底部B0手法 底部に墨書「文」
176	須恵坏	(11.6)	3.6	(3.0)	E F	Ⅱ	黒灰色	20	S D140 南比企産 底部B0手法
177	須恵坏	(12.0)	3.3	(7.6)	E F	Ⅰ	灰色	15	S D140 南比企産 口縁部内部は磨耗して滑らか
178	須恵高台付坏	(12.9)	4.7	7.2	I	Ⅱ	灰色	50	S D140 No.3 木野産 底面黒染あり 底部に墨書「福」 墨地点より厚6.2cm
179	土師皿	(16.4)	3.2		B D E	Ⅱ	橙褐色	20	S D140 8C初頭 風化が進んで調整は不明瞭
180	須恵坏	12.3	3.3	6.0	E F	Ⅱ	灰色	70	S D141 南比企産 底部B0手法
181	土師坏	(12.8)	3.0		E H	Ⅱ	褐色	20	S D143
182	須恵坏	(12.2)	3.6	6.4	E F	Ⅱ	明灰色	45	S D143 南比企産 底部B0手法
183	須恵坏	(12.0)	3.4	6.3	I J	Ⅰ	灰色	45	S D143 No.6 木野産か 底部B0手法 内面に黒色有機物付着
184	須恵坏	(11.6)	3.8	6.2	E F	Ⅱ	暗灰色	50	S D143 南比企産 底部B0手法
185	須恵坏	(12.0)	3.9	(6.4)	F	Ⅱ	灰色	15	S D143 南比企産 底部B0手法
186	須恵坏	(12.4)	3.3		F I	Ⅱ	暗灰色	15	S D143 木野産
187	須恵坏	(12.4)	3.7		C E I	Ⅱ	灰白色	8	S D143 産地不明 表面風化著しい
188	須恵坏	(11.6)	3.2		C E F	Ⅰ	暗灰色	20	S D143 南比企産
189	須恵坏		1.3	5.5	C E F	Ⅰ	暗灰色	70	S D143 南比企産 底部B0手法
190	須恵坏		1.0	(7.0)	E I	Ⅱ	灰色	45	S D143 木野産 底部B3b手法 底部に墨書あり「文」
191	須恵坏		0.7	(7.0)	E F	Ⅱ	灰色	25	S D143 南比企産 底部B3b手法 墨書「福」
192	須恵坏		1.2	(6.4)	F	Ⅰ	灰色	25	S D143 No.3 南比企産 底部B0手法
193	須恵坏		2.7	(6.0)	E I	Ⅱ	明灰色	15	S D143 木野産 風化著しく、底部調整痕は不明瞭
194	須恵蓋	(17.0)	1.9		E I	Ⅱ	明灰色	10	S D143 木野産
195	土師甕	(20.0)	5.5		D E H	Ⅱ	明褐色		S D143 風化著しい
196	須恵紫灰				E J	Ⅱ	紫灰色		S D143 群馬または木野産 外面平行叩き 内面同心円文当具
197	須恵甕				E J	Ⅰ	灰褐色		S D143 No.1 群馬または木野産 内面同心円文当具後4目
198	須恵坏	13.0	3.6	6.8	E H	Ⅲ	灰白色	85	S D144 産地不明 (三浦岬か) 底部B0手法
199	須恵坏	(12.4)	3.4		E F	Ⅱ	灰色	15	S D146 南比企産
200	須恵坏	(12.6)	3.7		E F	Ⅱ	青灰色	20	S D146 南比企産
201	土師坏	(12.0)	3.0		D E H J	Ⅱ	褐色	25	S D146
202	土師坏	(13.9)	4.2		D H	Ⅱ	淡褐色	20	S D146 外面黒染あり
203	須恵碗	(14.0)	4.5		E F	Ⅱ	青灰色	10	S D146 南比企産 作波理模様の可能性もある
204	土師坏	(12.6)	2.5		D H	Ⅱ	褐色	20	S D147 風化著しい
205	土師坏	(12.2)	(3.5)		D E H	Ⅲ	淡褐色	40	S D147 No.2 口縁と体部は接合しない
206	須恵坏	(12.0)	3.7	6.4	E F	Ⅱ	暗灰色	45	S D147 No.3 南比企産 底部B3b手法 底部に墨書「福」
207	須恵坏	(12.2)	3.1	6.5	I	Ⅰ	青灰色	35	S D147 木野産 底部B0手法 墨書「人」または「入」
208	須恵坏	(12.2)	2.6		E F H	Ⅰ	灰色	15	S D147 南比企産 内外面火傷あり
209	須恵坏		0.8	(6.5)	E F	Ⅱ	灰色	25	S D147 南比企産 底部B3b手法 不明墨書あり
210	須恵蓋	(14.7)	2.0		E I J	Ⅲ	明灰色	10	S D147 木野産 全体に風化
211	須恵甕	20.7	9.8		E F	Ⅱ	灰色	75	S D147 南比企産
212	須恵坏	2.4	6.8	E I J K	Ⅱ	灰黄白色	60	S D148 木野産 底部B0手法か	
213	土師甕	4.3	4.8	D H	Ⅱ	淡褐色	80	S D148 全体に風化	
214	須恵大甕				E J	Ⅰ	青灰色		S D148 木野産か 外面平行叩き 内面無文当具後ナゲ
215	土師坏	(12.4)	3.6	(9.8)	D E H	Ⅱ	褐色	35	S D149 外底面黒染あり 風化
216	土師坏	(12.0)	2.8		D H	Ⅱ	褐色	15	S D149
217	土師坏	(12.4)	3.4	(9.8)	E	Ⅰ	橙褐色	35	S D149 風化著しい
218	土師坏	(12.0)	2.9		D E H	Ⅰ	橙褐色	40	S D149 全体に風化
219	土師坏	(12.8)	3.2		D H	Ⅱ	褐色	45	S D149 3片あり接合しない
220	須恵坏	13.0	3.8	7.5	A C D G	Ⅱ	淡褐色	55	S D145 木野産
221	須恵坏	(11.4)	3.1	6.6	E I	Ⅰ	暗灰色	40	S D149 木野産 底部B0手法 底部は歪んでいる
222	須恵坏	(13.0)	3.5		C F	Ⅲ	暗灰色	20	S D149 南比企産 体部外面に墨書
223	須恵坏	(11.8)	3.8		E F	Ⅰ	暗紫色	15	S D149 南比企産
224	須恵高台付坏	(12.0)	3.3		E F	Ⅱ	黒灰色	8	S D149 南比企産
225	須恵坏		1.3	(6.6)	F I	Ⅱ	灰色	30	S D149 木野産 底部B0手法
226	土師甕		3.4	(4.8)	D E H	Ⅱ	明褐色	25	S D149

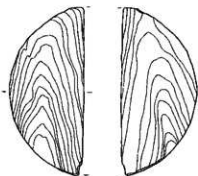
第28表 溝跡出土遺物観察表 (第211図)

番号	器種	口径	最高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
227	須恵蓋		1.4		C I	Ⅱ	明灰色	90	S D 149 未野産 風化が進んでいる
228	須恵蓋	(18.0)	1.9		C F	I	灰色	10	S D 149 南比企産
229	須恵蓋	(18.0)	3.0		E F	Ⅱ	明灰色	10	S D 149 南比企産 外面中に墨書「文」
230	須恵蓋	13.6	3.8		C D I	Ⅱ	灰色	80	S D 149 №2 未野産 外面に墨書あり
231	須恵甕	(34.0)	3.5		C F	I	暗紫色	3	S D 149 南比企産 内面鉄分付着
232	土鍾				H	Ⅱ	淡灰褐色	95	S D 149 長さ4.6cm 最大径1.8cm 孔径0.4cm 重量10.9g
233	須恵埴	(15.8)	5.8	(9.2)	E F	Ⅱ	灰色	35	S D 150 南比企産 底部回転ヘラケズリ
234	須恵坏	(12.0)	3.5	(5.5)	E F	I	青灰色	25	S D 150 南比企産 底部B0手法 接合しないが図上復元
235	須恵坏	(12.0)	3.4		C F	I	紫灰色	8	S D 151 南比企産
236	須恵埴	(14.8)	6.0		E F	Ⅱ	明灰色	5	S D 151 南比企産 軽量感がある
237	須恵高台埴		2.3	8.3	C I	Ⅱ	暗赤褐色	70	S D 151 未野産 接地面径8.0cm 底部回転糸切り
238	土師坏	(12.0)	3.0		A D E H	Ⅱ	黄褐色	10	S D 152 風化している
239	須恵坏	(11.9)	3.5		E F	Ⅱ	青灰色	25	S D 152 南比企産
240	須恵坏	(12.0)	3.4		E F H	Ⅱ	青灰色	30	S D 152 南比企産
241	須恵坏		0.9	(6.6)	E F	Ⅱ	青灰色	35	S D 152 南比企産 底部B3d手法 墨書「文」
242	須恵坏	(12.0)	2.8		F	I	青灰色	10	S D 154 南比企産
243	クワシ内脚坏	(12.8)	3.8	7.2	A E H	I	黄灰白色	50	S D 154 外面風化 内面ミガキ+黒色処理
244	須恵蓋	12.6	4.1		E F	Ⅱ	淡青灰色	65	S D 154 南比企産 高台坏蓋
245	須恵長頸瓶		5.8	(9.6)	E F	Ⅱ	灰色	25	S D 154 南比企産
246	土師坏	(12.4)	2.7		D H	Ⅱ	褐色	5	S D 160 体部にケズリは認められない
247	須恵坏	(11.9)	3.5	(6.2)	E F H	Ⅱ	灰白色	30	S D 162 南比企産 底部B0手法
248	土師甕		1.7	4.8	D E H	Ⅱ	暗褐色	65	S D 162

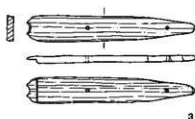
SD24



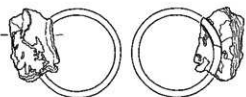
1



2



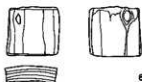
3



4



5



6



7

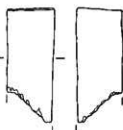


A F42G



8

SD24

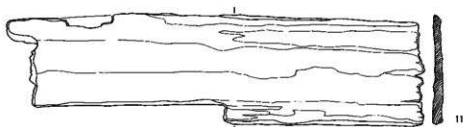


9



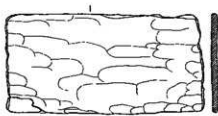
10

SD102



11

SD24



12

0 5cm

1 4 5

0 10cm

2 3

0 5cm

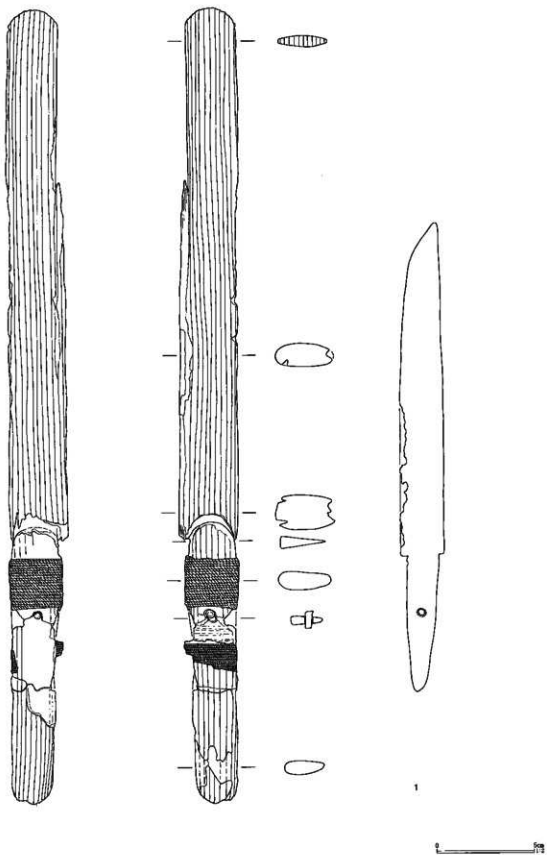
8 9

0 10cm

6 7 10 11 12

1~7·9·10·12 SD24
8 A F42G
11 SD102

第172図 満跡出土遺物 (12)



第173图 第74号满踏出土遗物

N-5°-Wの方位で、ほぼ南北に走る。溝跡の平面形は直線状で、断面形は皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

8. 水田跡

その1 (二面)

後程、「その2」(一面)で報告する水田跡は、1108(天仁元年)、浅間B軽石の降灰を蒙ったものである。この火山灰は、水田耕作土の中に鋤き込まれることなく、耕作土の表面に残された状態であった。このことから、浅間B軽石の降灰の後、放棄された水田跡と考えられる。発掘調査は、この火山灰を取り除いた面で行われた。そして、ここで報告する二面目の水田跡は、一面目の水田土壌を取り除いて、その下層で検出された、それ以前の水田跡である。

第17地点を主とした基本的な立地については、第19地点の北部分を頂点として東西方向に帯状に展開する自然堤防から、南東方向に向かって緩やかな傾斜をもって低地へと移行する部分に相当している。そして、さらに南東に位置する第18地点は、古代には水田域として用いられていたが、それ以前は沼沢地であった。

第17地点およびその周辺における立地は、微地形的な差異はあるものの、概ね二面・一面共に共通すると思われる。

なお、今回調査した平安時代の水田面は、上層の堆積土の土圧や遺構の攪乱によって、畦畔の遺存状況はきわめて悪いものであった。そのため、水田面の検出に当っては、畦畔構築土下に出来るプリント部分の確認によるものがほとんどであった。

水田跡のエレベーション図を起こす際に、計測値通りに図化した場合、畦畔と水田面との凹凸がほとんど現れない結果となる。そこで、エレベーション図については、水平方向1/100、垂直方向1/50とし、畦畔を際立たせるため、さらに起伏を強調して図化を行った。

そのため、水田跡エレベーション図における畦畔は、実際に検出された畦畔の状況を示したのではないことを、予めお断りしておきたいと思う。

各水田跡の事実記載をするための都合上、各調査区ごとに、平面図上に1・2・3……と番号を付し

た。そしてこれを表現する際には、第〇〇区画と呼称する。

また、水田跡の畦畔を表現する際に、第〇区画の東畦・南畦・西畦・北畦と呼称する。例えば(第180図)、第10区画からみた場合、東畦は第5区画の西畦、南畦は第11区画の北畦、西畦は第15区画の東畦、北畦は第9区画の南畦に相当する。

また、各調査区の水田跡に関して、標高の最高地点と最低地点の距離と標高差を基に、水田面の傾斜率を掲げることとする。しかし、これは発掘調査時点での計測値であって、各水田が耕作されていた当時のものとは、異なるものであることはいうまでもない。あくまでも参考までに掲げるものである。

なお、各調査区の水田跡に関して、畦の幅についても数値を示すが、これも同様である。

水田検出の層位的状況は、基本土層第6層(第7図)および第7層に相当する。すでに述べたように、畦畔の遺存状況はきわめて悪いものであった。

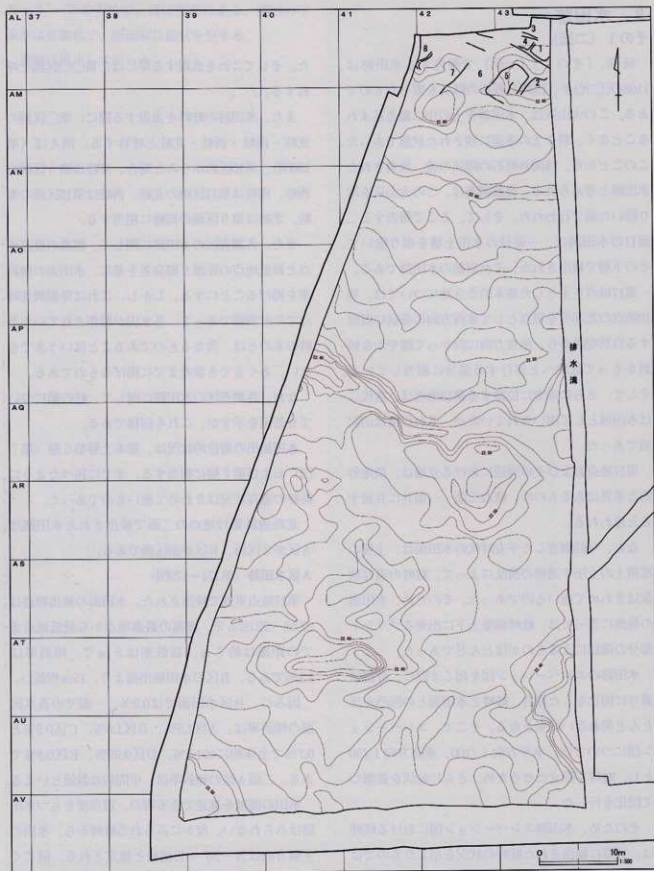
北島遺跡第17地点の二面で検出された水田跡は、A区が8区画、B区が28区画である。

A区水田跡(第174~179図)

第17地点東側で検出された。水田面の検出標高は、22.58~22.66mで、標高の最高地点から最低地点までの距離は約7m、高低差は8cmで、傾斜率は1.1%である。B区の水田検出面より、15cm程低い。

因みに、B区水田面では0.9%、一面での各水田面の傾斜率は、A区1.5%、B区1.6%、C区0.5%と0.7%で全体的には1.1%、D区0.95%、E区0.8%である。二面A区の傾斜率は、中間的な数値といえる。

水田の面積を算定できる程の、遺存度をもつ水田跡はみられない。僅かにみられる畦畔から、水田の主軸方向はN-36°-E前後と推定される。同じく二面で検出された、B区の水田区画の方が、N-1°-E、N-3°-W、あるいはN-5°-Wといったように、ほぼ東西南北に整然と区画されている



第174図 A区二面水田跡等高線図